

それから

夏目漱石



誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭のなか中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下つてゐた。けれども、その俎下駄は、足音の遠退くに従つて、すうと頭から抜け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覚めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪暈の上に落ちてゐる。代助はゆふべとこなか昨夜床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、あたり四隣が静かな所為かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。

それから
ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見

詰めてゐた彼は、急に思ひ出した様に、寐ながら胸の上に手を
当て、又心臓の鼓動を検し始めた。寐ながら胸の脈を聴いて
見るのは彼の近来の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ち付い
て確に打つてゐた。彼は胸に手を当てた儘、此鼓動の下に、温
かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。是が命であると
考へた。自分は今流れる命を掌で抑へてゐるんだと考へた。そ
れから、此掌に応へる、時計の針に似た響は、自分を死に誘ふ
警鐘の様なものであると考へた。此警鐘を聞くことなしに生き
てゐられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねな
かつたなら、如何に自分は氣楽だらう。如何に自分は絶対に生
を味はひ得るだらう。けれども——代助は覚えす悚とした。彼
は血潮によつて打たるゝ掛念のない、静かな心臓を想像するに
堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳

の下したに手を置いて、もし、此所こゝを鉄槌かなづちで一つ撲ぶされたならと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事実を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ自覚し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中なかから両手を出だして、大きく左右ひらに開くと、左側ひだりがはに男が女を斬きつてゐる絵があつた。彼はすぐ外ほかの頁ページへ眼めを移した。其所そこには学校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを讀んでゐたが、やがて、倦怠だるさうな手から、はたりと新聞を夜具の上うへに落した。夫から烟草を一本吹ふかしながら、五寸許り布団を摺ずり出して、畳の上の椿つばきを取つて、引つ繰り返かへして、鼻の先へ持もつて来た。口くちと口髭くちひげと鼻の大部分が全く隠かくれた。烟りは椿つばきの瓣はなと蕊ずいに絡からまつて漂たふ程濃く出た。それを白しろい敷布しきふの上うへに

それから

置くと、立ち上がつて風呂場へ行つた。

其所で叮嚀に齒を磨いた。彼は齒並の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つた様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれは夫にも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細く且つ初々しく、口の上を品よく蔽ふてゐる。代助は其ふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。実際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつ

たと思ふ位である。其代り人から御洒落おしやれと云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる。

一の二

約やく三十分の後のち彼は食卓に就いた。熱あつい紅茶を啜すりながら焼麵やきばん麩バタに牛酪バタを付けてゐると、門野かどのと云ふ書生が座敷から新聞を畳んで持つて来た。四つ折りにしたのを座布団わきの傍へ置きながら、

「先生、大変な事が始まりましたな」と仰山な声で話しかけた。

此書生は代助を捕つかまへては、先生先生と敬語を使ふ。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへ、えへ、だつて先生と、すぐ先生にして仕舞ふので、已を得ず其儘にして置いたのが、いつか習慣になつて、今では、此男かぎに限つて、平氣

に先生として通とほしてゐる。實際書生が代助の様な主人を呼ぶには、先生以外に別段適当な名称がないと云ふことを、書生を置いて見て、代助も始めて悟つたのである。

「学校騒動の事ぢやないか」と代助は落付いた顔をして麵ぼんを食つて居た。

「だつて痛快ぢやありませんか」

「校長排斥がですか」

「えゝ、到底辞職もんでせう」と嬉うれしがつてゐる。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲ことかる事でもあるんですか」
「冗談云つちや不可いけません。さう損得そんとくづくで、痛快がられやしません」

代助は矢つ張り麵ぼんを食つてゐた。

「君、あれは本当に校長が悪にくらしくつて排斥するのほかか、他に損得そんとく

問題があつて排斥するの知つてますか」と云ひながら鉄瓶の湯を紅茶々碗の中なかへ注さした。

「知りませんな。何なんですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得とくにならな

いと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、左様そんなもんですか」と門野かどのは稍真面目まじめな顔をした。

代助はそれぎり黙だまつて仕舞つた。門野かどのは是より以上通じない男

である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様そんなもんです

かなで押し通して澄すましてゐる。此方こちらの云ふことが応こたへるのだ

か、応へないのだか丸で要領を得ない。代助は、其所そこが漠然と

して、刺激いが要いらなくつて好いいと思つて書生に使つてゐるので

ある。其代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日いつにちごろくくして

ゐる。君、ちつと、外国語でも研究しちやどうだなど、云ふ事

がある。すると門野かどのは何時いつでも、左様さやうでせうか、とか、左様そんな
もんでせうか、とか答こたへる丈だけである。決して為しませうといふ事
は口くちにしない。又かう、怠惰なまけものでは、さう判然はつきりした答こたが出来
ないのである。代助たいてすけの方かたでも、門野かどのを教育うましに生なれて来きた訳わけ
もないから、好加減い、かげんにして放ほうつて置く。幸さいひ頭あたまと違ちがつて、身体からだ
の方は善うごく動うごくので、代助たいてすけはそこを大おほいに重宝ちゆうほうがつてゐる。代
助たいてすけばかりではない、従来じゆんらいからゐる婆ばさんも門野かどのの御蔭ごかげで此頃このころは
大變助おほいへすけかる様ようになつた。その原因げんいんで婆ばさんと門野かどのとは頗なかる仲なかが
好いい。主人しゆじんの留守くわうすなどには、よく二人ふたりで話わをする。

「先生いっさいは一体いったい何を為する気きなんだらうね。小母おぼさん」

「あの位くらゐになつて入いらつしやれば、何なんでも出来できますよ。心配しんぱす
るがものはない」

「心配しんぱはせんがね。何なにか為したら好よささうなもんだと思おもふんだが」

「まあ奥様でも御貫ひになつてから、緩づくり、御役でも御探おさがしなさる御積りなんでせうよ」

「いゝ積りつもだなあ。僕も、あんな風に一日本いちんちほんを読んだり、音楽を聞きに行つたりして暮くらして居たいな」

「御前おまへさんが？」

「本ほんは読まんでも好いいがね。あゝ云ふ具合に遊んで居たいね」

「夫それはみんな、前世ぜんせからの約束だから仕方がない」

「左様そんなものかな」

まづ斯う云ふ調子である。門野かどのが代助の所へ引き移る二週間かん前には、此若い独身の主人と、此食客あひやくとの間に下の様な会話が
あつた。

それから

「君は何方の学校へ行つてゐるんですか」

「もとは行きました。今は廃めちまいました」

「もと、何処へ行つたんです」

「何処つて方々行きました。然しどうも厭きつぽいもんだから」

「ぢき厭になるんですか」

「まあ、左様ですな」

「で、大して勉強する考もないんですか」

「えゝ、一寸有りません。それに近頃家の都合が、あんまり

好くないもんですから」

「家の婆さんは、あなたの御母さんを知つてゐるんだつてね」

「えゝ、もと、直近所に居たもんですから」

「御母さんは矢つ張り……」

「矢つ張りつまらない内職をしてゐるんですが、どうも近頃は
不景気で、余まり好くない様です」

「好くない様ですつて、君、一所に居るんぢやないですか」

「一所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞いた事もあり
ません。何でも能くこぼしてゐる様です」

「兄さんは」

「兄は郵便局の方へ出てゐます」

「家は夫丈ですか」

「まだ弟がゐます。是は銀行の——まあ小使に少し毛の生えた
位な所なんでせう」

「すると遊んでゐるのは、君許りぢやないか」

「まあ、左様なもんですな」

「それで、家にゐるときは、何をしてゐるんです」

「まあ、大抵寐ねてゐますな。でなければ散歩でも為しますかな」
「外ほかのものが、みんな稼かせいでるのに、君許り寐ねてゐるのは苦痛
ぢやないですか」

「いえ、左様さようでもありませんな」

「家庭が余よつ程円満なんですか」

「別段喧嘩けんかもしません。妙なもんで」

「だつて、御母おつかさんや兄にいさんから云つたら、一日いちにちも早く君に独

立して貰もらひたいでせうがね」

「左様さようかも知れませんな」

「君は余つ程気楽な性分しやうぶんと見える。それが本当の所なんですか」

「え、別に嘘うそを吐つく料簡りょうかんもありませんな」

「ぢや全くの呑気屋のんきなんだね」

「え、まあ呑気屋のんきつて云ふもんでせうか」

「兄にいさんは何歳いくつになるんです」

「斯かうつと、取とつて六ろくになりますか」

「すると、もう細君でも貰もらはなくちやならないでせう。兄にいさんの細君が出来ても、矢やつ張り今の様ようにしてゐる積しほですか」

「其時そのときに為なつて見みなくつちや、自分でも見当みあたが付きませんが、何なにしろ、どうか為なるだらうと思おもつてます」

「其外そのほかに親類しんれいはないんですか」

「叔母おばが一人ひとりありますがな。こいつは今いま、浜はまで運漕業うんこうぎやをやつて

ます」

「叔母おばさんが？」

「叔母おばが遣やつてる訳わけでもないんでせうが、まあ叔父おぢですな」

「其所そのこへでも頼たのんで使もちつて貰もらつちや、どうです。運漕業うんこうぎやなら大分ひと人が要いるでせう」

「根が怠惰なまけもんですからな。大方断わるだらうと思つてるんです」

「さう自任してゐちや困る。実は君の御母おつかさんが、家の婆うちさんに頼んで、君を僕の宅うちへ置いて呉れまいかといふ相談があるんですよ」

「えゝ、何だかそんな事を云つてました」

「君自身は、一体どう云ふ気なんです」

「えゝ、成るべく怠なまけない様にして……」

「家うちへ来る方が好いいんですか」

「まあ、左様さうですな」

「然し寐て散歩する丈ぢや困る」

「そりや大丈夫です。身体からだの方は達者ですから。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでも可い」

「ぢや、掃除でもしませう」

門野は斯う云ふ条件で代助の書生になつたのである。

一 の 四

代助はやがて食事を済まして、烟草を吹かし出した。今迄茶だんす筥かけの陰ひざに、ぽつねんと膝かを抱かへて柱よに倚かり懸かつてゐた門野かどのは、もう好いい時分だと思つて、又主人に質問を掛かけた。

「先生、今朝けさは心臓の具合はどうですか」

此間このあひだから代助の癖を知つてゐるので、幾分か茶化した調子である。

「今日けふはまだ大丈夫だ」

それから

「何だか明日あしたにも危あやしくなりさうですな。どうも先生見た様からだに身体を気にしちや、——仕舞には本当の病気に取とつ付つかれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野かどのは只ただへえと云つた限ぎり、代助の光沢つやの好い顔色かほいろや肉にくの豊ゆたかな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時いつでも此青年を氣の毒に思ふ。代助から見ると、此青年の頭あたまは、牛の脳味噌のうみそで一杯詰つてゐるとしか考へられないのである。話はなしをすると、平民の通とほる大通りを半町位しか付ついて来こない。たまに横町へでも曲まがると、すぐ迷まい兒じになつて仕舞ふ。論理の地盤たてを堅たてに切り下げた坑道などへは、てんから足も踏あみ込めない。彼かれの神経系に至つては猶更粗末である。恰あも荒繩あらなはで組み立てられたるかの感かんが起る。代助は此青年の生活状態を觀

察して、彼は必竟何の為ために呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さへある。それでゐて彼は平氣にのらくらしてゐる。しかも此こののらくらを以て、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、中々得意に振舞ふるまひたがる。其上頑強一点張りの肉体を笠かさに着きて、却つて主人の神経的な局所へ肉薄して来る。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性に対して払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報むくひに受る不文の刑罰である。是等の犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に為なれた。否、ある時は是等の犠牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さへある。門野かどのにはそんな事は丸で分らない。

「門野さん、郵便は来て居ゐなかつたかね」

「郵便ですか。斯かうつと。来きてゐました。端書はがきと封書が。机の

上に置きました。持つて来ますか」

「いや、僕が彼方へ行つても可い」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つて仕舞つた。さ

うして端書と郵便を持つて来た。端書は、今日二時東京着、たゞ

ちに表面へ投宿、取敢へず御報、明日午前会ひたし、と薄墨の

走り書の簡単極るもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次

郎といふ差出人の姓名が、表と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言の様に云ひなが

ら、封書の方を取り上げると、是は親爺の手蹟である。二三日

前帰つて来た。急ぐ用事でもないが、色々話しがあるから、此

手紙が着いたら来てくれろと書いて、あとには京都の花がまだ

早かつたの、急行列車が一杯で窮屈だつた杯といふ閑文字が数

行列ねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方

見較べてみた。

「君、電話を掛けて呉れませんか。家へ」

「はあ、御宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合わせる人があるから上がれないつて。明日か明後日屹度伺ひますからつて」

「はあ。何方に」

「親爺が旅行から帰つて来て、話があるから一寸来いつて云ふんだが、——何親爺を呼び出さなくても可いから、誰にでも左様云つて呉れ給へ」

「はあ」

門野は無雑作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書齋へ帰つた。見ると、奇麗に掃除が出来てゐる。落椿も何所かへ掃き出されて仕舞つた。代助は花瓶の右手にある組み重ね

の書棚しよだなの前まへへ行つて、上うへに載せた重い写真帖を取り上げて、立たちながら、金きんの留金とめがねを外はずして、一枚二枚と繰り始めたが、中頃迄来きてびたりと手てを留とめた。其所そこには廿歳位はたちの女の半身はんしんがある。代助は眼めを俯うつせて凝じつと女の顔を見詰めてゐた。

二の一

着物きものでも着換きかへて、此方こつちから平岡ひらをかの宿やどを訪ね様かと思つてゐる所へ、折ひよく先方むかふから遣やつて来た。車くるまをがらくと門前迄乗のり付けて、此所こゝだくと梶棒かぢぼうを下おろさした声は慥たしかに三年前わか分ぶんれた時ときそつくりである。玄関ちよつとで、取次とりつぎの婆おばさんを捕つかまへて、宿やどへ墓口がまぐちを忘れて来きたから、一寸ちよつと二十錢借してくれと云つた所などは、どうしても学校時代の平岡を思ひ出さずにはゐられない。

代助は玄関迄馳け出して行つて、手を執らぬ許りに旧友を座敷へ上げた。

「何うした。まあ緩くりするが好い」

「おや、椅子だね」と云ひながら平岡は安樂椅子へ、どきりと身体を投げ掛けた。十五貫目以上もあらうと云ふわが肉に、三文の価値を置いてゐない様な扱かひ方に見えた。それから椅子の脊に坊主頭を靠たして、一寸部屋の中を見廻しながら、

「中々、好い家だね。思つたより好い」と賞めた。代助は黙つて巻蓆入の蓋を開けた。

「それから、以後何うだい」

「何うの、斯うのつて、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分つたが、近頃ぢや些とも寄さないもんだから」

「いや何所どこも彼所かしこも御無沙汰で」と平岡は突然眼鏡とつぜんめがねを外はずして、脊せ広の胸から皺だらけの手帛ハンケチを出して、眼めをぱちく／＼させながら拭ふき始めた。学校時代からの近眼である。代助は凝じつと其様子を眺めてゐた。

「僕より君はどうだい」と云ひながら、細ほそい蔓つるを耳みみの後うしろへ絡からみつけに、両手で持つて行つた。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番好いいな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡ひらをかは八はちの字じを寄よせて、庭の模様を眺め出だしたが、不意に語調を更かへて、

「やあ、桜さくらがある。今漸やく咲き掛けた所だね。余程氣候が違ちがふ」と云つた。話の具合が何もだか故もとの様にしんみりしない。代助も少し氣の抜ぬけた風に、

「向ふは大分暖かいだらう」と序同然の挨拶をした。すると、今度は寧ろ法外に熱した具合で、

「うん、大分暖かい」と力の這入った返事があつた。恰も自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助は又平岡の顔を眺めた。平岡は巻苳まきたばこに火を点けた。其時婆さんが漸く急須きうすに茶を注いれて持つて出た。今しがた鉄瓶てつびんに水みづを射さして仕舞つたので、煮立にたてるのに暇ひまが入つて、つい遅おそくなつて済みませんと言訳あひだをしながら、洋卓テーブルの上うへへ盆ぼんを載のせた。二人は婆さんぼあの喋舌しゃべつてる間、紫檀あひだの盆ぼんを見て黙だまつてゐた。婆さんは相手にされないので、独りひとで愛想笑ひをして座敷ざしきを出た。

「ありや何なんだい」

「婆ぼあさんさ。雇やとつたんだ。飯めしを食くはなくつちやならないから」

「御世辞ごせじが好いいね」

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑む様に笑つた。

「今迄斯んな所へ奉公した事がないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて呉れば好いのに。大勢あるだらう」

「みんな若いの許りでね」と代助は真面目に答へた。平岡は此時始めて声を出して笑つた。

「若けりや猶結構ぢやないか」

「兎に角家の奴は好くないよ」

「あの婆さんの外に誰かゐるのかい」

「書生が一人ゐる」

門野は何時の間にか帰つて、台所の方で婆さんと話をしてゐた。

「それ限りかい」

それから

「それ限りだ。何故」

「細君はまだ貰はないのかい」

代助は心持赤い顔をしたが、すぐ尋常一般の極めて平凡な調子になつた。

「妻を貰つたら、君の所へ通知位する筈ぢやないか。夫よりか君の」と云ひかけて、ぴたりと已めた。

二の二

それから

代助と平岡とは中学時代からの知り合で、殊に学校を卒業して後、一年間といふものは、殆んど兄弟の様に親しく往来した。其時分は互に凡てを打ち明けて、互に力に為り合ふ様なことを云ふのが、互に娯樂の尤もなるものであつた。この娯樂が変じ

て実行となつた事も少くないので、彼等は双互の爲めに口くちにした凡ての言葉には、娯楽どころか、常に一種の犠牲を含んでゐると確信してゐた。さうして其犠牲を即座に払へば、娯楽の性質が、忽然苦痛に變ずるものであると云ふ陳腐な事実にさへ気が付かずにゐた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤つとめてゐる銀行の、京坂地方のある支店詰になつた。代助は、出立しつたつの当時、新夫婦を新橋の停車場に送つて、愉快さうに、直ぢき歸つて来給きたまへと平岡の手を握つた。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさと打遣る様に云つたが、其眼鏡めがねの裏には得意の色が羨ましい位動いた。それを見た時、代助は急に此友達を憎らしく思つた。家うちへ歸つて、一日部屋いちにちに這入つたなり考へ込んでゐた。嫂あによめを連れて音楽会へ行く筈はずの所を断わつて、大いに嫂あによめに氣を揉ました位である。

平岡からは断えず音信たよりがあつた。安着はがきの端書、向ふで世帯を
持った報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、
色々あつた。手紙の来くるたびに、代助は何時いつも丁寧な返事を出
した。不思議な事に、代助が返事を書くときは、何時いつでも一種
の不安に襲はれる。たまには我慢するのが厭いやになつて、途中で
返事を已めて仕舞ふ事がある。たゞ平岡の方から、自分の過去
の行為に対して、幾分か感謝の意を表して来くる場合に限つて、
安々やすくと筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうち段々手紙の遣やり取りが疎遠になつて、月に二遍が、
一遍になり、一遍が又二月ふた、三月みに跨あひだがる様に間おを置いて来く
と、今度は手紙を書かかない方が、却つて不安になつて、何の意
味もないのに、只この感じを驅逐ためする為ために封筒の糊のりを湿しめす事が
あつた。それが半年ばかり続くうちに、代助あたまの頭むねも段々組

織が變つて来る様に感ぜられて来た。此變化に伴つて、平岡へは手紙を書いてかも書かなくつても、丸で苦痛を覚えない様になつて仕舞つた。現げんに代助が一戸を構へて以来、約一年余と云ふものは、此このはる春年賀状の交換のとき、序を以て、今の住所を知らした丈である。

それでも、ある事情があつて、平岡の事は丸で忘れる訳には行かなかつた。時々ときどき思ひ出だす。さうして今頃はど何うして暮くらしてゐるだらうと、色々色々に想像して見る事がある。然したゞ思ひ出す丈で、別段問ひ合せたり聞き合せたりする程に、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日迄すじ過して来た所へ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。其手紙には近々当地を引き上げあて、御地へまかり越す積りである。但し本店からの命令で、榮転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくなくては困る。少し考

があつて、急に職業替をする氣になつたから、着京の上は何分宜しく頼むとあつた。此何分宜しく頼むの頼むは本当の意味の頼むか、又は単に辞令上の頼むか不明だけれども、平岡の身上に急劇な変化のあつたのは争ふべからざる事実である。代助は其時はつと思つた。

それで、逢ふや否や此變動の一部始終を聞かうと待設けて居たのだが、不幸にして話が外れて容易に其所へ戻つて来ない。折を見て此方から持ち掛けると、まあ緩つくり話すとか何とか云つて、中々埒を開けない。代助は仕方なしに、仕舞に、「久し振りだから、其所いらで飯でも食はう」と云ひ出した。平岡は、それでも、まだ、何れ緩くりを繰返したがるのを、無理に引張つて、近所の西洋料理へ上つた。

それから
ふたりは其所で大分飲んだ。飲む事と食ふ事は昔の通りだねと言つたのが始まりで、硬い舌が段々弛んで来た。代助は面白さうに、二三日前自分の観に行つた、ニコライの復活祭の話をした。御祭が夜の十二時を相図に、世の中の寐鎮まる頃を見計つて始める。参詣人が長い廊下を廻つて本堂へ帰つて来ると、何時の間にか幾千本の蠟燭が一度に点いてゐる。法衣を着た坊主が行列して向ふを通るときに、黒い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。——平岡は頬杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞いてゐた。代助はそれから夜の二時頃広い御成街道を通つて、深夜の鉄軌が、暗い中を真直に渡つてゐる上を、たつた一人上野の森迄来て、さうして電燈に照らされた花の中に這入つた。

「人氣のない夜桜はいいもんだよ」と云つた。平岡は黙つて盃を干したが、一寸氣の毒さうに口元を動かして、

「好いだらう、僕はまだ見た事がないが。——然し、そんな真似が出来る間はまだ氣楽なんだよ。世の中へ出ると、中々それ所ぢやない」と暗に相手の無經驗を上から見た様な事を云つた。代助には其調子よりも其返事の内容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの經驗よりも、復活祭当夜の經驗の方が、人生に於て有意義なものと考へてゐる。其所でこんな答をした。

「僕は所謂処世上の經驗程愚なものはないと思つてゐる。苦痛がある丈ぢやないか」

平岡は酔つた眼を心持大きくした。

「大分考へが違つて来た様だね。——けれども其苦痛が後から薬になるんだつて、もとは君の持説ぢやなかつたか」

「そりや不見識な青年が、流俗の諺ことわざに降参して、好加減な事を云つてゐた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中なかへ出でなくつちやなるまい。其時それぢや困るよ」

「世の中なかへは昔むかしから出でてゐるさ。ことに君と分わかれてから、大變世の中ひろが広ひろくなつた様な気がする。たゞ君の出でてゐる世の中よなかとは種類ちがが違ちがふ丈だ」

「そんな事を云つて威張つたつて、今に降参する丈だよ」

「無論食ふに困る様になれば、何時いつでも降参するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な經驗を嘗なめるものか。印度人が外套を着て、冬の来た時の用心をすると同じ事だもの」

平岡の眉あひだの間に、一寸ちよつと不快の色ひらが閃ひらめいた。赤い眼めを据めゑて

ぶか／＼烟草たばこを吹かしてゐる。代助は、ちと云ひ過ぎたと思つて、少し調子すこを穏おだやかにした。――

「僕の知つたものに、丸で音楽の解わからないものがある。学校の教師をして、一軒ぢや飯めしが食くへないもんだから、三軒も四軒も懸け持をやつてゐるが、そりや氣の毒なもんで、下読したよみをするのと、教場へ出でて器械的くわに口くちを動うごかしてゐるより外ひまに全く暇ひまがない。たまの日曜杯は骨休めとか号して一日ぐう／＼寐ねてゐる。だから何所どこに音楽会があらうと、どんな名人が外国から来きやうと聞きに行く機会がない。つまり楽がくといふ一種の美うつくしい世界には丸で足を踏み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。僕から云はせると、是程憐れな無経験はないと思ふ。麵麩ぼんに係かした経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麩ぼんを離れ水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。

それから

君は僕をまだ坊つちやんだと考へてゐるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君よりずっと年長者の積りだ」

平岡は巻蓆まきたばこの灰を、皿さらの上にはたきながら、沈うへんだ暗い調子で、

「うん、何時いつ迄もさう云ふ世界に住んでゐられ、ば結構さ」と云つた。其重おもい言葉の足あしが、富とみに対する一種の呪咀ひを引き摺ずつてゐる様に聴きこえた。

二の四

両人ふたりは酔よつて、戸外おもてへ出でた。酒さけの勢で変な議論をしたものだから、肝心かんしんの一身上の話はまだ少しも発展せずいそにゐる。

「少しすこ歩あるかないか」と代助たいてすけが誘さそつた。平岡も口程くち忙いそがしくはな

いと見えて、生返事をしながら、一所に歩を運んで来た。通を
曲つて横町へ出て、成る可く、話の為好い閑な場所を撰んで行
くうちに、何時か緒口が付いて、思ふあたりへ談柄が落ちた。

平岡の云ふ所によると、赴任の当時彼は事務見習のため、地
方の経済状況取調のため、大分忙がしく働らいて見た。出来得
るならば、学理的に実地の応用を研究しやうと思つた位であつ
たが、地位が夫程高くないので、已を得ず、自分の計画は計画と
して未来の試験用に頭の中に入れて置いた。尤も始めのうちは
色々支店長に建策した事もあるが、支店長は冷然として、何時
も取り合はなかつた。六※¹かしい理窟杯を持ち出すと甚だ御機
嫌が悪い。青二才に何が分るものかと云ふ様な風をする。其癖
自分は實際何も分つて居ないらしい。平岡から見ると、其相手

にしない所が、相手にするに足らないからではなくつて、寧ろ相手にするのが怖いからの様に思はれた。其所に平岡の癩はあつた。衝突しかけた事も一度や二度ではない。

けれども、時日を経過するに従つて、肝癩が何時となく薄らいできて、次第に自分の頭が、周囲の空気と融和する様になつた。又成るべくは、融和する様に力めた。それにつれて、支店長の自分に対する態度も段々變つて来た。時々は向ふから相談をかける事さへある。すると学校を出たての平岡でないから、先方に解らない、且つ都合のわるいことは成るべく云はない様にして置く。

「無暗に御世辞を使つたり、胡麻を摺るのとは違ふが」と平岡はわざ／＼断つた。代助は真面目な顔をして、「そりや無論さうだらう」と答へた。

支店長は平岡の未来みらいの事に就て、色々いろく心配してくれた。近いうちに本店に帰る番に中あたつてゐるから、其時そのときは一所きに来給へ扨なごと冗談半分に約束迄した。其頃そのころは事務じむにも慣なれるし、信用も厚くなるし、交際も殖えるし、勉強をする暇ひまが自然となくなつて、又勉強が却つて実務じつむの妨さまたげをする様に感ぜられて来た。

支店長が、自分に万事を打ち明ける如く、自分は自分の部下の関せきといふ男を信任して、色々と相談相手にして居つた。所ところが此男がある芸妓かきと関係かへりあつて、何時いつの間まにか会計に穴あを明けた。それが曝露ばくろしたので、本人は無論解雇しなければならぬが、あの事情じけいからして、放ほうつて置くと、支店長に迄多少わづらひの煩わづらひが及んで来さうだつたから、其所そこで自分が責を引いて辞職を申し出た。

平岡の語る所は、ざつと斯うであるが、代助には彼が支店長から因果を含められて、所決を促がされた様にも聞えた。それ

は平岡の話しの末に「会社員なんでものは、上うへになればなる程旨うまい事が出来できるものでね。実は関せきなんて、あれつ許ばかりの金を使ひ込んで、すぐ免職になるのは気の毒な位なものさ」といふ句があつたのから推したのである。

「ぢや支店長は一番旨うまい事をしてゐる訳だね」と代助が聞いた。「或はそんなものかも知れない」と平岡は言葉を濁にごして仕舞つた。

「それで其男の使ひ込んだ金かねは何どうした」

「千せんに足たらない金かねだつたから、僕が出して置おいた」

「よく有あつたね。君も大分旨うまい事をしたと見える」

平岡は苦にがい顔をして、ぢろりと代助を見た。

「旨うまい事をしたと仮定しても、皆使みんなつて仕舞つてゐる。生活くらしに

さへ足りない位だ。其金は借かりたんだよ」

「さうか」と代助は落ち付き払つて受けた。代助は何んな時でも平生の調子を失はない男である。さうして其調子には低く明らかなうちに一種の丸味まるみが出てゐる。

「支店長から借りて埋めて置いた」

「何故支店長がぢかに其関せきとか何とか云ふ男に貸して遣やらないのかな」

平岡ひらをかは何とも答へなかつた。代助も押しでは聞かなかつた。二人ふたりは無言の儘しばらくの間あひだなら並んで歩いて行つた。

二の五

代助は平岡ひらをかが語つたより外ほかに、まだ何かあるに違ちがひないと鑑定した。けれども彼はもう一歩進んで飽迄其真相を研究する程の

権利を有つてゐないことを自覺してゐる。又そんな好奇心を引き起すには、實際あまり都会化し過ぎてゐた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に *nil admirari* の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫驚する程の山出ではなかつた。彼の神経は斯様に陳腐な秘密を嗅いで嬉しがる様に退屈を感じてはゐなかつた。否、是より幾倍か快よい刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた。

代助は平岡のそれとは殆んど縁故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化——進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐたのである。それを平岡は全く知らない。代助をもつて、依然として旧態を改めざる三年前の初心と見てゐるらしい。かう云ふ御坊つ

ちやんに、洗ひ浚ひ自分の弱点を打ち明けては、徒らに馬糞を投^なげて、御嬢さまを驚ろかせると同結果に陥り易い。余計な事をして愛想を尽かされるよりは黙^{だま}つてゐる方が安全だ。――

代助には平岡の腹が斯う取れた。それで平岡が自分に返事もせず^{むじん}に無言^{ある}で歩いて行くのが、何となく馬鹿らしく見えた。平岡が代助を小供視^{こどもし}する程度に於て、あるひは其れ以上の程度に於て、代助は平岡を小供視^{こどもし}し始めたのである。けれども両人^{ふたり}が十五六間過^すぎて、又話を遣^やり出した時は、どちらにも、そんな痕迹^{さち}は更になかつた。最初に口を切つたのは代助であつた。

「それで、是^{これ}から先何^{さきど}うする積^{つもり}かね」

「さあ」

「矢つ張り今迄の経験もあるんだから、同じ職業が可^いいかも知れないね」

それから

「さあ。事情次第だが。実は緩くり君に相談して見様と思つてゐたんだが。何うだらう、君の兄さんの会社の方に口はあるまいか」

「うん、頼んで見様、二三日内に家へ行く用があるから。然し何うかな」

「もし、実業の方が駄目なら、どつか新聞へでも這入らうかと思ふ」

「夫も好いだらう」

両人は又電車の通へ出た。平岡は向ふから来た電車の軒を見てゐたが、突然是に乗つて帰ると云ひ出した。代助はさうかと答へた儘、留めもしない、と云つて直分れもしなかつた。

赤い棒の立つてゐる停留所迄歩いて来た。そこで、
「三千代さんは何うした」と聞いた。

それから

「難有う、まあ相変らずだ。君に宜しく云つてみた。実は今日けふ連れて来きやうと思つたんだけれども、何だか汽車に揺ゆれたんで頭あたまが悪いといふから宿屋やどへ置いて来たき」

電車が二人ふたりの前で留とまつた。平岡は二三步早足はやあしに行きかけたが、代助から注意されて已めた。彼かれの乗るべき車はまだ着つかなかつたのである。

「子供は惜おしい事をしたね」

「うん。可哀想な事をした。其節は又御叮嚀に難有う。どうせ死ぬ位なら生れない方が好よかつた」

「其後ごは何どうだい。まだ後あとは出来ないか」

「うん、未だにも何にも、もう駄目だめだらう。身体からだがあんまり好よくないものだからね」

「こんな動く時は小供のない方が却つて便利で可いいかも知れ

ない」

「夫それもさうさ。一層君の様に一人身ひとりみなら、猶の事、気楽で可い

かも知れない」

「一人身ひとりみになるさ」

「冗談云つてら——夫よりか、妻さいが頻りに、君はもう奥さんを
持ったらうか、未まだだらうかつて気にしてゐたぜ」

所へ電車が来きた。

三の一

それから

代助だいすけの父ちちは長井得ながあんとくといつて、御維新のとき、戦争に出でた経験のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きてゐる。役人を已やめてから、実業界に這入つて、何かなに彼かかしてゐるうちに、自

然と金が貯つて、此十四五年來は大分の財産家になつた。

誠吾と云ふ兄がある。学校を卒業してすぐ、父の關係してゐる会社へ出たので、今では其所で重要な地位を占める様になつた。梅子といふ夫人に、二人の子供が出来た。兄は誠太郎と云つて十五になる。妹は縫といつて三つ違である。

誠吾の外に姉がまだ一人あるが、是はある外交官に嫁いで、今は夫と共に西洋にゐる。誠吾と此姉の間にもう一人、それから此姉と代助の間にも、まだ一人兄弟があつたけれども、それは二人とも早く死んで仕舞つた。母も死んで仕舞つた。

代助の一家は是丈の人数から出来上つてゐる。そのうちで外へ出てゐるものは、西洋に行つた姉と、近頃一戸を構へた代助ばかりだから、本家には大小合せて四人残る訳になる。

代助は月に一度は必ず本家へ金を貰ひに行く。代助は親の金

とも、兄あにの金ともつかぬものを使つかつて生きてゐる。月に一度つきの外ほかにも、退屈たいくつになれば出掛でかけけて行く。さうして子供こどもに調戲てんごつたり、書生しよせいと五目並ごもくならびをしたり、嫂あによめと芝居しばいの評ひやうをしたりして帰かへつて来る。

代助たいてすけは此嫂あによめを好すいてゐる。此嫂あによめは、天保調てんぽうてうと明治めいしの現代調げんたいてうを、容赦ようじやうなく継つぎ合あはせた様な一種いっしゆの人物じんぶつである。わざく、仏蘭西ふらんすにゐる義妹いもづとに注文ちゆうもんして、六むづかしい名なのつく、頗おほる高価こうかな織物おりものを取寄とせて、それを四五人たで裁たつて、帯おビに仕立しだてて、着きて見みたり何かなにかする。後あとで、それは日本にっぽんから輸出しゆつしたものだなと云いふ事が分わつて大笑たふしひになつた。三越陳列所みやこちんれいじよへ行いつて、それを調べて来たきものは代助たいてすけである。夫それから西洋せいやうの音楽おんがくが好すきで、よく代助たいてすけに誘さそひ出だされて聞きに行く。さうかと思おもふと易断うらなひに非常ひじょうな興味きんみを有もつてゐる。石龍子せきりうしと尾島某おしまなにかしを大おほいに崇拜ちゆうはいする。代助たいてすけも二三度御相伴しやうばん

に、俾くるまで易者えきしやの許迄もと食付くつついて行つた事がある。

誠太郎と云ふ子は近頃ベースボールに熱中してゐる。代助が行つて時々ときどき球を投なげてやる事がある。彼は妙な希望を持つた子供である。毎年夏まいとしなつの初めに、多くの焼芋屋やきいもが俄然として氷水屋こほりみづに変化するとき、第一番に馳アイスクリームけつけて、汗も出ないのに、氷菓アイスクリームを食くふものは誠太郎である。氷菓アイスクリームがないときには、氷水こほりみづで我慢する。さうして得意になつて帰つて来る。近頃では、もし相撲の常設館が出来たら、一番先さきへ這入つて見たいと云つてゐる。おぢおぢさん誰だれか相撲を知りませんかと代助に聞いた事がある。縫ぬいといふ娘むすめは、何か云ふと、好よくつてよ、知らないわと答へる。さうして日に何遍となくリボンを掛け易へる。近頃はイオリンの稽古に行く。帰つて来ると、鋸のこぎりの目立めたての様な声を出して御浚おんひをする。たゞし人が見てゐると決して遣やらない。室へやを

締め切つて、きい／＼云はせるのだから、親は可なり上手だと思つてゐる。代助丈が時々そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。

兄は大抵不在勝である。ことに忙がしい時になると、家で食ふのは朝食位なもので、あとは、何うして暮してゐるのか、二人の子供には全く分らない。同程度に於て代助にも分らない。是分らない方が好ましいので、必要のない限りは、兄の日々の戸外生活に就て決して研究しないのである。

代助は二人の子供に大變人望がある。嫂にも可なりある。兄には、あるんだか、ないんだか分らない。会に兄と弟が顔を合せると、たゞ浮世話をする。双方とも普通の顔で、大いに平気で遣つてゐる。陳腐に慣れ抜いた様子である。

それから

代助の尤ももつと 応へるこたのは親爺おやぢである。好い年としをして、若い妾わかめかけを
持つてゐるが、それは構かまはない。代助から云いふと寧ろ賛成な位
なもので、彼は妾めかけを置く余裕あゆのないものに限かぎつて、蓄妾ちくしやうの攻撃
をするんだと考へてゐる。親爺おやぢは又大分だいぶの八釜やかまし屋やである。小
供こどものうちには心魂しんこんに徹てつして困却こんけつした事がある。しかし成人せいじんの今日こんにち
では、それにも別段辟易へつえきする必要を認めみとめない。たゞ応へるこたのは、
自分の青年時代と、代助の現今とを混同こんどうして、両方共大たいした変
りはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔し世に
処しよした時の心掛こころがけでもつて、代助も遣やらなくつては、嘘うそだとい
ふ論理になる。尤も代助の方では、何が嘘うそですかと聞き返した
事がない。だから決して喧嘩けんかにはならない。代助は小供の頃非

常な肝癩持で、十八九の時分親爺おやぢと組打をした事が一二返ある位だが、成長して学校を卒業して、しばらくすると、此肝癩がぱたりと已やんで仕舞つた。それから以後ついで怒おこつた試ためしがない。親爺おやぢはこれを自分の薫育の効果と信じてひそかに誇ほこつてゐる。

實際を云ふと親爺おやぢの所謂薫育は、此父子の間あひだに纏綿する暖あたかい情味を次第に冷却せしめた丈である。少なくとも代助はさう思つてゐる。所が親爺おやぢの腹のなかでは、それが全く反対あべこべに解釈されて仕舞つた。何をなにしやうと血肉けつにくの親子おやこである。子が親おやに對する天賦の情合あひが、子を取扱ふ方法の如何に因つて變る筈はずがない。教育の為ため、少しの無理はしやうとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺おやぢは、固く斯う信じてゐた。自分が代助に存在を与へたといふ単

純な事実が、あらゆる不快苦痛に対して、永久愛情の保証になると考へた親爺は、その信念をもつて、ぐんぐん押して行つた。さうして自分に冷淡な一個の息子を作り上げた。尤も代助の卒業前後からは其待遇法も大分變つて来て、ある点から云へば、驚ろく程寛大になつた所もある。然しそれは代助が生れ落ちるや否や、此親爺が代助に向つて作つたプログラムの一部分の遂行に過ぎないので、代助の心意の變移を見抜いた適宜の処置ではなかつたのである。自分の教育が代助に及ぼした悪結果に至つては、今に至つて全く気が付かずにある。

親爺は戦争に出たのを頗る自慢にする。稍もすると、御前杯はまだ戦争をした事がないから、度胸が据らなくつて不可んとい概にけなして仕舞ふ。恰も度胸が人間至上な能力であるかの如き言草である。代助はこれを聞かせられるたんびに厭な心持

がする。胆力は命いのちの遣り取りやとりの劇はげしい、親爺おやぢの若い頃の様な野蛮時代にあつてこそ、生存に必要な資格たぐひかも知れないが、文明の今日から云へば、古風な弓術撃劍たぐひの類と大差はない道具と、代助は心得てゐる。否、胆力とは両立し得ないで、しかも胆力以上おとうに難有がつて然るべき能力が沢山ある様に考へられる。御父おとうさんから又胆力の講釈おとうを聞いた。御父さんの様に云ふと、世あによめの中で石地藏なかが一番偉えらいことになつて仕舞ふ様だねと云つて、嫂あによめと笑つた事がある。

斯う云ふ代助は無論臆病である。又臆病で恥づかしいといふ気は心しんから起らない。ある場合には臆病を以て自任したくなる位である。子供の時、親爺おやぢの使喚よなかで、夜中よなかにわざ／＼あをやま青山の墓地迄出掛けた事がある。気味のわるいのを我慢して一時間も居たら、たまらなくなつて、蒼青な顔をして家うちへ歸つて来たき。其

折は自分でも残念に思つた。あくる朝親爺あさおやぢに笑はれたときは、親爺おやぢが憎にくらしかつた。親爺おやぢの云ふ所によると、彼かれと同時代の少年は、胆力修養の為ため、夜半やはんに結けつ束そくして、たつた一人ひとり、御城しろの北一里きたにある剣つるぎが峰みねの天頂てつぺん迄登のぼつて、其所そこの辻堂よあかしで夜明よあかしをして、日の出でを拝おがんで帰かへつてくる習慣かへであつたさうだ。今の若いものとは心得方かたからして違ちがふと親爺おやぢが批評ひつした。

斯ごとんな事を真面目まじめに口くちにした、又今でも口くちにしかねまじき親爺おやぢは氣の毒どくなものだと、代助は考かんへる。彼は地震きんが嫌きらみである。瞬間しゅんの動揺むねでも胸むねに波なみが打うつ。あるときは書齋じつで凝じつと坐すつてゐて、何かの拍子しに、あゝ地震しが遠とほくから寄よせて来くるなと感かんずる事ことがある。すると、尻しの下したに敷しいてゐる坐蒲団たみも、畳たたみも、乃至床板ゆかも明らかに震ふるへる様に思おもはれる。彼かれはこれが自分おのの本来ほんらいだと信しんじてゐる。親爺おやぢの如ごときは、神經未熟みじゆくの野人やじんか、然しからずんば己おのれ

を偽はる愚者としか代助には受け取れないのである。

三の三

代助は今此親爺と対坐してゐる。廂の長い小さな部屋なので、居ながら庭を見ると、廂の先で庭が仕切られた様な感がある。少くとも空は広く見えない。其代り静かで、落ち付いて、尻の据り具合が好い。

親爺は刻み烟草を吹かすので、手のある長い烟草盆を前へ引き付けて、時々灰吹をぽん／＼と叩く。それが静かな庭へ響いて好い音がする。代助の方は金の吸口を四五本手烙の中へ並べた。もう鼻から烟を出すのが厭になつたので、腕組をして親爺の顔を眺めてゐる。其顔には年の割に肉が多い。それでゐて頬

は瘦こけてゐる。濃こい眉まゆの下したに眼めの皮かが弛たるんで見える。髭ひげは真ま白つしろと云はんよりは、寧さろ黄き色いろである。さうして、話はなしをするときにあいて、ひざがしら、かほ、はんく、くせ、うご相手の膝頭あいてと顔かほとを半はん々くに見較くべる癖くせがある。其時の眼めの動うごかかたし方かたで、白眼しろめが一寸ちよつとちらついて、相手あいてに妙あいてな心持もちをさせる。

老人ろうじんは今いま斯まんな事ことを云つてゐる。――

「さう人間にんげんは自分丈おんぶんぢやうを考へるべきではない。世よの中なかもある。国くに家けもある。少しは人ひとの為ために何なにかしくつては心持こころもちのわるいものだ。御前ごぜんだつて、さう、ぶら／＼してゐて心持こころもちの好いい筈はずはなからう。そりや、下等社会げとうせかいの無教育むきやういくのものなら格別かくべつだが、最高の教育きやういくを受けたものが、決して遊んで居て面白い理由りゆうがない。学まなんだものは、実地じつちに應用えんようして始めて趣味しゆみがで出るものだからな」

「左様さやうです」と代助たいてすけは答へてゐる。親爺おやぢから説法せっぽうされるたんびに、代助たいてすけは返答へんたうに窮きうするから好加減こうかへんな事を云ふ習慣じゆはんになつてゐる。

る。代助に云はせると、親爺おやぢの考は、万事中途半端ちゆうとはんぱに、或物あるものを独り勝手に断定してから出立するんだから、毫も根本的の意義を有してゐない。しかのみならず、今利他本位でやつてるかと思ふと、何時いつの間まにか利己本位に變つてゐる。言葉丈は滾々として、勿体らしく出るが、要するに端倪すべからざる空談くうだんである。それを基礎から打ち崩して懸かかるのは大変な難事業だし、又必竟出来ない相談だから、始めより成るべく触さはらない様にしてゐる。所おやぢが親爺の方では代助を以て無論自己の太陽系に属すべきものと心得てゐるので、自己は飽までも代助の軌道を支配する権利があると信じて押して来る。そこで代助も己を得ず親爺おやぢといふ老太陽の周囲を、行儀よく廻転する様に見せてゐる。

「それは実業が厭いやなら厭いやで好いい。何も金かねを儲ける丈が日本の為になるとも限るまいから。金かねは取とらんでも構かまはない。金かねの為ために

兎や角云ふとなると、御前も心持がわるからう。金は今迄通り己おれが補助して遣やる。おれも、もう何時いつ死ぬしか分わからないし、死しにや金かねを持つて行く訳にも行いかないし。月々御前の生計位くらしどうでもしてやる。だから奮発して何か為するが好いい。国民の義務としてするが好いい。もう三十だらう」

「左様さようです」

「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁ふたいざいだな」

代助は決してのらくらして居ゐるとは思はない。たゞ職業の為ために汚けがされない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へてゐる丈である。親爺おやぢが斯んな事を云ふたびに、実は氣の毒になる。親爺おやぢの幼稚な頭脳には、かく有意義に月日つきひを利用しつゝある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出だしてゐる

のが、全く映うつらないのである。仕方がないから、真ま面目じめな顔を
して、

「え、困うへります」と答へた。老人ろうじんは頭あたまから代助を小僧視せうじして
ゐる上うへに、其返事いっが何時いつでも幼氣おきなげを失はない、簡単な、世帯離しよたいばな
れをした文句ぶんくなものだから、馬鹿ばかにするうちにも、どうも坊ぼくち
やんは成人せいじんしても仕し様やうがない、困うへつたものだと云ふ氣になる。
さうかと思ふと、代助の口調くちうが如何いかにも平氣へいけいで、冷静れいじやうで、はに
かまず、もぢ付つかず尋常じんじやう極ごくまつてゐるので、此奴こいつは手の付つけ様
がないといふ氣にもなる。

三の四

「からだ身体は丈夫ちゆうぶだね」

「二三年このかた風邪を引いた事もありません」

「頭あたまも悪い方わるぢやないだらう。学校の成績も可かなりだつたんぢやないか」

「まあ左様さやうです」

「夫それで遊あそんでゐるのは勿体ない。あの何とか云つたね、そら御前おまへの所へ善よく話かしに來た男があるだらう。己おれも一二度逢つたことがある」

「平岡ですか」

「さう平岡。あの人なぞは、あまり出來の可いい方ぢやなかつたさうだが、卒業すると、すぐ何処どこかへ行つたぢやないか」

「其代り失敗しくじつて、もう歸かへつて來きました」

老人は苦笑を禁じ得なかつた。

「どうして」と聞いた。

「詰り食ふ為に働らくからでせう」

老人には此意味が善く解らなかつた。

「何か面白い事でも遣つたのかな」と聞き返した。

「其場合々々で当然の事を遣るんでせうけれども、其当然が矢つ張り失敗になるんでせう」

「はあ、」と気の乗らない返事をしたが、やがて調子を易へて、説き出した。

「若い人がよく失敗といふが、全く誠実と熱心が足りないからだ。己も多年の経験で、此年になる迄遣つて来たが、どうしても此二つがないと成功しないね」

「誠実と熱心があるために、却つて遣り損ふこともあるでせう」

「いや、先ないな」

親爺の頭の上に、誠者天之道也と云ふ額が麗々と掛けてある。

先代の旧藩主に書いて貰つたと云つて、親爺おやぢは尤も珍重してゐる。代助は此額が甚だ嫌である。第一字が嫌だ。其上文句が氣に喰はない。誠は天の道なりの後あとへ、人の道にあらずと附け加へたい様な心持がする。

其昔し藩の財政が疲弊して、始末が付かなくなつた時、整理の任に當つた長井は、藩侯に縁故のある町人を二三人呼び集めて、刀かたなを脱いで其前に頭あたまを下さげて、彼等に一時の融通を頼んだ事がある。固より返かへせるか、返せないか、分らなかつたんだから、分らないと真直に自白して、それがために其時成功した。その因縁で此額がくを藩主かに書いて貰もらつたのである。爾来長井は何時いつでも、之を自分の居間ゐまに掛けて朝夕眺めてゐる。代助は此額の由来を何遍き聞かされたか知れない。

今から十五六年前に、旧藩主の家いへで、月々つきぐの支出つぎが嵩かさんでき

て、折角持ち直した経済が又崩れ出した時にも、長井は前年の手腕によつて、再度の整理を委託された。其時長井は自分で風呂の薪を焚いて見て、実際の消費高と帳面づらの消費高との差違から調べにかゝつたが、終日終夜この事丈に精魂を打ち込んだ結果は、約一ヶ月内に立派な方法を立て得るに至つた。それより以後藩主の家では比較的豊かな生計をしてゐる。

斯う云ふ過去の歴史を持つてゐて、此過去の歴史以外には、一步も踏み出して考へる事を敢てしない長井は、何によらず、誠実と熱心へ持つて行きたがる。

「御前は、どう云ふものか、誠実と熱心が欠けてゐる様だ。それぢや不可ん。だから何にも出来ないんだ」

「誠実も熱心もあるんですが、たゞ人事上に応用出来ないんです」

「何う云ふ訳で」

代助は又返答に窮した。代助の考によると、誠実だらうが、熱心だらうが、自分が出来合の奴を胸に蓄はへてゐるんぢやなくつて、石と鉄と触れて火花の出る様に、相手次第で摩擦の具合がうまく行けば、当事者二人の間に起るべき現象である。自分の有する性質と云ふよりは寧ろ精神の交換作用である。だから相手が悪くつては起り様がない。

「御父さんは論語だの、王陽明だのといふ、金の延金を呑んで入らつしやるから、左様いふ事を仰しやるんでせう」

「金の延金とは」

代助はしばらく黙つてゐたが、漸やく、

「延金の儘出て来るんです」と云つた。長井は、書物癖のある、偏窟な、世慣れない若輩のいひたがる不得要領の警句として、

好奇心のあるにも拘はらず、取り合ふ事を敢てしなかつた。

三の五

それから約四十分程して、老人は着物を着換えて、袴はかまを穿はいて、俵くるまに乗のつて、何処どこかへ出でて行いつた。代助も玄関迄送つて出たが、又引き返して客間きやくまの戸を開あけて中なかへ這はい入いつた。是これは近頃ちかごろになつて建たて増たした西洋作りで、内部の装飾其他の大部分は、代助の意匠いしやうに本もとづいて、専門家へ注文して出来上つたものである。ことに欄間らんまの周圍に張つた模様画は、自分の知り合ひの去る画え家に頼たのんで、色々相談の揚句あげくに成つたものだから、特更興味が深い。代助は立ちながら、画卷物ゑまきものを展開てんかいした様な、横長よこながの色彩しきさいを眺めてゐたが、どう云ふものか、此前来このまへきて見た時よりは、痛いたく

見劣りがする。是では頼もしくないと思ひながら、猶局部々
に眼を付けて吟味してゐると、突然嫂が這入つて来た。

「おや、此所に入らつしやるの」と云つたが、「一寸其所らに私
の櫛が落ちて居なくつて」と聞いた。櫛は長椅子の足の所にあ
つた。昨日縫子に貸して遣つたら、何所かへ失なして仕舞つた
んで、探しに来たんださうである。両手で頭を抑へる様にして、
櫛を束髪の根方へ押し付けて、上眼で代助を見ながら、
「相変らず茫乎してゐるぢやありませんか」と調戲つた。

「御父さんから御談義を聞かされちまつた」

「また？ 能く叱られるのね。御帰り匆匆、随分気が利かない
わね。然し貴方もあんまり、好かないわ。些とも御父さんの云
ふ通りになさらないんだもの」

「御父さんの前で議論なんかしやしませんよ。万事控え目に大

人しくしてゐるんです」

「だから猶始末が悪いのよ。何か云ふと、へいくつて、さうして、些とも云ふ事を聞かないんだもの」

代助は苦笑して黙つて仕舞つた。梅子は代助の方へ向いて、椅子へ腰を卸した。脊のすらりとした、色の浅黒い、眉の濃い、唇の薄い女である。

「まあ、御掛けなさい。少し話し相手になつて上げるから」

代助は矢つ張り立つた儘、嫂の姿を見守つてゐた。

「今日は妙な半襟を掛けてますね」

「これ？」

梅子は顎を縮めて、八の字を寄せて、自分の襦袢の襟を見やうとした。

「此間買ったの」

それから

「好い色だ」

「まあ、そんな事は、何うでも可いから、其所へ御掛けなさいよ」

代助は嫂の真正面へ腰を卸した。

「へえ掛けました」

「一体今日は何を叱られたんです」

「何を叱られたんだか、あんまり要領を得ない。然し御父さんの国家社会の為に尽すには驚ろいた。何でも十八の年から今日迄のべつに尽してるんだつてね」

「それだから、あの位に御成りになつたんぢやありませんか」
「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」

「だから遊んでないで、御尽しなさいな。貴方は寐てみて御金

を取らうとするから狡猾よ」

「御金を取らうとした事は、まだ有りません」

「取らうとしなくつても、使ふから同じぢやありませんか」

「兄さんが何とか云つてましたか」

「兄さんは呆れてるから、何とも云やしません」

「随分猛烈だな。然し御父さんより兄さんの方が偉いですね」

「何うして。——あら悪らしい、又あんな御世辞を使つて。貴方

はそれが悪いのよ。真面目な顔をして他を茶化すから」

「左様なもんでせうか」

「左様なもんでせうかつて、他の事ぢやあるまいし。少しや考

へて御覧なさいな」

「何うも此所へ来ると、丸で門野と同じ様になつちまふから困

る」

それから

「門野かどのつて何なんです」

「なに宅うちにゐる書生しゆせいですがね。人ひとに何か云いはれると、屹度きど左様さやうなもんでせうか、とか、左様さやうでせうか、とか答こたへるんです」

「あの人ひとが？ 余あまつ程ほど妙たふなのね」

三の六

代助ぢよつとはなしは一寸話わを已やめて、梅子うめこの肩越かたごしに、窓掛まどかけの間あひだから、奇麗きれいな空そらを透すかす様ように見みてゐた。遠とほくに大おほきな樹きが一本いっぴんある。薄茶色うすちやいろの芽めを全体ぜんたいに吹ふいて、柔やわらかい梢こづえの端はじが天てんに接つく所ところは、糠雨ぬかあめで暈ぼかされたかかの如ごとくに霞かすんでゐる。

「好いい氣候きがいになりましたね。何所どこか御花見ごはなみにでも行きませうか」
「行きませう。行くから仰おつしやい」

それから

「何を」

「御父さまから云はれた事を」

「云はれた事は色々あるんですが、秩序立てて繰り返すのは困るですよ。頭が悪いんだから」

「まだ空つとぼけて居らつしやる。ちやんと知つてますよ」

「ぢや、伺ひませうか」

梅子は少しつんとした。

「貴方は近頃余つ程減らず口が達者におなりね」

「何、姉さんが辟易する程ぢやない。——時に今日は大変静かですね。どうしました、小供達は」

「小供は学校です」

十六七の小間使が戸を開けて顔を出した。あの、旦那様が、奥様に一寸電話口迄と取り次いだなり、黙つて梅子の返事を待

つてゐる。梅子はすぐ立つた。代助も立つた。つゞいて客間きやくまを出やうとすると、梅子は振り向いた。

「あなたは、其所そこに居ゐらつしやい。少し話しがあるから」

代助には嫂あによめのかう云ふ命令的の言葉が何時いつでも面白く感ぜられる。御緩ごゆつくりと見送つた儘、又腰を掛けて、再び例の画を眺め出した。しばらくすると、其色が壁かべの上に塗り付けてあるのなかつて、自分の眼球めだまの中なかから飛び出して、壁かべの上うへへ行つて、ベたくく喰くつ付つく様に見えて来たき。仕舞には眼球めだまから色を出す具合一つで、向ふにある人物樹木が、此方こちらの思ひ通りに変化出来る様になつた。代助はかくして、下手へたな個所々々を悉く塗り更かへて、とうとう自分の想像し得る限りの尤も美くしい色彩に包囲されて、恍惚すはと坐つてゐた。所へ梅子うめこが帰つて来たので、忽ち当り前の自分に戻つて仕舞つた。

梅子の用事と云ふのを改まつて聞いて見ると、又例の縁談の事であつた。代助は学校を卒業する前から、梅子の御蔭で写真実物色々な細君の候補者に接した。けれども、何づれも不合格者ばかりであつた。始めのうちは体裁の好い逃口上で断わつてゐたが、二年程前からは、急に凶迂々々しくなつて、屹度相手にけちを付ける。口と顎の角度が悪いとか、眼の長さが顔の幅に比例しないと、耳の位置が間違つてるとか、必ず妙な非難を持つて来る。それが悉く尋常な言草でないので、仕舞には梅子も少々考へ出した。是は必竟世話を焼き過ぎるから、付け上つて、人を困らせるのだらう。当分打遣つて置いて、向ふから頼み出させるに若くはない。と決心して、夫からは縁談の事をついぞ口にしなくなつた。所が本人は一向困つた様子もなく、依然として海のものとも、山のものとも見当が付かない態度で

今日迄暮くらして来たき。

其所そこへ親爺おやぢが甚だ因念ふかの深いある候補者を見付けて、旅行先さきから帰つた。梅子は代助の来くる二三日前に、其話を親爺おやぢから聞かされたので、今日けふの会談は必ずそれだらうと推したのである。然し代助は實際老人から結婚問題に付いては、此日何にも聞きなかつたのである。老人は或はそれを披露する気で、呼んだのかも知れないが、代助の態度を見て、もう少し控えて置く方が得策だといふ了見を起した結果、故意わざと話題を避けたとも取れる。

此候補者に対して代助は一種特殊な関係を有もつてゐた。候補者の姓は知つてゐる。けれど名は知らない。年齢、容貌、教育、性質に至つては全く知らない。何故なぜその女が候補者に立つたと云ふ因念になると又能く知つて居る。

三の七

代助の父ちちには一人ひとりの兄あにがあつた。直記なほきと云つて、父ちちとはたつた一つ違ちがひの年とし上うへだが、父ちちよりは小柄こがらなうへに、顔付かほつき眼鼻立めはなだちが非常に似にてゐたものだから、知らない人には往々ふたご双子と間違まちがへられた。其折ときは父も得とくとは云はなかつた。誠之進まことしんといふ幼名こななで通とほつてゐた。

それから
直記なほきと誠之進まことしんとは外貌げいぶのよく似てゐた如く、氣質きだても本当ほんとうの兄弟けいだいであつた。両方りやうほうに差支さしつかひのあるときは特別とくべつ、都合とくごさへ付けば、同じ所おななじに食くつ付き合あつて、同じ事おななじをして暮くしてゐた。稽古しやくこも同時どうじ刻ときに往いき返かへりをする。読書よみかきにも一つ燈火とうしひを分わつた位くらい親したしかつた。

丁度直記なほきの十八あきの秋であつた。ある時ふたり二人は城下外じやうかはづれの等覺寺といふ寺へ親おやの使に行つた。これは藩主の菩提寺で、そこにゐる楚水といふ坊さんが、二人ふたりの親おやとは昵近じつこんなので、用の手紙を、此楚水さんに渡しに行つたのである。用は囲碁の招待か何かで返事にも及ばない程簡略なものであつたが、楚水さんに留とめられて、色々話してゐるうちに遅おそくなつて、日の暮れる一時間程前に漸く寺を出た。その日は何か祭のある折で、市中しちゆうは大分雑沓してゐた。二人ふたりは群集ぐんしゆのなかを急いで帰る拍子に、ある横町を曲らうとする角かどで、川向ひの方限りの某なにかといふものに突き当たつた。此某なにかと二人ふたりとは、かねてから仲なかが悪わるかつた。其時なにか某なにかは大分酒気を帯びてゐたと見えて、一ふた言二こと言三みこと言いひ争あにふうちに刀かたなを抜ぬいて、いきなり斬り付けた。斬り付けられた方は兄あにであつた。已を得ず是も腰の物を抜ぬいて立ち向つたが、相手は平生から極

めて評判のわるい乱暴もの丈あつて、酩酊してゐるにも拘はらず、強かつた。黙だまつてゐれば兄の方が負ける。そこで弟も刀を抜いた。さうして二人ふたりで滅茶苦茶に相手を斬り殺して仕舞つた。

其頃ころの習慣として、侍さむらいが侍さむらいを殺せば、殺した方が切腹をしななければならぬ。兄弟は其覚悟で家うちへ歸つて来た。父ちちも二人ふたりを並べて置いて順々に自分で介錯をする氣であつた。所はが母ははが生憎祭まつりで知己ちかづきの家うちへ呼よばれて留守である。父ちちは二人ふたりに切腹をさせる前まへ、もう一遍母ははに逢あはしてやりたいと云ふ人情から、すぐ母ははを迎にやつた。さうして母の来る間あひだ、二人ふたりに訓戒を加へたり、或は切腹する座敷の用意をさせたり可成愚図々々してゐた。

母ははの客に行つてゐた所は、その遠縁とほえんにあたる高木たかぎといふ勢力家であつたので、大變都合が好よかつた。と云ふのは、其頃は世の中なかの動き掛けた当時で、侍さむらいの掟おきても昔の様には嚴重に行はれな

かつた。殊更殺された相手は評判の悪い無頼の青年であつた。ので高木は母とともに長井の家へ来て、何分の沙汰が公向からある迄は、当分其儘にして、手を着けずに置くやうにと、父を論じた。

高木はそれから奔走を始めた。さうして第一に家老を説き付けた。それから家老を通して藩主を説き付けた。殺された某の親は又、存外訳の解つた人で、平生から倅の行跡の良くないのを苦に病んでゐたのみならず、斬り付けた当時も、此方から狼藉をしかけたと同然であるといふ事が明瞭になつたので、兄弟を寛大に処分する運動に就ては別段の苦情を持ち出さなかつた。兄弟はしばらく一間の内に閉ぢ籠つて、謹慎の意を表して後、二人とも人知れず家を捨てた。

三年の後兄は京都で浪士に殺された。四年目に天下が明治と

それから

なつた。又五六年してから、誠之進は両親を国元から東京へ呼び寄せた。さうして妻を迎へて、得とくといふ一字名なになつた。其時は自分の命いのちを助けてくれた高木はもう死んで、養子の代になつてゐた。東京へ出て仕官の方法でも講じたらと思つて色々勧めて見たが応じなかつた。此養子に子供ふたりが二人あつて、男の方は京都へ出て同志社へ這入はいつた。其所そこを卒業してから、長らく亜米利加に居つたさうだが、今では神戸で実業に従事して、相当の資産家になつてゐる。女の方は県下の多額納税者の所へ嫁よめに行つた。代助の細君の候補者といふのは此多額納税者の娘である。

「大変込み入つてるのね。私わたし驚ろいちまつた」と嫂あによめが代助に云つた。

「御父おとうさんから何返も聞いてるぢやありませんか」

「だつて、何時いつもは御嫁よめの話はなしが出でないから、好いい加減かへんに聞きいてるのよ」

「さがは佐川さがわにそんな娘むすめがあつたのかな。僕わがも些ちつとも知らなかつた」

「おもらひ御貫ごかんなさいよ」

「賛成さんせいなんですか」

「賛成さんせいですとも。因念いんねんつきぢやありませんか」

「先祖せんぞの拵もちらえた因念いんねんよりも、まだ自分の拵もちえた因念いんねんで貰もらふ方が貰もらひ好いい様さまだな」

「おや、左様さんざんなのがあるの」

代助だいすけは苦笑くせうして答こたへなかつた。

四の 一

代助は今読み切つた許の薄い洋書を机の上に開けた儘、両脇を突いて茫乎考へた。代助の頭は最後の幕で一杯になつてゐる。——遠くの向ふに寒さうな樹が立つてゐる後に、二つの小さな角燈が音もなく揺めいて見えた。絞首台は其所にある。刑人は暗い所に立つた。木履を片足失くした、寒いと一人が云ふと、何を？ と一人が聞き直した。木履を失くなくて寒いと前のものが同じ事を繰り返した。Mは何処にゐると誰か聞いた。此所にゐると誰か答へた。樹の間に大きな、白い様な、平たいものが見える。湿っぽい風が其所から吹いて来る。海だとGが云つた。しばらくすると、宣告文を書いた紙と、宣告文を持つた、白い手——手套を穿めない——を角燈が照らした。読上げんでも可からうといふ声があった。其の声は顫へてゐた。やがて角燈が消えた。……もう只一人になつたとKが云つた。さうして溜息

を吐いた。Sも死んで仕舞つた。Wも死んで仕舞つた。Mも死んで仕舞つた。只一人になつて仕舞つた。……

海から日が上つた。彼等は死骸を一つの車に積み込んだ。さうして引き出した。長くなつた頸、飛び出した眼、唇の上に咲いた、怖ろしい花の様な血の泡に濡れた舌を積み込んで元の路へ引き返した。……

代助はアンドレーフの「七刑人」の最後の模様を、此所迄頭なかの中で繰り返して見て、竦ぞつと肩かたを縮すくめた。斯かう云ふ時に、彼かれが尤も痛切かんに感ずるのは、万一自分がこんな場に臨のぞんだら、どうしたら宜よろからうといふ心配である。考へると到底死ねさうもない。と云つて、無理にも殺されるんだから、如何いかにも残酷である。彼は生の欲望せいと死の圧迫あつの間に、わが身を想像さうして、未練みれんに両方に往むかつたり来きたりする苦悶くもんを心に描えがき出しながら凝じつと坐すは

つてゐると、脊中一面の皮が毛穴ごとにむづ／＼して殆んど堪
らなくなる。

彼の父は十七のとき、家中の一人を斬り殺して、それが為め
切腹をする覚悟をしたと自分で常に人に語つてゐる。父の考で
は兄の介錯を自分がして、自分の介錯を祖父に頼む筈であつた
さうだが、能くそんな真似が出来るものである。父が過去を語
る度に、代助は父をえらいと思ふより、不愉快な人間だと思ふ。
さうでなければ嘘吐だと思ふ。嘘吐の方がまだ余つ程父らしい
気がする。

父許ではない。祖父に就ても、こんな話がある。祖父が若い
時分、撃劍の同門の何とかといふ男が、あまり技芸に達してゐた
所から、他の嫉妬を受けて、ある夜縄手道を城下へ帰る途中で、
誰かに斬り殺された。其時第一に馳け付けたものは祖父であつ

た。左の手に提灯を翳して、右の手に拔身を持つて、其拔身で死骸を叩きながら、軍平確かりしろ、創は浅いぞと云つたさうである。

伯父が京都で殺された時は、頭巾を着た人間にどやくくと、
やどや 旅宿に踏み込まれて、伯父は二階の廂から飛び下りる途端、庭
石に爪付いて倒れる所を上から、容赦なく遣られた為に、顔が
なます 膾の様になつたさうである。殺される十日程前、夜中、合羽を
着て、傘に雪を除けながら、足駄がけで、四条から三条へ帰つ
た事がある。其時旅宿の二丁程手前で、突然後から長井直記ど
のと呼び懸けられた。伯父は振り向きもせず、矢張り傘を差し
た儘、旅宿の戸口迄来て、格子を開けて中へ這入た。さうして
格子をびしやりと締めて、中から、長井直記は拙者だ。何御用
か。と聞いたさうである。

代助は斯んな話を聞く度に、勇ましいいと云ふ氣持よりも、まづ怖い方が先に立つ。度胸を買つてやる前に、腥ぐさい臭が鼻柱を抜ける様に応へる。

もし死が可能であるならば、それは発作の絶高頂に達した一瞬にあるだらうとは、代助のかねて期待する所である。所が、彼は決して発作性の男でない。手も顫へる、足も顫へる。声の顫へる事や、心臓の飛び上がる事は始終ある。けれども、激する事は近来殆んどない。激すると云ふ心的状態は、死に近づき得る自然の階段で、激するたびに死に易くなるのは眼に見えてゐるから、時には好奇心で、せめて、其近所迄押し寄せて見たいと思ふ事もあるが、全く駄目である。代助は此頃の自己を解剖するたびに、五六年前の自己と、丸で違つてゐるのに驚ろかずにはゐられない。

四の二

代助は机の上の書物を伏せると立ち上がった。縁側の硝子戸を細目に開けた間から暖かい陽気な風が吹き込んで来た。さうして鉢植のアマランスの赤い瓣をふらくくと揺かした。日は大きな花の上に落ちてゐる。代助は曲んで、花の中を覗き込んだ。やがて、ひよろ長い雄蕊の頂きから、花粉を取つて、雌蕊の先へ持つて来て、丹念に塗り付けた。

「蟻でも付きましたか」と門野が玄関の方から出て来た。袴を穿いてゐる。代助は曲んだ儘顔を上げた。

「もう行つて来たの」

「え、行つて来ました。何ださうです。明日御引移りになる

それから

さうです。今日けふ是から上あがらうと思つてた所だと仰おつしやいまし
た」

「誰だれが？ 平岡が？」

「えゝ。——どうも何なんですな。大分御忙いそがしい様ですな。先生
た余つ程違ちがつてますね。——蟻あなら種油たねあぶらを御注おつぎなさい。さう
して苦くるしがつて、穴から出でて来くる所を一々いちちく殺ころすんです。何なら
殺ころしませうか」

「蟻あぢやない。斯かうして、天氣の好いい時に、花粉を取とつて、雌蕊しすゐ
へ塗り付つけて置くと、今に実みが結なるんです。暇ひまだから植木屋か
ら聞きいた通り、遣やつてる所だ」

「なある程。どうも重宝な世なかの中になりましたね。——然し盆
裁いは好いいもんだ。奇麗で、楽しみになつて」

代助は面倒臭めんどくさいから返事をせず黙つてゐた。やがて、

「悪戯いたづらも好加減い、かげんに休よすかな」と云ひながら立ち上あがつて、縁側すゑがはへ据付すゑつけの、籐との安楽椅子いすに腰こしを掛けた。夫れ限りぎぽかんと何か考へ込んでゐる。門野かぢのは詰つまらなくなつたから、自分の玄関傍わきの三畳敷じまじきへ引き取つた。障子じを開あけて這入はいらうとすると、又縁側へ呼び返かへされた。

「平岡へいおかが今日けふ来くると云つたつて」

「えゝ、来くる様な御話ごわしでした」

「ぢや待まつてゐやう」

代助は外出を見合せた。実は平岡の事が此間このあひだから大分おほい気に掛かつてゐる。

平岡は此前このぜん、代助を訪問した当時、既すでに落ち付ついてゐられな身分であつた。彼自身かれの代助に語つた所によると、地位の心当りが二三ヶ所あるから、差し当り其方面へ運動して見る積り

なんださうだが、其二三ヶ所が今どうなつてゐるか、代助は殆んど知らない。代助の方から神保町の宿を訪ねた事が二返あるが、一度は留守であつた。一度は居つたには居つた。が、洋服を着た儘、部屋の敷居の上に立つて、何か急しい調子で、細君を極め付けてゐた。——案内なしに廊下を伝つて、平岡の部屋の横へ出た代助には、突然ながら、たしかに左様取れた。其時平岡は一寸振り向いて、やあ君かと云つた。其顔にも容子にも、少しも快よさうな所は見えなかつた。部屋の内から顔を出した細君は代助を見て、蒼白い頬をぼつと赤くした。代助は何となく席に就き悪くなつた。まあ這入れと申し訳に云ふのを聞き流して、いや別段用ぢやない。何うしてゐるかと思つて一寸来て見た丈だ。出掛けるなら一所に出様と、此方から誘ふ様にしておもて出て仕舞つた。

其時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しいんで、何うする事も出来ない、たまに宿のものが教へてくれるかと思ふと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるひは今壁を塗つてる最中だつたりする。などと、電車へ乗つて分れる迄諸事苦情づくめであつた。代助も気の毒になつて、そんなら家は、宅の書生に探させやう。なに不景気だから、大分空いてるのがある筈だ。と請合つて歸つた。

夫から約束通り門野を探しに出した。出すや否や、門野はすぐ恰好なのを見付けて来た。門野に案内をさせて平岡夫婦に見せると、大抵可からうと云ふ事で分れたさうだが、門野は家主の方へ責任もあるし、又其所が気に入らなければ外を探す考もあるからと云ふので、借りるか借りないか判断した所を、もう一遍確かめさせたのである。

「君、家主いへぬしの方へは借りかるつて、断きわつて来たんだらうね」
「え、帰りに寄よつて、明日あした引越すからつて、云きつて来きました」

四の三

代助は椅子に腰こしを掛かけた儘、新あたらしく二度の世帯しよたいを東京に持
つ、夫婦の未来を考へた。平岡は三年前新橋で分れた時とは、も
う大分變つてゐる。彼かれの経歴は処世の階はしご子段を一二段で踏ふみ外はづ
したと同じ事である。まだ高い所へ上のぼつてゐなかつた丈が、幸さいひ
と云へば云ふ様なものゝ、世間の眼めに映あざる程、身体からだに打撲だぼくを
受けてゐないのみで、其実精神状態には既に狂きやうひが出来てゐる。
始めて逢つた時、代助はすぐ左様さやう思つた。けれども、三年間に
起つた自分の方の變化を打だ算さんして見て、或は此方こつちの心こゝろが向むかひに反

響を起したのではなからうかと訂正した。が、其後平岡の旅宿へ尋ねて行つて、座敷へも這入らないで一所に外へ出た時の、容子から言語動作を眼の前に浮べて見ると、どうしても又最初の判断に戻らなければならなくなつた。平岡は其時顔の中心に一種の神経を寄せてゐた。風が吹いても、砂が飛んでも、強い刺激を受けさうな眉と眉の継目を、憚らず、ぴくつかせてゐた。さうして、口にする事が、内容の如何に関はらず、如何にも急しなく、且つ切なさうに、代助の耳に響いた。代助には、平岡の凡てが、恰も肺の強くない人の、重苦しい葛湯の中を片息で泳いでゐる様に取れた。

「あんなに、焦つて」と、電車へ乗つて飛んで行く平岡の姿を見送つた代助は、口の内でつぶやいだ。さうして旅宿に残されてゐる細君の事を考へた。

代助は此細君を捕まへて、かつて奥さんと云つた事がない。何時でも三千代さんくと、結婚しない前の通りに、本名を呼んでゐる。代助は平岡に分れてから又引き返して、旅宿へ行つて、三千代さんに逢つて話しをしやうかと思つた。けれども、何だか行けなかつた。足を停めて思案しても、今の自分には、行くのが悪いと云ふ意味はちつとも見出せなかつた。けれども、気が咎めて行かれないなかつた。勇気を出せば行かれると思つた。たゞ代助には是丈の勇気を出すのが苦痛であつた。夫で家へ歸つた。其代り歸つても、落ち付かない様な、物足りない様な、妙な心持がした。ので、又外へ出て酒を飲んだ。代助は酒をいくらでも飲む男である。ことに其晩はしたゝかに飲んだ。「あの時は、何うかしてゐたんだ」と代助は椅子に倚りながら、比較的冷やかな自己で、自己の影を批判した。

「何か御用ですか」と門野が又出て来た。袴を脱いで、足袋を脱いで、団子の様な素足を出してゐる。代助は黙つて門野の顔を見た。門野も代助の顔を見て、一寸の間突立つてゐた。

「おや、御呼になつたんぢやないですか。おや、おや」と云つて引込んで行つた。代助は別段可笑しいとも思はなかつた。

「小母さん、御呼びになつたんぢやないとき。何うも変だと思つた。だから手も何も鳴らないつて云ふのに」といふ言葉が茶の間の方で聞えた。夫から門野と婆さんの笑ふ声がした。

其時、待ち設けてゐる御客が来た。取次に出た門野は意外な顔をして這入つて来た。さうして、其顔を代助の傍迄持つて来て、先生、奥さんですと囁やく様に云つた。代助は黙つて椅子を離れて坐敷へ這入つた。

四の四

平岡の細君は、色の白い割に髪かみの黒い、細面ほそおもてに眉毛まみへの判然はつきりうつ映る女である。一寸ちよつと見ると何所どことなく淋さみしい感じの起る所が、古版こはんの浮世絵に似てゐる。帰京後は色光沢いろつやがことに可よくないやうだ。始めて旅宿で逢つた時、代助は少しすこ驚ろいた位である。汽車で長く揺られた疲れが、まだ回復しないのかと思つて、聞いて見たら、左様さやうぢやない、始終か斯うなんだと云はれた時は、氣の毒になつた。

それから
三千代みちよは東京を出て一年目に産をした。生れた子供はぢき死んだが、それから心臓を痛めたと見えて、兎角うまか具合がわるい。始めのうちは、ただ、ぶら／＼してゐたが、何どうしても、はか／＼しく癒らないので、仕舞に医者に見て貰もらつたら、能よくは分わか

らないが、ことに依ると何とかいふ六づかしい名の心臓病かも知れないと云つた。もし左様だとすれば、心臓から動脈へ出る血が、少しづつ、後戻りをする難症だから、根治は覚束ないと宣告されたので、平岡も驚ろいて、出来る丈養生に手を尽した所為か、一年許りするうちに、好い案排に、元気が滅切りよくなつた。色光沢も殆んど元の様に冴々して見える日が多いので、当人も喜こんでゐると、帰る一ヶ月ばかり前から、又血色が悪くなり出した。然し医者の話によると、今度のは心臓の為ではない。心臓は、夫程丈夫にもならないが、決して前よりは悪くなつてゐない。弁の作用に故障があるものとは、今は決して認められないといふ診断であつた。——是は三千代が直に代助に話した所である。代助は其時三千代の顔を見て、矢つ張り何か心配の為ぢやないかしらと思つた。

三千代は美しくしい線を奇麗に重ねた鮮かな二重瞼を持つてゐる。眼の恰好は細長い方であるが、瞳を据ゑて凝と物を見るときに、それが何かの具合で大変大きく見える。代助は是を黒眼の働らきと判断してゐた。三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代の斯う云ふ眼遣を見た。さうして今でも善く覺えてゐる。三千代の顔を頭の中に浮べやうとすると、顔の輪廓が、まだ出来上らないうちに、此黒い、湿んだ様に暈された眼が、ぽつと出て来る。

廊下伝ひに坐敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛け、さうして奇麗な手を膝の上に置ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の杵に比較的大きな真珠を盛つた当世風のもので、三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。

三千代は顔を上げた。代助は、突然例の眼を認めて、思はず瞬を一つした。

汽車で着いた明日平岡と一所に来る筈であつたけれども、つい気分が悪いので、来損なつて仕舞つて、それから一人でなぐつては来る機会がないので、つい出ずにゐたが、今日は丁度、と云ひかけて、句を切つて、それから急に思ひ出した様に、此間来て呉れた時は、平岡が出掛際だつたものだから、大変失礼して済まなかつたといふ様な詫をして、

「待つてゐらつしやれば可かつたのに」と女らしく愛想をつけ加へた。けれども其調子は沈んでゐた。尤も是は此女の持調子で、代助は却つて其昔を憶ひ出した。

「だつて、大変忙しさうだつたから」

「え、忙しい事は忙しいんですけども——好いぢやありません

せんか。居ゐらしつたつて。あんまり他人行儀ですわ」

代助は、あの時、夫婦の間に何があつたか聞いて見様と思つたけれども、まづ已めにした。例いづもなら調戲からかひ半分かに、あなたは何か叱しかられて、顔かほを赤くしてゐましたね、どんな悪い事わるをしたんですか位言ひかねない間柄あひだがらなのであるが、代助には三千代の愛嬌あじとが、後あとから其場そのばを取り繕とふ様に、いたましく聞えたので、冗談を云ひ募る元氣も一寸出なかつた。

四の五

それから

代助は烟草たばこへ火ひを点つけて、吸口すひくちを啣くわへた儘、椅子の脊せに頭あたまをも持もたせて、寛くわろいだ様に、

「久し振ぶりだから、何か御馳走ごちそうしませうか」と聞きいた。さうし

て心のうちで、自分の斯う云ふ態度が、幾分か此女の慰藉になる様に感じた。三千代は、

「今日は沢山。さう緩りしちやゐられないの」と云つて、昔の金歯を一寸見せた。

「まあ、可いでせう」

代助は両手を頭の後へ持つて行つて、指と指を組み合わせる三千代を見た。三千代はこゝんで帯の間から小さな時計を出した。

代助が真珠の指輪を此女に贈ものにする時、平岡は此時計を妻に買つて遣つたのである。代助は、一つ店で別々の品物を買つた後、平岡と連れ立つて其所の敷居を跨ぎながら互に顔を見合せて笑つた事を記憶してゐる。

「おや、もう三時過ぎね。まだ二時位かと思つたら。——少し寄り道をしてゐたものだから」

と独り言ごごの様に説明を加へた。

「そんなに急いそぐんですか」

「え、成なり丈たけ早く帰りたいの」

代助は頭あたまから手てを放はなして、烟草たばこの灰をはたき落した。

「三年さんねんのうちの大分世帯染だいぶんしよたいしじみちまつた。仕方しかたがない」

代助は笑つて斯う云つた。けれども其調子には何処どこかに苦にがい

所があつた。

「あら、だつて、明日引越あしたひっこすんぢやありませんか」

三千代みちよの声は、此時急このときに生々いきくと聞きえた。代助は引越ひっこしの事を丸

で忘れてゐた。

「ぢや引越ひっこしてから緩ゆつくり来くれば可いいのに」

代助は相手の快こころよささうな調子に釣つり込まれて、此方こつちからも

他愛たあいなく追窮おきつした。

「でも」と云つた、三千代は少し挨拶に困つた色を、額の所へあらはして、一寸下を見たが、やがて頬を上げた。それが薄赤く染まつて居た。

「実は私少し御願があつて上がつたの」

疝かんの鋭どい代助は、三千代の言葉を聞くや否や、すぐ其用事の何であるかを悟つた。実は平岡が東京へ着いた時から、いつか此問題に出逢ふ事だらうと思つて、半意識はんいしきの下で覚悟したしてゐたのである。

「何ですか、遠慮なく仰しやい」

「少し御金の工面が出来なくつて？」

三千代の言葉は丸で子供の様に無邪気であるけれども、両方の頬は矢つ張り赤くなつてゐる。代助は、此女に斯んな気恥きはづかしい思ひをさせる、平岡の今の境遇を、甚だ気の毒に思つた。

段々聞いて見ると、明日引越をする費用や、新らしく世帯を持つ為めの金が入用なのではなかつた。支店の方を引き上げる時、向ふへ置き去りにして来た借金が三口とかあるうちで、其一口を是非片付けなくてはならないのださうである。東京へ着いたら一週間うちに、どうしてもすると云ふ堅い約束をして来た上に、少し訳があつて、他の様に放つて置けない性質のものだから、平岡も着いた明日から心配して、所々奔走してゐるけれども、まだ出来さうな様子が見えないので、已を得ず三千代に云ひ付けて代助の所に頼みに寄したと云ふ事が分つた。

「支店長から借りたと云ふ奴ですか」

「いゝえ。其方は何時迄延ばして置いても構はないんですが、此方の方を何うかしないと困るのよ。東京で運動する方に響いて来るんだから」

代助は成程そんな事があるのかと思つた。金高かねだかを聞くと五百円と少し許である。代助はなんだ其位なかにと腹の中で考へたが、實際自分は一文もない。代助は、自分が金かねに不自由しない様でゐて、其実大いに不自由してゐる男だと気が付いた。

「何なんでまた、そんなに借金をしたんですか」

「だから私考わたくしへると厭いやになるのよ。私も病氣わたくしをしたのが、悪いわるには悪いわるけれども」

「病氣の時の費用なんですか」

「ぢやないのよ。薬代くすりだいなんか知れたもんですわ」

三千代は夫それ以上を語らなかつた。代助も夫それ以上を聞く勇氣がなかつた。たゞ蒼白あをしろい三千代の顔を眺めて、その中うちに、漠然たる未来の不安を感じた。

それから

翌日朝早く門野は荷車を三台雇つて、新橋の停車場迄平岡の荷物を受取りに行つた。実は疾うから着いて居たのであるけれども、宅がまだ極らないので、今日迄其儘にしてあつたのである。往復の時間と、向ふで荷物を積み込む時間を勘定して見ると、何うしても半日仕事である。早く行かなけりや、間に合はないよと代助は寐床を出るとすぐ注意した。門野は例の調子で、なに訳はありませんと答へた。此男は、時間の考などは、あまりない方だから、斯う簡便な返事が出来たんだが、代助から説明を聞いて始めて成程と云ふ顔をした。それから荷物を平岡の宅へ届けた上に、万事奇麗に片付く迄手伝をするんだと云はれた時は、えゝ承知しました、なに大丈夫ですと気軽に引き受け

て出て行つた。

それから十一時過^{すぎ}迄代助は読書してゐた。が不図ダヌンチオと云ふ人が、自分の家の部屋^{いへ}を、青色^{あをいろ}と赤色^{あかいろ}に分つて裝飾してゐると云ふ話を思ひ出した。ダヌンチオの主意は、生活の二大情調の発現は、此二色に外^{ほか}ならんと云ふ点に存するらしい。だから何でも興奮を要する部屋、即ち音楽室とか書齋とか云ふものは、成るべく赤く塗り立てる。又寝室とか、休息室とか、凡て精神の安静を要する所は青に近い色で飾り付をする。と云ふのが、心理学者の説を応用した、詩人の好奇心の満足と見える。

代助は何故^{なぜ}ダヌンチオの様な刺激を受け易い人に、奮興色とも見做し得べき程強烈な赤^{あか}の必要があるだらうと不思議に感じた。代助自身は稲荷の鳥居を見ても余り好^いい心持はしない。出来得るならば、自分の頭丈^{あたま}でも可^いいから、緑^{みどり}のなかに漂はして

安らかに眠りたい位である。いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる脊の高い女を画いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い氣持に出来てゐると思つた。つまり、自分もああ云ふ沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである。

代助は縁側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。花はいつしか散つて、今は新芽若葉の初期である。はなやかな緑がぱつと顔に吹き付けた様な心持ちがした。眼を醒す刺激の底に何所か沈んだ調子のあるのを嬉しく思ひながら、鳥打帽を被つて、銘仙の不断着の儘門を出た。

平岡の新宅へ来て見ると、門が開いて、がらんとしてゐる丈で、荷物の着いた様子もなければ、平岡夫婦の来てゐる気色も見えない。たゞ車夫体の男が一人縁側に腰を懸けて烟草を呑んでゐた。聞いて見ると、先刻一返御出になりましたが、此案排

ぢや、どうせ午過ひるすぎだらうつて又御帰りになりましたといふ答である。

「旦那と奥さんと一所に来たかい」

「え、御一所です」

「さうして一所に帰つたかい」

「え、御一所に御帰りになりました」

「荷物もそのうち着つくだらう。御苦労さま」と云つて、又通りへ出た。

神田へ来たが、平岡の旅館へ寄る気はしなかつた。けれども二人ふたりの事が何だか気に掛る。ことに細君の事が気に掛る。ので一寸ちよつとかほ顔を出した。夫婦は膳ぜんを並ならべて飯めしを食くつてゐた。下女げじよが盆ぼんを持つて、敷居しりに尻しりを向けてゐる。其後うしろから、声を懸けた。

平岡は驚ろいた様に代助を見た。其眼そのめが血ばしつてゐる。二

三日能く眠らない所為だと云ふ。三千代は仰山なもの、云ひ方だと云つて笑つた。代助は氣の毒にも思つたが、又安心もした。留めるのを外へ出て、飯を食つて、髪を刈つて、九段の上へ一寸寄つて、又帰りに新宅へ行つて見た。三千代は手拭を姉さん被りにして、友禪の長繻絆をさらりと出して、襷がけで荷物の世話を焼いてゐた。旅宿で世話をして呉れたと云ふ下女も来てゐる。平岡は縁側で行李の紐を解いてゐたが、代助を見て、笑ひながら、少し手伝はないかと云つた。門野は袴を脱いで、尻を端折つて、重ね箆笥を車夫と一所に坐敷へ抱へ込みながら、先生どうです、此服装は、笑つちや不可ませんよと云つた。

翌日、代助が朝食の膳に向つて、例の如く紅茶を呑んでゐると、門野が、洗ひ立ての顔を光らして茶の間へ這入つて来た。

「昨夕は何時御帰りでした。つい疲れちまつて、仮寐をしてゐたものだから、些とも気が付きませんでした。——寐てゐる所を御覧になつたんですか、先生も随分人が悪いな。全体何時頃なんです、御帰りになつたのは。夫迄何所へ行つて居らしつた」と平生の調子で苦もなく嘔舌り立てた。代助は真面目で、

「君、すつかり片付迄居て呉れたんでせうね」と聞いた。

「え、すつかり片付けちまいました。其代り、何うも骨が折れましたぜ。何しろ、我々の引越と違つて、大きな物が色々あるんだから。奥さんが坐敷の真中へ立つて、茫然、斯う周囲を見回してゐた様子つたら、——随分可笑なもんでした」

「少し身体の場合が悪いんだからね」

「どうも左様らしいですね。色が何だか可くないと思つた。平岡さんとは大違ひだ。あの人の体格は好いですね。昨夕一所に湯に入つて驚ろいた」

代助はやがて書齋へ歸つて、手紙を二三本書いた。一本は朝鮮の統監府に居る友人宛で、先達て送つて呉れた高麗焼の礼状である。一本は仏蘭西に居る姉婿宛で、タナグラの安いを見付けて呉れといふ依頼である。

昼過散歩の出掛けに、門野の室を覗いたら又引繰り返つて、ぐうぐう寐てゐた。代助は門野の無邪気な鼻の穴を見て羨ましくなつた。実を云ふと、自分は昨夕寐つかれないで大変難義したのである。例に依つて、枕の傍へ置いた袂時計が、大変大きな音を出す。夫が氣になつたので、手を延ばして、時計を枕の下へ押し込んだ。けれども音は依然として頭の中へ響いて来る。

其音を聞きながら、つい、うとくする間に、凡ての外の意識は、全く暗窖の裡に降下した。が、たゞ独り夜を縫ふミシンの針丈が刻み足に頭の中を断えず通つてゐた事を自覚してゐた。所が其音が何時かりんくといふ虫の音に變つて、奇麗な玄関の傍の植込みの奥で鳴いてゐる様になつた。——代助は昨夕の夢を此所迄辿つて来て、睡眠と覚醒との間を繋ぐ一種の糸を發見した様な心持がした。

代助は、何事によらず一度氣にかゝり出すと、何処迄も氣にかゝる男である。しかも自分で其馬鹿氣さ加減の程度を明らかに見積る丈の脳力があるので、自分の氣にかゝり方が猶眼に付いてならない。三四年前、平生の自分が如何にして夢に入るかと云ふ問題を解決しやうと試みた事がある。夜、蒲団へ這入つて、好い案排にうとくし掛けると、あゝ此所だ、斯うして眠

るんだなと思つてはつとする。すると、其瞬間に眼が冴えて仕舞ふ。しばらくして、又眠りかけると、又、そら此所だと思ふ。代助は殆んど毎晩の様に此好奇心に苦しめられて、同じ事を二遍も三遍も繰り返した。仕舞には自分ながら辟易した。どうかして、此苦痛を逃れ様と思つた。のみならず、つくぐ、自分は愚物であると考へた。自分の不明瞭な意識を、自分の明瞭な意識に訴へて、同時に回顧しやうとするのは、ジエームスの云つた通り、暗闇を検査する為に蠟燭を点したり、独楽の運動を吟味する為に独楽を抑へる様なもので、生涯寐られつこない訳になる。と解つてゐるが晩になると又はつと思ふ。

此困難は約一年許りで何時の間にか漸く遠退いた。代助は昨夕の夢と此困難とを比較して見て、妙に感じた。正氣の自己の一部分を切り放して、其儘の姿として、知らぬ間に夢の中へ譲り

渡す方が趣おもむきがあると思つたからである。同時に、此作用は氣狂きちがひになる時の状態と似て居はせぬかと考へ付いた。代助は今迄、自分は激昂しないから氣狂きちがひにはなれないと信じてゐたのである。

五の三

それから二三日は、代助も門野かどのも平岡の消息を聞かずに過すごした。四日よつかめ目の午過ひるすぎに代助は麻布あざぶのある家いへへ園遊会に呼ばれて行いつた。御客は男女を合せて、大分だいぶん来たが、正賓と云ふのは、英國の国会議員とか実業家とかいふ、無暗に脊の高い男と、それから鼻眼鏡をかけた其細君とであつた。これは中々なかの美人で、日本杯くへ来るには勿体ない位な容色だが、何処どこで買つたものか、岐阜ぎふ出来できの絵日傘ゑひがさを得意に差さしてゐた。

尤も其日は大変な好い天気で、広い芝生の上にフロツクで立つてゐると、もう夏が来たといふ感じが、肩から脊中へ掛けて著るしく起つた位、空が真蒼に透き通つてゐた。英国の紳士は顔をしかめて空を見て、実に美しくいと云つた。すると細君がすぐ、ラツヴレイと答へた。非常に疝の高い声で尤も力を入れ、た挨拶の仕様であつたので、代助は英国の御世辞は、また格別のものだと思つた。

代助も二言三言此細君から話しかけられた。が三分と経たないうちに、遣り切れなくなつて、すぐ退却した。あとは、日本服を着て、わざと島田に結つた令嬢と、長らく紐育で商業に従事してゐたと云ふ某が引き受けた。此某は英語を喋舌る天才を以て自ら任ずる男で、欠かさず英語会へ出席して、日本人と英語の会話を遣つて、それから英語で卓上演説をするのを、何よ

りの楽たのみにしてゐる。何か云つては、あとでさも可笑おかしさうに、
げらく／＼笑わらふ癖くせがある。英国人が時によると怪訝けげんな顔かほをしてゐる。代助はあれ丈は已めたら可よからうと思つた。令嬢も中々うま旨い。是は米国婦人を家庭教師に雇つて、英語を使ふ事を研究した、ある物持ちの娘である。代助は、顔より言葉の方が達者だと考へながら、つく／＼感心して聞いてゐた。

代助が此所こゝへ呼ばれたのは、個人的に此所こゝの主人や、此英国人夫婦に關係があるからではない。全く自分の父ちちと兄あにとの社交的勢力の余波で、招待状が廻つて来たのである。だから、万遍なく方々へ行つて、好い加減あたまに頭さを下げて、ぶらく／＼してゐた。其中そのうちに兄あにも居ゐた。

「やあ、来たな」と云つた儘、帽子に手も掛けない。

「何どうも、好い天気ですね」

「あゝ。結構だ」

代助も脊の低い方ではないが、兄は一層高く出来てゐる。其上この五六年次第に肥満して来たので、中々立派に見える。

「何うです、彼方へ行つて、ちと外国人と話でもしちや」

「いや、真平だ」と云つて兄は苦笑ひをした。さうして大きな腹にぶら下がつてゐる金鎖を指の先で弄つた。

「何うも外国人は調子が可いですね。少し可すぎる位だ。あゝ賞められると、天気の方でも是非好くならなくつちやならなくなる」

「そんなに天気を賞めてゐたのかい。へえ。少し暑過ぎるぢやないか」

「私にも暑過ぎる」

誠吾と代助は申し合せた様に、白い手巾を出して額を拭いた。

ふたり
おも
シルクハット
かぶ
兩人共重い絹帽を被つてゐる。

兄弟は芝生の外れの木蔭迄来て留つた。近所には誰もゐない。向ふの方で余興か何か始まつてゐる。それを、誠吾は、宅にゐると同じ様な顔をして、遠くから眺めた。

「兄の様になると、宅にゐても、客に来て同じ心持ちなんだらう。斯う世の中に慣れ切つて仕舞つても、楽しみがなくなつて、詰らないものだらう」と思ひながら代助は誠吾の様子を見てゐた。

「今日は御父さんは何うしました」

「御父さんは詩の会だ」

誠吾は相変らず普通の顔で答へたが、代助の方は多少可笑し
かつた。

「姉さんは」

それから

「御客の接待掛りだ」

また嫂あによめが後あとで不平を云ふ事だらうと考へると、代助は又可笑おかしくなつた。

五の四

代助は、誠吾の始終いそがしがつてゐる様子を知つてゐる。又その忙いそがしさの過半は、斯かう云ふ会合から出来上できあがつてゐるといふ事実も心得てゐる。さうして、別に厭いやな顔かほもせず、一口ひとくちの不平も零こぼさず、不規則に酒を飲んだり、物ものを食くつたり、女を相手にしたり、してゐながら、何時いつ見ても疲つかれた態たいもなく、噪さわぐ気色もなく、物外に平然として、年々肥満してくる技倆に敬服してゐる。

それから

誠吾が待合へ這入つたり、料理茶屋へ上つたり、晚餐に出たり、午餐に呼ばれたり、倶楽部に行つたり、新橋に人を送つたり、横浜に人を迎へたり、大磯へ御機嫌伺ひに行つたり、朝から晩迄多勢の集まる所へ顔を出して、得意にも見えなければ、失意にも思はれない様子は、斯う云ふ生活に慣れ抜いて、海月に漂ひながら、塩水を辛く感じ得ない様なものだらうと代助は考へてゐる。

其所が代助には難有い。と云ふのは、誠吾は父と異つて、嘗て小六※か²しい説法杯を代助に向つて遣つた事がない。主義だとか、主張だとか、人生観だとか云ふ窮窟なものは、てんで、これつ許も口にしないんだから、有んだか、無いんだか、殆んど要領を得ない。其代り、此窮窟な主義だとか、主張だとか、人

生観だとかいふものを積極的に打ち壊して懸つた試もない。実に平凡で好い。

だが面白くはない。話し相手としては、兄よりも嫂の方が、代助に取つて遙かに興味がある。兄に逢ふと屹度何うだいと云ふ。以太利に地震があつたぢやないかと云ふ。土耳其の天子が廃されたぢやないかと云ふ。其外、向ふ島の花はもう駄目になつた、横浜にある外国船の船底に大蛇が飼つてあつた、誰が鉄道で轢かれた、ぢやないかと云ふ。みんな新聞に出た事許である。其代り、当らず障らずの材料はいくらでも持つて居る。いつ迄経つても種が尽きる様子が見えない。

さうかと思ふと。時にトルストイと云ふ人は、もう死んだのかね杯と妙な事を聞く事がある。今日本の小説家では誰が一番偉いのかねと聞く事もある。要するに文芸には丸で無頓着で且

つ驚ろくべく無識であるが、尊敬と輕蔑以上に立つて平氣で聞くんだから、代助も返事がし易い。

斯う云ふ兄と差し向ひで話をしてみると、刺激の乏しい代りには、灰汁がなくなつて、氣樂で好い。たゞ朝から晩迄出歩いてゐるから減多に捕まへる事が出来ない。嫂でも、誠太郎でも、縫子でも、兄が終日宅に居て、三度の食事を家族と共に欠かさず食ふと、却つて珍らしがる位である。

だから木蔭に立つて、兄と肩を比べた時、代助は丁度好い機會だと思つた。

「兄さん、貴方に少し話があるんだが。何時か暇はありませんか」

「暇」と繰り返した誠吾は、何にも説明せずに見せた。
「明日の朝は何うです」

「明日の朝は浜迄行つて来なくつちやならない」

「午からは」

「午からは、会社の方に居る事はあるが、少し相談があるから、

来ても緩くり話しちやゐられない」

「ぢや晩なら宜からう」

「晩は帝国ホテルだ。あの西洋人夫婦を明日の晩帝国ホテルへ

呼ぶ事になつてるから駄目だ」

代助は口を尖がらかして、兄を凝と見た。さうして二人で笑

ひ出した。

「そんなに急ぐなら、今日ぢや、何うだ。今日なら可い。久し振りで一所に飯でも食はうか」

代助は賛成した。所が倶楽部へでも行くかと思ひの外、誠吾は鰻が可からうと云ひ出した。

シルクハットうなぎな
「絹帽なにかまで鰻屋へ行くのは始はじめてだな」と代助は逡巡した。

「何構なにかまふものか」

ふたり
二人は園遊会を辞して、車くるまに乗つて、金杉橋かなすぎばしの袂たもとにある鰻屋うなぎやへ上あがつた。

五の五

其所そこは河かはが流れて、柳やなぎがあつて、古風いへな家であつた。黒くろくなつた床柱とこばしらの傍わきの違ちがひ棚だなに、絹帽シルクハットを引繰ひつくりかへ返しに、二つ並ならべて置いて見て、代助は妙あだなと云いつた。然し明あけ放はなした二階まの間に、たつた二人ふたりで胡坐あぐらをかいてゐるのは、園遊会より却らくつて楽らくであつた。

それから
ふたり
二人は好こゝろもちい心持こゝろもちに酒を飲のんだ。兄あには飲のんで、食くつて、世間話せけんばなし

をすれば其外ほかに用はないと云ふ態度たいどであつた。代助も、うつかりすると、肝心の事件を忘れさうな勢であつた。が下女が三本目の銚子を置いて行つた時に、始めて用談に取り掛かつた。代助の用談と云ふのは、言ふ迄もなく、此間みちよ三千代から頼たのまれた金策の件である。

実を云ふと、代助は今日迄まだ誠吾に無心を云つた事がない。尤も学校を出た時少々芸者買をし過ぎすて、其尻を兄あにになすり付けた覚はある。其時兄あには叱るかと思ひの外ほか、さうか、困り者だな、親爺おやぢには内々で置けと云つて嫂あによめを通して、奇麗に借金を払つてくれた。さうして代助には一口の小言こごとも云はなかつた。代助は其時から、兄あにきに恐縮して仕舞つた。其後小遣そのちこづかひに困る事はよくあるが、困るたんびに嫂あによめを痛いためて事を済ましてゐた。従つて斯かう云ふ事件に関して兄あにとの交渉は、まあ初対面の様なもので

ある。

代助から見ると、誠吾は蔓つるのない葉やく鐘わんと同じことで、何ど処こから手を出して好いいか分わからない。然しそこが代助には興味があつた。

代助は世間話せけんばなしの体ていにして、平岡夫婦の経歴をそろそろ話はなし始めた。誠吾は面倒な顔色もせず、へえくと拍子を取る様に、飲みながら、聞いてゐる。段々進んで三千代かが金かねを借かりに来きた一段になつても、矢つ張りへえくと合あ槌づを打うつてゐる丈である。代助は、仕方なしに、

「で、私わたしも氣の毒だから、何どうにか心配して見様つて受合うつたんですかね」と云つた。

「へえ。左様さやうかい」

「何どうでせう」

それから

「御前金おまいかねが出来るできのかい」

「私わたしや一文いちもんも出来できやしません。借りかるんです」

「誰だれから」

代助たいてすけは始めはじめから此所こゝへ落す積おとつもりだつたんだから、判然はつきりした調子

で、

「貴方あなたから借りて置おかうと思ふんです」と云つて、改めて誠吾

の顔かほを見た。兄あには矢つ張り普通の顔かほをしてゐた。さうして、平

気に、

「そりや、御廢よしよ」と答へた。

誠吾まことごの理由りゆうを聞いて見ると、義理ぎりや人情にんじやうに關係けんがひがない許ばかりでは

ない、返かへす返かへさないと云ふ損得そんとくにも關係けんがひがなかつた。たゞ、そ

んな場合には放ほうつて置おけば自おのづから何どうかなるもんだと云ふ単純

な断定だんていである。

それから

誠吾は此断定を証明する為めに、色々な例を挙げた。誠吾の門内に藤野と云ふ男が長屋を借りて住んでゐる。其藤野が近頃遠縁のものゝ息子を頼まれて宅へ置いた。所が其子が徴兵検査で急に国へ帰らなければならなくなつたが、前以て国から送つてある学資も旅費も藤野が使ひ込んでゐると云ふので、一時の繰り合せを頼みに来た事がある。無論誠吾が直に逢つたのではないが、妻に云ひ付けて断らした。夫でも其子は期日迄に国へ帰つて差支なく検査を済ましてゐる。夫から此藤野の親類の何とか云ふ男は、自分の持つてゐる貸家の敷金を、つい使つて仕舞つて、借家人が明日引越すといふ間際になつても、まだ調達が出来ないとか云つて、矢つ張り藤野から泣き付いて来た事がある。然し是も断らした。夫でも別に不都合はなく敷金は返せてゐる。——まだ其外にもあつたが、まあ斯んな種類の例ばかり

りであつた。

「そりや、姉ねえさんが蔭かげへ廻まわつて恵めぐんでゐるに違ちがひない。ハ、ハ、ハ、。
兄にいさんも余なつ程呑気どなだなあ」
と代助は大きい声を出して笑つた。

「何なに、そんな事があるものか」

誠吾は矢張やじやう当り前の顔かほをしてゐた。さうして前まへにある猪口ちぐちを取とつて口くちへ持もつて行いつた。

六の一

それから

其日誠吾は中々なか／＼金かねを貸かして遣やらうと云いはなかつた。代助も
三千代みちよが氣きの毒どくだとか、可哀想あはれだとか云いふ泣言なきごとは、可成な避よける
様ようにした。自分おれが三千代みちよに對たいしてこそ、さう云いふ心こころ持ももあるが、

何にも知らない兄を、其所迄連れて行くのには一通りでは駄目だと思ふし、と云つて、無暗にセンチメンタルな文句を口にすれば、兄には馬鹿にされる、ばかりではない、かねて自分を愚弄する様な気がするので、矢つ張り平生の代助の通り、のらくらした所を、彼方へ行つたり此方へ来たりして、飲んでゐた。飲みながら、親爺の所謂熱誠が足りないとは、此所の事だなど考へた。けれども、代助は泣いて人を動かさうとする程、低級趣味のものではないと自信してゐる。凡そ何が気障だつて、思はせ振りの、涙や、煩悶や、真面目や、熱誠ほど気障なものはないと自覚してゐる。兄には其辺の消息がよく解つてゐる。だから此手で遣り損なひでもしやうものなら、生涯自分の価値を落す事になる。と気が付いてゐる。

代助は飲むに従つて、段々金を遠ざかつて来た。たゞ互が差

し向ひであるが為めに、旨く飲めたと云ふ自覚を、互に持ち得る様な話をした。が茶漬を食ふ段になつて、思ひ出した様に、金は借りなくつても好いから、平岡を何処か使つて遣つて呉れないかと頼んだ。

「いや、さう云ふ人間は御免蒙る。のみならず此不景気ぢや仕様がない」と云つて誠吾はさくく、飯を掻き込んでゐた。

明日眼が覚めた時、代助は床の中でまづ第一番に斯う考へた。「兄を動かすのは、同じ仲間の実業家でなくつちや駄目だ。単に兄弟の好丈では何うする事も出来ない」

斯う考へた様なものゝ、別に兄を不人情と思ふ気は起らなかつた。寧ろその方が当然であると悟つた。此兄が自分の放蕩費を苦情も云はずに弁償して呉れた事があるんだから可笑しい。そんなら自分が今茲で平岡の為に判を押して、連借でもしたら、

何うするだらう。矢つ張り彼の時の様に奇麗に片付けて呉れるだらうか。兄は其所迄考へてゐて、断わつたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初から安心して借さないのかしらん。

代助自身の今の傾向から云ふと、到底人の為に判なぞを押しさうにもない。自分もさう思つてゐる。けれども、兄が其所を見抜いて金を貸さないとすると、一寸意外な連帯をして、兄がどんな態度に変わるか、試験して見たくもある。——其所迄来て、代助は自分ながら、あんまり性質が能くないなと心のうちで苦笑した。

けれども、唯一つ慥な事がある。平岡は早晚借用証書を携へて、自分の判を取りにくるに違ない。

斯う考へながら、代助は床を出た。門野は茶の間で、胡坐を

それから

かいて新聞を読んでゐたが、髪かみを濡ぬらして湯殿ゆどのから帰かへつて来る代助だいすけを見るや否いなや、急に坐あざん三昧まいを直なほして、新聞を畳たたんで坐蒲団ざぶたんの傍そばへ押おし遣やりながら、

「何どうも『煤烟ばいえん』は大変な事になりましたな」と大きな声で云つた。

「君読よんでるんですか」

「え、毎朝まいあさ読よんでます」

「面白おもしろいですか」

「面白おもしろい様ようですな。どうも」

「何どんな所ところが」

「何どんな所ところがつて。さう改あらたまつて聞きかれちや困こまりますが。何

ぢやありませんか、一体いったいに、斯ごとう、現代的げんたいてきの不安ふあんがで出でてゐる様ようぢやありませんか」

「さうして、肉の臭におひがしやしないか」

「しますな。大いに」

代助は黙だまつて仕舞つた。

六の二

紅茶々碗を持つた儘、書齋へ引き取つて、椅子へ腰こしを懸けて、
茫然ぼんやり庭を眺ながめてゐると、瘤こぶだらけの柘榴ざくろの枯枝かれえだと、灰色はいいろの幹みきの
根方ねがたに、暗緑あんりよくと暗紅あんかうを混まぜ合あはした様な若い芽わかが、一面に吹き
出だしてゐる。代助の眼めには夫それがぱつと映えいじた丈で、すぐ刺激を
失つて仕舞つた。

代助の頭あたまには今具体的な何物をも留とどめてゐない。恰さかも戸外こぐわい
の天気あまの様に、それが静しづかに凝じつと働はたらいてゐる。が、其底そこには

微塵みじんの如き本体の分らぬものが無数に押し合つてゐた。乾酪ちいずの中なかで、いくら虫むしが動うごいても、乾酪ちいずが元もとの位置にある間は、氣あひだが付かないと同じ事で、代助も此微震びしんには殆んど自覚を有してゐなかつた。たゞ、それが生理的に反射して来る度たびに、椅子の上うへで、少し宛身体づからだの位置を變かへなければならなかつた。

代助は近頃流行語の様に人が使ふ、現代的とか不安とか云ふ言葉を、あまり口くちにした事がない。それは、自分が現代的であるのは、云はずと知れてゐると考へたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分で信じて居たからである。

代助は露西亜文学に出でて来る不安を、天候の具合と、政治の圧迫で解釈してゐる。仏蘭西文学に出でてくる不安を、有夫姦の多いためと見てゐる。ダヌンチオによつて代表される以太利文

それから

学の不安を、無制限の墮落から出る自己欠損の感と判断してゐる。だから日本の文学者が、好んで不安と云ふ側がはからのみ社会を描き出すのを、舶来とうぶつの唐物の様に見倣してゐる。

理智的に物を疑ふ方の不安は、学校時代に、有あつたにはあつたが、ある所迄進行して、ぴたりと留とまつて、夫から逆戻りをして仕舞つた。丁度天へ向つて石を抛なげた様なものである。代助は今では、なまじい石杯を抛なげなければ可よかつたと思つてゐる。禅坊さんの所謂大疑現前杯だいぎげんぜんと云ふ境界は、代助のまだ踏み込んだ事のない未知国である。代助は、斯かう真卒性急に万事を疑ふには、あまりに利口りこうに生れ過ぎた男である。

代助は門野かどのの賞ほめた「煤烟」を讀んでゐる。今日は紅茶々碗そばの傍そばに新聞を置いたなり、開あけて見る気にならない。ダヌンチオの主人公は、みんな金かねに不自由のない男だから、贅ぜいたく沢の結果あゝ

云ふ悪戯いたづらをしても無理とは思へないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな余地のない程に貧しい人である。それを彼所迄押して行くには、全く情愛じやうあいの力でなくつちや出来る筈のものでない。所が、要吉といふ人物にも、朋子ともこといふ女にも、誠まことの愛で、已むなく社会の外そとに押し流されて行く様子が見えない。彼等を動かす内面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝいふ境遇に居て、あゝ云ふ事を断行し得る主人公は、恐らく不安ぢやあるまい。これを断行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は独りで考へるたびに、自分は特殊人オリヂナルだと思ふ。けれども要吉の特殊人オリヂナルたるに至つては、自分より遙かに上手うはてであると承認した。それで此間このあひだ迄は好奇心に駆かられて「煤烟」を読んでゐたが、昨今になつて、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある様に思はれ出したので、

眼めを通さない事がよくある。

代助は椅子の上うへで、時々身ときどきを動かうごした。さうして、自分では飽く迄落ち付いて居ると思つてゐた。やがて、紅茶を呑んで仕舞つて、例いつもの通り読書どくしょに取りかゝつた。約二時間ばかりは故障なく進行したが、ある頁ページの中頃まで来て急に休やめて頬杖ほつを突ついた。さうして、傍そばにあつた新聞を取つて、「煤烟ほか」を読んだ。呼吸こゝろの合はない事は同じ事である。それから外ほかの雑報ざつぱうを読んだ。大隈伯が高等商業の紛擾こんじやうに關して、大いに騒動さわどうしつゝある生徒側せいとくの味方あつちをしてゐる。それが中々強い言葉ことばで出でてゐる。代助は斯かう云ふ記事きじを読よむと、是は大隈伯が早稲田へ生徒せいとくを呼び寄せよせる為ための方便べんべんだと解釈かいさくする。代助は新聞を放り出だした。

それから

それから

午過ひるすぎになつてから、代助は自分が落ち付いてゐないと云ふ事を、漸く自覚し出しただ。腹はらのなかに小さな皺しわが無数に出来て、其皺そのしわが絶えず、相互さうごの位地と、形状かたちとを変かへて、一面に揺うごいてゐる様な気持がする。代助は時々ときぐ斯う云ふ情調の支配を受ける事がある。さうして、此種の経験きんを、今日迄、単なる生理上の現象としてのみ取り扱つて居つた。代助は昨日兄きのふあにと一所うなぎに鰻うなぎを食つたのを少し後悔した。散歩がてらに、平岡の所へ行て見みやうかと思ひ出だしたが、散歩が目的か、平岡が目的か、自分には判然たる区別がなかつた。婆さんに着物を出ださして、着換きかへやうとしてゐる所へ、甥をひの誠太郎が来きた。帽子を手に持もつた儘、恰好いいの好まるい円あたまい頭あたまを、代助の頭へ出して、腰こしを掛かけた。

「もう学校は引けたのかい。早過はやすぎぎるぢやないか」

「ちつとも早はやかない」と云つて、笑わらひながら、代助の顔かほを見てゐる。代助は手てを敲たたいて婆ばあさんを呼よんで、

「誠太郎、チヨコレートを飲のむかい」と聞いた。

「飲のむ」

代助はチヨコレートを二杯命じて置いて誠太郎に調戯からかひだした。

「誠太郎、御前はベースボール許遣ばかりやるもんだから、此頃手このごろが大

変あたま大きくなつたよ。頭あたまより手の方が大きいよ」

誠太郎はにこくして、右の手で、円まるい頭あたまをぐるぐる撫なでた。

実際大きな手を持つてゐる。

「叔父おぢさんは、昨日御父きのふおとうさんから奢おごつて貰もらつたんですつてね」

「あゝ、御馳走おかげになつたよ。御蔭おかげで今日けふは腹具はらぐあひ合わるが悪わるくつて不可いけ

ない」

「又またしんけい神經だ」

それから

「しんけい神経ぢやない本当だよ。全またく兄にいさんの所せ為みだ」

「おとうだつて御父おとうさんは左様さやう云つてましたよ」

「なん何なんて」

「あした明日あした学校の帰りに代助の所へ廻つて何か御馳走して貰もらへつて」

「きのふへえ、昨日きのふの御礼にかい」

「けふえ、今日けふは己おれが奢おごつたから、明日あしたが向むかふの番ばんだつて」

「やそれで、わざく遣やつて来たのかい」

「ええ、」

「あにき兄あにきの子丈あつて、中々なか抜ぬけないな。だから今チヨコレートを飲のまして遣やるから可いぢやないか」

「チヨコレートなんぞ」

「の飲のまないかい」

「の飲のむ事は飲のむけれども」

誠太郎の注文を能く聞いて見ると、相撲が始まつたら、回向院へ連れて行つて、正面の最上等の所で見物させるといふのであつた。代助は快よく引き受けた。すると誠太郎は嬉しさうな顔をして、突然、

「叔父さんはのらくらして居るけれども實際偉いんですつてね」と云つた。代助も是には一寸呆れた。仕方なしに、

「偉いのは知れ切つてるぢやないか」と答へた。

「だつて、僕は昨夕始めて御父さんから聞いたんですもの」と云ふ弁解があつた。

誠太郎の云ふ所によると、昨夕兄が宅へ帰つてから、父と嫂と三人して、代助の合評をしたらしい。小供のいふ事だから、能く分らないが、比較的頭が可いので、能く断片的に其時の言葉を覚えてゐる。父は代助を、どうも見込がなさうだと評した

のださうだ。兄あには之これに對して、あゝ遣やつてゐても、あれで中々解わかつた所がある。当分ほう放ほうつて置くおが可いい。放ほうつて置おいても大丈夫だ、間違まちがはない。いづれ其内そのうちに何か遣やるだらうと弁護べんごしたのださうだ。すると嫂あによめがそれに賛成さんせいして、一週間許ゆるり前まへ占者うらなひしやに見てもらつたら、此人このひとは屹度人かみの上に立たつに違ちがないと判断はんぱんしたから大丈夫だと主張しやうけんしたのださうだ。

代助たいてすけはうん、それから、と云つて、始終面白おもしろさうに聞いて居たが、占者うらなひしやの所ところへ来きたら、本当に可笑おかししくなつた。やがて着物きものを着換きかへて、誠太郎まことろうを送りながら表へ出て、自分は平岡ひらおかの家いへを訪たづねた。

六の四

平岡の家は、此十数年来の物価騰貴に伴れて、中流社会が次第々々に切り詰められて行く有様を、住宅の上に善く代表してゐる、尤も粗悪な見苦しき構へである。とくに代助には左様見えた。

門と玄関の間が一間位しかない。勝手口も其通りである。さうして裏にも、横にも同じ様な窮屈な家が建てられてゐる。東京市の貧弱なる膨脹に付け込んで、最低度の資本家が、なげなしの元手を二割乃至三割の高利に廻さうと目論で、あたぢけなく拵へ上げた、生存競争の記念である。

今日の東京市、ことに場末の東京市には、至る所に此種の家が散点してゐる、のみならず、梅雨に入つた蚤の如く、日毎に、格外の増加律を以て殖えつゝある。代助はかつて、是を敗亡の発展と名づけた。さうして、之を目下の日本を代表する最好の

シンボル
象徴とした。

彼等のあるものは、石油缶せきゆうくわんの底そこを継ぎ合つあはせた四角うろこな鱗うろこで蔽おほはれてゐる。彼等の一つを借りて、夜中よなかに柱はしらの割おとれる音おとで眼めを醒さまさないものは一人ひとりもない。彼等の戸かどには必ず節穴ふしあながある。彼等の襖ふすまは必ず狂くるひが出ると極ごくつてゐる。資本あたまを頭なかの中なかへ注つぎ込んで、月々つきぐ其頭あたまから利息あきを取とつて生活あたましやうと云いふ人間にんげんは、みんな斯かういふ所ところを借かりて立たて籠こもつてゐる。平岡ひらおかも其一人いちにんである。

それから
代助かきねは垣根まへの前まへを通るとき、先まづづ其屋根やねに眼めが付ついた。さうして、どす黒くろい瓦がわの色いろが妙かに彼かれの心こころを刺さ激げきした。代助かきねには此光ひかりのない土つちの板いたが、いくらでも水みづを吸すひ込こむ様ように思おもはれた。玄関げんかん前に、此間このあひだ引越ひきこえのときときに解ほどいた菰包こもづみの藁屑わらくづがまだ零こぼれてゐた。座敷ざしきへ通とほると、平岡ひらおかは机まへの前まへへ坐すつて、長ながい手紙てがみを書かき掛かけてゐる。

る所であつた。三千代は次の部屋で簞笥の環をかたかた鳴らしてゐた。傍に大きな行李が開けてあつて、中から奇麗な長繻絆の袖が半分出かかつてゐた。

平岡が、失敬だが鳥渡待つて呉れと云つた間に、代助は行李と長繻絆と、時々行李の中へ落ちる織い手とを見てゐた。襖は明けた儘閉て切る様子もなかつた。が三千代の顔は陰になつて見えなかつた。

やがて、平岡は筆を机の上へ抛げ付ける様にして、座を直した。何だか込み入つた事を懸命に書いてゐたと見えて、耳を赤くしてゐた。眼も赤くしてゐた。

「何うだい。此間は色々難有う。其後一寸札に行かうと思つて、まだ行かない」

平岡の言葉は言訳と云はんより寧ろ挑戦の調子を帯びてゐる

様に聞こえた。襯衣も股引も着けず、すぐ胡坐をかいた。襟を正しく合せないので、胸毛が少し出ゝゐる。

「まだ落ち付かないだらう」と代助が聞いた。

「落ち付く所か、此分ぢや生涯落ち付きさうもない」と、いそがしさうに烟草を吹かし出した。

代助は平岡が何故こんな態度で自分に応接するか能く心得てゐた。決して自分に中るのぢやない、つまり世間に中るんである、否己れに中つてゐるんだと思つて、却つて氣の毒になつた。けれども代助の様な神経には、此調子が甚だ不愉快に響いた。たゞ腹が立たない丈である。

「宅の都合は、どうだい。間取の具合は可ささうぢやないか」

「うん、まあ、悪くつても仕方がない。氣に入つた家へ這入らうと思へば、株でも遣るより外に仕様がなからう。此頃東京に

出来る立派な家はみんな株屋が拵へるんだつて云ふぢやないか」

「左様かも知れない。其代り、あゝ云ふ立派な家が一軒立つと、其陰に、どの位沢山な家が潰れてゐるか知れやしない」

「だから猶住み好いだらう」

平岡は斯う云つて大いに笑つた。其所へ三千代が出て来た。先達てはと、軽く代助に挨拶をして、手に持つた赤いフランネルのくるくると巻いたのを、坐ると共に、前へ置いて、代助に見せた。

「何ですか、それは」

「赤※坊3の着物なの。拵へた儘、つい、まだ、解かずにあつたのを、今行李の底を見たら有つたから、出して来たんです」と云ひながら、附紐を解いて筒袖を左右に開いた。

「こら」

「まだ、そんなものを仕舞つといたのか。早く壊こわして雑巾ぞうじにでもして仕舞へ」

六の五

三千代みちよは小供こどもの着物きものを膝ひざの上うへに乗のせた儘まま、返事こたへもせずしばらく俯向うつむいて眺ながめてゐたが、

「貴方あなたのと同じおんなに拵こしらへたのよ」と云おつとつて夫おつとの方かたを見た。

「是これか」

平岡かすりは緋あはせの袴したの下したへ、ネルかきを重かさねて、素肌すはだに着きてゐた。

「是これはもう不可いかん。暑あつくて駄目だめだ」

代助はじは始はじめて、昔むかしの平岡ひらをかを当まの面あたりに見みた。

それから

「あはせした
裕の下にネルを重ねちやもう暑い。繻絆にすると可い」

「うん、面倒だから着てゐるが」

「洗濯をするから御脱ぎなさいと云つても、中々脱がないのよ」

「いや、もう脱ぐ、己も少々厭になつた」

「はなしし
話は死んだ小供の事をとう／＼離れて仕舞つた。さうして、

来た時よりは幾分か空気に暖味が出来た。平岡は久し振りに一

杯飲まうと云ひ出した。三千代も支度をするから、緩りして行

つて呉れと頼む様に留めて、次の間へ立つた。代助は其後姿を

見て、どうかして金を拵へてやりたいと思つた。

「君何所か奉公口の見当は付いたか」と聞いた。

「うん、まあ、ある様な無い様なもんだ。無ければ当分遊ぶ丈

の事だ。緩くり探してゐるうちには何うかなるだらう」

云ふ事は落ち付いてゐるが、代助が聞くと却つて焦つて探し

てゐる様にしか取れない。代助は、昨日兄きのふあにと自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせやうと思つてゐたのだが、此一言を聞いて、しばらく見合せる事にした。何だか、構かまへてゐる向ふの体面を、わざと此方こつちから毀損する様な気がしたからである。其そのうへか上金の事に付ついては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。だから表向挨拶をする必要もないのである。たゞ、斯かうして黙だまつてゐれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴やつだと悪わるく思はれるに極きまつてゐる。けれども今の代助はさう云ふ非難ひなんに対して、殆んど無感覺である。又實際自分はさう熱烈な人間にんげんぢやないと考へてゐる。三四年前の自分になつて、今の自分を批判して見れば、自分は、墮落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧まはして見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使ひ回まはしてゐた。渡金めつきを金きんに通用させ様

とする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。と今は考へてゐる。

代助が真鍮を以て甘んずる様になつたのは、不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚ろきの余り、心機一転の結果を来たしたといふ様な、小説じみた歴史を有つてゐる為ではない。全く彼れ自身に特有な思索と観察の力によつて、次第々々に渡金を自分で剥がして来たに過ぎない。代助は此渡金の大半をもつて、親爺が捺摺り付けたものと信じてゐる。其時分は親爺が金に見えた。多くの先輩が金に見えた。相当の教育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の渡金が辛かつた。早く金になりたいと焦つて見た。所が、他のものゝ地金へ、自分の眼光がちかに打つかる様になつて以後は、それが急に馬鹿な尽力の様に思はれ出した。

代助は同時に斯う考へた。自分が三四年の間に、是迄変化したんだから、同じ三四年の間に、平岡も、かれ自身の経験の範圍内で大分変化してゐるだらう。昔しの自分なら、可成平岡によく思はれたい心から、斯んな場合には兄あにと喧嘩をしても、父と口論をしても、平岡の為ために計つたらう、又其計はかつた通りを平岡の所へ来きて事々ことごとくしく吹聴したらうが、それを予期するのは、矢つ張り昔しの平岡で、今の彼は左程に友達を重くは見てゐない。

それで肝心の話は一二言で已やめて、あとは色々な雑談に時を過すごすうちに酒が出でた。三千代が徳利の尻しりを持つて御酌をした。

六の六

平岡は酔ふに従つて、段々口が多くなつて来た。此男はいくら酔つても、中く平生を離れない事がある。かと思ふと、大變に元氣づいて、調子に一種の悦樂を帯びて来る。さうなると、普通の酒家以上に、能く弁する上に、時としては比較的眞面目な問題を持ち出して、相手と議論を上下して楽し気に見える。代助は其昔し、麦酒の壇を互の間に並べて、よく平岡と戦つた事を覚えてゐる。代助に取つて不思議とも思はれるのは、平岡が斯う云ふ状態に陥つた時が、一番平岡と議論がしやすいと云ふ自覚であつた。又酒を呑んで本音を吐かうか、と平岡の方からよく云つたものだ。今日の二人の境界は其時分とは、大分離れて来た。さうして、其離れて、近づく路を見出し悪い事実を、双方共に腹の中で心得てゐる。東京へ着いた翌日、三年振りで邂逅した二人は、其時既に、二人ともに何時か互の傍を立退い

てゐたことを発見した。

所が今日けふは妙である。酒さけに親したしめば親したしむ程、平岡むかしが昔の調子を出だして来きた。旨うまい局所へ酒さけが回まはつて、刻下こくかの経済や、目前の生活や、又それに伴ふ苦痛やら、不平やら、心の底の騒さわがしさやらを全然まひ癡ひして仕舞つた様に見える。平岡の談話は一躍いちやくして高たかい平面に飛あび上あがつた。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働はたらいてゐる。又是かはたらも働はたらく積つもりだ。君は僕の失敗したのを見て笑つてゐる。――

笑はないたつて、要するに笑つてると同じ事に帰着するんだから構はない。いゝか、君は笑つてゐる。笑つてゐるが、其君そのきみは何も為しないぢやないか。君は世なかの中を、有ありの儘まで受け取る男だ。言葉を換えて云ふと、意志を発展させる事の出来ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘うそだ。人間だもの。其証拠には、始終物

足りないに違ちがひない。僕は僕の意志を現実社会はたらに働き掛かけて、其現実社会が、僕の意志の為ために、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の価値かちを認めるんだ。君はたゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭あたまの中の世界と、頭あたまの外そとの世界を別々べつべつに建立して生きてゐる。此大不調和を忍んでゐる所が、既に無形の大失敗ぢやないか。何故なぜと云つて見給へ。僕のは其不調和を外そとへ出だした迄で、君のは内に押し込んで置く丈の話だから、外面ぐわいめんに押し掛けた丈、僕の方が本当の失敗の度ほどは少すくないかも知れない。でも僕は君に笑はれてゐる。さうして僕は君を笑ふ事が出来ない。いや笑ひたいんだが、世間から見ると、笑つちや不可いけないんだらう」

「何笑なにわらつても構はない。君が僕を笑ふ前に、僕は既に自分を笑

つてゐるんだから」

「そりや、嘘だ。ねえ三千代」

三千代は先刻から黙つて坐つてゐたが、夫から不意に相談を

受けた時、にこりと笑つて、代助を見た。

「本当でせう、三千代さん」と云ひながら、代助は盃を出して、

酒を受けた。

「そりや嘘だ。おれの細君が、いくら弁護したつて、嘘だ。尤

も君は人を笑つても、自分を笑つても、両方共頭の中で遣る人

だから、嘘か本当か其辺はしかと分らないが……」

「冗談云つちや不可ない」

「冗談ぢやない。全く本気の沙汰であります。そりや昔の君は

さうぢや無かつた。昔の君はさうぢや無かつたが、今の君は大

分違つてるよ。ねえ三千代。長井は誰が見たつて、大得意ぢや

ないか」

「何なんだか先刻さつきから、傍そばで伺うかがつてると、貴方あなたの方が余あまつ程御得ごとく意いの様ようよ」

平岡は大きな声を出してハ、と笑つた。三千代みちよは爛徳利かんを持もつて次つぎの間へ立たつた。

六の七

平岡は膳うへの上さかなの肴ふたくちみくちを二口三口、箸はしで突つついて、下を向いた儘まま、むしやく、云はしてゐたが、やがて、どろんとした眼めを上あげて、云つた。――

「今日けふは久ひさし振ぶりに好いい心持こころもちに酔よつた。なあ君。――君はあんまり好いい心持こころもちにならないね。何どうも怪けしからん。僕わがが昔むかしの平岡

それから

それから

常次郎になつてゐるのに、君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給へ。さうして、大いに遣つて呉れ給へ。僕も是から遣る。から君も遣つて呉れ給へ」

代助は此言葉のうちに、今の自己を昔に返さうとする真卒な又無邪気な一種の努力を認めた。さうして、それに動かされた。けれども一方では、一昨日、食つた麵麩を今返せと強請られる様な気がした。

「君は酒を呑むと、言葉丈酔払つても、頭は大抵確かな男だから、僕も云ふがね」

「それだ。それでこそ長井君だ」
代助は急に云ふのが厭になつた。

「君、頭は確かい」と聞いた。

「確だとも。君さへ確なら此方は何時でも確だ」と云つて、ち

やんと代助の顔を見た。實際自分の云ふ通りの男である。そこで代助が云つた。――

「君はさつきから、働らかない」と云つて、大分僕を攻撃したが、僕は黙つてゐた。攻撃される通り僕は働らかない積だから黙つてゐた」

「何故働かない」

「何故働かないつて、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の

中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が

駄目だから働かないのだ。第一、日本程借金を拵らへて、貧乏

震ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君、何時になつた

ら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、

それ許りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもし

なければ、到底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て

任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしやうとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行おくゆきを削つて、一等国丈の間口まぐちを張つちまつた。なまじい張れるから、なほ悲惨ひさんなものだ。牛うしと競争をする蛙かへると同じ事で、もう君、腹はらが裂さけるよ。其影響はみんな我々個人うへの上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は、頭あたまに余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日こんにちの、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神こんぱいの困憊こんぱいと、身体の衰弱とは不幸にして伴ともなつてゐる。のみならず、道德だうとくの敗退はいたいも一所きに来てゐる。日本国中どこ何所を見渡したつて、輝かやいてる断面だんめんは一寸四方も無いぢや

ないか。悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を為したつて、仕様がないき。僕は元来怠なまけものだ。いや、君と一所に往来してゐる時分から怠なまけものだ。あの時は強ひて景気をつけてゐたから、君には有為多望の様に見えたんだらう。そりや今だつて、日本の社会が精神的、徳義的、身体的に、大體の上に於て健全なら、僕は依然として有為多望なのさ。さうなれば遣やる事はいくらでもあるからね。さうして僕の怠惰性に打ち勝かつ丈の刺激も亦いくらでも出来て来るだらうと思ふ。然し是ぢや駄目だ。今の様なら僕は寧ろ自分丈になつてゐる。さうして、君の所謂有ありの儘の世界を、有の儘で受取つて、其中僕に尤も適したものに接触を保つて満足する。進んで外ほかの人を、此方こつちの考へ通りにするなんて、到底出来た話ぢやありやしないもの——」

代助は一寸息を継いだ。さうして、一寸窮屈さうに控えてみる三千代の方を見て、御世辞を遣つた。

「三千代さん。どうです、私の考は。随分呑気で宜いでせう。

賛成しませんか」

「何だか厭世の様な呑気の様な妙なのね。私よく分らないわ。けれども、少し胡麻化して入らつしやる様よ」

「へええ。何処ん所を」

「何処ん所つて、ねえ貴方」と三千代は夫を見た。平岡は股の上へ肱を乗せて、肱の上へ顎を載せて黙つてゐたが、何にも云はずに盃を代助の前に出した。代助も黙つて受けた。三千代は又酌をした。

それから

代助は盃へ唇を付けながら、是から先はもう云ふ必要がないと感じた。元來が平岡を自分の様に考へ直させる為の弁論でもなし、又平岡から意見されに來た訪問でもない。二人はいつ迄立つても、二人として離れてゐなければならぬ運命を有つてゐるんだと、始めから心付てゐるから、議論は能い加減に引き上げて、三千代の仲間入りの出来る様な、普通の社交上の題目に談話を持つて來やうと試みた。

けれども、平岡は酔ふとしつこくなる男であつた。胸毛の奥迄赤くなつた胸を突き出して、斯う云つた。

「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に當つて、現実と悪闘してゐるものは、そんな事を考へる余地がない。日本が貧弱だつて、弱虫だつて、働らいてるうちには、忘れてゐる

それから

からね。世なかの中なかが墮落だらくしたつて、世なかの中なかの墮落だらくに気が付つかないで、其中うちに活動うごするんだからね。君きみの様な暇人ひまじんから見れば日本にっぽんの貧乏びんぼうや、僕等われらの墮落だらくが気になるかも知れないが、それは此社会こゝに用のない傍觀者ぼうくわんにして始めて口くちにすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見ると余裕があるから、さうなるんだ。忙いそがしい時は、自分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」

平岡は噁舌しゃべつてゐるうち、自然しぜんと此比喻こゝに打ぶつかつて、大いなる味方あつちを得た様な心持こころがしたので、其所そこで得意とくいに一段落いちだんらくをつけた。代助たいてすけは仕方しかたなしに薄笑うすわらひをした。すると平岡はすぐ後あとを附加つげへた。

「君きみは金かねに不自由ふじゆうしないから不可いけない。生活くわつに困こまらないから、働はたらく気きにならないんだ。要ひつするに坊ぼつちやんだから、品ひんの好いい様なこと許ばつかり云いつてゐて、——」

代助は少々平岡が小憎しくなつたので、突然中途で相手を遮ぎつた。

「働らくのも可いが、働らくなら、生活以上の働でなくつちや名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麵麩を離れてゐる」

平岡は不思議に不愉快な眼をして、代助の顔を窺つた。さうして、

「何故」と聞いた。

「何故つて、生活の為めの労力は、労力の為めの労力でないもの」

「そんな論理学の命題見た様なものは分らないな。もう少し實際的の人間に通じる様な言葉で云つてくれ」

「つまり食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪いと云ふ意味さ」

「僕の考へとは丸で反対だね。食ふ為めだから、猛烈に働らく気になるんだらう」

「猛烈には働らせるかも知れないが誠実には働らき悪いよ。食ふ為の働らきと云ふと、つまり食ふのと、働らくのと何方が目的だと思ふ」

「無論食ふ方さ」

「夫れ見給へ。食ふ方が目的で働らく方が方便なら、食ひ易い様に、働らき方を合せて行くのが当然だらう。さうすりや、何を働らいたつて、又どう働らいたつて、構はない、只麵麩が得られ、ば好いと云ふ事に帰着して仕舞ふぢやないか。労力の内容も方向も乃至順序も悉く他から掣肘される以上は、其労力は墮落の労力だ」

「まだ理論的だね、何うも。夫で一向差支ないぢやないか」

「では極上品な例で説明してやらう。古臭い話だが、ある本で斯んな事を読んだ覚えがある。織田信長が、ある有名な料理人を抱へた所が、始めて、其料理人の拵へたものを食つて見ると頗る不味かつたんで、大變小言を云つたさうだ。料理人の方では最上の料理を食はして、叱られたものだから、其次からは二流もしくは三流の料理を主人にあてがつて、始終褒められたさうだ。此料理人を見給へ。生活の為に働らく事は抜目のない男だらうが、自分の技芸たる料理其物のために働らく点から云へば、頗る不誠実ぢやないか、墮落料理人ぢやないか」

「だつて左様しなければ解雇されるんだから仕方があるまい」

「だからさ。衣食に不自由のない人が、云はゞ、物数奇にやる働らきでなくつちや、真面目な仕事は出来るものぢやないんだよ」

「さうすると、君の様な身分のものでなくつちや、神聖の労力は出来ない訳だ。ぢや益遣る義務がある。なあ三千代」

「本当ですわ」

「何だか話が、元へ戻つちまつた。是だから議論は不可ないよ」と云つて、代助は頭を掻いた。議論はそれで、とう／＼御仕舞になつた。

七の一

代助は風呂へ這入た。

「先生、何うです、御爛は。もう少し燃させませうか」と門野が突然入り口から顔を出した。門野は斯う云ふ事には能く氣の付く男である。代助は、凝と湯に浸つた儘、

それから

「結構」と答へた。すると、門野が、

「ですか」と云ひ棄て、茶の間の方へ引き返した。代助は門野の返事のし具合に、いたく興味を有つて、独りにやくと笑つた。代助には人の感じ得ない事を感じる神経がある。それが為時々苦しい思もする。ある時、友達の御親爺さんが死んで、葬式の供に立つたが、不図其友達が装束を着て、青竹を突いて、柩のあとへ付いて行く姿を見て可笑しくなつて困つた事がある。又ある時は、自分の父から御談義を聞いてゐる最中に、何の気もなく父の顔を見たら、急に吹き出したくなつて弱り抜いた事がある。自宅に風呂を買はない時分には、つい近所の銭湯に行つたが、其所に一人の骨格の逞ましい三助がゐた。是が行くたんに、奥から飛び出して来て、流しませうと云つては脊中を擦る。代助は其奴に体をごしく遣られる度に、どうしても、

エジプトじん
埃及人に遣られてゐる様な気がした。いくら思ひ返しても日本人とは思へなかつた。

まだ不思議な事がある。此間、ある書物を読んだら、ウエーバーと云ふ生理学者は自分の心臓の鼓動を、増したり、減したり、随意に変化さしたと書いてあつたので、平生から鼓動を試験する癖のある代助は、ためしに遣つて見たくなつて、一日に二三回位怖々ながら試してゐるうちに、何うやら、ウエーバーと同じ様になりさうなので、急に驚ろいて已めにした。

湯のなかに、静かに浸つてゐた代助は、何の気なしに右の手を左の胸の上へ持つて行つたが、どん／＼と云ふ命の音を二三度聞くや否や、忽ちウエーバーを思ひ出して、すぐ流しへ下りた。さうして、其所に胡坐をかいた儘、茫然と、自分の足を見詰めてゐた。すると其足が変になり始めた。どうも自分の胴か

ら生はえてゐるんでなくて、自分とは全く無関係のものが、其所そこに無作法に横よこたはつてゐる様に思はれて来たき。さうなると、今迄は気が付つかなかつたが、実じつに見るに堪えない程醜みにくいものである。毛けが不揃むらに延のびて、青あをい筋すぢが所々ところどころに蔓はびこつて、如何にも不思議な動物である。

代助は又湯ゆに這入こつて、平岡の云つた通り、全またく暇ひまがあり過ぎるので、こんな事迄考へるのかと思つた。湯から出でて、鏡かがみに自分の姿を写うつした時、又平岡の言葉を思ひ出だした。幅あつの厚あつい西洋髪剃かみそりで、顎あごと頬ほを剃そる段だんになつて、其鋭すどい刃はが、鏡かがみの裏うらで閃ひらめく色いろが、一種むづ痒がゆい様な気持おこを起おこした。是これが烈敷はげしくなると、高い塔の上から、遙かの下を見下したすのと同じになるのだと意識しながら、漸く剃り終おはつた。

茶の間まを抜ぬけ様とする拍子しに、

「何うも先生は旨いよ」と門野が婆さんに話してゐた。

「何が旨いんだ」と代助は立ちながら、門野を見た。門野は、

「やあ、もう御上りですか。早いですな」と答へた。此挨拶で

は、もう一遍、何が旨いんだと聞かれもしなくなつたので、其

儘書齋へ歸つて、椅子に腰を掛けて休息してゐた。

休息しながら、斯う頭が妙な方面に鋭どく働き出しちや、身体

の毒だから、些と旅行でもしやうかと思つて見た。一つは近来

持ち上つた結婚問題を避けるに都合が好いとも考へた。すると

又平岡の事が妙に気に掛つて、転地する計画をすぐ打ち消して

仕舞つた。それを能く煎じ詰めて見ると、平岡の事が気に掛る

のではない、矢つ張り三千代の事が気にかかるのである。代助

は其所迄押して来ても、別段不徳義とは感じなかつた。寧ろ愉

快な心持がした。

代助が三千代と知り合になつたのは、今から四五年前の事で、代助がまだ学生の頃であつた。代助は長井家の関係から、当時交際社会の表面にあらはれて出た、若い女の顔も名も、沢山に知つてゐた。けれども三千代は其方面の婦人ではなかつた。色合から云ふと、もつと地味で、氣持から云ふと、もう少し沈んでゐた。其頃、代助の学友に菅沼と云ふのがあつて、代助とも平岡とも、親しく附合つてゐた。三千代は其妹である。

此菅沼は東京近県のもので、学生になつた二年目の春、修業の為と号して、国から妹を連れて来ると同時に、今迄の下宿を引き払つて、二人して家を持つた。其時妹は国の高等女学校を

卒業した許ばかりで、年は慥たしか十八とか云ふ話はなしであつたが、派出な半襟かたあけを掛けて、肩かた上あけをしてゐた。さうして程なくある女学校へ通かよひ始はじめた。

菅沼の家いへは谷中やなかの清水町しみづちようで、庭にはのない代りに、椽側へ出でると、上野もりの森ふるの古い杉すぎが高く見えた。それがまた、錆さびた鉄てつの様に、頗すこぶる異あやしい色いろをしてゐた。其その一本は殆んど枯かれ掛かかつて、上うへの方まはには丸裸まるはだかの骨許残ほねばかりつた所に、夕方ゆふがたになると烏くろまが沢山集さわらみまつて鳴ないてゐた。隣わかには若い画家ゑがきが住すんでゐた。車くるまもあまり通とらない細い横町よこまちで、至極閑静な住居すまゐであつた。

代助は其所そこへ能く遊あそびに行いつた。始めて三千代みちよに逢あつた時、三千代はたゞ御辞儀ごじぎをした丈で引込んで仕舞つた。代助は上野の森を評して帰つて来た。二返行つても、三返行つても、三千代はたゞ御茶ごちやを持つて出でる丈であつた。其癖くせ狭い家うちだから、隣となり

それから

の室へやにゐるより外はなかつた。代助は菅沼と話はなしながら、隣となりの室へやに三千代がゐて、自分の話を聴きいてゐるといふ自覚を去る訳わけに行ゆかなかつた。

三千代みちよと口くちを利きき出だしたのは、どんな機はづみ会みであつたか、今では代助の記憶に残のこつてゐない。残のこつて居ゐない程、瑣末な尋常の出來事から起つたのだらう。詩や小説に厭あいた代助には、それが却かつて面白かつた。けれども一旦口くちを利きき出だしてからは、矢つ張り詩や小説と同じ様に、二人ふたりはすぐ心安こころやすくなつて仕舞つた。

平岡も、代助の様に、よく菅沼すがぬまの家うちへ遊あそびに來きた。あるときふたりは二人連つれ立だつて、來きた事もある。さうして、代助と前後して、三千代みちよと懇意になつた。三千代は兄あにと此二人ふたりに食くつついて、時々池の端はた杯はを散步した事がある。

四人よつたりは此關係やくにねんで約二年足らず過すごした。すると菅沼すがぬまの卒業すす

る年の春、菅沼の母と云ふのが、田舎から遊びに出て来て、しばらく清水町に泊つてゐた。此母は年に一二度づつは上京して、子供の家に五六日寐起する例になつてゐたんだが、其時は帰る前日から熱が出だして、全く動けなくなつた。それが一週間の後、窒扶斯と判明したので、すぐ大学病院へ入れた。三千代は看護の為附添として一所に病院に移つた。病人の経過は、一時稍佳良であつたが、中途からぶり返して、とう／＼死んで仕舞つた。それ許ではない。窒扶斯が、見舞に來た兄に伝染して、是も程なく亡くなつた。国にはたゞ父親が一人残つた。

それが母の死んだ時も、菅沼の死んだ時も出て来て、始末をしたので、生前に關係の深かつた代助とも平岡とも知り合になつた。三千代を連れて国へ帰る時は、娘とともに二人の下宿を別々に訪ねて、暇乞旁礼を述べた。

其年の秋、平岡は三千代と結婚した。さうして其間に立つたものは代助であつた。尤も表向きは郷里の先輩を頼んで、媒酌人として式に連なつて貰つたのだが、身体を動かして、三千代の方を纏めたものは代助であつた。

結婚して間もなく二人は東京を去つた。国に居た父は思はざるある事情の為に余儀なくされて、是も亦北海道へ行つて仕舞つた。三千代は何方かと云へば、今心細い境遇に居る。どうかして、此東京に落付いてゐられる様にして遣りたい気がする。代助はもう一返嫂に相談して、此間の金を調達する工面をして見やうかと思つた。又三千代に逢つて、もう少し立ち入つた事情を委しく聞いて見やうかと思つた。

けれども、平岡へ行つた所で、三千代が無暗に洗ひ浚い曉舌
り散らす女ではなし、よしんば何うして、そんな金が要る様に
なつたかの事情を、詳しく聞き得たにした所で、夫婦の腹の中
なんぞは容易に探られる訳のものではない。——代助の心の底
を能く見詰めてみると、彼の本当に知りたい点は、却つて此所
に在ると、自から承認しなければならなくなる。だから正直を
云ふと、何故に金が入用であるかを研究する必要は、もう既に
通り越してゐたのである。実は外面の事情は聞いても聞かなく
つても、三千代に金を貸して満足させたい方であつた。けれど
も三千代の歡心を買ふ目的を以て、其手段として金を拵へる氣
は丸でなかつた。代助は三千代に対して、それ程政略的な料簡
を起す余裕を有つてゐなかつたのである。

其^{その}上平岡の留守へ行き中^あて、今日^{こんにち}迄の事情を、特に經濟の
点に關して丈でも、充分聞き出すのは困難である。平岡が家^{うち}に
ゐる以上は、詳しい話^{はなし}の出来ないのは知れ切つてゐる。出来て
も、それを一から十迄^ま真に受ける訳には行かない。平岡は世間
的な色々の動機から、代助に見栄^{みえ}を張つてゐる。見栄^{みえ}の入らな
い所でも一種の考から沈黙を守つてゐる。

代助は、兎も角もまづ^{あによめ}嫂に相談して見やうと決心した。さうし
て、自分ながら甚だ覺束ないとは思つた。今迄^{あによめ}嫂にちびく、
無心を吹き掛けた事は何度もあるが、斯^かう短兵急に^{いた}痛め付ける
のは始めてである。然し梅子は自分の自由になる資産をいく
らか持^もつてゐるから、或は出来ないとも限らない。夫^{それ}で駄目な
ら、又高利でも借^かりるのだが、代助はまだ其^{そこ}所迄には氣が進ん
でゐなかつた。たゞ早晚平岡から表向きに、連帶責任を強ひら

れて、それを断わり切れない位なら、一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遙かに愉快だといふ取捨の念丈は殆んど理窟を離れて、頭の中に潜んでゐた。

生暖かい風の吹く日であつた。曇つた天氣が何時迄も無精に空に引掛つて、中々暮れさうにない四時過から家を出て、兄の宅迄電車で行つた。青山御所の少し手前迄来ると、電車の左側を父と兄が綱曳で急がして通つた。挨拶をする暇もないうちに擦れ違つたから、向ふは元より気が付かずに過ぎ去つた。代助は次の停留所で下りた。

兄の家の門を這入ると、客間でピアノの音がした。代助は一寸砂利の上に立ち留つたが、すぐ左へ切れて勝手口の方へ廻つた。其所には格子の外に、ヘクターと云ふ英国産の大きな犬が、大きな口を革紐で縛られて臥てゐた。代助の足音を聞くや否や、

ヘクターは毛の長い耳を振つて、斑な顔を急に上げた。さうして尾を揺かした。

入口の書生部屋を覗き込んで、敷居の上に立ちながら、一言二言愛嬌を云つた後、すぐ西洋間の方へ来て、戸を明けると、嫂がピヤノの前に腰を掛けて両手を動かして居た。其傍に縫子が袖の長い着物を着て、例の髪を肩迄掛けて立つてゐた。代助は縫子の髪を見るたんびに、ブランコに乗つた縫子の姿を思ひ出す。黒い髪と、淡紅色のリボンと、それから黄色い縮緬の帯が、一時に風に吹かれて空に流れる様を、鮮かに頭の中に刻み込んでゐる。

おやこ
母子は同時に振り向いた。

「おや」

縫子の方は、黙つて馳けて来た。さうして、代助の手をぐい

く引張ひっぱつた。代助はピアノの傍そば迄き来た。

「如何なる名人が鳴ならしてゐるのかと思つた」

梅子は何にも云はずに、額ひたいに八の字を寄よせて、笑ひながら手を振り振り、代助の言葉を遮さぎつた。さうして、向むかふから斯かう云つた。

「代さん、此こゝ所ところを一寸遣ちよつとつて見みせて下ください」

代助は黙だまつて嫂あによめと入れ替かつた。譜ふを見ながら、両方りやうはたの指ゆびをしばらく奇麗はたらに働あつた後、

「斯かうだらう」と云つて、すぐ席を離れた。

七の四

それから三十分程あひだの間、母子おやこして交かるぐ、樂器がくぎの前に坐すつて

は、一つ所を復習してゐたが、やがて梅子が、
「もう廃しませう。彼方へ行つて、御飯でも食ませう。叔父さん
もゐらつしやい」と云ひながら立つた。部屋の中はもう薄暗
くなつてゐた。代助は先刻から、ピアノの音を聞いて、嫂や姪
の白い手の動く様子を見て、さうして時々は例の欄間の画を眺
めて、三千代の事も、金を借りる事も殆んど忘れてゐた。部屋
を出る時、振り返つたら、紺青の波が摧けて、白く吹き返す所
だけが、暗い中に判然見えた。代助は此大濤の上に黄金色の雲の
峰を一面に描かした。さうして、其雲の峰をよく見ると、真裸
な女性の巨人が、髪を乱し、身を躍らして、一団となつて、暴
れ狂つてゐる様に、旨く輪廓を取らした。代助はルキイルを雲
に見立てた積で此図を注文したのである。彼は此雲の峰だか、
又巨大な女性だか、殆んど見分けの付かない、偉な塊を脳中に

髣髴して、ひそかに嬉しがつてゐた。が偕出来上つて、壁の中へ嵌め込んでみると、想像したよりは不味かつた。梅子と共に部屋を出た時は、此ルキイルは殆んど見えなかつた。紺青の波は固より見えなかつた。たゞ白い泡の大きな塊が薄白く見えた。居間にはもう電燈が点いてゐた。代助は其所で、梅子と共に晩食を済ました。子供二人も卓を共にした。誠太郎に兄の部屋からマニラを一本取つて来さして、夫を吹かしながら、雑談をした。やがて、小供は明日の下読をする時間だと云ふので、母から注意を受けて、自分の部屋へ引き取つたので、後は差し向になつた。

代助は突然例の話を持ち出すのも、変なものだと思つて、關係のない所からそろ／＼進行を始めた。先づ父と兄が綱曳で車を急がして何所へ行つたのだとか、此間は兄さんに御馳走にな

それから

つたとか、あなたは何故麻布の園遊会へ来なかつたのだとか、御父さんの漢詩は大抵法螺だとか、色々聞いたり答へたりして居るうちに、一つ新しい事実を発見した。それは外でもない。父と兄が、近來目に立つ様に、忙しさうに奔走し始めて、此四五日は碌々寝るひまもない位だと云ふ報知である。全体何が始つたんですと、代助は平気な顔で聞いて見た。すると、嫂も普通の調子で、さうですね、何か始つたんでせう。御父さんも、兄さんも私には何にも仰しやらないから、知らないけれども答へて、代さんは、それよりか此間の御嫁さんをと云ひ掛けてゐる所へ、書生が這入つて来た。

今夜も遅くなる、もし、誰と誰が来たら何とか屋へ来る様に云つて呉れと云ふ電話を伝へた儘、書生は再び出て行つた。代助は又結婚問題に話に戻ると面倒だから、時に姉さん、些御願

それから
があつて来たんだが、とすぐ切り出して仕舞つた。

梅子は代助の云ふ事を素直に聞いて居た。代助は凡てを話すに約十分許を費やした。最後に、

「だから思ひ切つて貸して下さい」と云つた。すると梅子は真面目な顔をして、

「さうね。けれども全体何時返す気なの」と思ひも寄らぬ事を問ひ返した。代助は顎の先を指で撮んだ儘、じつと嫂の気色を窺つた。梅子は益真面目な顔をして、又斯う云つた。

「皮肉ぢやないのよ。怒つちや不可ませんよ」

代助は無論怒つてはゐなかつた。たゞ姉弟から斯ういふ質問を受けやうと予期してゐなかつた丈である。今更返す気だの、貰う積りだのと布衲すればする程馬鹿になる許だから、甘んじて打撃を受けてゐた丈である。梅子は漸やく手に余る弟を取つ

て抑えた様な気がしたので、後が大変云ひ易かつた。――

七の五

「代さん、あなたは不断から私を馬鹿にして御出なさる。――
いゝえ、厭味を云ふんぢやない、本当の事なんですもの、仕方
がない。さうでせう」

「困りますね、左様真剣に詰問されちや」

「善ござんすよ。胡魔化ささないでも。ちやんと分つてるんだか
ら。だから正直に左様だと云つて御仕舞なさい。左様でない
と、後が話せないから」

代助は黙つてにや／＼笑つてゐた。

「でせう。そら御覧なさい。けれども、それが当り前よ。ちつ

とも構かまやしません。いくら私わたしが威張おどろつたつて、貴方あなたに敵かたひつこないのは無論むろんですもの。私わたしと貴方あなたとは今迄どほ通りの関係かんけいで、御互ごごひに満足まんぞくなんだから、文句ぶんこうはありやしません。そりや夫それで好いいとして、貴方あなたは御父おとうさんも馬鹿ばかにして入いらつしやるのね」

代助だいてすけは嫂あによめの態度たいどの真卒まそつな所ところが氣きに入いつた。それで、

「え、少しは馬鹿ばかにしてゐます」と答こたへた。すると梅子うめこは左ひだりも愉快えんげきさうにハ、ハ、と笑わらつた。さうして云いつた。

「兄にいさんも馬鹿ばかにして入いらつしやる」

「兄にいさんですか。兄にいさんは大おほいに尊敬そんけいしてゐる」

「嘘うそを仰おつしやい。序ついでだから、みんな打ぶち散まけて御仕舞しまいなさい」

「そりや、或点あるてんでは馬鹿ばかにしない事こともない」

「それ御覽らんなさい。あなたは一家族いけぞう中ちゆう悉しつく馬鹿ばかにして入いらつしやる」

「どうも恐れ入りました」

「そんな言訳いひわけはどうでも好いいんですよ。貴方あなたから見れば、みんな馬鹿にされる資格があるんだから」

「もう、廃よさうぢやありませんか。今日は中な中なかきびしいですね」

「本当なのよ。夫それで差支さしつかへないんですよ。喧嘩なも何なにも起おこらないん

だから。けれどもね、そんなに偉えらい貴方あなたが、何故なぜ私わたしなんぞから

御金おかねを借かりる必要があるの。可笑おかしいぢやありませんか。いえ、

揚足あげあしを取とると思おもふと、腹はらが立たつでせう。左様そんなんぢやありませ

ん。それ程えら偉あなたい貴方おかねでも、御金おかねがないと、私わたし見た様あたまなものに頭あたま

を下さげなけりやならなくなる」

「だから先さつきから頭あたまを下さげてゐるんです」

「まだ本気で聞いてゐらつしやらないのね」

「是わたしが私わたしの本気な所ところなんです」

「ぢや、それも貴方あなたの偉い所えらかも知れない。然し誰も御金おかねを貸かして手てがなくなつて、今の御友達おともだちを救すくつて上げる事あが出来なかつたら、何どうなさる。いくら偉えらくつても駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋くるまやと同おんなしですもの」

代助あによめは今迄いま嫂あによめが是程適切な異見いけんを自分に向つて加へ得やうとは思はなかつた。実は金かねの工面こうめんを思ひ立つてから、自分でも此弱点じゆてんを冥々めいめいの裡うちに感じてゐたのである。

「全く車屋くるまやですね。だから姉ねえさんに頼たのむんです」

「仕方がないのね、貴方あなたは。あんまり、偉過えらすぎて。一人ひとりで御金かねを

御取とんなさいな。本当の車屋くるまやなら貸かして上げない事もないけれども、貴方あなたには厭いやよ。だつて余あんなまりぢやありませんか。月々つきづく兄にいさんや御父おとうさんの厄介やくがいになつた上うへに、人ひとの分迄ぶん自分に引受けて、貸してやらうつて云ふんだから。誰だれも出し度だはないぢやありませんか。

せんか」

梅子の云ふ所は実に尤もである。然し代助は此尤もつともを通り越して、気が付つかずにゐた。振り返つて見ると、後うしろの方に姉あねと兄あにと父ちちがかたまつてゐた。自分も後戻りあともどをして、世間並せけんなみにならなければならぬと感じた。家うちを出る時で、嫂あによめから無心を断たわられるだらうとは氣遣きづかつた。けれども夫それが為ために、大いに働はたらいて、自から金を取らねばならぬといふ決心は決して起し得なかつた。代助は此事件を夫程重くは見てゐなかつたのである。

七の六

梅子は、此機会を利用して、色々の方面から代助を刺激しやうと力めた。所が代助には梅子の腹はらがよく解わかつてゐた。解わかれば

解^{わか}る程激する気にならなかつた。そのうち話題は金^{かね}を離れて、再び結婚^{こんくわん}に戻^{もど}つて来た。代助は最近の候補者に就て、此間^{このあひだ}から親爺^{おやぢ}に二度程悩^{なや}まされてゐる。親爺の論理は何時聞^{いつき}いても昔し風に甚だ義理堅^{かた}いものであつたが、其代り今度は左程権柄^{けんがら}づくでもなかつた。自分の命^{いのち}の親^{おや}に当^{あた}る人^{ひと}の血統を受け^{うけ}たものと縁組^{えんぐみ}をするのは結構な事であるから、貫^{もら}つて呉れと云ふのである。さうすれば幾分か恩^{かへ}が返^{かへ}せると云ふのである。要するに代助から見ると、何が結構なのか、何が恩返しに当^{あた}るのか、丸で筋の立た^たない主張であつた。尤も候補者自身に就ては、代助も格別の苦情は持つてゐなかつた事丈は慥かである。だから父^{ちち}の云ふ事の当否は論弁^{ろんべん}の限^{かぎり}にあらざとして、貫^{もら}へば貫^{もら}つても構^{かま}はないのである。代助は此二三年来、凡ての物に對して重きを置かない習慣になつた如く、結婚^{けっこん}に對しても、あまり重きを置く必要

を認めてゐない。佐川の娘といふのは只写真で知つてゐる許であるが、夫丈でも沢山な様な気がする。——尤も写真は大分美しくかつた。——従つて、貰ふとなれば、左様面倒な条件を持ち出す考も何もない。たゞ、貰ひませうと云ふ確答が出なかつた丈である。

その不明晰な態度を、父に評させると、丸で要領を得てゐない鈍物同様の挨拶振になる。結婚を生死の間に横はる一大要件と見做して、あらゆる他の出来事を、これに従属させる考の嫂から云はせると、不可思議になる。

「だつて、貴方だつて、生涯一人である気でもないんでせう。さう我儘を云はないで、好い加減な所で極めて仕舞つたら何うです」と梅子は少し焦れつたさうに云つた。

生涯一人であるか、或は妾を置いて暮すか、或は芸者と関係

をつけるか、代助自身にも明瞭な計画は丸でなかつた。只、今の彼は結婚といふものに対して、他の独身者の様に、あまり興味を持ってなかつた事は慥である。是は、彼の性情が、一凶に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭が普通以上に鋭どくつて、しかも其鋭さが、日本現代の社会状況のために、幻像打破の方面に向つて、今日迄多く費やされたのと、それから最後には、比較的金錢に不自由がないので、ある種類の女を大分多く知つてゐるのとに帰着するのである。が代助は其所迄解剖して考へる必要は認めてゐない。たゞ結婚に興味がないと云ふ、自己に明かな事実を握つて、それに応じて未来を自然に延ばして行く気である。だから、結婚を必要事件と、初手から断定して、何時か之を成立させ様と喘る努力を、不自然であり、不合理であり、且つあまりに俗臭を帯びたものと解釈した。

それから

代助は固より斯んな哲理フヒロソフヒーあによめを嫂あによめに向つて講釈する気はない。が、段々押し詰つめられると、苦し紛まぎれに、

「だが、姉ねえさん、僕は何うしても嫁よめを貰もらはなければならぬのかね」と聞きく事がある。代助は無論真面目まじめに聞きく積つもりだけれども、嫂あによめの方では呆あきれて仕舞ふ。さうして、自分を茶にするのだと取る。梅子は其晩代助に向つて、平生いづもの手續てつづきを繰くり返かへした後あとで、斯こんな事を云つた。

「妙なね、そんなに厭いやがるのは。——厭いやなんぢやないつて、口くちでは仰おつしやるけれども、貰もらはなければ、厭いやなのと同おんなしぢやありませんか。それぢや誰だれか好きすきなのがあるんでせう。其方そのかたの名なを仰おつしやい」

代助は今迄嫁よめの候補者としては、たゞの一人も好すいた女をんなを頭あたまの中なかに指名してゐた覚がなかつた。が、今斯いまう云はれた時、ど

う云ふ訳か、不意に三千代といふ名が心に浮かんだ。つゞいて、だから先刻云つた金を貸して下さい、といふ文句が自から頭の中なかで出来上つた。——けれども代助はたゞ苦笑して嫂あによめの前に坐すはつてゐた。

八の一

代助あによめが嫂あによめに失敗して帰つた夜は、大分更だいぶんけてゐた。彼は辛からうじて青山の通りで、最後さいごの電車を捕つかまえた位である。それにも拘かはらず彼の話かたしてゐる間あひだには、父ちちも兄あにも帰つて来こなかつた。尤そのあひだも其間に梅子ところは電話口ぐちへ二返呼こつちばれた。然し、嫂あによめの様子に別段変つた所ところもないので、代助は此方こつちから進んで何にも聞かなかつた。

それから

其夜は雨催の空が、地面と同じ様な色に見えた。停留所の赤い柱の傍に、たつた一人立つて電車を待ち合はしてゐると、遠い向ふから小さい火の玉があらはれて、それが一直線に暗い中を上下に揺れつつ代助の方に近いて来るのが非常に淋しく感ぜられた。乗り込んで見ると、誰も居なかつた。黒い着物を着た車掌と運転手の間に挟まれて、一種の音に埋まつて動いて行く、動いてゐる車の外は真暗である。代助は一人明るい中に腰を掛けて、どこ迄も電車に乗つて、終に下りる機会が来ない迄引つ張り廻される様な気がした。

神楽坂へかゝると、寂りとした路が左右の二階家に挟まれて、細長く前を塞いでゐた。中途迄上つて来たなら、それが急に鳴り出した。代助は風が家の棟に当る事と思つて、立ち留まつて暗い軒を見上げながら、屋根から空をぐるりと見廻すうちに、忽

ち一種の恐怖に襲はれた。戸と障子と硝子の打ち合ふ音が、見る／＼^{はげ}烈しくなつて、あゝ地震だと気が付いた時は、代助の足は立ちながら半ば竦んでゐた。其時代助は左右の二階家が坂を埋むべく、双方から倒れて来る様に感じた。すると、突然右側の潜り戸をがらりと開けて、小供を抱いた一人の男が、地震だ／＼、大きな地震だと云つて出て来た。代助は其男の声を聞いて漸く安心した。

家へ着いたら、婆さんも門野も大いに地震の噂をした。けれども、代助は、二人とも自分程には感じなかつたらうと考へた。寐てから、又三千代の依頼をどう所置し様かと思案して見た。然し分別を凝らす迄には至らなかつた。父と兄の近来の多忙は何事だらうと推して見た。結婚は愚図々々にして置かうと了簡を極めた。さうして眠に入つた。

そのあくるひ

其明日の新聞に始めて日糖事件なるものがあらはれた。砂糖を製造する会社の重役が、会社の金かねを使用して代議士の何名かを買収したと云ふ報知である。門野は例の如く重役や代議士の拘引されるのを痛快だ々々と評してゐたが、代助にはそれ程痛快にも思へなかつた。が、二三日するうちに取り調べを受けるものゝ数かずが大分多くなつて来て、世間ではこれを大疑獄の様に囃たし立てる様になつた。ある新聞ではこれを英国に対する検挙と称した。其説明には、英国大使が日糖株を買ひ込んで、損をして、苦情を鳴らし出だしたので、日本政府も英国へ対する申訳に手を下くだしたのでとあつた。

日糖事件の起る少し前、東洋汽船といふ会社は、壺割二分の配当をした後あとの半期に、八十万円の欠損を報告した事があつた。それを代助は記憶して居た。其時の新聞が此報告を評して信を

置くに足らんと云つた事も記憶してゐた。

代助は自分の父と兄の關係してゐる会社に就ては何事も知らなかつた。けれども、いつ何んな事が起るまいものでもないとは常から考へてゐた。さうして、父も兄もあらゆる点に於て神聖であるとは信じてゐなかつた。もし八釜敷い吟味をされたなら、両方共拘引に価する資格が出来はしまいかと迄疑つてゐた。それ程でなくつても、父と兄の財産が、彼等の脳力と手腕丈で、誰が見ても尤と認める様に、作り上げられたとは肯はなかつた。

明治の初年に横浜へ移住奨励のため、政府が移住者に土地を与へた事がある。其時たゞ貰つた地面の御蔭で、今は非常な金満家になつたものがある。けれども是は寧ろ天の与へた偶然である。父と兄の如きは、此自己にのみ幸福なる偶然を、人為的に且政略的に、暖室を造つて、拵え上げたんだらうと代助は鑑定

してゐた。

八の二

代助は斯^かう云ふ考で、新聞記事に対しては別に驚ろきもしなかつた。父^{ちち}と兄^{あに}の会社に就ても心配をする程正直ではなかつた。たゞ三千代の事丈が多少気に掛つた。けれども、徒手^{てぶら}で行くのが面白くないんで、其うちの事と腹^{はら}の中で料簡^{なか}を定^{さだ}めて、日々^{にちく}読書に耽つて四五日^{すじ}過した。不思議な事に其後例^{そのご}の金^{かね}の件に就いては、平岡からも三千代からも何とも云つて来^こなかつた。代助は心^{こころ}のうちに、あるひは三千代が又一人^{ひとり}で返事を聞^ききに來^くる事もあるだらうと、実^{じつ}は心待^{こころまち}に待つてゐたのだが、其甲斐はなかつた。

それから

仕舞にアンニユイを感じ出した。何処か遊びに行く所はあるまいかと、娯楽案内を捜して、芝居でも見やうと云ふ氣を起した。神楽坂から外濠線へ乗つて、御茶の水迄来るうちに氣が變つて、森川丁にゐる寺尾といふ同窓の友達を尋ねる事にした。此男は学校を出ると、教師は厭だから文学を職業とすると云ひ出して、他のものゝ留めるにも拘らず、危険な商買をやり始めた。やり始めてから三年になるが、未だに名声も上らず、窮々云つて原稿生活を持続してゐる。自分の關係のある雑誌に、何でも好いから書けと逼るので、代助は一度面白いものを寄草した事がある。それは一ヶ月の間雑誌屋の店頭に曝されたぎり、永久人間世界から何処かへ、運命の爲めに持つて行かれて仕舞つた。それぎり代助は筆を執る事を御免蒙つた。寺尾は逢ふたんに、もつと書け書けと勧める。さうして、己を見ろと云ふ

のが口癖くちくせであつた。けれども外ほかの人に聞きくと、寺尾ももう陥落かんらくするだらうと云ふ評判であつた。大変露西亞ものが好すきで、ことに人が名前を知らない作家が好すきで、なけなしの錢ぜにを工面しては新刊物ものを買ふのが道楽であつた。あまり氣焰が高かつた時、代助が、文学者も恐露病に罹つてるうちはまだ駄目だ。一旦日露戦争を経過したものでないと話せないと冷評返ひやかしした事がある。すると寺尾は真面目まじめな顔かほをして、戦争は何時いつでもするが、日露戦争後の日本の様に往生しちや詰つまらんぢやないか。矢つ張り恐露病に罹つてる方が、卑怯でも安全だ、と答へて矢つ張り露西亞文学を鼓吹してゐた。

玄関から座敷へ通つて見ると、寺尾は真中まんなかへ一貫張ぱりの机を据ゑて、頭痛がすると云つて鉢巻はちまきをして、腕うでまくりで、帝国文学の原稿を書かいてゐた。邪魔ならまた来くると云ふと、帰かへらんでも

いゝ、もう今朝から五五、二円五十銭丈稼いだからと云ふ挨拶
であつた。やがて鉢巻を外して、話を始めた。始めるが早いか、
今の日本の作家と評家を眼の玉の飛び出る程痛快に罵倒し始め
た。代助はそれを面白く聞いてゐた。然し腹の中では、寺尾の
事を誰も賞めないの、其対抗運動として、自分の方では他を
貶すんだらうと思つた。ちと、左様云ふ意見を發表したら好い
ぢやないかと勧めると、左様は行かないよと笑つてゐる。何故
と聞き返しても答へない。しばらくして、そりや君の様に気楽
に暮せる身分なら随分云つて見せるが——何しろ食ふんだから
ね。どうせ真面目な商買ぢやないさ。と云つた。代助は、夫で
結構だ、確かに遣り玉へと奨励した。すると寺尾は、いや些と
も結構ぢやない。どうかして、真面目になりたいと思つてゐる。
どうだ、君ちつと金を借して僕を真面目にする了見はないかと

聞いた。いや、君が今の様な事をして、夫で真面目だと思ふ様になつたら、其時借してやらうと調戯つて、代助は表へ出た。

本郷の通り迄来たが倦怠の感は依然として故の通りである。何処をどう歩いてても物足りない。と云つて、人の宅を訪ねる気はもう出ない。自分を検査して見ると、身体全体が、大きな胃病の様な心持がした。四丁目から又電車へ乗つて、今度は伝法院前迄来た。車中で揺られるたびに、五尺何寸かある大きな胃囊の中で、腐つたものが、波を打つ感じがあつた。三時過ぎにぼんやり宅へ帰つた。玄関で門野が、

「先刻御宅から御使でした。手紙は書斎の机の上に載せて置きました。受取は一寸私が書いて渡して置きました」と云つた。

手がみ 手紙は古風な状箱の中にあつた。其赤塗の表には名宛も何も書かないで、真鍮の環に通した観世燃の封じ目に黒い墨を着けてあつた。代助は机の上を一目見て、此手紙の主は嫂だとすぐ悟つた。嫂は斯う云ふ旧式な趣味があつて、それが時々思はぬ方角へ出てくる。代助は鋏の先で観世燃の結目を突つつきながら、面倒な手数だと思つた。

けれど中にあつた手紙は、状箱とは正反対に、簡単な言文一致で用を済してゐた。此間わざ／＼来て呉れた時は、御依頼通り取り計ひかねて、御氣の毒をした。後から考へて見ると、其時色々無遠慮な失礼を云つた事が氣にかゝる。どうか悪く取つて下さるな。其代り御金を上げる。尤もみんなと云ふ訳には行かない。二百円丈都合して上げる。から夫をすぐ御友達の所

へ届けて御上げなさい。是は兄さんには内所だから其積でゐなくつては不可ない。奥さんの事も宿題にするといふ約束だから、よく考へて返事をなさい。

手紙の中に巻き込めて、二百円の小切手が這入つてゐた。代助は、しばらく、それを眺めてゐるうちに、梅子に済まない様な気がして来た。此間の晩、歸りがけに、向から、ぢや御金は要らないのと聞いた。貸して呉れと切り込んで頼んだ時は、あゝ手痛く跳ね付けて置きながら、いざ断念して帰る段になると、却つて断わつた方から、掛念がつて駄目を押し出た。代助はそこに女性の美しくしさと弱さを見た。さうして其弱さに付け入る勇気を失つた。此美しい弱点を弄ぶに堪えなかつたからである。えゝ要りません、何うかなるでせうと云つて分れた。それを梅子は冷かな挨拶と思つたに違ない。其冷かな言葉が、梅子

の平生の思ひ切つた動作の裏に、何処にか引つ掛つてゐて、とう／＼此手紙になつたのだらうと代助は判断した。

代助はすぐ返事を書いた。さうして出来る丈暖かい言葉を使つて感謝の意を表した。代助が斯う云ふ気分になる事は兄に對してもない。父に對してもない。世間一般に對しては固よりない。近来は梅子に對してもあまり起らなかつたのである。

代助はすぐ三千代の所へ出掛け様かと考へた。実を云ふと、二百円は代助に取つて中途半端な額であつた。是丈呉れるなら、一層思ひ切つて、此方の強請つた通りにして、満足を買へばいゝにと云ふ氣も出た。が、それは代助の頭が梅子を離れて三千代の方へ向いた時の事であつた。その上、女は如何に思ひ切つた女でも、感情上中途半端なものであると信じてゐる代助には、それが別段不平にも思へなかつた。否女の斯う云ふ態度の方が、

却つて男性の断然たる所置よりも、同情の弾力性を示してゐる点に於て、快こころよいものと考へてゐた。だから、もし二百円を自分に贈つたものが、梅子でなくつて、父ちちであつたとすれば、代助は、それを経済的中途半端ちうとはんぱと解釈して、却つて不愉快な感に打たれたかも知れないのである。

代助は晩食ばんめしも食くはずに、すぐ又表おもてへ出た。五軒町から江戸川の縁へりを伝つたつて、河かはを向むかふへ越した時は、先刻散歩さつぎからの帰りの様に精神の困憊を感じてゐなかつた。坂を上のぼつて伝通院の横へ出ると、細く高い烟突が、寺てらと寺てらの間あひだから、汚きたない烟けむを、雲の多くもい空そらに吐はいてゐた。代助はそれを見て、貧弱な工業が、生存ちかのためために無理に吐つく呼吸いきを見苦みぐるしいものと思つた。さうして其近ちかくに住すむ平岡と、此烟突とを暗あんくくの裏うちに連想せずにはゐられなかつた。斯かう云ふ場合には、同情の念より美醜さひの念さかが先に立つの

が、代助の常つねであつた。代助は此瞬間に、三千代の事を殆んど忘れて仕舞つた位、空そらに散ちる憐あはれな石炭けむりの烟けむりに刺激さされた。

平岡ひらをかの玄関くつぬぎの沓くつぬぎには女の穿はく重かさね草履かきが脱ぬぎ棄すてゝあつた。格子あを開あけると、奥おくの方かたから三千代すそが裾すそを鳴ならして出でて来きた。其時あが上ぐちり口にじやうの二畳ほとは殆んど暗くらかつた。三千代みちよは其暗くらい中なかに坐すはつて挨拶あいさつをした。始めは誰だれが来きたのか、よく分わからなかつたらしかつたが、代助こえの声こえを聞きくや否いなや、何方どなたかと思おもつたら……と寧なろ低ひい声こゑで云いつた。代助はつきりは判然はつきり見みえない三千代みちよの姿すがたを、常つねよりは美うつくしく眺ながめた。

八の四

平岡ひらをかは不在ふざいであつた。それを聞きいた時とき、代助はなは話はなしてゐ易やすい

それから

様な、又話してゐる悪い様な変な気がした。けれども三千代の方は常の通り落ち付いてゐた。洋燈も点けないで、暗い室を閉て切つた儘二人で坐つてゐた。三千代は下女も留守だと云つた。自分も先刻其所迄用達に出て、今帰つて夕食を済ました許りだと云つた。やがて平岡の話が出た。

予期した通り、平岡は相変らず奔走してゐる。が、此一週間程は、あんまり外へ出なくなつた。疲れたと云つて、よく宅に寐てゐる。でなければ酒を飲む。人が尋ねて来れば猶飲む。さうして善く怒る。さかんに人を罵倒する。のださうである。

「昔と違つて気が荒くなつて困るわ」と云つて、三千代は暗に同情を求め様子であつた。代助は黙つてゐた。下女が帰つて来て、勝手口でがたく音をさせた。しばらくすると、胡摩竹の台の着いた洋燈を持つて出た。襖を締める時、代助の顔を偷

む様に見て行つた。

代助は懐ふところから例の小切手ぎつてを出だした。二つに折をれたのを其儘三千代の前に置いて、奥さん、と呼び掛かけた。代助が三千代を奥さんと呼んだのは始めてゝあつた。

「先達せんだつて御頼おたのみの金かねですがね」

三千代は何にも答へなかつた。たゞ眼めを挙あげて代助を見た。「実は、直すぐにもと思つたんだけれども、此方こつちの都合ごつちが付つかなかつたものだから、遂つい遅おそくなつたんだが、何どうですか、もう始末は付つきましたか」と聞いた。

其時三千代は急に心細ひくさうな低い声になつた。さうして怨えんずる様に、

「未まだですわ。だつて、片付かたづく訳なが無いぢやありませんか」と云つた儘、眼めを睜みはつて凝じつと代助を見てゐた。代助は折をれた小切手

を取り上げて二つに開いた。

「是丈ぢや駄目ですか」

三千代は手を伸ばして小切手を受取つた。

「難有う。平岡が喜びますわ」と静かに小切手を畳の上に置いた。

代助は金を借りて来た由来を、極ざつと説明して、自分は斯ういふ呑気な身分の様に見えるけれども、何か必要があつて、自分以外の事に、手を出さうとすると、丸で無能力になるんだから、そこは悪く思つて呉れない様にと言訳を付け加へた。

「それは、私も承知してゐますわ。けれども、困つて、何うする事も出来ないものだから。つい無理を御願して」と三千代は氣の毒さうに詫を述べた。代助はそこで念を押した。

「夫丈で、何うか始末が付きますか。もし何うしても付かなけ

れば、もう一遍工面くめんして見るんだが」

「もう一遍工面いっぺんするつて」

「判を押して高い利のつく御金おかねを借りかるんです」

「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消すけ様に云つた。「それこそ大変よ。貴方あなた」

代助は平岡の今苦しめられてゐるのも、其起りは、性質たちの悪い金かねを借りかり始めたのが転々てんくして祟つてゐるんだと云ふ事を聞きいた。平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後さんご心臓わろが悪くなつて、ぶらくし出すと、遊び始めたのである。それも初めのうちは、夫程それほど烈しくもなかつたので、三千代はたゞ交際つきあひ上已やむを得ないんだらうと諦あきらめてゐたが、仕舞にはそれが段々高かうじて、程度ほうづが無くなる許なので三千代も心配をする。すれば身体からだが悪わるくなる。なれば放

それから

蕩が猶募る。不親切なんぢやない。私が悪いんですと三千代はわざく断わつた。けれども又淋しい顔をして、責めて小供でも生きてゐて呉れたら嘸可かつたらうと、つくづく考へた事もありましたと自白した。

代助は経済問題の裏面に潜んでゐる、夫婦の關係をあらまし推察し得た様な気がしたので、あまり多く此方から問ふのを控えた。帰りがけに、

「そんなに弱つちや不可ない。昔の様に元気に御成んなさい。さうして些と遊びに御出なさい」と勇氣をつけた。

「本当ね」と三千代は笑つた。彼等は互の昔を互の顔の上に認めた。平岡はとうく帰つて来なかつた。

それから

中二日置いて、突然平岡が来た。其日は乾いた風が朗らかな
天を吹いて、蒼いものが眼に映る、常よりは暑い天気であつた。
朝の新聞に菖蒲の案内が出てゐた。代助の買った大きな鉢植の
君子蘭はとうとう縁側で散つて仕舞つた。其代り脇差程も幅の
ある緑の葉が、茎を押し分けて長く延びて来た。古い葉は黒ず
んだ儘、日に光つてゐる。其一枚が何かの拍子に半分から折れ
て、茎を去る五寸許の所で、急に鋭く下つたのが、代助には見苦
しく見えた。代助は鋏を持つて椽に出た。さうして其葉を折れ
込んだ手前から、剪つて棄てた。時に厚い切り口が、急に煮染
む様に見えて、しばらく眺めてゐるうちに、ぽたりと椽に音がし
た。切口に集つたのは緑色の濃い重い汁であつた。代助は其香
を嗅がうと思つて、乱れる葉の中に鼻を突つ込んだ。椽側の滴

は其儘にして置いた。立ち上がつて、袂から手帛を出して、鉢はきみの刃はを拭ふいてゐる所へ、門野かどのが平岡おいでさんが御出ですと報しらせて来たのである。代助は其時平岡の事も三千代の事も、丸で頭あたまの中に考へてゐなかつた。只不思議な緑色の液体みどりいろ えきたいに支配されて、比較的世間せけんに關係のない情調もとの下うごに動いてゐた。それが平岡の名を聞くや否や、すぐ消えて仕舞つた。さうして、何だか逢あひたつくない様な氣持がした。

「此方こつちへ御通とほし申ましませうか」と門野から催促された時、代助はうんと云つて、座敷へ這入つた。あとから席せきに導みちびかれた平岡を見ると、もう夏の洋服を着てゐた。襟えりも白襯衣しろしやつも新あたらしい上うへに、流行の編襟飾あみえりかざりを掛かけて、浪人とは誰だれにも受け取れない位、ハイカラに取り繕つくろつてゐた。

話はなして見ると、平岡の事情は、依然として発展してゐなかつ

た。もう近頃は運動しても当分駄目だから、毎日斯うして遊んで歩く。それでなければ、宅に寐てゐるんだと云つて、大きな声を出して笑つて見せた。代助もそれが可からうと答へたなり、後は当らず障らずの世間話に時間を潰してゐた。けれども自然に出る世間話といふよりも、寧ろある問題を回避する為の世間話だから、両方共に緊張を腹の底に感じてゐた。

平岡は三千代の事も、金の事も口へ出さなかつた。従がつて三日前代助が彼の留守宅を訪問した事に就ても何も語らなかつた。代助も始めのうちは、わざと、その点に触れないで澄してゐたが、何時迄経つても、平岡の方で余所々しく構へてゐるので、却つて不安になつた。

「実は二三日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と云ひ出した。

「うん。左様さやうだつたさうだね。其節は又難有う。御蔭かげさまで。——なに、君を煩わずはさないでも何うかなつたんだが、彼奴あいつがあまり心配し過すて、つい君に迷惑を掛けて済すまない」と冷淡な礼を云つた。それから、

「僕も実は御礼に來きた様やうなものだが、本当の御礼には、いづれ当人でが出るだらうから」と丸で三千代と自分を別物べつものにした言分いひぶんであつた。代助はたゞ、

「そんな面倒な事をする必要があるものか」と答へた。話は是はなしで切れた。が又両方に共通で、しかも、両方のあまり興味を持もたない方面に摺ずり滑すべつて行いつた。すると、平岡が突然、

「僕はことによると、もう実業は已やめるかも知れない。實際内幕うちまくを知れば知る程厭いやになる。其上此方こつちへ來きて、少し運動をして見て、つくづく勇氣がなくなつた」と心底しんそこかららしい告白をした。

代助は、一口、

「それは、左様だらう」と答へた。平岡はあまり此返事の冷淡なのに驚ろいた様子であつた。が、又あとを付けた。

「先達ても一寸話したんだが、新聞へでも這入らうかと思つて
る」

「口があるのかい」と代助が聞き返した。

「今、一つある。多分出来さうだ」

来た時は、運動しても駄目だから遊んでゐると云ふし、今は新聞に口があるから出様と云ふし、少し要領を欠いでゐるが、追窮するのも面倒だと思つて、代助は、

「それも面白からう」と賛成の意を表して置いた。

平岡の帰りを玄関迄見送つた時、代助はしばらく、障子に身を寄せて、敷居の上に立つてゐた。門野も御附合に平岡の後姿を眺めてゐた。が、すぐ口を出した。

「平岡さんは思つたよりハイカラですな。あの服装ぢや、少し宅の方が御粗末過る様です」

「左様でもないさ。近頃はみんな、あんなものだらう」と代助は立ちながら答へた。

「全たく、服装丈ぢやわからない世の中になりましたからね。何処の紳士かと思ふと、どうも変ちきりんな家へ這入てますからね」と門野はすぐあとを付けた。

代助は返事も為ずに書齋へ引き返した。椽側に垂れた君子蘭の緑の滴がどろろになつて、干上り掛つてゐた。代助はわざ

と、書齋と座敷の仕切を立て切つて、一人室のうちへ這入つた。来客に接した後しばらくは、独坐に耽るが代助の癖であつた。ことに今日の様に調子の狂ふ時は、格別その必要を感じた。

平岡はとうとう自分と離れて仕舞つた。逢ふたんびに、遠く
にゐて対応する様な気がする。実を云ふと、平岡ばかりではな
い。誰に逢つても左んな気がする。現代の社会は孤立した人間
の集合体に過なかつた。大地は自然に続いてゐるけれども、其
上に家を建てたら、忽ち切れ／＼になつて仕舞つた。家の中に
ゐる人間も亦切れ切れになつて仕舞つた。文明は我等をして孤
立せしむるものだ、と、代助は解釈した。

代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜こ
ぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が、些ともそんな顔
をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に

振舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か、又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか、何方かに帰着する。

平岡に接近してゐた時分の代助は、人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ曾て出逢はなかつた。代助は今の平岡に対して、隔離の感よりも寧ろ嫌悪の念を催ふした。さうして向ふにも自己同様の念が萌してゐると判じた。昔しの代助も、時々わが胸のうちに、斯う云ふ影を認めて驚ろいた事があつた。其時は非常に悲しかつた。今は其悲しみも殆ん

ど薄く剥がれて仕舞つた。だから自分で黒い影を凝と見詰めて見る。さうして、これが真だと思ふ。己を得ないと思ふ。たゞそれ丈になつた。

斯う云ふ意味の孤独の底に陥つて煩悶するには、代助の頭はあまりに判然し過てゐた。彼はこの境遇を以て、現代人の踏むべき必然の運命と考へたからである。従つて、自分と平岡の隔離は、今の自分の眼に訴へて見て、尋常一般の径路を、ある点迄進行した結果に過ないと見做した。けれども、同時に、兩人の間に横たはる一種の特別な事情の為、此隔離が世間並よりも早く到着したと云ふ事を自覚せずにはゐられなかつた。それはみちよ三千代の結婚であつた。三千代を平岡に周旋したものは元來が自分であつた。それを當時に悔る様な薄弱な頭脳ではなかつた。今日に至つて振り返つて見ても、自分の所作は、過去を照らす

あざや

鮮かな名譽であつた。けれども三年経過するうちに自然は自然に特有な結果を、彼等二人の前に突き付けた。彼等は自己の満足と光輝を棄て、其前に頭を下げるしなければならなかつた。さうして平岡は、ちらり／＼と何故三千代を貰つたかと思ふ様になつた。代助は何処かしらで、何故三千代を周旋したかと云ふ声を聞いた。

代助は書齋に閉ぢ籠つて一日考へに沈んでゐた。晩食の時、

門野が、

「先生今日は一日御勉強ですな。どうです、些と御散歩になりませんか。今夜は寅毘沙ですぜ。演芸館で支那人の留学生が芝居を演つてます。どんな事を演る積ですか、行つて御覧なすつたら何うです。支那人てえ奴は、臆面がないから、何でも遣る気だから呑気なもんだ。……」と一人で喋舌つた。

それから

代助は又父またちちから呼よばれた。代助には其用事が大抵分わかつてゐた。代助は不断ふだんから成るべく父ちちを避さけて会あはない様にしてゐた。此頃このごろになつては猶更奥おくへ寄より付つかなかつた。逢あふと、叮嚀ちやうな言葉を使つかつて応対してゐるにも拘くはらず、腹はらの中なかでは、父ちちを侮辱ぶじよくしてゐる様な氣がしてならなかつたからである。

代助は人類いちにんの一人として、互たがひを腹はらの中なかで侮辱する事なしには、互たがひに接觸を敢てし得ぬ、現代の社会を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近来急に膨脹した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈してゐた。又これを此等新旧両慾の衝突と見做してゐた。最後に、此生活慾の目醒しい

發展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得てゐた。

この二つのふた因数は、何処どこかで平衡を得なければならぬ。けれども、貧弱な日本が、歐洲の最強国と、財力に於て肩を較ならべる日の来る迄は、此平衡は日本に於て得られぬものと代助は信じてゐた。さうして、斯かる日は、到底日本の上を照てらさぬものと諦あきらめてゐた。だからこの窮地に陥つた日本紳士の多数は、日毎に法律に触れない程度に於て、もしくはたゞ頭あたまの中に於て、罪惡を犯さなければならぬ。さうして、相手が今如何なる罪惡を犯しつゝあるかを、互に黙知しつゝ、談笑しなければならぬ。代助は人類の一人いちにんとして、かゝる侮辱を加ふるにも、又加へらるゝにも堪へなかつた。

代助の父ちちの場合は、一般に比くらべると、稍特殊や的傾向を帯びる丈に複雑であつた。彼は維新前の武士に固有な道義本位の教育

を受けた。此教育は情意行為の標準を、自己以外の遠い所に据ゑて、事実の発展によつて証明せらるべき手近な真を、眼中に置かない無理なものであつた。にも拘はらず、父は習慣に囚へられて、未だに此教育に執着してゐる。さうして、一方には、劇烈な生活慾に冒され易い実業に従事した。父は實際に於て年々此生活慾の為に腐蝕されつゝ今日に至つた。だから昔の自分と、今の自分の間には、大いな相違のあるべき筈である。それを父は自認してゐなかつた。昔の自分が、昔通りの心得で、今の事業を是迄に成し遂げたとばかり公言する。けれども封建時代にのみ通用すべき教育の範囲を狭める事なしに、現代の生活慾を時々刻々に充たして行ける訳がないと代助は考へた。もし双方を其儘に存在させ様とすれば、之を敢てする個人は、矛盾の為に大苦痛を受けなければならない。もし内心に此苦痛を受けな

がら、たゞ苦痛の自覚文明あきらかで、何の為ための苦痛だか分別が付かないならば、それは頭腦の鈍にぶい劣等な人種である。代助は父に対する毎ごとに、父は自己を隠蔽いんべいする偽君子ぎくんしか、もしくは分別の足りない愚物ぐぶつか、何方どつちかでなくてはならない様な気がした。さうして、左さう云ふ気がするのが厭いやでならなかつた。

と云つて、父ちちは代助の手際で、何どうする事も出来ない男であつた。代助には明あきらかに、それが分わかつてゐた。だから代助は未いまだ曾かつて父ちちを矛盾の極端迄追ひ詰つめた事がなかつた。

代助は凡ての道徳の出立しつたつてん点は社会的事実より外あたまにないと思あたまじてゐた。始めから頭の中あたまに硬張こわばつた道徳を据ゑ付けて、其道徳から逆に社会的事実を發展させ様とする程、本末を誤つた話はないと思あたまじてゐた。従つて日本の学校でやる、講釈の倫理教育は、無意義のものだと考へた。彼等は学校で昔し風の道徳を教

授してゐる。それでなければ一般歐洲人に適切な道德を呑み込ましてゐる。此劇烈なる生活慾に襲はれた不幸な国民から見れば、迂遠の空談に過ぎない。此迂遠な教育を受けたものは、他日社会を眼前に見る時、昔の講釈を思ひ出して笑つて仕舞ふ。でなければ馬鹿にされた様な気がする。代助に至つては、学校のみならず、現に自分の父から、尤も嚴格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭あたまの中に起した。代助はそれを恨めしく思つてゐる位であつた。代助は此前梅子このまへに礼を云ひに行つた時、梅子から一寸奥へ行つて、挨拶をしてゐらつしやいと注意された。代助は笑ひながら御父とうさんはゐるんですかと空そらとぼけた。ゐらつしやるわと云ふ確答を得た時でも、今日けふはちと急いそぐから廃よさうと帰つて来た。

今日はわざく、其為に來たのだから、否でも応でも父に逢はなければならぬ。相変らず、内玄関の方から廻つて座敷へ來ると、珍らしく兄の誠吾が胡坐をかいて、酒を呑んでゐた。梅子も傍に坐つてゐた。兄は代助を見て、

「何うだ、一盃遣らないか」と、前にあつた葡萄酒の壺を持つて振つて見せた。中にはまだ余程這入つてゐた。梅子は手を敲いて洋盞を取り寄せた。

「当て、御覽なさい。どの位古いんだか」と一杯注いだ。

「代助に分るものか」と云つて、誠吾は弟の唇のあたりを眺めてゐた。代助は一口飲んで盃を下へ下した。肴の代りに薄いウエーファーが菓子皿にあつた。

「旨いですね」と云つた。

「だから時代を当て、御覧なさいよ」

「時代があるんですか。偉いものを買ひ込んだもんだね。帰り
に一本貫つて行かう」

「御生憎様、もう是限なの。到来物よ」と云つて梅子は椽側へ
出て、膝の上に落ちたウエーフアーの粉を払いた。

「兄さん、今日は何うしたんです。大変気楽さうですね」と代
助が聞いた。

「今日は休養だ。此間中は何うも忙し過ぎて降参したから」と誠吾
は火の消えた葉巻を口に啣えた。代助は自分の傍にあつた燐寸
を擦つて遣つた。

「代さん貴方こそ気楽ぢやありませんか」と云ひながら梅子が

椽側から歸つて来た。

「姉さん歌舞伎座へ行きましたか。まだなら、行つて御覽なさい。

面白いから」

「貴方もう行つたの、驚ろいた。貴方も余つ程怠けものね」

「怠けものは可くない。勉強の方向が違ふんだから」

「押の強い事ばかり云つて。人の気も知らないで」と梅子は誠

吾の方を見た。誠吾は赤い臉をして、ぽかんと葉巻の烟を吹い

てゐた。

「ねえ、貴方」と梅子が催促した。誠吾はうるささうに葉巻を

指の股へ移して、

「今のうち沢山勉強して貰つて置いて、今に此方が貧乏したら、

救つて貰ふ方が好いぢやないか」と云つた。梅子は、

「代さん、あなた役者になれて」と聞いた。代助は何にも云は

ずに、洋盞コップを姉の前に出した。梅子も黙だまつて葡萄酒の壺を取り上げた。

「兄にいさん、此間中このあひだちうは何だか大変忙いそがしかつたんだつてね」と代助は前へ戻つて聞いた。

「いや、もう大弱りだ」と云ひながら、誠吾は寐ね転ころんで仕舞つた。

「何か日糖事件なにに関係でもあつたんですか」と代助が聞いた。

「日糖事件いそがに関係はないが、忙いそがしかつた」

兄あにの答は何時いつでも此程度以上に明瞭になつた事がない。実は明瞭に話したくないんだらうけれども、代助の耳には、夫が本来の無頓着で、話すのが臆おそ怯おそなためと聞える。だから代助はいつでも楽らくに其返事なにかの中に這入はいてゐた。

「日糖も詰つまらない事ことになつたが、あゝなる前に何どうか方法はな

いもんでせうかね」

「左うさなあ。實際世の中の事は、何が何うなるんだか分らないからな。——梅、今日は直木に云ひ付けて、ヘクターを少し運動させなくつちや不可いよ。あゝ大食をして寐て許るちや毒だ」と誠吾は眠さうな臉を指でしきりに擦つた。代助は、
「愈奥へ行つて御父さんに叱られて来るかな」と云ひながら又コップを嫂の前へ出した。梅子は笑つて酒を注いだ。

「嫁の事か」と誠吾が聞いた。

「まあ、左うだらうと思ふんです」

「貰つて置くがいゝ。さう老人に心配さしたつて仕様があるものか」と云つたが、今度はもつと判然した語勢で、

「氣を付けないと不可よ。少し低氣圧が来てゐるから」と注意した。代助は立ち掛けながら、

「まさか此間中の奔走からきた低気圧ぢやありますまいね」と念を押した。兄は寐転んだ儘、

「何とも云へないよ。斯う見えて、我々も日糖の重役と同じ様に、何時拘引されるか分らない身体なんだから」と云つた。

「馬鹿な事を仰しやるなよ」と梅子が窘めた。

「矢つ張り僕なのらくらが持ち来たした低気圧なんだらう」と代助は笑ひながら立つた。

九の三

それから

廊下伝ひに中庭を越して、奥へ来て見ると、父は唐机の前へ坐つて、唐本を見てゐた。父は詩が好で、閑があると折々支那人の詩集を読んでゐる。然し時によると、それが尤も機嫌のわ

るい索引さくいんになる事があつた。さう云ふときは、いかに神経のふつくら出来上あがつた兄あにでも、成るべく近寄ちかよらない事にしてゐた。是非顔かほを合せあはなければならぬ場合には、誠太郎か、縫子か、どつちどつちひつぱつひつぱつ父ちちの前まへへ出でる手段を取とつてゐた。代助も椽側迄来きて、そこに気が付ついたが、夫程それほどの必要もあるまいと思つて、座敷を一つ通り越とほして、父ちちの居間まに這入まつた。

父はまづ眼鏡めがねを外はずした。それを読み掛けた書物うへの上に置くと、代助の方なほに向き直なほつた。さうして、たゞ一言ひとこと、

「来たか」と云つた。其語調は平常よりも却つて穩おだやかな位であつた。代助は膝ひざの上うへに手を置きながら、兄あにが真面目まじめな顔をして、自分を担かついたんぢやなからうかと考へた。代助はそこで又にが苦にがい茶にがを飲のませられて、しばらく雑談ざつたんに時ときを移うつした。今年ことしは芍薬しやくやくの出でが早いとか、茶摘歌ちやつみうたを聞きいてゐると眠ねむくなる時候ときだとか、何所どこ

とかに、大きな藤ふぢがあつて、其花の長さが四尺た足らずあるとか、
話はなしは好加減い、かげんな方角かどへ大分だいぶん長く延のびて行いつた。代助またそのほうは又其方が勝
手てなので、いつ迄ちも延のばす様にと、後あとから後あとを付つけて行いつた。
父ちちも仕舞しまいには持あまて余あまして、とうく、時に今日けふ御前ごぜんを呼よんだの
はと云いひ出でした。

代助あつとはそれから後あとは、一言ひとことも口くちを利きかなくなつた。只謹まじまじんで
親おやぢ爺ぢの云いふことを聴きいてゐた。父ちちも代助あつとから斯かう云いふ態度たいどに出
られると、長い間あひだ自分ひとり一人で、講義こうぎでもする様ように、述のべて行いか
なくてはならなかつた。然しかし其半分以上いじょうは、過去かこを繰くり返かへす丈
であつた。が代助あつとはそれを、始めて聞きくと同程度どうていどの注意ちゅういを払はらつ
て聞きいてゐた。

父ちちの長談義ながたぎのうちに、代助あつとは二三にさんの新あたらしい点みとも認みとめた。その
一つは、御前ごぜんは一体いったい是こゝからさき何どうする料簡りょうかんなんだと云いふ真面まへ

目な質問であつた。代助は今迄父からの注文ばかり受けてゐた。だから、其注文を曖昧に外す事に慣れてゐた。けれども、斯う云ふ大質問になると、さう口から出任せに答へられない。無暗な事を云へば、すぐ父を怒らして仕舞ふからである。と云つて正直を自白すると、二三年間父の頭を教育した上でなくつては、通じない理窟になる。何故と云ふと、代助は今此大質問に應じて、自分の未来を明瞭に道破る丈の考も何も有つてゐなかつたからである。彼はそれが自分に取つては尤もな所だと思つてゐた。から、父が、其通りを聞いて、成程と納得する迄には、大變な時間がかゝる。或は生涯通じつこないかも知れない。父の氣に入る様にするのは、何でも、国家の爲とか、天下の爲とか、景氣の好い事を、しかも結婚と両立しない様な事を、述べて置けば済むのであるが、代助は如何に、自己を侮辱する氣になつて

も、是ばかりは馬鹿氣てゐて、口へ出す勇氣がなかつた。そこで已を得ないから、実は色々計画もあるが、いづれ秩序立て、来て、御相談をする積であると答へた。答へた後で、実に滑稽だと思つたが仕方がなかつた。

代助は次に、独立の出来る丈の財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると、父が、では佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ条件を付けた。其財産は佐川の娘が持つて来るのか、又は父が呉れるのか甚だ曖昧であつた。代助は少し其点に向つて進んで見たが、遂に要領を得なかつた。けれども、それを突き留める必要がないと考へて已めた。

次に、一層洋行する気はないかと云はれた。代助は好いでせうと云つて賛成した。けれども、これにも、矢つ張り結婚が先決問題として出て来た。

「そんなに佐川の娘を貰ふ必要があるんですか」と代助が仕舞に聞いた。すると父の顔が赤くなつた。

九の四

代助は父を怒らせる気は少しもなかつたのである。彼の近頃の主義として、人と喧嘩をするのは、人間の墮落の一範鑄になつてゐた。喧嘩の一部分として、人を怒らせるのは、怒らせる事自身よりは、怒つた人の顔色が、如何に不愉快にわが眼に映ずるかと云ふ点に於て、大切なわが生命を傷ける打撃に外ならぬと心得てゐた。彼は罪惡に就ても彼れ自身に特有な考を有つてゐた。けれども、それが為に、自然の儘に振舞ひさへすれば、罰を免かれ得るとは信じてゐなかつた。人を斬つたものゝ受く

る罰は、斬られた人の肉から出る血潮であると固く信じてゐた。逆しる血の色を見て、清い心の迷乱を引き起さないものはあるまいと感ずるからである。代助は夫程神経の鋭い男であつた。だから顔の色を赤くした父を見た時、妙に不快になつた。けれども此罪を二重に償ふために、父の云ふ通りにしやうと云ふ気は些とも起らなかつた。彼は、一方に於て、自己の脳力に、非常な尊敬を払ふ男であつたからである。

其時父は頗る熱した語気で、先づ自分の年を取つてゐる事、子供の未来が心配になる事、子供に嫁を持たせるのは親の義務であると云ふ事、嫁の資格其他に就ては、本人よりも親の方が遙かに周到な注意を払つてゐると云ふ事、他の親切は、其当時にこそ余計な御世話に見えるが、後になると、もう一遍うるさく干渉して貰ひたい時機が来るものであるといふ事を、非常に町

嘸に説いた。代助は慎重な態度で、聴いてゐた。けれども、父の言葉が切れた時も、依然として許諾の意を表さなかつた。すると父はわざと抑えた調子で、

「ぢや、佐川は已めるさ。さうして誰でも御前の好きなを貰つたら好いだらう。誰か貰ひたいのがあるのか」と云つた。是は嫂の質問と同様であるが、代助は梅子に対する様に、たゞ苦笑ばかりしてはゐられなかつた。

「別にそんな貰ひたいのありません」と明らかな返事をした。すると父は急に肝の発した様な声で、

「ぢや、少しは此方の事も考へて呉れたら好からう。何もさう自分の事ばかり思つてゐないでも」と急調子に云つた。代助は、突然父が代助を離れて、彼自身の利害に飛び移つたのに驚ろかされた。けれども其驚ろきは、論理なき急劇の変化の上に注が

れた丈であつた。

「貴方あなたにそれ程御都合が好いい事があるなら、もう一遍考へて見ませう」と答へた。

父は益機嫌をわるくした。代助は人と対応してゐる時、何どうしても論理を離れる事の出来ない場合がある。夫それが為ため、よく人ひとから、相手を遣やり込めるのを目的とする様に受取られる。實際を云ふと、彼程人かれを遣やり込める事の嫌な男はないのである。

「何も己おれの都合許ばかりで、嫁よめを貰へると云つてやしない」と父は前まへの言葉ためを訂正した。「そんなに理窟を云ふなら、参考の為ため、云つて聞かせるが、御前おまへはもう三十だらう、三十になつて、普通のものわかが結婚をしなければ、世間せけんでは何なんと思ふか大抵分わかるだらう。そりや今いまは昔むかしと違ふから、独身も本人の随意だけれども、独身の為ために親おやや兄弟が迷惑めいわくしたり、果はては自分の名譽くわんけいに關係する様な事

が出来しつたしたりしたら何どうする気だ」

代助はたゞ茫然として父ちちの顔かほを見てゐた。父ちちは何どの点に向つて、自分を刺した積りだか、代助には殆んど分わからなかつたからである。しばらくして、

「そりや私わたくしのことだから少すこしは道楽もしますが……」と云ひかけた。父ちちはすぐ夫それを遮さへぎつた。

「そんな事ことぢやない」

二人ふたりは夫それ限りしばらく口くちを利きかずにゐた。父ちちは此沈黙を以て代助に向つて与へた打撃の結果と信じた。やがて、言葉やわを和らげて、

「まあ、よく考へて御覽」と云つた。代助ははあと答へて、父ちちの室へやを退しりぞいた。座敷へ来きて兄あにを探さがしたが見えなかつた。嫂あによめはと尋ねたら、客間きやくまだと下女が教へたので、行いつて戸あを明けて見

ると、縫子のピヤノの先生が来てゐた。代助は先生に一寸挨拶をして、梅子を戸口迄呼び出した。

「あなたは僕の事を何か御父さんに讒訴しやしないか」

梅子はハ、ハ、と笑つた。さうして、

「まあ御這入んなさいよ。丁度好い所だから」と云つて、代助を楽器の傍迄引張つて行つた。

十の一

それから
蟻の座敷へ上がる時候になつた。代助は大きな鉢へ水を張つて、其中に真白なりり、オフ、ゼ、レーを茎ごと漬けた。簇がる細かい花が、濃い模様の縁を隠した。鉢を動かすと、花が零れる。代助はそれを大きな字引の上に載せた。さうして、其

傍そばに枕まくらを置いて仰あほむ向けに倒たふれた。黒くろい頭あたまが丁度はち鉢かけの陰かげになつて、花はなから出でる香におひが、好いい具ぐ合あひに鼻はなに通かよつた。代助しろすけは其その香におひを嗅かぎながら仮うつゝ寐ねをした。

代助しろすけは時々ときどき尋常じんじょうな外界がいがいから法外はふがいに痛烈いたれつな刺激しきを受ける。それが劇はげしくなると、晴天せいぜんから来くる日光にっこうの反射はんしゃにさへ堪たへ難がたくなる事ことがあつた。さう云いふ時ときには、成なる可べく世間せけんとの交渉こうしやうを稀薄しやくにして、朝あさでも午ひるでも構かまはず寐ねる工夫くわふをした。其手段そのしゅんたには、極ごくめて淡あわい、甘味あまみの軽かるい、花はなの香かをよく用もちひた。瞼まぶたを閉とぢて、瞳ひとみに落おちる光線こうせんを謝絶しゃてつして、静しずかかに鼻はなの穴あな丈だけで呼吸こきゅうしてゐるうちに、枕元まくらもとの花はなが、次第しだいに夢ゆめの方ほうへ、躁さわぐ意識いしきを吹ふいて行く。是こゝが成な功こうすると、代助しろすけの神経しんけいが生うまれ代かつた様ように落おちち付ついて、世間せけんとの連絡れんらくが、前まへよりは比較ひかく的てき楽らくに取とれる。

代助しろすけは父ちちに呼よばれてから二三日ふたみの間あひだ、庭にはの隅すみに咲さいた薔薇ばらの

花の赤い^{はなあか}のを見るたびに、それが点々^{てんく}として眼を刺^さしてならなかつた。其時は、いつでも、手水鉢^{てみづぼち}の傍^{そば}にある、擬宝珠^{ぎぼしゆ}の葉^はに眼^めを移^{うつ}した。其葉^はには、放肆^{ほうし}な白^{しろ}い縞^{しま}が、三筋^{みすぢ}か四筋^{よすぢ}、長く乱^{みだ}れてゐた。代助が見るたびに、擬宝珠^{ぎぼしゆ}の葉^はは延^のびて行く様に思はれた。さうして、それと共に白^{しろ}い縞^{しま}も、自由に拘束^{こうそく}なく、延^のびる様な気がした。柘榴^{ざくろ}の花^{はな}は、薔薇^{ばら}よりも派出^{はで}に且つ重苦^{おもくる}しく見えた。緑^{みどり}の間にちらりくと光^{ひか}つて見える位、強い色を出^だしてゐた。従^{これ}つて是も代助の今の気分には相応^{うつ}らなかつた。

彼の今^{いま}の気分は、彼に時々^{ときどき}起^{おこ}る如^{ごと}く、総体^{そうたい}の上^{うへ}に一種の暗調^{あんてう}を帯びてゐた。だから余^{あま}りに明^{あか}る過^{すぎ}るものに接すると、其矛盾^{むじゆん}に堪^たえがたかつた。擬宝珠^{ぎぼしゆ}の葉^はも長く見詰^{みづ}めてゐると、すぐ厭^{いや}になる位であつた。

其^{その}上^{うへ}彼^{かれ}は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲^だはれ出した。

其不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であつた。彼は此心的現象のために甚しき動揺を感じた。彼は神に信仰を置く事を喜ばぬ人であつた。又頭腦の人として、神に信仰を置く事の出来ぬ性質であつた。けれども、相互に信仰を有するものは、神に依頼するの必要がないと信じてゐた。相互が疑ひ合ふときの苦しみを解脱する為めに、神は始めて存在の権利を有するものと解釈してゐた。だから、神のある国では、人が嘘を吐くものと極めた。然し今の日本は、神にも人も信仰のない国柄であるといふ事を発見した。さうして、彼は之を一に日本の経済事情に帰着せしめた。

四五日前、彼は掏摸と結託して悪事を働らいた刑事巡査の話
を新聞で読んだ。それが一人や二人ではなかつた。他の新聞の
記す所によれば、もし嚴重に、それからそれへと、手を延ばし

たら、東京は一時殆んど無警察の有様に陥るかも知れないさうである。代助は其記事を読んだとき、たゞ苦笑した丈であつた。さうして、生活の大難に対抗せねばならぬ薄給の刑事が、悪い事をするのは、實際尤もだと思つた。

代助が父に逢つて、結婚の相談を受けた時も、少し是と同様の気がした。が、これはたゞ父に信仰がない所から起る、代助に取つて不幸な暗示に過ぎなかつた。さうして代助は自分の心のうちに、かゝる忌はしい暗示を受けたのを、不徳義とは感じ得なかつた。それが事実となつて眼前にあらはれても、矢張り父を尤もだと肯ふ積りだつたからである。

代助は平岡に対しても同様の感じを抱いてゐた。然し平岡に取つては、それが当然な事であると許してゐた。たゞ平岡を好く気になれない丈であつた。代助は兄を愛してゐた。けれども

其兄に対しても矢張り信仰は有ち得なかつた。嫂は実意のある女であつた。然し嫂は、直接生活の難関に当らない丈、それ丈兄よりも近付き易いのだと考へてゐた。

代助は平生から、此位に世の中を打遣つてゐた。だから、非常な神経質であるにも拘はらず、不安の念に襲はれる事は少なかつた。さうして、自分でもそれを自覚してゐた。夫が、何う云ふ具合か急に揺き出した。代助は之を生理上の変化から起るのだらうと察した。そこである人が北海道から採つて来たと云つて呉れたりリー、オフ、ゼ、レーの束を解いて、それを悉く水の中に浸して、其下に寐たのである。

一時間の後、代助は大きな黒い眼を開いた。其眼は、しばらくの間一つ所に留まつて全く動かなかつた。手も足も寐てゐた時の姿勢を少しも崩さずに、丸で死人のその様であつた。其時一匹の黒い蟻が、ネルの襟を伝はつて、代助の咽喉に落ちた。代助はすぐ右の手を動かして咽喉を抑へた。さうして、額に皺を寄せて、指の股に挟んだ小さな動物を、鼻の上迄持つて来て眺めた。其時蟻はもう死んでゐた。代助は人指指の先に着いた黒いものを、親指の爪で向へ弾いた。さうして起き上がった。膝の周圍に、まだ三四匹這つてゐたのを、薄い象牙の紙小刀で打ち殺した。それから手を叩いて人を呼んだ。

「御目醒ですか」と云つて、門野が出て来た。

「御茶でも入れて来ませうか」と聞いた。代助は、はだかつた胸を搔き合せながら、

「君、僕の寐てゐるうちに、誰か来やしなかつたかね」と、静かな調子で尋ねた。

「え、御出でした。平岡の奥さんが。よく御存じですな」と
かどの門野は平気に答へた。

「何故起さなかつたんだ」

「余まり能く御休でしたからな」

「だつて御客なら仕方がないぢやないか」

代助の語勢は少し強くなつた。

「ですがな。平岡の奥さんの方で、起さない方が好いつて、仰しやつたもんですからな」

「それで、奥さんは帰つて仕舞つたのか」

「なに帰つて仕舞つたと云ふ訳でもないんです。一寸神楽坂に買物があるから、それを済まして又来るからつて、云はれるも

んですからな」

「ぢや又来るんだね」

「さうです。実は御目覚になる迄待つてゐやうかつて、此座敷迄上つて来られたんですが、先生の顔を見て、あんまり善く寐てゐるもんだから、こいつは、容易に起きさうもないと思つたんでせう」

「また出て行つたのかい」

「えゝ、まあ左うです」

代助は笑ひながら、両手で寐起の顔を撫でた。さうして風呂場へ顔を洗ひに行つた。頭を濡らして、椽側迄歸つて来て、庭を眺めてゐると、前よりは気分が大分晴々した。曇つた空を燕が二羽飛んでゐる様が大いに愉快に見えた。

代助は此前平岡の訪問を受けてから、心待に、後から三千代

の来るのを待つてゐた。けれども、平岡の言葉は遂に事実として現れて来なかつた。特別の事情があつて、三千代がわざと来ないのか、又は平岡が始めから御世辞を使つたのか、疑問であるが、それがため、代助は心の何処かに空虚を感じてゐた。然し彼は此空虚な感じを、一つの経験として日常生活の中に見出した迄で、其原因をどうするの、斯うするのと云ふ気はあまりなかつた。此経験自身の奥を覗き込むと、それ以上に暗い影がちらついてゐる様に思つたからである。

それで彼は進んで平岡を訪問するのを避けてゐた。散歩のとき彼の足は多く江戸川の方角に向いた。桜の散る時分には、夕暮の風に吹かれて、四つの橋を此方から向へ渡り、向から又此方へ渡り返して、長い堤を縫ふ様に歩いた。が其桜はとくに散て仕舞つて、今は緑蔭の時節になつた。代助は時々橋の真中に立

つて、欄干に頰杖を突いて、茂る葉の中を、真直に通つてゐる、
水の光を眺め尽して見る。それから其光の細くなつた先の方に、
高く聳える目白台の森を見上げて見る。けれども橋を向へ渡つて、
小石川の坂を上る事はやめにして帰る様になつた。ある時彼は
おほまがり
大曲の所で、電車を下る平岡の影を半町程手前から認めめた。彼
は慥に左様に違ないと思つた。さうして、すぐ揚場の方へ引き
返した。

かれ
彼は平岡の安否を気にかけてゐた。まだ坐食の不安な境遇に
居るに違ないとは思ふけれども、或は何の方面かへ、生活の行路
を切り開く手掛りが出来たかも知れないとも想像して見た。け
れども、それを確かめる為に、平岡の後を追ふ気にはなれなかつ
た。彼は平岡に面するときの、原因不明な一種の不快を予想す
る様になつた。と云つて、たゞ三千代の為にのみ、平岡の位地

を心配する程、平岡を悪にくんでもゐなかつた。平岡の為ためにも、矢張り平岡の成功を祈る心はあつたのである。

十の三

斯ふうんな風ふうに、代助は空虚なるわが心こころの一角いつかくを抱いだいて今日こんにちに至つた。いま先方さきがた門野かどを呼よんで括くり枕まくらを取り寄よせて、午寐ひるねを貪むさぼつた時は、あまりに澆あま渌ろたる宇宙うちゅうの刺激しきに堪たえなくなつた頭あたまを、出来るできならば、蒼あをい色いろの付ついた、深ふかい水みづの中なかに沈しづめたい位くらいに思つた。それ程かれ彼いのちは命いのちを鋭すく感あつじ過あぎた。従あつつて熱あつい頭あたまを枕あたまへ着つけた時は、平岡も三千代も、彼かれに取とつて殆たんど存在あしてゐなかつた。彼は幸あにして涼すずしい心持こころに寐ねた。けれども其おだ穩なやかな眠ねむりのうちうちに、誰だれかすうと来きて、又またすうと出でて行いつた様ような心持こころがし

それから

た。眼を醒まして起き上がつても其感じがまだ残つてゐて、頭から拭ひ去る事が出来なかつた。それで門野を呼んで、寐る間に誰か来はしないかと聞いたのである。

代助は両手を額に当て、高い空を面白さうに切つて廻る燕の運動を椽側から眺めてゐたが、やがて、それが眼ま苦しくなつたので、室の中に這入つた。けれども、三千代が又訪ねて来ると云ふ目前の予期が、既に気分を冒してゐるので、思索も読書も殆んど手に着かなかつた。代助は仕舞に本棚の中から、大きな画帖を出して来て、膝の上に広げて、繰り始めた。けれども、それも、只指の先で順々に開けて行く丈であつた。一つ画を半分とは味はつてゐられなかつた。やがてブランギンの所へ来た。代助は平生から此裝飾画家に多大の趣味を有つてゐた。彼の眼は常の如く輝を帯びて、一度は其上に落ちた。それ

は何処かの港の図であつた。背景に船と檣と帆を大きく描いて、
其余つた所に、際立つて花やかな空の雲と、蒼黒い水の色をあ
らはした前に、裸体の労働者が四五人ゐた。代助は是等の男性
の、山の如くに怒らした筋肉の張り具合や、彼等の肩から脊へ
かけて、肉塊と肉塊が落ち合つて、其間に渦の様な谷を作つて
ゐる模様を見て、其所にしばらく肉の力の快感を認めしたが、や
がて、画帖を開けた儘、眼を放して耳を立てた。すると勝手の
方で婆さんの声をした。それから牛乳配達が空壇を鳴らして急
ぎ足に出て行つた。宅のうちが静かなので、鋭どい代助の聴神
経には善く応へた。

代助はぼんやり壁を見詰めてゐた。門野をもう一返呼んで、
三千代が又くる時間を、云ひ置いて行つたか何うか尋ねやうと
思つたが、あまり愚だから憚かつた。それ許ではない、人の細

君が訪ねて来るのを、それ程待ち受ける趣意がないと考へた。又それ程待ち受ける位なら、此方から何時でも行つて話をすべきであると考へた。此矛盾の両面を双対に見た時、代助は急に自己の没論理に恥ぢざるを得なかつた。彼の腰は半ば椅子を離れた。けれども彼はこの没論理の根底に横はる色々の因数を自分で善く承知してゐた。さうして、今の自分に取つては、この没論理の状態が、唯一の事実であるから仕方ないと思つた。且、此事実と衝突する論理は、自己に無關係な命題を繋ぎ合はして出来上つた、自己の本体を蔑視する、形式に過ぎないと思つた。さう思つて又椅子へ腰を卸した。

それから三千代の来る迄、代助はどんな風に時を過したか、殆んど知らなかつた。表に女の声が出た時、彼は胸に一鼓動を感じた。彼は論理に於て尤も強い代りに、心臓の作用に於て尤も

弱い男であつた。彼が近来怒れなくなつたのは、全く頭の御蔭で、腹を立てる程自分を馬鹿にすることを、理智が許さなくなつたからである。が其他の点に於ては、尋常以上に情緒の支配を受けるべく余儀なくされてゐた。取次に出た門野が足音を立て、書齋の入口にあらはれた時、血色のいゝ代助の頬は微かに光沢を失つてゐた。門野は、

「此方にしますか」と甚だ簡単に代助の意向を確めた。座敷へ案内するか、書齋で逢ふかと聞くのが面倒だから、斯う詰めて仕舞つたのである。代助はうんと云つて、入口に返事を待つてゐた門野を追ひ払ふ様に、自分で立つて行つて、椽側へ首を出した。三千代は椽側と玄関の継目の所に、此方を向いてためらつて居た。

十四

三千代の顔は此前逢つた時よりは寧ろ蒼白かつた。代助に眼と顎で招かれて書齋の入口へ近寄つた時、代助は三千代の息を喘ましてゐることに気が付いた。

「何うかしましたか」と聞いた。

三千代は何にも答へずに室の中に這入て来た。セルの単衣の下に襦袢を重ねて、手に大きな白い百合の花を二本許提げてゐた。其百合をいきなり洋卓の上に投げる様に置いて、其横にある椅子へ腰を卸した。さうして、結つた許の銀杏返を、構はず、椅子の脊に押し付けて、

「あゝ苦しかつた」と云ひながら、代助の方を見て笑つた。代助は手を叩いて水を取り寄せ様とした。三千代は黙つて洋卓の

上を指した。其所には代助の食後の嗽をする硝子の洋盃があつた。中に水が二口許残つてゐた。

「奇麗なんでせう」と三千代が聞いた。

「此奴は先刻僕が飲んだんだから」と云つて、洋盃を取り上げたが、蹣跚した。代助の坐つてゐる所から、水を棄てやうとすると、障子の外に硝子戸が一枚邪魔をしてゐる。門野は毎朝椽側の硝子戸を一二枚宛開けないで、元の通りに放つて置く癖があつた。代助は席を立つて、椽へ出て、水を庭へ空けながら、門野を呼んだ。今ゐた門野は何処へ行つたか、容易に返事をしなかつた。代助は少しまごついて、又三千代の所へ歸つて来て、「今すぐ持つて来て上げる」と云ひながら、折角空けた洋盃を其儘洋卓の上に置いたなり、勝手の方へ出て行つた。茶の間を通ると、門野は無細工な手をして錫の茶壺から玉露を撮み出し

てゐた。代助の姿を見て、

「先生、今直です」と言訳をした。

「茶は後でも好い。水が要るんだ」と云つて、代助は自分で台所へ出た。

「はあ、左様ですか。上がるんですか」と茶壺を放り出して門野も付いて来た。二人で洋盃を探したが一寸見付からなかつた。婆さんはと聞くと、今御客さんの菓子を買いに行つたといふ答であつた。

「菓子がなければ、早く買つて置けば可いのに」と代助は水道の栓を振つて湯呑に水を溢らせながら云つた。

「つい、小母さんに、御客さんの呉る事を云つて置かなかつたものですからな」と門野は氣の毒さうに頭を搔いた。

「ぢや、君が菓子を買いに行けば可いのに」と代助は勝手を出な

がら、門野かどのに当あたつた。門野かどのはそれでも、まだ、返事をした。

「なに菓子ほかの外ほかにも、まだ色々買物いろいろかひがあるつて云ふもんですか
らな。足あしは悪わるし天気は好よくないし、廃よせば好いいんですのに」

代助は振り向きもせず、書齋もとへ戻もどつた。敷居しきみを跨またいで、中なかへ
這入るや否や三千代の顔かほを見ると、三千代は先刻さつき代助すけの置おいて
行いつた洋盃コップを膝うへの上に両手で持つてゐた。其洋盃コップの中には、代
助が庭にはへ空あけたと同じ位に水みづが這入はいつてゐた。代助は湯呑もを持
つた儘まゝ、茫然として、三千代の前まへに立たつた。

「何どうしたんです」と聞きいた。三千代は例いつもの通り落ち付いた調
子で、

「難ありがた有う。もう沢山。今あれを飲んだの。あんまり奇麗きれいだつた
から」と答へて、リリー、オフ、ゼ、レーの漬つけけてある鉢はちを顧かへり
みた。代助は此大鉢おほはちの中なかに水みづを八分目程張はつて置おいた。妻楊枝つま

位ほそな細くきい茎うすあをの薄青いろい色みづが、水なかの中そろに揃あひだつてゐる間やきものから、陶器やきものの模ほの様がう仄うかに浮ういて見ええた。

「何な故げあんなものを飲のんだんですか」と代助あきは呆あれて聞きいた。

「だつて毒どくぢやないでせう」と三千代もは手もに持もつた洋盃コップを代助もの前だへ出だして、透すかして見みせた。

「毒どくでないつたつて、もし二日ふつかも三日みつかも経たつた水みづだつたら何どうするんです」

「いえ、先刻さつき来きた時とき、あの傍そば迄かほ顔かほを持もつて行いつて嗅かいで見みたの。其時そのとき、たつた今いま其鉢そのはちへ水みづを入れて、桶おけから移うつした許ばかりだつて、あの方がかた云いつたんですもの。大丈夫だいじゆうだわ。好いい香にほひね」

代助だまは黙だまつて椅子いすへ腰こしを卸おした。果はして詩しの為ために鉢はちの水みづを呑のんだのか、又は生理上せいりじやうの作用さうじゆうに促うながされて飲のんだのか、追窮しゆきゆうする勇氣ゆうきも出でなかつた。よし前ぜん者しやとした所ところで、詩しを銜てらつて、小説せうせつ

それから

の真似なぞをした受売うけうりの所作とは認められなかつたからである。そこで、たゞ、「気分はもう好よくなりましたか」と聞きいた。

十の五

三千代の頬ほに漸ほやく色いろがで出きて来きた。袂たもとから手帛ハンケチを取り出だして、口くちの辺あたりを拭ふきながら話はなしを始はじめた。——大抵たいていは伝通院前でんつういんまへから電車でんしゃへ乗のつて本郷ほんきやう迄まで買物かひものに出でるんだが、人ひとに聞きいて見みると、本郷ほんきやうの方かたは神楽坂かぐらざかに比くらべて、何どうしても一割いちわりか二割にわり物ものが高たかいと云いふので、此間このあひだから一二度いちど此方こつちの方かたへ出でて来きて見みた。此前このまへも寄よる筈はずであつたが、ついで遅おそくなつたので急いそいで帰かへつた。今日けふは其積つもりで早はやく宅うちを出でた。が、御息おやすみ中ちゆうだつたので、又また通とほり迄まで行いつて買物かひものを

それから

済^すまして帰^{かへ}り掛^がけに寄^よる事にした。所^{ところ}が天気模^も様が悪^{わる}くなつて、
藁^{わら}店^{だな}を上^あがり掛^かけるとぼつ／＼降^ふり出^だした。傘^{かさ}を持^もつて来^こなかつたので、濡^ぬれまいと思^{おも}つて、つい急^{いそ}ぎ過^すぎたものだから、す
ぐ身^{からだ}体に障^{さわ}つて、息^{いき}が苦^{くる}しくなつて困^こつた。――
「けれども、慣^なれつこに為^なつてゐるんだから、驚^{おど}ろきやしません」と
云^いつて、代^だ助^{すけ}を見て淋^{さみ}しい笑^{わら}ひ方^{かた}をした。
「心^{こゝろ}臓^{ぞう}の方は、まだ悉^{すつかり}皆^よ善^よくないんですか」と代^だ助^{すけ}は氣^きの毒^{どく}さ
うな顔^{かほ}で尋^{たず}ねた。

「悉^{すつかり}皆^よ善^よくなるなんて、生涯^{せいぜい}駄^だ目^めですわ」

意味^{いみ}の絶^{ぜつ}望^{ぼう}な程^{ほど}、三^{さん}千^{せん}代^{だい}の言^い葉^はは沈^{しづ}んでゐなかつた。織^{ほそ}い指^{ゆび}
を反^{そら}して穿^はめてゐる指^{ゆび}環^わを見た。それから、手^て帛^{ひん}を丸^{まる}めて、又^{また}
袂^{たもと}へ入^いれた。代^だ助^{すけ}は眼^めを俯^ふせた女^{むすめ}の額^{ひたい}の、髪^{かみ}に連^{つら}なる所^{ところ}を眺^{なが}め
てゐた。

すると、三千代は急に思ひ出した様に、此間の小切手の礼を述べ出した。其時何だか少し頬を赤くした様に思はれた。視感の鋭敏な代助にはそれが善く分つた。彼はそれを、貸借に關係した羞恥の血潮とのみ解釈した。そこで話をすぐ他所へ外した。先刻三千代が提げて這入て来た百合の花が、依然として洋卓の上に載つてゐる。甘たるい強い香が二人の間に立ちつゝあつた。代助は此重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪へなかつた。けれども無断で、取り除ける程、三千代に対して思ひ切つた振舞が出来なかつた。

「此花は何うしたんです。買って来たんですか」と聞いた。三千代は黙つて首肯いた。さうして、

「好い香でせう」と云つて、自分の鼻を、瓣の傍迄持つて来て、ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を真直に踏ん張つて、身

を後うしろの方へ反そらした。

「さう傍そばで嗅かいぢや不可いけない」

「あら何故なげ」

「何故なげつて理由もないんだが、不可いけない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顔をもとの位地に戻した。

「貴方あなた、此花このはな、御嫌おきらひなの？」

代助は椅子の足あしを斜ななめに立て、身体からだを後うしろへ伸のばした儘、答へを

せずに、微笑して見せた。

「ぢや、買かつて来こなくつても好よかつたのに。詰つまらないわ、回まり

路みちをして。御負まけに雨あめに降ふられ損そくなつて、息いきを切きらして」

雨あめは本ま当まに降ふつて来こた。雨あ滴たまが樋たに集あつまつて、流ながれる音おとがぎ

あと聞きえた。代助は椅子から立あち上あがつた。眼めの前まへにある百も合ご

の束たばを取とり上あげて、根ね元もとを括くつた濡ぬ藁わらを撈むし切きつた。

「僕に呉れたのか。そんなら早く活けやう」と云ひながら、すぐ先刻の大鉢の中に投げ込んだ。茎が長すぎるので、根が水を跳ねて、飛び出しさうになる。代助は滴る茎を又鉢から抜いた。さうして洋卓の引出から西洋鋏を出して、ふつり／＼と半分程の長さに剪り詰めた。さうして、大きな花を、リリー、オフ、ゼ、レーの簇がる上に浮かした。

「さあ是で好い」と代助は鋏を洋卓の上に置いた。三千代は此不思議に無作法に活けられた百合を、しばらく見てゐたが、突然、

「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」と妙な質問をかけた。

昔し三千代の兄がまだ生きてゐる時分、ある日何かのはづみに、長い百合を買つて、代助が谷中の家を訪ねた事があつた。其時彼は三千代に危しげな花瓶の掃除をさして、自分で、大事

さうに買つて来た花を活けて、三千代にも、三千代の兄にも、床へ向直つて眺めさした事があつた。三千代はそれを覚えてゐたのである。

「あなた、貴方だつて、鼻を着けて嗅いで入らしつたぢやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した。

十の六

それから
そのうち雨は益深くなつた。家を包んで遠い音が聴えた。門野が出て来て、少し寒い様ですな、硝子戸を閉めませうかと聞いた。硝子戸を引く間、二人は顔を揃えて庭の方を見てゐた。青い木の葉が悉く濡れて、静かな湿り気が、硝子越に代助の頭に

吹き込んで来た。世の中の浮いてゐるものは残らず大地の上
に落ち付いた様に見えた。代助は久し振りで吾に返つた心持が
した。

「好い雨ですね」と云つた。

「些とも好かないわ、私、草履を穿いて来たんですもの」

三千代は寧ろ恨めしさうに樋から洩る雨点を眺めた。

「帰りには車を云ひ付けて上げるから可いでせう。緩りなさい」

三千代はあまり緩り出来さうな様子も見えなかつた。まとも

に、代助の方を見て、

「貴方も相変らず呑気な事を仰しやるのね」と窘めた。けれど

も其眼元には笑の影が泛んでゐた。

今迄三千代の陰に隠れてぼんやりしてゐた平岡の顔が、此時

明らかに代助の心の瞳に映つた。代助は急に薄暗がりから物に

それから

襲はれた様な気がした。三千代は矢張り、離れ難い黒い影を引き摺つて歩いてゐる女であつた。

「平岡君は何うしました」とわざと何気なく聞いた。すると三千代の口元が心持締つて見えた。

「相変らずですわ」

「まだ何にも見付らないんですか」

「その方はまあ安心なの。来月から新聞の方が大抵出来るらしいんです」

「そりや好かつた。些とも知らなかつた。そんなら当分夫で好いぢやありませんか」

「え、まあ難有いわ」と三千代は低い声で真面目に云つた。代

助は、其時三千代を大変可愛く感じた。引き続き、

「彼方の方は差し当り責められる様な事もないんですか」と聞き

いた。

「彼方あつちの方ほうつて——」と少し逡巡すこつてみた三千代は、急に顔かほを

赧あからめた。

「私わたし、実は今日夫けふそれで御詫おわびに上あがつたのよ」と云ひながら、一度俯向うつむいた顔を又上げた。

代助は少しでも氣不味きまづい様子を見せて、此上にも、女の優しやさい血潮うごを動かすに堪えなかつた。同時に、わざと向ふの意を迎へる様な言葉を掛けて、相手を殊更に氣の毒がらせる結果を避けた。それで静かに三千代の云ふ所を聴いた。

先達せんだつての二百円は、代助から受取うけとるとすぐ借錢しやくせんの方へ回す筈はずであつたが、新あたらしく家うちを持つた為ため、色々入費いろくが掛かつたので、つい其方の用を、あのうちで幾分か弁べんじたのが始はじりであつた。あとはと思つてみると、今度こんどは毎日の活計くらしに追おはれ出した。自

分ながら好いい心持こころもちはしなかつたけれども、仕方しかたなしに困こまるとは使つかひ、困こまるとは使つかひして、とう／＼荒増あらまし亡なくして仕舞つかひつた。尤なもさうでもしなければ、夫婦こんいちは今日迄こんにち斯かうして暮くらしては行いけなかつたのである。今から考いへて見ると、一層いつその事無なければ無ないなりに、何どうか斯かうか工面くめんも付ついたかも知しれないが、なまじい、手元てもとに有あつたものだから、苦くるし紛まぎれに、急場きうばの間に合あはして仕舞つかひつたので、肝心かんしんの証書しやくせんを入しれた借銭しやくせんの方は、いまだに其儘ままにしてある。是むしは寧むしろ平岡へらおかの悪わるいのではない。全く自あやまち分の過あやまちである。

「私わたし、本ほん当とうに済すまない事ことをしたと思おもつて、後悔こうかいしてゐるのよ。けれども拝借はいせするときは、決あなして貴方あなたを瞞だまして嘘うそを吐つく積つぢやなかつたんだから、堪忍かんにんして頂戴ていだい」と三千代さんせんは甚くだ苦くるしさうに言訳いひわけをした。

それから

「何うせ貴方に上げたんだから、何う使つたつて、誰も何とも云ふ訳はないでせう。役にさへ立てば夫で好いちやありませんか」と代助は慰めた。さうして貴方といふ字をことさらに重く且つ緩く響かせた。三千代はたゞ、

「私、夫で漸く安心したわ」と云つた丈であつた。

雨が頻なので、帰るときには約束通り車を雇つた。寒いので、セルの上へ男の羽織を着せやうとしたら、三千代は笑つて着なかつた。

十一の一

何時の間にか、人が紹の羽織を着て歩く様になつた。一三日、宅で調物をして庭先より外に眺めなかつた代助は、冬帽を被つ

て表へ出て見て、急に暑さを感じた。自分もセルを脱がなければならぬと思つて、五六町歩くうちに、袷を着た人に二人出逢つた。左様かと思ふと新らしい氷屋で書生が洋盃を手にして、冷たさうなものを飲んでゐた。代助は其時誠太郎を思ひ出した。近頃代助は元よりも誠太郎が好きになつた。外の人間と話してゐると、人間の皮と話す様で齒痒くつてならなかつた。けれども、顧みて自分を見ると、自分は人間中で、尤も相手を齒痒がらせる様に拵えられてゐた。是も長年生存競争の因果に曝された罰かと思ふと余り難有い心持はしなかつた。

此頃誠太郎はしきりに玉乗りの稽古をしたがつてゐるが、それは、全く此間浅草の奥山へ一所に連れて行つた結果である。あの一凶な所はよく、嫂の気性を受け継いでゐる。然し兄の子丈あつて、一凶なうちに、何処か逼らない鷹揚な氣象がある。

誠太郎の相手をしてみると、向ふの魂たましひが遠慮なく此方こつちへ流れ込んで来るから愉快である。實際代助は、昼夜ちゆうやの区別なく、武装を解といた事ことのない精神に、包圍されるのが苦痛であつた。

誠太郎は此春このはるから中学校へ行き出だした。すると急に脊丈せたくが延びて来る様くに思はれた。もう一二年すると声こゑが変かはる。それから先何さきどんな径路けいろを取つて、生長するか分わからないが、到底人間にんげんとして、生存する為ためには、人間から嫌きらはれると云ふ運命に到着するに違ちがひない。其時そのとき、彼かれは穩おだやかに人の目に着つかない服装なりをして、乞食こじきの如く、何物をか求めつゝ、人の市いちをうろついて歩あるくだらう。

代助は堀端ぼたへ出でた。此間このあひだ迄向むかふの土手にむら躑躅つぎが、団団だんだんと紅く白はくの模様を青あかい中なかに印おしてゐたのが、丸まで跡形あとかたもなくなつて、のべつに草おが生おい茂もつてゐる高い傾斜うへの上に、大きな松まつが何十本

となく並んで、何処迄もつゞいてゐる。空は奇麗に晴れた。代助は電車に乗つて、宅へ行つて、嫂に調戲つて、誠太郎と遊ばうと思つたが、急に厭になつて、此松を見ながら、草臥る所迄堀端を伝つて行く氣になつた。

新見付へ来ると、向から来たり、此方から行つたりする電車が苦になり出したので、堀を横切つて、招魂社の横から番町へ出た。そこをぐる／＼回つて歩いてゐるうちに、かく目的なしに歩いてゐる事が、不意に馬鹿らしく思はれた。目的があつて歩くものは賤民だと、彼は平生から信じてゐたのであるけれど、此場合に限つて、其賤民の方が偉い様な氣がした。全たく、又アンニユイに襲はれたと悟つて、帰りだした。神楽坂へかゝると、ある商店で大きな蓄音器を吹かしてゐた。其音が甚しく金属性の刺激を帯びてゐて、大いに代助の頭に応へた。

家の門を這入ると、今度は門野が、主人の留守を幸ひと、大きな声で琵琶歌をうたつてゐた。夫でも代助の足音を聞いて、ぴたりと已めた。

「いや、御早うがしたな」と云つて玄関へ出て来た。代助は何にも答へずに、帽子を其所へ掛けた儘、椽側から書齋へ這入つた。さうして、わざく／＼障子を締め切つた。つゞいて湯呑に茶を注いで持つて来た門野が、

「締めときですか。暑かありませんか」と聞いた。代助は袂から手帛を出して額を拭いてゐたが、矢つ張り、
「締めて置いてくれ」と命令した。門野は妙な顔をして障子を締めて出て行つた。代助は暗くした室のなかに、十分許ばかりとしてゐた。

彼は人の羨やむ程光沢の好い皮膚と、労働者に見出しがたい

様に柔かな筋肉を有つた男であつた。彼は生れて以来、まだ大病と名のつくものを経験しなかつた位、健康に於て幸福を享けてゐた。彼はこれでこそ、生甲斐があると信じてゐたのだから、彼の健康は、彼に取つて、他人の倍以上に価値を有つてゐた。彼の頭は、彼の肉体と同じく確であつた。たゞ始終論理に苦しめられてゐたのは事実である。それから時々、頭の中心が、大弓的の様に、二重もしくは三重にかさなる様に感ずる事があつた。ことに、今日は朝から左様な心持がした。

十一の二

代助が黙然として、自己は何の為に此世の中に生れて来たかを考へるのは斯う云ふ時であつた。彼は今迄何遍も此大問題を

捕へて、彼の眼前に据ゑ付けて見た。其動機は、単に哲学上の好奇心から来た事もあるし、又世間の現象が、余りに複雑な色彩を以て、彼の頭を染め付けやうと焦るから来る事もあるし、又最後には今日の如くアンニユイの結果として来る事もあるが、其都度彼は同じ結論に到着した。然し其結論は、此問題の解決ではなくつて、寧ろ其否定と異ならなかつた。彼の考によると、人間はある目的を以て、生れたものではなかつた。之と反対に、生れた人間に、始めてある目的が出来て来るのであつた。最初から客観的にある目的を拵らえて、それを人間に附着するのは、其人間の自由な活動を、既に生れる時に奪つたと同じ事になる。だから人間の目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならぬ。けれども、如何な本人でも、之を随意に作る事は出来ない。自己存在の目的は、自己存在の経過が、既に

これを天下に向つて発表したと同様だからである。

此根本義から出立した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立て、活動するのは活動の墮落になる。従つて自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。

だから、代助は今日迄、自分の脳裏に願望、嗜欲が起るたび毎に、是等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在してゐた。二個の相容れざる願望嗜欲が胸に闘ふ場合も同じ事であつた。たゞ矛盾から出る一目的の消耗と解釈してゐた。これ

を煎じ詰めると、彼は普通に所謂無目的な行為を目的として活動してゐたのである。さうして、他を偽らざる点に於てそれを尤も道徳的なものと心得てゐた。

此主義を出来る丈遂行する彼は、其遂行の途中で、われ知らず、自分のとうに棄却した問題に襲はれて、自分は今何の為に、こんな事をしてゐるのかと考へ出す事がある。彼が番町を散歩しながら、何故散歩しつゝあるかと疑つたのは正に是である。

其時彼は自分ながら、自分の活力の充実してゐない事に気がつく。餓へたる行動は、一気に遂行する勇氣と、興味に乏しいから、自ら其行動の意義を途中で疑ふ様になる。彼はこれをアンニユイと名けてゐた。アンニユイに罹ると、彼は論理の迷乱を引き起すものと信じてゐた。彼の行為の中途に於て、何の為と云ふ、冠履顛倒の疑を起させるのは、アンニユイに外ならぬ

かつたからである。

彼は立て切つた室へやの中で、一二度頭あたまを抑えて振り動うごかして見た。彼は昔むかしから今日迄こんにちの思索家の、屢しばしば繰り返した無意義な疑義を、又脳裏のうりに拮定ねんていするに堪えなかつた。その姿すがたのちらりと眼前がんぜんに起つた時、またかと云ふ具合に、すぐ切り棄きて、仕舞つた。同時に彼は自己の生活力の不足を劇しく感じた。従つて行為其物を目的として、円満に遂行する興味も有もたなかつた。彼はたゞひとりひとり荒野こうやの中に立たつた。茫然としてゐた。

彼は高尚な生活欲の満足を冀ふ男であつた。又ある意味に於て道義欲の満足を買はうとする男であつた。さうして、ある点へ来ると、此二つのものが火花ひばなを散ちらして切り結むすぶ関門くわんもんがある。と予想してゐた。それで生活欲を低い程度に留とめて我慢してゐた。彼の室へやは普通の日本間にほんまであつた。是これと云ふ程の大した装飾

もなかつた。彼に云はせると、額がくさへ氣の利きいたものは掛けてなかつた。色彩しきさいとして眼めを惹ひく程うつくに美しいのは、本棚に並べてある洋書に集められたと云ふ位であつた。彼は今此書物なかの中に、茫然すはとして坐すつた。良やあつて、これほど寐ね入いつた自分の意識を強烈にするには、もう少し周囲の物を何どうかしなければならぬと、思ひながら、室へやの中なかをぐる／＼見廻みまはした。それから、又ぼかんとして壁かべを眺ながめた。が、最後さいごに、自分を此薄弱な生活くちから救ひ得る方法は、たゞ一つあると考へた。さうして口くちの内うちで云つた。

「矢つ張り、三千代さんに逢あはなくちや不可いかん」

彼は足の進まない方角へ散歩に出たのを悔いた。もう一遍出直して、平岡の許迄行かうかと思つてゐる所へ、森川町から寺尾が来た。新らしい麦藁帽を被つて、閑静な薄い羽織を着て、暑いくくと云つて赤い顔を拭いた。

「何だつて、今時分来たんだ」と代助は愛想もなく云ひ放つた。彼と寺尾とは平生でも、この位な言葉で交際してゐたのである。

「今時分が丁度訪問に好い刻限だらう。君、又昼寐をしたな。どうも職業のない人間は、情弱で不可ん。君は一体何の為に生れて来たのだつたかね」と云つて、寺尾は麦藁帽で、しきりに胸のあたりへ風を送つた。時候はまだ夫程暑くないのだから、此所作は頗る愛嬌を添へた。

「何の為に生れて来やうと、余計な御世話だ。夫より君こそ何しに来たんだ。又「此所十日許の間」ぢやないか、金の相談な

らもう御免だよ」と代助は遠慮なく先へ断つた。

「君も随分礼義を知らない男だね」と寺尾は已を得ず答へた。けれども別段感情を害した様子も見えなかつた。実を云ふと、此位な言葉は寺尾に取つて、少しも無礼とは思へなかつたのである。代助は黙つて、寺尾の顔を見てゐた。それは、空しい壁を見てゐるより以上の何等の感動をも、代助に与へなかつた。

寺尾は懐から汚ない仮綴の書物を出した。

「是を訳さなけりやならないんだ」と云つた。代助は依然として黙つてゐた。

「食ふに困らないと思つて、さう無精な顔をしなくつて好からう。もう少し判然として呉れ。此方は生死の戦だ」と云つて、寺尾は小形の本をとんくと椅子の角で二返敲いた。

「何時迄に」

それから

寺尾は、書物の頁をさらりと繰つて見せたが、断然たる調子で、

「二週間」と答へた後で、「何うでも斯うでも、夫迄に片付なけりや、食へないんだから仕方がない」と説明した。

「偉い勢だね」と代助は冷かした。

「だから、本郷からわざわざ遣つて来たんだ。なに、金は借りなくても好い。——貸せば猶好いが——夫より少し分らない所があるから、相談しやうと思つて」

「面倒だな。僕は今日は頭が悪くつて、そんな事は遣つてゐられないよ。好い加減に訳して置けば構はないぢやないか。どうせ原稿料は頁で呉れるんだらう」

「なんぼ、僕だつて、さう無責任な翻訳は出来ないだらうぢやないか。誤訳でも指摘されると後から面倒だあね」

「仕様がないな」と云つて、代助は矢つ張り横着な態度を維持してゐた。すると、寺尾は、

「おい」と云つた。「冗談ぢやない、君の様に、のらくら遊んでる人は、たまには其位な事でも、しなくつちや退屈で仕方がないだらう。なに、僕だつて、本の善く読める人の所へ行く気なら、わざしく君の所迄来やしない。けれども、左んな人は君と違つて、みんな忙しいんだからな」と少しも辟易した様子を見せなかつた。代助は喧嘩をするか、相談に応ずるか何方かだと覚悟を極めた。彼の性質として、斯う云ふ相手を軽蔑する事は出来るが、怒り付ける気は出せなかつた。

「ぢや成るべく少しに仕様ぢやないか」と断つて置いて、符号の附けてある所文を見た。代助は其書物の梗概さへ聞く勇氣がなかつた。相談を受けた部分にも曖昧な所は沢山あつた。寺尾

は、やがて、

「やあ、難有う」と云つて本を伏せた。

「分らない所は何する」と代助が聞いた。

「なに何かする。——誰に聞いたつて、さう善く分りやしまい。

第一時間がないから已を得ない」と、寺尾は、誤訳よりも生活費の方が大事件である如く天から極めてゐた。

相談が済むと、寺尾は例によつて、文学談を持ち出した。不思議な事に、さうなると、自己の翻訳とは違つて、いつもの通り非常に熱心になつた。代助は現今の文学者の公けにする創作のうちにも、寺尾の翻訳と同じ意味のものが沢山あるだらうと考へて、寺尾の矛盾を可笑しく思つた。けれども面倒だから、口へは出さなかつた。

寺尾の御蔭で、代助は其日とうく平岡へ行きはぐれて仕舞

つた。

十一の四

晩食ばんめしの時とき、丸善まるぜんから小包こづゝみが届といた。箸はしを措おいて開あけて見ると、余程よほど前に外国がいこくへ注文ちゆうもんした二三にさんの新刊書しんかんしよであつた。代助だいすけはそれを腋わきの下したに抱かへ込こんで、書齋しよさいへ歸かへつた。一冊いっさつづゝ順々じゆんじゆんに取り上あげて、暗くらいながら二三にさん頁ぺいじ、捲はぐる様に眼めを通とほしたが何処どこも彼の注意ちゆういを惹ひく様な所ところはなかつた。最後さいごの一冊いっさつに至いたつては、其名そのな前まへさへ既に忘わすれてゐた。何れ其中そのうち読よむ事にしやうと云いふ考こうで、一所いっ所に纏まとめた儘まま、立たつて、本棚ほんだなの上うへに重かさねて置かいた。椽側せんがはから外そとを窺うかがうと、奇麗きれいな空そらが、高たかい色いろを失うしなひかけて、隣となりの梧桐ぎとこうの一際ひとときはこ濃こく見える上うへに、薄うすい月つきが出でてゐた。

それから

そこへ門野かどのが大きな洋燈ランプを持つて這入はいつて来た。それには絹縮きぬちぢみの様に、豎たてに溝みぞの入いつた青い笠かさが掛かけてあつた。門野かどのはそれをテールテールの上に置おいて、又椽側うへへ出でたが、出掛でがけに、

「もう、そろ／＼ほたる螢でが出る時分でですな」と云つた。代助をかしは可笑をかな顔かほをして、

「まだ出でやしまい」と答へた。すると門野かどのは例の如く、

「左様さようでしやうか」と云ふ返事まじめをしたが、すぐ真面目まじめな調子あまで、

「螢ほたるてえものは、昔むかしは大分流行だいぶんはやつたもんだが、近来あまは余り文士方がたが

騒さわがない様さわになりましたな。何どう云ふもんでせう。螢ほたるだの烏からすだ

のつて、此頃このころぢやついぞ見た事ことがない位くらいなもんだ」と云つた。

「左様さようさ。何どう云ふ訳わけだらう」と代助ぞらも空そらつとぼけて、真面目まじめな挨拶あいさつをした。すると門野かどのは、

「矢やつ張り、電気燈でんきとうに圧倒あつぱんされて、段々退却たいせつするんでせう」と云

ひ終つて、自みづから、えへ、と、洒落しやれの結末をつけて、書生部屋へ歸つて行つた。代助もつゞいて玄関迄出た。門野は振返ふりかへつた。

「また御出掛でかけですか。よござんす。洋燈ランプは私が氣わたくしを付けますから。——小母をばさんが先刻さつきから腹はらが痛いいたつて寐ねたんですが、何大なたいした事はないでせう。御緩ごゆつくり」

代助は門もんを出でた。江戸川迄来くると、河かはの水みづがもう暗くらくなつてゐた。彼は固かたより平岡たうを訪たづねる氣であつた。から何時いつもの様に川辺かはべりを伝つたはないで、すぐ橋はしを渡わたつて、金剛寺坂こんごうじざかを上あがつた。

実を云ふと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢つてゐた。一遍は平岡から比較的長い手紙を受取つた時であつた。

それには、第一に着京以来御世話になつて難有いと云ふ礼が述べてあつた。それから、——其後そのご色々朋友や先輩の尽力を辱うしたが、近頃ある知人の周旋で、某新聞の經濟部の主任記者に

ならぬかとの勧誘を受けた。自分も遣つて見たい様な気がする。然し着京の当時君に御依頼をした事もあるから、無断では宜しくあるまいと思つて、一応御相談をすると云ふ意味が後に書いてあつた。代助は、其当時平岡から、兄の会社に周旋してくれと依頼されたのを、其儘にして、断わりもせず今日迄放つて置いた。ので、其返事を促がされたのだと受取つた。一通の手紙で謝絶するのも、あまり冷淡過ると云ふ考もあつたので、翌日出向いて行つて、色々兄の方の事情を話して当分、此方は断念して呉れる様に頼んだ。平岡は其時、僕も大方左様だらうと思つてゐたと云つて、妙な眼をして三千代の方を見た。

いま一遍は、愈新聞の方が極まつたから、一晚緩り君と飲みたい。何日に来て呉れといふ平岡の端書が着いた時、折悪く差支が出来たからと云つて散歩の序に断わりに寄つたのである。

其時平岡は座敷の真中に引繰り返つて寐てゐた。昨夕どこかの会へ出て、飲み過ぎた結果だと云つて、赤い眼をしきりに摩つた。代助を見て、突然、人間は何うしても君の様に独身でなけりや仕事は出来ない。僕も一人なら満洲へでも亜米利加へでも行くんだが大いに妻帯の不便を鳴らした。三千代は次の間で、こつそり仕事をしてゐた。

三遍目には、平岡の社へ出た留守を訪ねた。其時は用事も何もなかつた。約三十分許り椽へ腰を掛けて話した。

夫から以後は可成小石川の方面へ立ち回らない事にして今夜に至たのである。代助は竹早町へ上つて、それを向ふへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云ふ軒燈のすぐ前へ来た。格子の外から声を掛ると、洋燈を持つて下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。代助は出先も尋ねずに、すぐ引返して、電車

へ乗つて、本郷迄来て、本郷から又神田へ乗り換えて、そこで降りて、あるビヤ、ホールへ這入つて、麦酒をぐいぐい飲んだ。

十一の五

翌日眼が覚めると、依然として腦の中心から、半径の違つた円が、頭を二重に仕切つてゐる様な心持がした。斯う云ふ時に代助は、頭の内側と外側が、質の異なつた切り組み細工で出来上つてゐるとしか感じ得られない癖になつてゐた。夫で能く自分で自分の頭を振つてみて、二つのものを混ぜやうと力めたものである。彼は今枕の上へ髪を着けたなり、右の手を固めて、耳の上を二三度敲いた。

代助は斯ゝる腦髓の異状を以て、かつて酒の咎に歸した事は

なかつた。彼は小供の時ときから酒さけに量りかを得た男であつた。いくら飲んでも、左程平常を離れなかつた。のみならず、一度熟睡さへすれば、あとは身体からだに何の故障も認める事が出来なかつた。嘗て何かのはづみに、兄あにと競り飲のみをやつて、三合入さんごういりの徳利を十三本倒した事がある。其翌日代助は平気な顔をして学校へ出た。兄あには二日ふつかも頭あたまが痛いいたと云つて苦にがり切きつてゐた。さうして、これを年齢としの違ちがひだと云つた。

昨夕飲んだ麦酒ビールは是これに比くらべると愚おろかなものだと、代助は頭あたまを敲た

きながら考へた。幸さいはいひに、代助はいくら頭あたまが二重にぢうになつても、脳

の活動くわつに狂くるひを受けた事がなかつた。時としては、たゞ頭あたまを使つかふ

のが臆劫おくけつになつた。けれども努力さへすれば、充分複雑な仕事

に堪たえるといふ自信があつた。だから、斯こんな異状を感じても、

脳の組織そしの変化から、精神しんに悪わるい影響えいぎやうを与へるものとしては、

悲観する余地がなかつた。始めて、こんな感覚があつた時は驚ろいた。二遍目は寧ろ新奇な経験として喜んだ。この頃は、此経験が、多くの場合に、精神気力の低落に伴ふ様になつた。内容の充実しない行為を敢てして、生活する時の徴候になつた。代助にはそこが不愉快だつた。

床の上に起き上がつて、彼は又頭を振つた。朝食の時、門野は今朝の新聞に出てゐた蛇と驚の戦の事を話し掛けたが、代助は応じなかつた。門野は又始まつたなと思つて、茶の間を出た。勝手の方で、

「小母さん、さう働らいちや悪いだらう。先生の膳は僕が洗つて置くから、彼方へ行つて休んで御出」と婆さんを労つてゐた。代助は始めて婆さんの病気の事を思ひ出した。何か優しい言葉でも掛ける所であつたが、面倒だと思つて已めにした。

ナイフ
食刀を置くや否や、代助はすぐ紅茶々碗を持つて書齋へ這入
つた。時計を見るともう九時過であつた。しばらく、庭を眺め
ながら、茶を啜り延ばしてゐると、門野が来て、

「御宅から御迎が参りました」と云つた。代助は宅から迎を受
ける覚がなかつた。聞き返して見ても、門野は車夫がとか何と
か要領を得ない事を云ふので、代助は頭を振り／＼玄関へ出て
見た。すると、そこに兄の車を引く勝と云ふのがゐた。ちやん
と、護謨輪の車を玄関へ横付にして、叮嚀に御辞義をした。

「勝、御迎つて何だい」と聞くと、勝は恐縮の態度で、

「奥様が車を持つて、迎に行つて来いつて、御仰いました」

「何か急用でも出来たのかい」

「勝は固より何事も知らなかつた。」

「御出になれば分るからつて——」と簡潔に答へて、言葉の尻

を結むすばなかつた。

代助は奥へ這入はいつた。婆ばあさんを呼んで着物きものを出させやうと思つたが、腹の痛むものを使つかふのが厭いやなので、自分で簞笥ひきだしの抽出ひきだしを掻かき回まはして、急いで身支度みじたくをして、勝かつの車くるまに乗つて出た。

其日そのひは風かぜが強ふく吹いた。勝かつは苦くるしさうに、前まへの方に曲こまんで馳かけた。乗のつてゐた代助は、二重あたまの頭あたまがぐるぐると回転するほど、風かぜに吹かれた。けれども、音おとも響ひびきもない車輪しやりんが美しく動うごいて、意識に乏しい自分を、半睡の状態ちゆうで宙はこに運んで行く有様が愉快であつた。青山あをやまの家うちへ着く時分には、起おきた頃とは違ちがつて、気色きしよくが余程晴々して来た。

何か事が起つたのかと思つて、上り掛けに、書生部屋を覗いて見たら、直木と誠太郎がたつた二人で、白砂糖を振り掛けた苺を食つてゐた。

「やあ、御馳走だな」と云ふと、直木は、すぐ居ずまひを直して、挨拶をした。誠太郎は唇の縁を濡らした儘、突然、「叔父さん、奥さんは何時貰ふんですか」と聞いた。直木はにや／＼してゐる。代助は一寸返答に窮した。己を得ず、「今日は何故学校へ行かないんだ。さうして朝つ腹から苺なんぞを食つて」と調戯ふ様に、叱る様に云つた。

「だつて今日は日曜ぢやありませんか」と誠太郎は真面目になつた。

「おや、日曜か」と代助は驚ろいた。

直木は代助の顔を見てとう／＼笑ひ出した。代助も笑つて、

座敷へ来た。そこには誰も居なかつた。替え立ての畳の上に、丸い紫檀の刳抜盆が一つ出てゐて、中に置いた湯呑には、京都の浅井黙語の模様画が染め付けてあつた。からんとした広い座敷へ朝の緑が庭から射し込んで、凡てが静かに見えた。戸外の風は急に落ちた様に思はれた。

座敷を通り抜けて、兄の部屋の方へ来たら、人の影がした。

「あら、だつて、夫ぢや余まりだわ」と云ふ嫂の声が聞えた。

代助は中へ這入つた。中には兄と嫂と縫子がゐた。兄は角帯に

金鎖を巻き付けて、近頃流行る妙な紹の羽織を着て、此方に向

いて立つてゐた。代助の姿を見て、

「そら来た。ね。だから一所に連れて行つて御貫よ」と梅子に話しかけた。代助には何の意味だか固より分らなかつた。すると、梅子が代助の方に向き直つた。

「代さん、今日貴方、無論暇でせう」と云つた。

「え、まあ暇です」と代助は答へた。

「ぢや、一所に歌舞伎座へ行つて頂戴」

代助は嫂の此言葉を聞いて、頭の中に、忽ち一種の滑稽を感じた。けれども今日は平常の様に、嫂に調戲ふ勇氣がなかつた。面倒だから、平気な顔をして、

「え、宜しい、行きませう」と機嫌よく答へた。すると梅子は、

「だつて、貴方は、最早、一遍観たつて云ふんぢやありませんか」と聞き返した。

「一遍だらうが、二遍だらうが、些とも構はない。行きませう」と代助は梅子を見て微笑した。

「貴方も余つ程道楽ものね」と梅子が評した。代助は益滑稽を感じた。

兄あには用があると云つて、すぐ出でて行いつた。四時頃用が済すんだら芝居の方へ回る約束なんださうである。それ迄自分と縫子丈で見みてゐたら好よささうなものだが、梅子は夫それが厭いやだと云つた。そんなら直木を連れて行いけと兄あにから注意された時、直木は紺こん紺がすりを着きて、袴はかまを穿はいて、六むづかしく坐すつてゐて不可いけないと答へた。夫それで仕方がないから代助を迎むかひに遣やつたのだ、と、是は兄あにが出掛でかけの説明であつた。代助は少々理窟りくつに合あはないと思つたが、たゞ、左様さうですかと答へた。さうして、嫂あによめは幕まくの相間あひまに話はなし相手が欲ほしいのと、夫それからいざと云ふ時ときに、色々いろく用を云ひ付けたいものだから、わざ／＼自分自分を呼よび寄よせたに違ちがはないと解釈した。

梅子と縫子は長い時間を御化粧け粧けいに費つやした。代助は懇こよく御化粧けいの監督者たつになつて、両人ふたりの傍そばに附ついてゐた。さうして時々は、面白おもしろ半分はんぶんの冷ひやかしも云つた。縫子からは叔父おぢさん随分ずいぶんだわ

を二三度繰り返された。

父は今朝早くから出て、家にゐなかつた。何処へ行つたのだ

か、嫂は知らないと言つた。代助は別に知りたい気もなかつた。

たゞ父のゐないのが難有かつた。此間の会見以後、代助は父と

はたつた二度程しか顔を合せなかつた。それも、ほんの十分か

十五分に過ぎなかつた。話が込み入りさうになると、急に叮嚀

な御辞義をして立つのを例にしてゐた。父は座敷の方へ出て来

て、どうも代助は近頃少しも尻が落ち付かなくなつた。おれの

顔さへ見れば逃げ支度をすると言つて怒つた。と嫂は鏡の前で

夏帯の尻を撫でながら代助に話した。

「ひどく、信用を落したもんだな」

代助は斯う云つて、嫂と縫子の蝙蝠傘を抱げて一足先へ玄関

へ出た。車はそこに三挺并んでゐた。

十一の七

代助は風を恐れて烏打帽を被つてゐた。風は漸く歇んで、強い日が雲の隙間から頭の上を照らした。先へ行く梅子と縫子は傘を広げた。代助は時々手の甲を額の前に翳した。

芝居の中では、嫂も縫子も非常に熱心な観客であつた。代助は二返目の所為といひ、此三四日來の腦の状態からと云ひ、左様一図に舞台ばかりに氣を取られてゐる訳にも行かなかつた。堪えず精神に重苦しい暑を感じるので、屢団扇を手にして、風を襟から頭へ送つてゐた。

幕の合間に縫子が代助の方を向いて時々妙な事を聞いた。何故あの人は盃で酒を飲んだとか、何故坊さんが急に大将になれ

るんだとか、大抵説明の出来ない質問のみであつた。梅子はそれを聞きたんびに笑つてゐた。代助は不図二三日前新聞で見た、ある文学者の劇評を思ひ出した。それには、日本の脚本が、あまりに突飛な筋すぢに富とんでゐるので、楽らくに見物が出来ないかと書いてあつた。代助は其時そのとき、役者の立場たちばから考へて、何もそんな人ひとに見て貰ふ必要はあるまいと思つた。作者に云ふべき小言こごとを、役者の方へ持つてくるのは、近松の作を知るために、越路の浄瑠璃が聴きたいと云ふ愚物と同じ事だと云つて門野かどのに話した。門野は依然として、左様そんなもんでせうかなと云つてゐた。

小供のうちから日本在来の芝居を見慣れた代助は、無論梅子と同じ様に、単純なる芸術の鑑賞家であつた。さうして舞台に於ける芸術の意味を、役者の手腕しゅわんに就てのみ用ひべきものと狭義に解釈してゐた。だから梅子とは大いに話はなしが合あつた。時々顔ときぐかほ

を見合みあして、黒人くろうとの様な批評を加へて、互に感心してゐた。けれども、大体に於て、舞台にはもう厭あきが来きてゐた。幕まくの途とちう中ちゆうでも、双眼鏡で、彼方あつちを見たり、此方こつちを見たりしてゐた。双眼鏡の向むかふ所には芸者が沢山ゐた。そのあるものは、先方むかふでも眼鏡めがねの先さきを此方こつちへ向けてゐた。

代助の右隣みぎとなりには自分と同年輩の男が丸髻いづつに結むすた美しい細君ちかづきを連れて来きてゐた。代助は其細君の横顔を見て、自分の近付ちかづきのある芸者によく似てゐると思つた。左隣ひだりとなりには男連づれが四人許よつたりばかりゐた。さうして、それが、悉く博士であつた。代助は其顔を一々覚えことごとてゐた。其又隣となりに、広ひろい所を、たつた二人で専領せんしてゐるものがあつた。その一人ひとりは、兄あにと同じ位な年恰好としかつこうで、正しい洋服たゞを着きてゐた。さうして金縁きんぶちの眼鏡めがねを掛けて、物を見るときには、顎あごを前まへへ出だして、心持仰向こころもちあほむく癖くせがあつた。代助は此男このを見たとき

き、何所か見覚のある様な気がした。が、ついに思ひ出さうと力めても見なかつた。其伴侶は若い女であつた。代助はまだ廿になるまいと判定した。羽織を着ないで、普通よりは大きく廂を出して、多くは顎を襟元へぴたりと着けて坐つてゐた。

代助は苦しいので、何返も席を立つて、後の廊下へ出て、狭い空を仰いだ。兄が来たら、嫂と縫子を引き渡して早く歸りた位に思つた。一遍は縫子を連れて、其所等をぐるぐ運動して歩いた。仕舞には些と酒でも取り寄せて飲まうかと思つた。

兄は日暮とすれくゝに来た。大変遅かつたぢやありませんかと云つた時、帯の間から、金時計を出して見せた。實際六時少し回つた許であつた。兄は例の如く、平気な顔をして、方々見回してゐた。が、飯を食ふ時、立つて廊下へ出たぎり、中々歸つて来なかつた。しばらくして、代助は不図振り返つたら、一軒

置いて隣りの金縁の眼鏡を掛けた男の所へ這入つて、話をして
ゐた。若い女にも時々話しかける様であつた。然し女の方では
笑ひ顔を一寸見せる丈で、すぐ舞台の方へ真面目に向き直つた。
代助は嫂に其人の名を聞かうと思つたが、兄は人の集る所へさ
へ出れば、何所へでも斯の如く平氣に這入り込む程、世間の広
い、又世間を自分の家の様に心得てゐる男であるから、氣にも
掛けずに黙つてゐた。

すると幕の切れ目に、兄が入口迄歸つて来て、代助一寸来いと
云ひながら、代助を其金縁の男の席へ連れて行つて、愚弟だと
紹介した。それから代助には、是が神戸の高木さんだと云つて
引合した。金縁の紳士は、若い女を顧みて、私の姪ですと云つ
た。女はしとやかに御辞義をした。其時兄が、佐川さんの令嬢
だと口を添へた。代助は女の名を聞いたとき、旨く掛けられた

と腹はらの中で思なつた。が何事なにも知らぬものゝ如よく装まつて、好加減い、かげんに話はなしてゐた。すると嫂あによめが一寸ちよつと自分おれの方かたを振り向むいた。

十一の八

五六分ぶんして、代助あには兄ともと共に自分おれの席かへに返かへつた。佐川むすめの娘むすめを紹介しょうかいされる迄までは、兄あにの見え次第しだい逃にげる気きであつたが、今いまでは左様さやう不可いかなくなつた。余あまり現金げんきんに見みえては、却よつて好よくない結果けつこを引ひき起おこしさうな気がしたので、苦くるしいのを我慢まんまんして坐すつてゐた。兄あにも芝居しばいに就あてては全ぜんたたく興味きょうみがなささうだつたけれども、例れいの如ごとく鷹揚たかやうに構かまえて、黒くろい頭あたまを燻いぶす程ほど、葉卷はまきをゆらした。時々ときどき評ひやうをすることと、縫子ぬいこあの幕まくは綺麗きれいだらう位くらいの所ところであつた。梅子うめこは平ひら生なまの好奇心きうしんにも似にず、高木たかぎに就あても、佐川さかの娘むすめに就あても、何等いづれ

の質問も掛けず、一言の批評も加へなかつた。代助には其澄すました様子が却つて滑稽に思はれた。彼は今日迄こんにち嫂あによめの策略にかゝつた事が時々ときどきあつた。けれども、只ただの一返も腹はらを立てた事はなかつた。今度こんどの狂言も、平生ならば、退屈まぎ紛らしの遊戯程度に解釈して、笑つて仕舞たかも知れない。夫許そればかりではない。もし自分みづかが結婚する気なら、却つて、此狂言を利用して、自ら人巧的に、御目出度おめでたい喜劇きげきを作り上げて、生涯自分を嘲あざけつて満足する事も出来た。然し此姉このあね迄が、今の自分を、父ちちや兄あにと共謀して、漸々ぜんぜん窮地いきぢに誘いざなつて行くかと思ふと、流石さすががに此所作しよさをたゞの滑稽として、観察する訳には行いかなかつた。代助は此先このさき、嫂あによめが此事件じを何どう発展あさせる気だらうと考へて、少々弱つた。家のものゝ中うちで、嫂あによめが一番斯こんな計画に興味をもつてゐたからである。もし嫂あによめが此方面に向つて代助に肉薄すればする程、代助は

漸々家族かぞくのものあたまと疎遠どこにならなければならぬと云ふ恐れが、代助あたまの頭どこの何処ひそかに潜ひそんでゐた。

芝居の仕舞になつたのは十一時近くちかであつた。外そとへ出でて見ると、風は全く歇やんだが、月つきも星ほしも見みえない静しづかな晩を、電燈が少し許り照らしてゐた。時間が遅おそいので茶屋では話はなしをする暇ひまもなかつた。三人の迎むかひは来きてゐたが、代助はつい車くるまを逃あつらへて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂あによめの勸すゝめを斥しりぞけて、茶屋の前なかから電車に乗つた。数寄屋橋すきやで乗のり易かえ様と思つて、黒くろい路みちの中なかに、待あち合あはしてゐると、小供おぶを負おつた神かみさんが、退儀たいぎさうに向むかかふら近寄よつて来きた。電車は向むかふ側がはを二に三さん度通とほつた。代助と軌道レールの間あひだには、土つちか石いしの積つんだものが、高たかい土手はさの様さまに挟はさまつてゐた。代助は始はじめて間違まちがつた所ところに立たつてゐる事ことを悟わつた。

「御神むかふがはさん、電車へ乗るなら、此所こゝぢや不可いけない。向側むかふがはだ」と

それから

教へながら歩き出した。神さんは礼を云つて跟いて来た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付つた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗つた。代助はたつた一人反対の赤坂行へ這入つた。

車の中では、眠くて寐られない様な気がした。揺られながらも今夜の睡眠が苦になつた。彼は大いに疲労して、白昼の凡てに、惰気を催うすにも拘はらず、知られざる何物かの興奮の為に、静かな夜を恣にする事が出来ない事がよくあつた。彼の脳裏には、今日の日中に、交るぐ痕を残した色彩が、時の前後と形の差別を忘れて、一度に散らついてゐた。さうして、それが何の色彩であるか、何の運動であるか慥かに解らなかつた。彼は眼を眠つて、家へ帰つたら、又スキの力を借りやうと

覚悟した。

彼は此取り留めのない花やかな色調の反照として、三千代の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地を見出した様な気がした。けれども其安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全体で、それを認めた丈であつた。従つて彼は三千代の顔や、容子や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏にしたものを、わが情調にしつくり合ふ対象として、発見したに過ぎなかつた。

十一の九

それから
翌日代助は但馬にゐる友人から長い手紙を受取つた。此友人は学校を卒業すると、すぐ国へ歸つたぎり、今日迄ついで東京

へ出た事のない男であつた。当人は無論山の中で暮す気はなかつたのだが、親の命令で已を得ず、故郷に封じ込められて仕舞つたのである。夫でも一年許の間は、もう一返親父を説き付けて、東京へ出る出ると云つて、うるさい程手紙を寄こしたが、此頃は漸く断念したと見えて、大した不平がましい訴もしない様になつた。家は所の旧家で、先祖から持ち伝へた山林を年々伐り出すのが、重なる用事になつてゐるよしであつた。今度の手紙には、彼の日常生活の様子が委しく書いてあつた。それから、一ヶ月前町長に挙げられて、年俸を三百円頂戴する身分になつた事を、面白半分、殊更に真面目な句調で吹聴して来た。卒業してすぐ中学の教師になつても、此三倍は貰へると、自分と他の友人との比較がしてあつた。

此友人は国へ帰つてから、約一年許りして、京都在のある財

産家から嫁よめを貰もらつた。それは無論親おやの云つひ付つけであつた。すると、少時しばらくして、直子供すくが生れた。女房の事は貰もらつた時より外ほかに何も云こつて来ないが、子供の生長おいたちには興味があると見えて、時々代助おかしの可笑おかしくなる様な報知をした。代助はそれを読むたびに、此子供に対して、満足しつゝある友人の生活を想像した。さうして、此子供の為ために、彼の細君に対する感想が、貰もらつた当時に比べて、どの位変化したかを疑つた。

友人は時々鮎ときぐの乾あゆしたのや、柿の乾ほしたのを送つてくれた。代助は其返礼に大概は新らしい西洋の文学書を遣やつた。すると其返事には、それを面白く読んだ証拠になる様な批評が屹度あつた。けれども、それが長くは続つかなかつた。仕舞には受取うけとつたと云ふ礼状さへ寄よこさなかつた。此方こつちからわぎ／＼問ひ合せると、書物は難有く頂戴した。読んでから礼を云はうと思つて、

つい遅おそくなつた。実はまだ読よまない。白状すると、読よむ閑ひまがな
いと云ふより、読よむ気がしないのである。もう一層露骨に云へ
ば、読よんでも解わからなくなつたのである。といふ返事きが来た。代
助それは夫から書物を廢やめて、其代りに新らしい玩具おもちゃを買かつて送おく
る事にした。

代助は友人の手紙を封筒に入れて、自分と同じ傾向を有もつて
ゐた此旧友が、当時とは丸で反対の思想と行動とに支配されて、
生活の音色ねいろを出だしてゐると云ふ事実を、切せつに感じた。さうして、
命いのちの絃いとの震動しんどうから出でる二人の響ひびきを審つまびらかに比較した。

彼かれは理論家として、友人の結婚けつこんを肯うけがつた。山やまの中に住すんで、樹き
や谷たにを相手にしてゐるものは、親おやの取り極きめた通りの妻つまを迎むかへ
て、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼かれ
は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都会人士には、不幸を

それから

持ち来きたすものと断定した。其原因を云へば、都会は人間にんげんの展覽会に過ぎないからであつた。彼は此前提このぜんていから此結論このに達する為ために斯かう云ふ径路たどを辿つた。

彼は肉体と精神に於て美びの類別を認める男であつた。さうして、あらゆる美びの種類に接触する機会を得るのが、都会人士の権能であると考へた。あらゆる美びの種類に接触して、其たび毎ごとに、甲から乙に氣を移し、乙から丙に心を動かさぬものは、感受性に乏しい無鑑賞家かであると断定した。彼は是これを自家の経験かれに徴ちゆうして争ふべからざる真理と信じた。その真理から出立して、都会的生活を送る凡ての男女は、両性間の引アツトラクション力に於て、悉く随縁臨機ずいえんりんきに、測りがたき変化を受けつゝあるとの結論に到着した。それを引き延のばすと、既婚きこんの一对いっついは、双方ともに、流俗なに所謂不義いはゆるインフイデリチの念に冒おかされて、過去から生じた不幸を、始終嘗なめ

なければならぬ事になつた。代助は、感受性の尤も発達した、又接触点の尤も自由な、都会人士の代表者として、芸妓を撰んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替へるか分らないではないか。普通の都会人は、より少なき程度に於て、みんな芸妓ではないか。代助は渝らざる愛を、今の世に口にするものを偽善家の第一位に置いた。

此所迄考へた時、代助の頭の中に、突然三千代の姿が浮んだ。其時代助はこの論理中に、或因数を数へ込むのを忘れたのではなからうかと疑つた。けれども、其因数は何うしても発見する事が出来なかつた。すると、自分が三千代に対する場合も、此論理によつて、たゞ現在のものに過ぎなくなつた。彼の頭は正にこれを承認した。然し彼の心は、慥かに左様だと感ずる勇氣がなかつた。

代助は嫂あによめの肉薄を恐れた。又三千代の引力を恐れた。避暑に

はまだ間あひだがあつた。凡ての娯楽には興味を失つた。読書をして
も、自己の影かげを黒い文字の上うへに認める事が出来できなくなつた。落付おちつ
いて考へれば、考へは蓮はちすの糸いとを引く如く如くに出るが、出たものを纏で
めて見みると、人ひとの恐ろしがるもの許ばかりであつた。仕舞には、斯かやう様
に考へなければならぬ自分が怖こわくなつた。代助は蒼白あをしろく見え
る自分の脳髓を、ミルクセーキの如く廻転させる為ために、しばら
く旅行しやうと決心した。始めは父ちちの別荘に行く積つもりであつた。
然し、是は東京から襲はれる点に於て、牛込に居ると大たいした変
りはないと思つた。代助は旅行案内を買つて来きて、自分の行く

それから

べき先を調べて見た。が、自分の行くべき先は天下中何処にも無い様な気がした。しかし、代助は無理にも何処かへ行かうとした。それには、支度を調へるに若くはないと極めた。代助は電車に乗つて、銀座迄来た。朗かに風の往来を渡る午後であつた。新橋の勧工場を一回して、広い通りをぶらぶらと京橋の方へ下つた。其時代助の眼には、向ふ側の家が、芝居の書割の様ひらに平たく見えた。青い空は、屋根の上あを そらにすぐ塗り付けられてゐた。

代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調べた。其中に、比較的高い香水があつた。資生堂で練齒磨を買はうとしたら、若いものが、欲しくないと云ふのに自製のものを出して、頻に勧めた。代助は顔をしかめて店を出た。紙包を腋の下わかに抱へた儘、銀座の外れ迄遣つて来て、其所から大根河岸を回つて、鍛冶橋

それから

を丸の内へ志した。当もなく西の方へ歩きながら、是も簡便な旅行と云へるかも知れないと考へた揚句、草臥れて車をと思つたが、何処にも見当らなかつたので又電車へ乗つて歸つた。家の門を這入ると、玄関に誠太郎のらしい履が叮嚀に并べてあつた。門野に聞いたたら、へえ左様です、先方から待つて御出ですといふ答であつた。代助はすぐ書齋へ来て見た。誠太郎は、代助の坐る大きな椅子に腰を掛けて、洋卓の前で、アラスカ探検記を読んでゐた。洋卓の上には、蕎麦饅頭と茶盆が一所に乗つてゐた。

「誠太郎、何だい、人のゐない留守に来て、御馳走だね」と云ふと、誠太郎は、笑ひながら、先づアラスカ探検記をポケットトへ押し込んで、席を立つた。

「其所に居るなら、ゐても構はないよ」と云つても、聞かなか

つた。

代助は誠太郎を捕まえて、例の様に調戲ひ出した。誠太郎は此間代助が歌舞伎座でした欠伸の数を知つてゐた。さうして、「叔父さんは何時奥さんを貰ふの」と、又先達てと同じ様な質問を掛けた。

此日誠太郎は、父の使に來たのであつた。其口上は、明日の十一時迄に一寸來て呉れと云ふのであつた。代助はさうく父や兄に呼び付けられるが面倒であつた。誠太郎に向つて、半分怒つた様に、

「何だい、苛いぢやないか。用も云はないで、無暗に人を呼びつけるなんて」と云つた。誠太郎は矢つ張りにやくくしてゐた。代助はそれぎり話を外へそらして仕舞つた。新聞に出てゐる相撲の勝負が、二人の題目の重なるものであつた。

それから

晩食ばんめしを食くつて行いけと云ふのを学校の下調があると云つて辞退して誠太郎は帰つた。帰る前に、

「それぢや、叔父おぢさん、明日あしたは来こないんですか」と聞きいた。代助は已を得ず、

「うむ。何どうだか分わからない。叔父おぢさんは旅行するかも知れないからつて、帰つてさう云つて呉れ」と云つた。

「何時いつ」と誠太郎が聞き返したとき、代助は今日明日のうちと答へた。誠太郎はそれで納得して、玄関迄出で行つたが、沓脱くつぬぎへ下りながら振り返つて、突然

「何処どこへ入らつしやるの」と代助を見上みあげた。代助は、

「何処どこつて、まだ分わかるもんか。ぐる／＼回まはるんだ」と云つたので、誠太郎は又またにやく／＼しながら、格子を出た。

代助は其夜すぐ立たうと思つて、グラッドストーンの中を門野に掃除さして、携帶品を少し詰め込んだ。門野は少なからざる好奇心を以て、代助の革鞆を眺めてゐたが、

「少し手伝ひませうか」と突立つたまゝ聞いた。代助は、

「なに、訳はない」と断わりながら、一旦詰め込んだ香水の壺を取り出して、封被を剥いで、栓を抜いて、鼻に当て、嗅いで見た。門野は少し愛想を尽した様な具合で、自分の部屋へ引き取つた。二三分すると又出て来て、

「先生、車を左様云つときますかな」と注意した。代助はグラッドストーンを前へ置いて、顔を上げた。

「左様、少し待つて呉れ給へ」

庭を見るとき、生垣の要目の頂に、まだ薄明るい日足がうろついてゐた。代助は外を覗きながら、是から三十分のうちに行く先を極めやうと考へた。何でも都合のよきさうな時間に出る汽車に乗つて、其汽車の持つて行く所へ降りて、其所で明日迄暮らして、暮らしてゐるうちに、又新しい運命が、自分を攫ひに来るのを待つ積であつた。旅費は無論充分でなかつた。代助の旅装に適した程の宿泊を続けるとすれば、一週間も保たない位であつた。けれども、さう云ふ点になると、代助は無頓着であつた。愈となれば、家から金を取り寄せる氣でゐた。それから、本来が四辺の風氣を換えるのを目的とする移動だから、贅沢の方面へは重きを置かない決心であつた。興に乗れば、荷持を雇つて、一日歩いて可いと覚悟した。

彼は又旅行案内を開いて、細かい数字を丹念に調べ出したが、

それから

少しも決定の運はこびに近寄ちかよらないうちに、又三千代の方に頭あたまが滑すべつて行いつた。立つ前まへにもう一遍様子を見て、それから東京を出でやうと云ふ気が起おつた。グラツドストーンは今夜中こんやぢゆうに始末を付つけて、明日あすの朝早あさはやく提さげて行いかれる様にして置けば構たがはない事になつた。代助は急いそぎ足で玄関迄出でた。其音おとを聞き付つけて、門野かどのも飛び出だした。代助は不断着ふだんぎの儘、掛釘かけくぎから帽子を取とつてゐた。「又御出掛でかけですか。何か御買物おかひものぢやありませんか。私わたくしで可よければ買かつて来きませう」と門野かどのが驚おどろいた様やうに云いつた。「今夜こんやは已やめだ」と云いひ放はなした儘、代助は外そとへ出でた。外そとはもう暗くらかつた。美うつくしい空そらに星ほしがぼつ／＼影かげを増まして行く様に見えた。心持こころもちの好いい風かぜが袂たもとを吹ふいた。けれども長ながい足あしを大きく動かした代助は、二三町も歩あるかないうちに額際ひたひぎはに汗あせを覚おぼえた。彼は頭あたまから烏打くわうちを脱とつた。黒い髪かみを夜露よつゆに打うたして、時々帽子とぎくをわ

ざと振つて歩いた。

平岡の家の近所へ来ると、暗い人影が蝙蝠の如く静かに其所、此所に動いた。粗末な板塀の隙間から、洋燈の灯が往来へ映つた。三千代は其光の下で新聞を読んでゐた。今頃新聞を読むのかと聞いたら、二返目だと答へた。

「そんなに閑なんですか」と代助は座蒲団を敷居の上に移して、椽側へ半分身体を出しながら、障子へ倚りかゝつた。

平岡は居なかつた。三千代は今湯から帰つた所だと云つて、団扇さへ膝の傍に置いてゐた。平生の頬に、心持暖い色を出して、もう帰るでせうから、緩くりしてゐらつしやいと、茶の間へ茶を入れに立つた。髪は西洋風に結つてゐた。

平岡は三千代の云つた通りには中々帰らなかつた。何時でも斯んなに遅いのかと尋ねたら、笑ひながら、まあ左んな所でせ

それから

うと答へた。代助は其笑わらひの中に一種いっしゆの淋さみしさを認めて、眼めを正たゞして、三千代の顔かほを凝じつと見た。三千代は急に団扇うちほを取とつて袖そでの下したを煽あほいだ。

代助は平岡の経済の事が氣かに掛かつた。正面このじろから、此頃このころは生活費には不自由はあるまいと尋ねて見た。三千代は左様さうですと云つて、又前の様な笑わらひ方かたをした。代助がすぐ返事をしなかつたものだから、

「貴方あなたには、左様さう見えて」と今度は向ふから聞き直なほした。さうして、手に持もつた団扇うちほを放はなり出だして、湯ゆから出でたての奇麗ほそな織ほそい指ゆびを、代助の前に広ひろげて見せた。其指ゆびには代助の贈おくつた指環ゆびわも、他ほかの指環ゆびわも穿はめてゐなかつた。自分の記念いっを何時いつでも胸むねに描ゑがいてゐた代助には、三千代みちよの意味わかがよく分わつた。三千代は手てを引き込こめると同時に、ほつと赤い顔かほをした。

「仕方がないんだから、堪忍して頂戴」と云つた。代助は憐れな心持がした。

十二の三

代助は其夜九時頃平岡の家を辞した。辞する前、自分の紙入ななかの中に有るものを出して、三千代に渡した。其時は、腹はらの中で多少の工夫を費やした。彼は先づ何気なく懐中物を胸むねの所で開あけて、中なかにある紙幣を、勘定もせずなげに攫つかんで、是これを上げあげるから御使おつかひなさいと無雑作に三千代の前まへへ出だした。三千代は、下女を憚はッかる様な低い声で、

「そんな事を」と、却かへつて両手をびたりと身体からだへ付つけて仕舞つた。代助は然し自分の手を引き込こめなかつた。

「指環を受取るなら、これを受取つても、同じ事でせう。紙の指環だと思つて御貰ひなさい」

代助は笑ひながら、斯う云つた。三千代はでも、余りだからとまだ蹶踏した。代助は、平岡に知れると叱られるのかと聞いた。三千代は叱られるか、賞められるか、明らかに分らなかつたので、矢張り愚図々々してゐた。代助は、叱られるなら、平岡に黙つてゐたら可からうと注意した。三千代はまだ手を出さなかつた。代助は無論出したものを引き込める訳に行かなかつた。已を得ず、少し及び腰になつて、掌を三千代の胸の傍迄持つて行つた。同時に自分の顔も一尺許の距離に近寄せて、「大丈夫だから、御取んなさい」と確りした低い調子で云つた。三千代は顎を襟の中へ埋める様に後へ引いて、無言の儘右の手を前へ出した。紙幣は其上に落ちた。其時三千代は長い睫毛を

二三度打ち合はした。さうして、掌てのひらに落ちたものを帯おびの間に挟はさんだ。

「又く来る。平岡君ひらおかによろしく」と云つて、代助は表おもてへ出た。町まちを横断こうたんして小路こうぢへ下くだると、あたりは暗くくなつた。代助は美うくしい夢ゆめを見た様に、暗くらい夜よを切きつて歩あるいた。彼は三十分と立たないうちに、吾家わがいえの門前もんぜんに來た。けれども門もんを潜くづる氣がしなかつた。彼かれは高い星ほしを戴いたゞいて、静しづかな屋敷町やしきまちをぐる／＼徘徊わいした。自分おれでは、夜半よる迄歩あるきつゞけても疲つかれる事はなからうと思つた。兎角とかくするうち、又自分の家いえの前まえへ出た。中なかは静しづかであつた。門野かどのと婆ばあさんは茶の間まで世間話せけんばなしをしてゐたらしい。

「大變遅おそうがしたな。明日あしたは何時なんじの汽車で御立たちですか」と玄関あがへ上あがるや否いなや問とひを掛かけた。代助は、微笑わいごうしながら、「明日あしたも御已やめだ」と答こたへて、自分の室へやへ這入はいつた。そこには

床がもう敷いてあつた。代助は先刻栓を抜いた香水を取つて、括枕の上に一滴垂らした。夫では何だか物足りなかつた。壘も持った儘、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴づゝ振りかけた。斯様に打ち興じた後、白地の浴衣に着換えて、新しい小搔卷の下に安かな手足を横たへた。さうして、薔薇の香のする眠に就いた。

眼が覚めた時は、高い日が椽に黄金色の震動を射込んでゐた。枕元には新聞が二枚揃えてあつた。代助は、門野が何時、雨戸を引いて、何時新聞を持つて来たか、丸で知らなかつた。代助は長い伸を一つして起き上つた。風呂場で身体を拭いてゐると、門野が少し狼狽へた容子で遣つて来て、
「青山から御兄いさんが御見えになりました」と云つた。代助は今直行く旨を答へて、奇麗に身体を拭き取つた。座敷はまだ

掃除が出来てゐるか、ゐないかであつたが、自分で飛び出す必要もないと思つたから、急ぎもせず、いつもの通り、髪を分けて剃そりを中あてて、悠悠と茶の間へ歸かへつた。そこでは流石さすがにゆつくりと膳ぜんにつく気も出でなかつた。立ちながら紅茶を一杯啜すつて、タエルで一寸口髭ちよつとくちひげを摩こすつて、それを、其所そこへ放り出すと、すぐ客間へ出でて、

「やあ兄にいさん」と挨拶をした。兄あには例れいの如ごとく、色いろの濃こい葉卷はまきの、火ひの消えたのを、指ゆびの股またに挟はさんで、平然として代助の新聞を讀よんでゐた。代助の顔かほを見るや否や、

「此室このへやは大變好いい香におひがする様だが、御前おまへの頭あたまかい」と聞いた。
「僕ぼくの頭あたまの見える前まへからでせう」と答こたへて、昨夜ゆふべの香水の事を話はなした。兄あには、落おちち付いて、

「は、あ、大分洒落しやれた事をやるな」と云つた。

十二の四

兄あには滅多めったに代助だいすけの所ところへ来た事ことのない男おとこであつた。たまたまに来くれば必ず来こなくつてならない用事ようじを持つてゐた。さうして、用ようを濟すますとさつきと歸かへつて行いつた。今日けふも何事なにごとか起おこつたに違ちがひないと代助だいすけは考かんへた。さうして、それは昨日きのふ誠太郎まことたろうを好加減いゝかげんに胡魔化ごまくわして返かへした反響はんきやうだらうと想像さうぞうした。五六分ぶん雑談ざつだんをしてゐるうちに、兄あにはとう／＼斯かう云いひ出した。

「昨夕ゆふべ誠太郎まことたろうが歸かへつて来きて、叔父おぢさんは明日あしたから旅行りょこうするつて云いふ話はなしだから、出でて来きた」

「え、実は今朝けさ六時むごう頃ごろから出でやうと思おもつてね」と代助だいすけは嘘うその様な事ごとを、至極しごく冷静れいじやうに答こたへた。兄あにも真面目まじめな顔かほをして、

「六時に立てる位な早起はやおきの男なら、今時分じぶんわざわざあをやま青山から遣やつて来きやしない」と云つた。改めて用事を聞いて見ると、矢張り予想の通り肉薄にくはくの遂行に過ぎなかつた。即ち今日けふ高木と佐川の娘を呼んで午餐を振舞ふるまふ筈だから、代助にも列席しろと云ふ父ちちの命令であつた。兄あにの語る所によると、昨夕ゆふべ誠太郎の返事を聞いて、父ちちは大いに機嫌を悪くした。梅子は氣を揉もんで、代助の立たたない前に逢あつて、旅行を延のばさせると云ひ出した。兄あにはそれを留とめたさうである。

「なに彼奴あいつが今夜中こんやちゆうに立たつものか、今頃いまごろは革鞆かぼんの前すはへ坐すつて考へ込んでゐる位ぐらゐのものだ。明日あしたになつて見ろ、放ほうつて置いても遣やつて来るからつて、己おれが姉ねえさんを安心させたのだよ」と誠吾まことごは落付おちつき払はつてゐた。代助は少し忌々いまくしくなつたので、「ぢや、放ほうつて置いて御覽ごらんなされば好いいのに」と云つた。

「所ところが女をんなと云ふものは、氣きの短みぢかいもので、御父おとうさんに悪いからつて、今朝けさ起きるや否いなや、己おれをせびるんだからね」と誠吾まことごは可笑おかしい様な顔かほもしなかつた。寧むしろ迷惑まじさうに代助たいてすけを眺ながめてゐた。代助は行くとも、行かないとも決答けつたふを与よへなかつた。けれども兄あにに対しては、誠太郎まことたろう同様に、要領ようりやうを握にぎらせないで返かへして仕舞しまふ勇氣ゆうきも出でなかつた。其上そのうへ午餐ちゆうはんを断ことわつて、旅行りょこうするにしても、もう自分の懐中くわいちゆうを当あてにする訳わけには行いかなかつた。矢張やじやうり、兄あにとかあによめ嫂せうとか、もしくは父ちちとか、いづれ反対派たいていぱいの誰だれかを痛いためなければ、身動みうごぎが取とれない位地ゐにゐた。そこで、即つかず離はなれずに、高木たかぎと佐川さがわの娘むすめの評判ひやうぱんをした。高木たかぎには十年程前まへに一遍逢あつた限ぎりであつたが、妙めづなもの、何処どこかに見覚みがあつて、此間このあひだ歌舞伎座かぶきざで眼めに着ついた時ときは、はてなと思おもつた。これに反へんして、佐川さがわの娘むすめの方かたは、つい先達せんだつて、写真しやしんを手てにした許ばかりであるのに、実物じつぶつに接せつし

ても、丸で聯想が浮ばなかつた。写真は奇体なもので、先づ人間を知つてゐて、その方から、写真の誰彼を極めるのは容易であるが、その逆の、写真から人間を定める方は中々六づかしい。是を哲学にすると、死から生を出すのは不可能だが、生から死に移るのは自然の順序であると云ふ真理に帰着する。

「私は左様考へた」と代助が云つた。兄は成程と答へたが別段感心した様子もなかつた。葉巻の短かくなつて、口髭に火が付きさうなのを無暗に啣へ易えて、

「それで、必ずしも今日旅行する必要もないんだらう」と聞いた。

代助はないと答へざるを得なかつた。

「ぢや、今日餐を食ひに来て、好いんだらう」

代助は又好いと答へない訳に行かなかつた。

「ぢや、己おれはこれから、一寸ちよつと他所わきへ回まはるから、間違まちがひのない様さまに來きてくれ」と相変あひからず多忙たぼうに見えた。代助はもう度胸どきょうを据たゑたから、何どうでも構かまはないといふ氣で、先方せんぽうに都合ごうの好いい返事へんじを与よへた。すると兄あにが突然、

「一体何どうなんだ。あの女をを貰もらふ氣はないのか。好いいぢやないか貰もらつたつて。さう撰えり好ごみをする程ほど女房に重おもきを置くと、何なんだか元禄げんろく時代の色男のの様ようで可笑おかしいな。凡たゞてあの時代の人間にんげんは男女にんねいに限かぎらず非常ひじょうに窮屈きゆうくつな恋こひをした様ようだが、左様さやうでもなかつたのかい。——まあ、どうでも好いいから、成なる可べく年寄としよりを怒おこらせない様に遣やつてくれ」と云いつて歸かへつた。

代助は座敷ざしきへ戻もどつて、しばらく、兄あにの警句けいごを咀嚼そくかくしてゐた。自分じぶんも結婚けっこんに対しては、實際じつじ兄あにと同意見どういけんであるとしか考かんへられない。だから、結婚けっこんを勧すすめる方ほうでも、怒おこらないで放はなつて置おくべ

きものだと、兄とは反対に、自分に都合の好い結論を得た。

十二の五

兄あにの云ふ所ところによると、佐川の娘は、今度久ひさし振ぶりに叔父おぢに連つれられて、見物かたぐ旁上京したので、叔父の商用が済み次第又連つれられて国くにへ帰るのださうである。父ちちが其機会を利用して、相互の關係に、永遠の利害を結び付けやうと企だてたのか、又は先達せんだつての旅行先さきで、此機会をも自発的に拵こしらえて帰つて来たのか、どつちにしても代助はあまり研究の余地を認めなかつた。自分は大は是等の人ひとと同じ食卓しょくたくで、旨うまさうに午餐ごさんを味あじはつて見せれば、社交上の義務は其所そこに終るものと考へた。もしそれより以上に、何等の發展が必要になつた場合には、其時に至つて、始めて処

置を付けるより外に道はないと思案した。

代助は婆さんと呼んで着物を出さした。面倒だと思つたが、敬意を表するため、紋付の夏羽織を着た。袴は一重のがなかつたから、家へ行つて、父か兄かのを穿く事に極めた。代助は神経質な割に、子供の時から習慣で、人中へ出るのを余り苦にしなかつた。宴会とか、招待とか、送別とかいふ機会があると、大抵は都合して出席した。だから、ある方面に知名な人の顔は大分覚えてゐた。其中には伯爵とか子爵とかいふ貴公子も交つてゐた。彼は斯んな人の仲間入をして、其仲間なりの交際に、損も得も感じなかつた。言語動作は何処へ出ても同じであつた。外部から見ると、其所が大変能く兄の誠吾に似てゐた。だから、よく知らない人は、此兄弟の性質を、全く同一型に属するものと信じてゐた。

代助が青山に着いた時は、十一時五分前であつたが、御客はまだ来てゐなかつた。兄もまだ帰らなかつた。嫂丈がちやんと支度をして、座敷に坐つてゐた。代助の顔を見て、

「あなたも、随分乱暴ね。人を出し抜いて旅行するなんて」と、いきなり遣り込めた。梅子の場合によると、決して論理を有ち得ない女であつた。此場合にも、自分が代助を出し抜いた事には丸で気が付いてゐない挨拶の仕方であつた。それが代助には愛嬌に見えた。で、直そこへ坐り込んで梅子の服装の品評を始めた。父は奥にゐると聞いたが、わざと行かなかつた。強ひられたとき、

「今に御客さんが来たら、僕が奥へ知らせに行く。其時挨拶をすれば好からう」と云つて、矢つ張り平常の様な無駄口を叩いてゐた。けれども佐川の娘に関しては、一言も口を切らなかつ

た。梅子は何とかして、話を其所へ持つて行かうとした。代助には、それが明らかに見えた。だから、猶空とぼけて讐を取つた。

其うち待ち設けた御客が来たので、代助は約束通りすぐ父の所へ知らせに行つた。父は、案のじよう、

「左様か」とすぐ立ち上がった丈であつた。代助に小言を云ふ暇も何も無かつた。代助は座敷へ引き返して来て、袴を穿いて、それから応接間へ出た。客と主人とはそこで悉く顔を合はせた。父と高木とが第一に話を始めた。梅子は重に佐川の令嬢の相手になつた。そこへ兄が今朝の通りの服装で、のつそりと這入つて来た。

「いや、何うも遅くなりました」と客の方に挨拶をしたが、席に就いたとき、代助を振り返つて、

「大分早かつたね」と小さな声を掛けた。

食堂には応接室の次の間を使つた。代助は戸の開いた間から、白い卓布の角の際立つた色を認めて、午餐は洋食だと心づいた。梅子は一寸席を立つて、次の入口を覗きに行つた。それは父に、食卓の準備が出来上つた旨を知らせる為であつた。

「では何うぞ」と父は立ち上がった。高木も会釈して立ち上がった。佐川の令嬢も叔父に継いで立ち上がった。代助は其時、女の腰から下の、比較的細く長い事を発見した。食卓では、父と高木が、真中に向き合つた。高木の右に梅子が坐つて、父の左に令嬢が席を占めた。女同志が向き合つた如く、誠吾と代助も向き合つた。代助は五味台を中に、少し斜に反れた位地から令嬢の顔を眺める事になつた。代助は其頬の肉と色が、著るしく後の窓から射す光線の影響を受けて、鼻の境に暗過ぎる

影かげを作つた様に思つた。其代り耳に接した方は、明あきらかに薄紅うすくれなゐであつた。殊に小さい耳が、日ひの光を透とほしてゐるかの如くデリケートに見えた。皮膚ひふとは反対に、令嬢は黒い鳶色の大きな眼を有したゐた。此二つの対照から華はなやかな特長を生ずる令嬢の顔の形は、寧ろ丸い方であつた。

十二の六

食卓しょくたくは、人数にんずが人数にんずだけに、左程大きくはなかつた。部屋の広ひろさに比例して、寧ろ小ちさ過る位であつたが、純白じゆんぱくな卓布を、取り集めた花で綴つぎつて、其中そのなかに肉刀ナイフと肉匙フォークの色が冴さえて輝かゞやいた。卓上の談話は重おもに平凡な世間話ぼなしであつた。始はじめのうちには、それさへ余あまり興味が乗のらない様に見えた。父ちちは斯かう云ふ場合には、

それから

よく自分の好きすな書画骨董はなしの話を持ち出すのを常つねとしてゐた。さうして気が向けむば、いくらでも、蔵くらから出だして来て、客きやくの前まへに陳ならべたものである。父ちちの御蔭おかげで、代助は多少斯道このみちに好悪こうおを有もてる様になつてゐた。兄あにも同様の原因まへから、画家の名前位は心得てゐた。たゞし、此方このほうは掛物かけものの前まへに立つて、はあ仇英きうえいだね、はあ応拳おほしろだねと云ふ丈であつた。面白おもしろい顔かほもしないから、面白おもしろい様にも見えなかつた。それから真偽しんぎの鑑定ための為に、虫眼鏡むしめがねなどを振り舞まはさない所は、誠吾ちやくも代助も同じ事であつた。父ちちの様に、こんな波なみは昔むかしの人は描かかないものだから、法ひとにかなつてゐない杯ひといふ批評は、双方共に、未だ嘗て如何なる画まゐに対しても加へた事はなかつた。

父ちちは乾かはいた会話くわいわに色彩しきさいを添そへるため、やがて好きすな方面まゐの問題もに触ふれて見た。所ところが一二言いちにげんで、高木はさう云ふ事ことに丸まるで無頓

着な男であるといふ事が分つた。父は老巧の人だから、すぐ退却した。けれども双方に安全な領分に帰ると、双方共に談話の意味を感じなかつた。父は已を得ず、高木に何んな娯樂があるかを確かめた。高木は特別に娯樂を持たない由を答へた。父は万事休すといふ体裁で、高木を誠吾と代助に托して、しばらく談話の圏外に出た。誠吾は、何の苦もなく、神戸の宿屋やら、楠公神社やら、手当り次第に話題を開拓して行つた。さうして、そのうち其中に自然令嬢の演ずべき役割を拵えた。令嬢はたゞ簡単に、必要な言葉丈を点じては逃げた。代助と高木とは、始め同志社を問題にした。それから亜米利加の大学の状況に移つた。最後にエマーソンやホーソーンの名が出た。代助は、高木に斯う云ふ種類の知識があるといふ事を確かめたけれども、たゞ確めた丈で、それより以上に深入もしなかつた。従つて文学談は単に二

三の人名と書名に終つて、少しも発展しなかつた。

梅子は固より初はじめから断たえず口くちを動うごかしてゐた。其努力おもの重おもなるものは、無論自分の前にゐる令嬢の遠慮と沈黙を打ち崩すにあつた。令嬢は礼義上から云つても、梅子の間断かんだんなき質問に応じない訳に行かなかつた。けれども積極的に自分から梅子の心こころを動うごかさうと力つとめた形迹は殆んどなかつた。たゞ物ものを云ふときに、少し首くびを横よこに曲まげる癖くせがあつた。それすらも代助には媚こびを売うるとは解釈出来できなかつた。

令嬢は京都で教育を受けた。音楽は、始はじめめは琴ことを習まなつたが、後にはピアノに易かえた。イオリンも少し稽古けいこしたが、此方このほうは手ての使つかい方が六む※⁴かしいので、まあ遣やらないと同じである。芝居は滅多に行つた事がなかつた。

それから

「先達せんだつての歌舞伎座は如何いかゞでした」と梅子が聞いた時、令嬢は何とも答へなかつた。代助には夫それが劇を解かいしないと云ふより、劇を軽蔑してゐる様にとれた。それなのに、梅子はつゞけて、同じ問題に就ついて、甲の役者は何どうだの、乙の役者は何なんだのと評し出だした。代助は又あに嫂よめが論理を踏ふみ外はづしたと思つた。仕方がないから、横合よこあひから、

「芝居は御嫌ひでも、小説は御読みになるでせう」と聞きいて芝居の話はなしを已やめさした。令嬢は其時始めて、一寸ちよつと代助の方かたを見た。けれども答は案外はずかに判然はつきりしてゐた。

「いえ小説も」

令嬢の答を待ち受けてゐた、主客はみんな声を出だして笑つた。高木は令嬢の為ために説明の勞を取つた。その云ふ所によると、令嬢の教育を受けたミス何なんとか云ふ婦人の影響で、令嬢はある点

では殆んど清教徒ピユリタンの様に仕込まれてゐるのださうであつた。だから余程時代後れおくだと、高木は説明のあとから批評さへ付け加へた。其時は無論誰だれも笑はなかつた。耶蘇教に対して、あまり好意を有もつてゐない父は、

「それは結構だ」と賞ほめた。梅子は、さう云ふ教育の価値を全く解かいする事が出来できなかつた。にも拘くはらず、

「本当にね」と趣味に適かなはない不得要領の言葉を使つかつた。誠吾は梅子の言葉が、あまり重い印象を先方に与へない様に、すぐ問題を易やすえた。

「ぢや英語は御上手でせう」

令嬢はいゝえと云つて、心持顔を赤くした。

食事が済んでから、主客は又応接間に戻つて、話を始めたが、蠟燭を継ぎ足した様に、新しい方へは急に火が移りさうにも見えなかつた。梅子は立つて、ピアノの蓋を開けて、

「何か一つ如何ですか」と云ひながら令嬢を顧みた。令嬢は固より席を動かかなかつた。

「ぢや、代さん、皮切に何か御遣り」と今度は代助に云つた。代助は人に聞かせる程の上手でないのを自覚してゐた。けれども、そんな弁解をすると、問答が理窟臭く、しつこくなる許だから、「まあ、蓋を開けて御置なさい。今に遣るから」と答へたなり、何かなしに、無関係の事を話しつゞけてゐた。

一時間程して客は帰つた。四人は肩を揃へて玄関迄出た。奥へ這入る時、

「代助はまだ帰るんぢやなからうな」と父が云つた。代助はみんなから一足後れて、鴨居の上に両手が届く様な伸を一つした。それから、人のみない応接間と食堂を少しうろくして座敷へ来て見ると、兄と嫂が向き合つて何か話をしてゐた。

「おい、すぐ帰つちや不可ない。御父さんが何か用があるさうだ。奥へ御出」と兄はわざとらしい真面目な調子で云つた。梅子は薄笑ひをしてゐる。代助は黙つて頭を搔いた。

代助は一人で父の室へ行く勇氣がなかつた。何とか蚊とか云つて、兄夫婦を引張つて行かうとした。それが旨く成功しないので、とうく其所へ坐り込んで仕舞つた。所へ小間使が来て、

「あの、若旦那様に一寸、奥迄入つしやる様に」と催促した。

「うん、今行く」と返事をして、それから、兄夫婦に斯ういふ理窟を述べた。——自分一人で父に逢ふと、父があゝ云ふ氣象

の所へ持つて来て、自分がこんな凶法螺だから、殊によると大いに老人を怒らして仕舞ふかも知れない。さうすると、兄夫婦だつて、後から面倒くさい調停をしたり何かしなければならぬ。其方が却つて迷惑になる訳だから、骨惜をせず今一寸一所に行つて呉れたら宜からう。

兄は議論が嫌な男なので、何んだ下らないと云はぬ許の顔をしたが、

「ぢや、さあ行かう」と立ち上がった。梅子も笑ひながらすぐに立つた。三人して廊下を渡つて父の室に行つて、何事も起らなかったかの如く着坐した。

そこでは、梅子が如才なく、代助の過去に父の小言が飛ばない様な手加減をした。さうして談話の潮流を、成るべく今帰つた来客の品評の方へ持つて行つた。梅子は佐川の令嬢を大変大人

しきうな可い子だと賞めた。是には父も兄も代助も同意を表した。けれども、兄は、もし亜米利加のミスの教育を受けたと云ふのが本當なら、もう少しは西洋流にはきくしきうなものだと云ふ疑を立てた。代助は其疑にも賛成した。父と嫂は黙つてゐた。そこで代助は、あの大人しきは、羞恥む性質の大人さだから、ミスの教育とは独立に、日本の男女の社交的關係から来たものだらうと説明した。父はそれも左うだと云つた。梅子は令嬢の教育地が京都だから、あゝなんぢやないかと推察した。兄は東京だつて、御前見た様な許はゐないと云つた。此時父は厳正な顔をして灰吹を叩いた。次に、容色だつて十人並より可いぢやありませんかと梅子が云つた。是には父も兄も異議はなかつた。代助も賛成の旨を告白した。四人は夫から高木の品評に移つた。温健の好人物と云ふ事で、其方はすぐ方付いて仕

舞つた。不幸にして誰も令嬢の父母を知らなかつた。けれども、ものがた物堅い地味な人だと云ふ丈は、父が三人の前で保証した。父はそれを同県下の多額納税議員の某から確めたのださうである。最後に、佐川家の財産に就ても話が出た。其時父は、あゝ云ふのは、普通の実業家より基礎が確りしてゐて安全だと云つた。令嬢の資格が略定まつた時、父は代助に向つて、

「大した異存もないだらう」と尋ねた。其語調と云ひ、意味と云ひ、何うするかね位の程度ではなかつた。代助は、

「左様ですな」と矢つ張り煮え切らない答をした。父はじつと代助を見てゐたが、段々皺の多い額を曇らした。兄は仕方なしに、

「まあ、もう少し善く考へて見るが可い」と云つて、代助の為に余裕を付けて呉れた。

四日程よつかほどしてから、代助は又父ちちの命令で、高木の出立しつたつを新橋迄見送みおくつた。其日そのひは眠い所ねむを無理に早く起おこされて、寐足ねたらない頭あたまを風かぜに吹ふかした所せゐ為か、停車場ちやうばに着つく頃ころ、髪かみの毛なかの中に風邪かぜを引ひいた様な氣きがした。待合所まちあひじよに這入はいるや否いなや、梅子うめこから顔色かほいろが可よくないと云ふ注意ちゆういを受けた。代助は何なんにも答へずに、帽子ぼうしを脱ぬいで、時々ときどき濡ぬれた頭あたまを抑おさえた。仕舞しまには朝奇麗あさきれいに分わけた髪かみがもぢやもぢくくになつた。

プラツトフォームで高木は突然代助に向つて、

「何どうです此汽車で、神戸迄遊あそびに行いきませんか」と勸すすめた。代助はたゞ難有なんうと答へた丈であつた。愈いよく汽車の出でる間際まぎはに、梅

子はわざと、窓際まどぎはに近寄ちかよつて、とくに令嬢の名を呼んで、

「近い内うちに又是非入うちからつしやい」と云つた。令嬢は窓まどのなかで、

叮嚀ていれいに会釈したが、窓の外そとへは別段の言葉も聞えきこなかつた。汽

車を見送つて、又改札場を出た四人よつたりは、それぎり離れぐくに

なつた。梅子は代助を誘つて青山へ連れて行かうとしたが、代

助は頭あたまを抑えて応じなかつた。

車くるまに乗つてすぐ牛込へ帰かへつて、それなり書齋へ這入つて、仰向あほむけ

に倒れた。門野かどのは一寸其様子を覗のぞきに來たが、代助の平生を知

つてゐるので、言葉も掛けず、椅子に引ひつ掛かけてある羽織丈を

抱かへて出でて行つた。

代助は寐ねながら、自分の近き未来を何どうなるものだらうと考

へた。斯かうして打遣うちやつて置けば、是非共嫁よめを貰もらはなければなら

なくなる。嫁よめはもう今迄いままでに大分断だいぶんことわつてゐる。此上断ことわれば、愛想

を尽かされるか、本当に怒り出されるか、何方かになるらしい。もし愛想を尽かされて、結婚勧誘をこれ限り断念して貰へれば、それに越した事はないが、怒られるのは甚だ迷惑である。と云つて、進まぬものを貰ひませうと云ふのは今代人として馬鹿氣てゐる。代助は此ヂレンマの間に徘徊した。

彼は父と違つて、当初からある計画を拵らえて、自然を其計画通りに強ひる古風な人ではなかつた。彼は自然を以て人間の拵えた凡ての計画よりも偉大なものと信じてゐたからである。だから父が、自分の自然に逆らつて、父の計画通りを強ひるならば、それは、去られた妻が、離縁状を楯に夫婦の關係を証拠立てやうとすると一般であると考へた。けれども、そんな理窟を、父に向つて述べる氣は、丸でなかつた。父を理攻にする事は困難中の困難であつた。其困難を冒した所で、代助に取つて

は何等の利益もなかつた。其結果は父の不興を招く丈で、理由を云はずに結婚を拒絶するのと撰む所はなかつた。

彼は父と兄と嫂の三人の中で、父の人格に尤も疑を置いた。

今度の結婚にしても、結婚其物が必ずしも父の唯一の目的ではあるまいと迄推察した。けれども父の本意が何処にあるかは、固より明らかに知る機会を与へられてゐなかつた。彼は子として、父の心意を斯様に揣摩する事を、不徳義とは考へなかつた。従つて自分丈が、多くの親子のうちで、尤も不幸なものであると云ふ様な考は少しも起さなかつた。たゞ是がため、今日迄の程度より以上に、父と自分の間が隔つて来さうなのを不快に感じた。

彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪え得

られない程度のもものではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶とぜつの方が恐ろしかつた。

もし馬鈴薯ポテトが金剛石ダイヤモンドより大切になつたら、人間にんげんはもう駄目である、代助は平生から考へてゐた。向後父ちちの怒いかりに触れて、万一金錢きんせん上の関係が絶えるとすれば、彼は厭いやでも金剛石ダイヤモンドを放り出して、馬鈴薯ポテトに嚙かちり付かなければならない。さうして其償つぐなひには

自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君であつた。

彼は寐ながら、何時いつ迄も考へた。けれども、彼の頭あたまは何時いつ迄も何処どこへも到着ちやくする事が出来なかつた。彼は自分の寿命を極きめる権利を持たぬ如く、自分の未来をも極め得なかつた。同時に、自分の寿命に、大抵の見当を付つけ得る如く、自分の未来にも多少の影かげを認めた。さうして、徒らに其影を捕捉しやうと企てた。

其時代助の脳の活動は、夕闇を驚ろかす蝙蝠かはほりの様な幻像をちらり／＼と産み出すに過ぎなかつた。其羽搏はばたきの光ひかりを追ひ掛かけて寐ねてゐるうちに、頭あたまが床ゆかから浮うき上あがつて、ふわ／＼する様に思はれて来たき。さうして、何時いつの間まにか軽かるい眠ねむりに陥おちいつた。

すると突然誰だれか耳みみの傍はたで半鐘はんかねを打うつた。代助は火事と云ふ意識いしきさへまだ起おこらない先さきに眼めを醒さました。けれども跳はね起おきもせずずに寐ねてゐた。彼の夢ゆめに斯こんな音おとの出でるのは殆たいていんど普通ふつであつた。ある時ときはそれが正氣せいきに返かへつた後あと迄までも響ひびいてゐた。五六日前まへは、彼の家かれの大いへいに揺ゆれる自覚じかくと共に眠ねむりを破やぶつた。其時とき彼は明あきらかに、彼かれの下したに動うごく昼たひの様さまを、肩かたと腰こしと脊せの一部いっぶに感かんじた。彼は又夢ゆめに得えた心臓しんざうの鼓動こどうを、覚さめた後あと迄まで持もち伝つたへる事が屢しばしばあ

つた。そんな場合には聖徒セイントの如く、胸むねに手を当て、眼めを開け
た儘まま、じつと天井を見詰めてゐた。

代助は此時も半鐘の音おとが、じいんと耳みみの底そこで鳴り尽つくして仕舞
ふ迄よこ横よこになつて待つてゐた。それから起きた。茶ちやの間まへ来て見
ると、自分の膳ぜんの上うへに簀すだれ垂たれが掛かけて、火鉢ひばちの傍そばに据すゑてあつた。
柱時計はもう十二時回まはつてゐた。婆ばあさんは、飯めしを済すました後あとと
見みえて、下女部屋かどので御櫃はちの上うへに肱ひぢを突ついて居眠あねむりをしてゐた。
門野かどのは何処どこへ行いつたか影かげさへ見えなかつた。

代助は風呂場へ行つて、頭あたまを濡ぬらしたあと、独ひとり茶ちやの間まの膳ぜん
に就ついた。そこで、淋さみしい食事を済すまして、再ふたゝび書斎しよざいに戻かへつたが、
久くし振ぶりに今日けふは少し書見しよけんをしやうと云いふ心組こころぐみであつた。

かねて読よみ掛かけてある洋書しよりを、葉はの挟はさんである所あで開あけて見
ると、前後ぜんごの關係けんけいを丸まるで忘れてゐた。代助の記憶きおくに取とつて斯かう

云ふ現象は寧ろ珍めづらしかつた。彼は学校生活の時代から一種の読書家であつた。卒業の後も、衣食の煩わづらひなしに、講読の利益を適意に収め得る身分みぶんを誇ほこりにしてゐた。一頁ページも眼めを通とほさないで、日ひを送ることがあると、習慣上何なにとなく荒廢の感を催ふした。だから大抵な事故があつても、成るべく都合して、活字したしに親んだ。ある時は読書そのものが、唯一なる自己の本領の様な気がした。

代助は今茫然として、烟草たばこを燻くゆらしながら、読よみ掛けた頁ページを二三枚あとへ繰くつて見た。そこに何どんな議論があつて、それが何どう続つづくのか、頭あたまを拵こしらえる為ために一ちよつと寸骨を折つた。其努力は解はしけから棧橋へ移る程らくではなかつた。食くひ違ちがつた断面の甲まごつに迷付まごついてゐるものが、急に乙に移るべく余儀なくされた様であつた。代助はそれでも辛抱して、約二時間程眼めを頁ページの上うへに曝さらしてゐた。

が仕舞にとぅ／＼堪え切れなくなつた。彼の読んでゐるものは、活字の集合あつまりとして、ある意味を以て、彼の頭かれに映あたまずるには違ちがひないが、彼の肉かれや血ちに廻まはる気色は一向見えなかつた。彼は氷囊かれを隔へて、氷こほりに食くひ付ついた時の様に物足らなく思つた。

彼は書物を伏ふせた。さうして、こんな時に書物を読むのは無理だと考へた。同時にもう安息する事も出来なくなつたと考へた。彼の苦痛かれは何時いつものアンニユイではなかつた。何も為なるのものが慵もいと云ふのとは違ちがつて、何かなに為しなくてはゐられない頭あたまの状態であつた。

彼は立ち上あがつて、茶ちやの間まへ来きて、畳たたみである羽織うゑを又引掛ひっかけた。さうして玄関げんかんに脱ぬぎ棄すてた下駄かぶつたかを穿はいて馳かけ出だす様に門かどを出でた。時は四時頃であつた。神楽坂かぐらざかを下おりて、当あてもなく、眼めに付ついた第一の電車でんしゃに乗のつた。車掌くるまざしに行先ゆくさきを問はれたとき、口くちか

ら出^で任^ませの返^{かえ}事^{こと}をした。紙^か入^みを開^あけたら、三^{さん}千^{せん}代^{だい}に遣^やつた旅^{りょ}行^{ぎょう}費^ひの余^{あま}りが、三^{みつ}折^{せり}の深^{ふか}底^{ぞこ}の方^{かた}にまだ這^は入^いつてゐた。代^{だい}助^{すけ}は乗^{じやう}車^{しや}券^{けん}を買^かつた後^{あと}で、札^{さつ}の数^{かず}を調^{しら}べて見^みた。

彼^{かれ}は其^{その}晩^{ばん}を赤^{あか}坂^{さか}のあ^ある待^{まち}合^{あひ}で暮^くらした。其^{その}所^{ところ}で面^ま白^{はく}い話^{はなし}を聞^きいた。あ^ある若^{わか}くて美^{うつく}し^しい女^{むすめ}が、去^さる男^{おとこ}と関^{かん}係^{けい}して、其^{その}種^{たね}を宿^{やど}した所^{ところ}が、愈^い子^こを生^うむ段^{たん}になつて、涙^{なみだ}を零^{こぼ}して悲^{かな}しがつた。後^{あと}から其^{その}訳^{わけ}を聞^きいたら、こ^こんな年^{とし}で子^こ供^ごを生^うませられるのは情^{なさけ}な^ないからだと答^{こた}へた。此^{この}女^{むすめ}は愛^{あい}を専^{もつ}らにする時^{とき}機^げが余^{あま}り短^{みじ}か過^すぎて、親^{おや}子^この関^{かん}係^{けい}が容^{ゆる}赦^{しやう}もな^なく、若^{わか}い頭^{あたま}の上^{うへ}を襲^かつて来^きたのに、一^{いっ}種^{しゆ}の無^む定^{てい}を感じ^{かん}じたのであつた。それ^{それ}は無^む論^{ろん}堅^{かた}気^ぎの女^{むすめ}ではなかつた。代^{だい}助^{すけ}は肉^{にく}の美^びと、霊^{れい}の愛^{あい}にのみ己^{おの}れを捧^たげて、其^{その}他^{ほか}を顧^かみぬ女^{むすめ}の心^{こころ}理^り状^{じやう}体^{たい}として、此^{この}話^{はなし}を甚^しだ興^{きやう}味^みあ^あるものと思^{おも}つた。

翌日よくじつになつて、代助はとう／＼又三千代に逢あひに行つた。其時かれ彼は腹はらの中で、先達なかて置いて来たき金の事かねを、三千代が平岡に話はなしたらうか、話はなさなかつたらうか、もし話はなしたとすれば何どんな結果を夫婦の上うへに生じたらうか、それが氣掛きかりだからと云ふ口実くじを拵こしらえた。彼は此氣掛きがゝりが、自分を驅かつて、凝じつと落ち付つかれない様に、東西に引張回ひつぱりまはした揚句、遂ついに三千代の方に吹ふき付つけるのだと解釈した。

代助は家いへを出でる前まへに、昨夕着ゆふべきた肌着はだぎも単衣ひとへも悉あらたく改きめて氣きを新あらたにした。外そとは寒暖計の度盛どもりの日を逐おふて騰あがる頃ころであつた。歩あるいてゐると、湿しめつぽい梅雨つゆが却ゆつて待ち遠とほしい程熾さかんに日ひが照てつた。代助は昨夕ゆふべの反動で、此陽気な空氣なかの中に落おちる自分の

黒い影が苦になつた。広い鰐の夏帽を被りながら、早く雨季に入れば好いと云ふ心持があつた。其雨季はもう二三日の眼前に逼つてゐた。彼の頭はそれを予報するかの様に、どんよりと重かつた。

平岡の家の前へ来た時は、曇つた頭を厚く掩ふ髪の毛の根元が息切れてゐた。代助は家に入る前に先づ帽子を脱いだ。格子には締りがしてあつた。物音を目的に裏へ回ると、三千代は下女と張物をしてゐた。物置の横へ立て掛けた張板の中途から、細い首を前へ出して、曲みながら、苦茶々々になつたものを丹念に引き伸ばしつゝあつた手を留めて、代助を見た。一寸は何とも云はなかつた。代助も、しばらくは唯立つてゐた。漸くにして、「又来ました」と云つた時、三千代は濡れた手を振つて、馳け込む様に勝手から上がった。同時に表へ回れと眼で合図をした。

三千代は自分で沓脱へ下りて、格子の締を外しながら、

「無用心だから」と云つた。今迄日の透る澄んだ空気の下で、手を動かしてゐた所為で、頬の所が熱つて見えた。それが額際へ来て何時もの様に蒼白く變つてゐる辺に、汗が少し煮染み出した。代助は格子の外から、三千代の極めて薄手な皮膚を眺めて、戸の開くのを静かに待つた。三千代は、

「御待遠さま」と云つて、代助を誘ふ様に、一足横へ退いた。代助は三千代とすれ／＼になつて内へ這入つた。座敷へ来て見ると、平岡の机の前に、紫の座蒲団がちやんと据ゑてあつた。代助はそれを見た時一寸厭な心持がした。土の和れない庭の色が黄色に光る所に、長い草が見苦しく生えた。

代助は又忙がしい所を、邪魔に来て済まないといふ様な尋常な云訳を述べながら、此無趣味な庭を眺めた。其時三千代をこ

んな家へ入れて置くのは實際氣の毒だといふ氣が起つた。三千代は水いぢりで爪先の少しふやけた手を膝の上に重ねて、あまり退屈だから張物をしてゐた所だと云つた。三千代の退屈といふ意味は、夫が始終外へ出てゐて、單調な留守居の時間を無聊に苦しむと云ふ事であつた。代助はわざと、

「結構な身分ですね」と冷かした。三千代は自分の荒涼な胸の中を代助に訴へる様子もなかつた。黙つて、次の間へ立つて行つた。用簞笥の環を響かして、赤い天鵞絨で張つた小さい箱を持つて出て来た。代助の前へ坐つて、それを開けた。中には昔し代助の遣つた指環がちやんと這入つてゐた。三千代は、たゞ「可でせう、ね」と代助に謝罪する様に云つて、すぐ又立つて次の間へ行つた。さうして、世の中を憚かる様に、記念の指環をそこ／＼に用簞笥に仕舞つて元の坐に戻つた。代助は指環に

就ては何事も語らなかつた。庭の方を見て、

「そんなに閑なら、庭の草でも取つたら、何うです」と云つた。すると今度は三千代の方が黙つて仕舞つた。それが、少時続いた後で代助は又改ためて聞いた。

「此間の事を平岡君に話したんですか」

三千代は低い声で、

「いゝえ」と答へた。

「ぢや、未だ知らないんですか」と聞き返した。

其時三千代の説明には、話さうと思つたけれども、此頃平岡はついぞ落ち付いて宅にゐた事がないので、つい話しそびれて未だ知らせずにあると云ふ事であつた。代助は固より三千代の説明を嘘とは思はなかつた。けれども、五分の閑さへあれば夫に話される事を、今日迄それなりに為てあるのは、三千代の腹

の中なかに、何だか話はなし悪い或蟠あるわだかまりがあるからだと思はずにはある人ひとにして仕舞つたと代助は考へた。けれども夫それは左程に代助の良心を螫さすには至らなかつた。法律の制裁はいざ知らず、自然の制裁として、平岡も此結果に對して明かに責せめを分わかたなければならぬと思つたからである。

十三の四

それから
代助は三千代に平岡の近来の模様を尋ねて見た。三千代は例によつて多くを語る事を好このまなかつた。然し平岡の妻に對する仕打しうちが結婚当時と變つてゐるのは明あきらかであつた。代助は夫婦が東京へ歸つた当時すて既にそれを見抜いた。夫それから以後改あらたまつて兩ふたり人

の腹はらの中なかを聞いた事ことはないが、それが日毎よに好よくない方に、速度を加へて進行しつゝあるのは殆んど争ふべからざる事実と見えた。夫婦あひだの間に、代助と云ふ第三者が点ぜられたがために、此疎隔そかくが起つたとすれば、代助は此方面に向つて、もつと注意深く働らいたかも知れなかつた。けれども代助は自己の悟性に訴へて、さうは信ずる事が出来なかつた。彼は此結果の一部分を三千代の病氣に帰した。さうして、肉体上の關係が、夫おとこの精神に反響を与へたものと断定した。又其一部分を子供の死亡に帰した。それから、他の一部分を平岡の遊蕩に帰した。又他の一部分を会社員としての平岡の失敗に帰した。最後に、残りの一部分を、平岡の放埒から生じた經濟事狀に帰した。凡てを概括した上で、平岡は貰ふべからざる人ひとを貰ひ、三千代は嫁ぐべからざる人ひとに嫁いだのだと解決した。代助は心うちの中で痛いたく自分

が平岡の依頼に応じて、三千代を彼の為ために周旋した事を後悔した。けれども自分が三千代の心を動かうごかすが為ために、平岡が妻さいから離れたとは、何どうしても思ひ得なかつた。

同時に代助の三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の關係を、必須条件として募りつゝある事もまた一方では否いなみ切れなかつた。三千代が平岡に嫁とつぐ前まへ、代助と三千代の間柄あひだは、どの位の程度迄進んでゐたかは、しばらく措おくとしても、彼かれは現在の三千代には決して無頓着である訳には行かなかつた。彼は病氣に冒された三千代をたゞの昔むかしの三千代よりは氣の毒に思つた。彼は小供を亡なくなした三千代をたゞの昔むかしの三千代よりは氣の毒に思つた。彼は夫おつとの愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔むかしの三千代よりは氣の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔むかしの三千代よりは氣の毒に思つた。但し、代助は此夫婦

の間を、正面から永久に引き放さうと試みる程大胆ではなかつた。彼の愛はさう逆上してはゐなかつた。

三千代の眼のあたり、苦しんでゐるのは経済問題であつた。平岡が自力で給し得る丈の生活費を勝手の方へ回さない事は、三千代の口吻で慥であつた。代助は此点丈でもまづ何うかしなければなるまいと考へた。それで、

「一つ私が平岡君に逢つて、能く話して見やう」と云つた。三千代は淋しい顔をして代助を見た。旨く行けば結構だが、遣り損なへば益三千代の迷惑になる許だとは代助も承知してゐたので、強ひて左様しやうとも主張しかねた。三千代は又立つて次の間から一封の書状を持つて来た。書状は薄青い状袋へ這入つてゐた。北海道にゐる父から三千代へ宛たものであつた。三千代は状袋の中から長い手紙を出して、代助に見せた。

それから

手紙には向ふの思はしくない事や、物価の高くて活計にくい事や、親類も縁者もなくて心細い事や、東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云ふ事や、——凡て憐れな事ばかり書いてあつた。代助は叮嚀に手紙を巻き返して、三千代に渡した。其時三千代は眼の中に涙を溜めてゐた。

三千代の父はかつて多少の財産と称へらるべき田畠の所有者であつた。日露戦争の当時、人の勸に依じて、株に手を出して全く遣り損なつてから、潔よく祖先の地を売り払つて、北海道へ渡つたのである。其後の消息は、代助も今此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類はあれども無きが如しだとは三千代の兄が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果して三千代は、父と平岡ばかりを便に生きてゐた。

「貴方は羨ましいのね」と瞬きながら云つた。代助はそれを否

それから

定する勇氣に乏しかつた。しばらくしてから又、
「何だつて、まだ奥さんを御貰ひなさらないの」と聞いた。代
助は此問にも答へる事が出来なかつた。

十三の五

しばらく黙然として三千代の顔を見てゐるうちに、女の頬か
ら血の色が次第に退ぞいて行つて、普通よりは眼に付く程蒼白
くなつた。其時代助は三千代と差向で、より長く坐つてゐる事
の危険に、始めて気が付いた。自然の情合から流れる相互の言
葉が、無意識のうちには彼等を駆つて、準繩の埒を踏み超えさせ
るのは、今二三分の裡にあつた。代助は固より夫より先へ進ん
でも、猶素知らぬ顔で引返し得る、会話の方を心得てゐた。彼

は西洋の小説を読むたびに、そのうちに出て来る男女の情話が、あまりに露骨ろこつで、あまりに放肆あやしで、且つあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪あやしんでゐた。原語で読めば兎に角、日本には訳し得ぬ趣味のものと考へてゐた。従つて彼は自分と三千代との關係を發展させる為ために、舶来せりふの台詞を用ひる意志は毫もなかつた。少すくなくとも二人ふたりの間では、尋常の言葉で充分用が足りたのである。が、其所そこに、甲の位地から、知らぬ間まに乙の位置に滑すべり込む危険が潜ひそんでゐた。代助は辛からうじて、今一歩と云ふ際きはどい所で、踏とみ留とまつた。帰る時、三千代は玄関迄送つて来て、淋さむしくつて不可いけけないから、又来きて頂戴」と云つた。下女はまうらだ裏はりもので張物はりものをしてゐた。

表おもてへ出た代助は、ふらくくと一丁程歩あるいた。好いい所ところで切きり上あげたといふ意識があるべき筈であるのに、彼かれの心こころにはさう云ふ

満足が些とも無かつた。と云つて、もつと三千代と対座してゐて、自然の命ずるが儘に、話し尽して帰れば可かつたといふ後悔もなかつた。彼は、彼所で切り上げて、五分十分の後切り上げて、必竟は同じ事であつたと思ひ出した。自分と三千代との現在の関係は、此前逢つた時、既に発展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人の過去を順次に溯ぼつて見て、いづれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の為に、足がふらついた。家に帰つた時、門野が、

「大変顔の色が悪い様ですね、何うかなさいましたか」と聞いた。代助は風呂場へ行つて、蒼い額から奇麗に汗を拭き取つた。

さうして、長く延び過ぎた髪を冷水に浸した。

それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後、電車に乗つて、平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢つて、三千代の為に充分話をする決心であつた。給仕に名刺を渡して、埃だらけの受付に待つてゐる間、彼はしばしば袂から手帛を出して、鼻を掩ふた。やがて、二階の応接間へ案内された。其所は風通しの悪い、蒸し暑い、陰気な狭い部屋であつた。代助は此所で烟草を一本吹かした。編輯室と書いた戸口が始終開いて、人が出たり這入つたりした。代助の逢ひに来た平岡も其戸口から現はれた。先達て見た夏服を着て、相変らず奇麗な襟とカフスを掛けてゐた。忙しさうに、

「やあ、暫く」と云つて代助の前に立つた。代助も相手に唆かされた様に立ち上がった。二人は立ちながら一寸話をした。丁

度編輯のいそがしい時ときで緩ゆつくり何どうする事も出来なかつた。代助は改めて平岡の都合を聞いた。平岡はポケットから時計を出だして見て、

「失敬だが、もう一時間程して来てくれないか」と云つた。代助は帽子を取つて、又暗くらい埃ほこりだらけの階段を下おりた。表へ出でると、夫それでも涼すずしい風が吹いた。

代助はあてもなく、其所そこいらを逍遙ぶらつた。さうして、愈平岡と逢つたら、どんな風に話はなしを切り出ださうかと工夫した。代助の意は、三千代に刻下の安慰を、少しでも与へたい為ために外ほかならなかつた。けれど、夫それが為ために、却つて平岡の感情を害がいする事があるかも知れないと思つた。代助は其悪結果の極端として、平岡と自分の間に起り得る破裂をさへ予想した。然し、其時は何どんな具合にして、三千代を救はうかと云ふ成案あんはなかつた。代

助は三千代と相対づくで、自分等二人の間をあれ以上に何うかする勇氣を有たなかつたと同時に、三千代のために、何かしなくては居られなくなつたのである。だから、今日の会見は、理知の作用から出た安全の策と云ふよりも、寧ろ情の旋風に捲き込まれた冒険の働きであつた。其所に平生の代助と異なる点があらはれてゐた。けれども、代助自身は夫に気が付いてゐなかつた。一時間の後彼は又編輯室の入口に立つた。さうして、平岡と一所に新聞社の門を出た。

十三の六

裏通りを三四丁来た所で、平岡が先へ立つて或家に這入つた。座敷の軒に釣忍が懸つて、狭い庭が水で一面に濡れてゐた。平

岡は上衣うはぎを脱ぬいで、すぐ胡坐あぐらをかいた。代助は左程あつ暑いと思はなかつた。団扇は手にした丈で済すんだ。

会話は新聞社内ありさまの有様から始まつた。平岡は忙いそがしい様で却つて楽らくな商買で好いいと云つた。其語気には別まけおしに負惜みの様子も見えなかつた。代助は、それは無責任だからだらうと調からか戲つた。平岡は真面目になつて、弁解をした。さうして、今日こんにちの新聞事業程競争の烈しくて、機敏あたまな頭を要するものはないと云ふ理由わけを説明した。

「成程たゞ筆ふでが達者な丈ぢや仕様があるまいよ」と代助は別に感服した様子を見せなかつた。すると、平岡は斯かう云つた。

「僕は経済方面の係りだが、単にそれ丈でも中々なか面白い事実が挙あがつてゐる。ちと、君の家うちの会社の内幕うちまくでも書いて御覧に入かれやうか」

代助は自分の平生の觀察から、斯んな事を云はれて、驚ろく程ぼんやりしては居なかつた。

「書くのも面白いだらう。其代り公平に願ひたいな」と云つた。

「無論嘘は書かない積だ」

「いえ、僕の兄の会社ばかりでなく、一列一体に筆誅して貰ひたいと云ふ意味だ」

平岡は此時邪気のある笑ひ方をした。さうして、

「日糖事件丈ぢや物足りないからね」と奥歯に物の挟まつた様

に云つた。代助は黙つて酒を飲んだ。話は此調子で段々はずみ

を失ふ様に見えた。すると平岡は、実業界の内状に關聯すると

でも思つたものか、何かの拍子に、ふと、日清戦争の当時、大

倉組に起つた逸話を代助に吹聴した。その時、大倉組は広島で、

軍隊用の食料品として、何百頭かの牛を陸軍に納める筈になつ

てゐた。それを毎日何頭かづつ、納めて置いては、夜になると、そつと行つて偷み出して来た。さうして、知らぬ顔をして、翌日同じ牛を又納めた。役人は毎日々々同じ牛を何遍も買つてゐた。が仕舞に気が付いて、一遍受取つた牛には焼印を押した。所がそれを知らずに、又偷み出した。のみならず、それを平気に翌日連れて行つたので、とう／＼露見して仕舞つたのださうである。代助は此話を聞いた時、その実社会に触れてゐる点に於て、現代的滑稽の標本だと思つた。平岡はそれから、幸徳秋水と云ふ社会主義の人を、政府がどんなに恐れてゐるかと云ふ事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡査が二三人宛昼夜張番をしてゐる。一時は天幕を張つて、其中から覗つてゐた。秋水が外出すると、巡査が後を付ける。万一見失ひでもしやうものなら非常な事件になる。今本郷に現はれた、今神田へ来たとき、夫から

夫それへと電話が掛かつて東京市中大騒しんじゆくぎである。新宿警察署では秋あき水みづ一人ひとりの為ために月々百円使つかつてゐる。同じ仲間なかまの飴屋あめやが、大道だうだうで飴細工あめざいくを拵こしらへてゐると、白服しろふくの巡查しゆさが、飴あめの前まへへ鼻はなを出だして、邪魔じゃまになつて仕方しかたがない。

是も代助たいてすけの耳みみには、真面目まじめな響ひびきを与よへなかつた。

「矢やつ張り現代的滑稽げんたいてきごうきの標本ひょうほんぢやないか」と平岡へいおかは先刻さつぎの批評ひひうを繰くり返かへしながら、代助たいてすけを挑いどんだ。代助たいてすけはさうさと笑わらつたが、此方面こゝにはあまり興味きんみがないのみならず、今日けふは平生いつしよの様に普通ふつうの世間話よなしをする氣きでないので、社会主義しやかいしゆぎの事はそれなりにして置おいた。先刻さつぎ平岡へいおかの呼よばうと云いふ芸者げんしやを無理むりに已おめさしたのも是ためが為ためであつた。

「実じつは君きみに話はなしたい事ことがあるんだが」と代助たいてすけは遂ついにに云いひ出だした。すると、平岡へいおかは急に様子ようすを変かへて、落ち付おちつかかない眼めを代助たいてすけの上うへ

に注いだ^{そゝ}が、卒然^{そつぜん}として、

「そりや、僕も疾^とうから、何^どうかする積^{つもり}なんだけれども、今^{いま}の所^しぢや仕方^{しかた}がない。もう少^{すこ}し待つて呉^くれ玉^{たま}へ。其代^にり君^にの兄^{にい}さんや御父^{おとつ}さんの事も、斯^かうして書^かかず^にゐるんだから」と代助には意表^{いひ}な返事^{へんじ}をした。代助は馬鹿^{ばか}馬鹿^{ばか}しいと云ふより、寧^なろ一種^{いっしゆ}の憎惡^{ぞうお}を感じ^{かんじ}た。

「君^{きみ}も大分^{だいぶん}変^{かは}つたね」と冷^{ひや}かに云^いつた。

「君^{きみ}の変^{かは}つた如^{ごと}く変^{かは}つちまつた。斯^かう摺^すれちや仕方^{しかた}がない。だから、もう少^{すこ}し待つて呉^くれ給^{たま}へ」と答^{こた}へて、平岡^{ひらおか}はわざとらしい笑^{わら}ひ方^{かた}をした。

十三の七

代助は平岡の言語の如何に拘はらず、自分の云ふ事丈は云はうと極めた。なまじい、借金の催促に来たんぢやない杯と弁明すると、又平岡が其裏を行くのが癪だから、向ふの疍違は、疍違で構はないとして置いて、此方は此方の歩を進める態度に出た。けれども第一に困つたのは、平岡の勝手元の都合を、三千代の訴へによつて知つたと切り出しては、三千代に迷惑が掛るかも知れない。と云つて、問題が其所に触れなければ、忠告も助言も全く無益である。代助は仕方なしに迂回した。

「君は近來斯う云ふ所へ大分頻繁に出はいりをする見え、家のものとは、みんな御馴染だね」

「君の様に金回りが好くないから、さう豪遊も出来ないが、交際だから仕方がないよ」と云つて、平岡は器用な手付をして猪口を口へ着けた。

「余計な事だが、それで家の方の経済は、収支償なふのかい」と代助は思ひ切つて猛進した。

「うん。まあ、好い加減にやつてるさ」

斯う云つた平岡は、急に調子を落して、極めて気の無い返事をした。代助は夫限食ひ込めなくなつた。已を得ず、

「不断は今頃もう家へ帰つてゐるんだらう。此間僕が訪ねた時は大分遅かつた様だが」と聞いた。すると、平岡は矢張問題を回避する様な語気で、

「まあ帰つたり、帰らなかつたりだ。職業が斯う云ふ不規則な性質だから、仕方がないさ」と、半ば自分を弁護するためらしく、曖昧に云つた。

「三千代さんは淋しいだらう」

「なに大丈夫だ。彼奴も大分変つたからね」と云つて、平岡は

代助を見た。代助は其眸ひとみの内に危あやしい恐れを感じた。ことによると、此夫婦の關係は元もとに戻もどせないなと思つた。もし此夫婦が自然の斧おので割きき限きりに割きかれるとすると、自分の運命は取り歸かへしの付つかない未来を眼めの前まへに控まへえてゐる。夫婦が離れ、ば離れる程、自分じぶんと三千代はそれ丈接近しなければならぬからである。代助は即座そくざの衝動しやうどうの如ごとくに云つた。――

「そんな事が、あらう筈はずがない。いくら、變かはつたつて、そりや唯年たゞとしを取とつた丈の變化だ。成るべく歸かへつて三千代さんに安慰を與へて遣やれ」

「君はさう思ふか」と云ひさま平岡はぐいと飲んだ。代助は、たゞ、

「思ふかつて、誰だれだつて左様思はざるを得んぢやないか」と半ば口くちから出任でまかせに答へた。

「君は三千代を三年前の三千代と思つてるか。大分變つたよ。あゝ、大分變つたよ」と平岡は又ぐいと飲んだ。代助は覚えぬ胸の動悸を感じた。

「同なじだ、僕の見るところでは全く同じだ。少しも變つてゐやしない」

「だつて、僕は家へ歸つても面白くないから仕方がないぢやないか」

「そんな筈はない」

平岡は眼を丸くして又代助を見た。代助は少し呼吸が逼つた。

けれども、罪あるものが雷火に打たれた様な気は全たくなかつ

た。彼は平生にも似ず論理に合はない事をたゞ衝動的に云つた。

然しそれは眼の前にゐる平岡のためだと固く信じて疑はなかつ

た。彼は平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便に、自分を

三千代から永く振り放さうとする最後の試みを、半ば無意識的に遣つた丈であつた。自分と三千代の關係を、平岡から隠す為の、糊塗策とは毫も考へてゐなかつた。代助は平岡に対して、左程に不信な言動を敢てするには、余りに高尚であると、優に自己を評価してゐた。しばらくしてから、代助は又平生の調子に歸つた。

「だつて、君がさう外へ許出てゐれば、自然金も要る。従つて家の経済も旨く行かなくなる。段々家庭が面白くなくなる丈ぢやないか」

平岡は、白襯衣の袖を腕の中途迄捲り上げて、
「家庭か。家庭もあまり下さつたものぢやない。家庭を重く見るのは、君の様な独身者に限る様だね」と云つた。

此言葉ことばを聞いたとき、代助は平岡が悪にくくなつた。あからさまに自分の腹はらの中なかを云ふと、そんなに家庭が嫌きらひなら、嫌きらひでよし、其代り細君を奪とつちまふぞと判然はつきり知らせたかつた。けれども二人ふたりの問答は、其所そこ迄行くには、まだ中中間なかなかあひだがあつた。代助はもう一遍外ほかの方面から平岡の内部に触れて見た。

「君きみが東京へ着きたてに、僕は君から説教されたね。何か遣やれつて」

「うん。さうして君の消極な哲学を聞きかされて驚ろいた」

代助は實際平岡が驚ろいたらうと思つた。その時の平岡は、熱病に罹かつた人間にんげんの如く行為アクシヨンに渴かはいてゐた。彼は行為アクシヨンの結果として、富を糞くそつてゐたか、もしくはは名誉、もしくはは権勢を糞くそつ

てゐたか。夫それでなければ、活動としての行為アクション其物を求めてゐたか。それは代助にも分わからなかつた。

「僕ぼくの様に精神的に敗残した人間は、已を得ず、あゝ云ふ消極な意見も出すが。——元来意見があつて、人ひとがそれに則のつとるのぢやない。人ひとがあつて、其人そのひとに適てきした様な意見が出て来るのだから、僕ぼくの説は僕ぼく丈に通用する丈だ。決して君の身の上を、あの説で、何どうしやうの斯かうしやうのと云ふ訳ぢやない。僕はあの時の君の意気に敬服してゐる。君きみはあの時自分で云つた如く、全く活動の人だ。是非共活動して貰もらひたい」

「無論大いに遣やる積つもりだ」

平岡の答こたへはたゞ此一句限ぎりであつた。代助は腹はらの中なかで首くびを傾かたむけた。

「新聞で遣やる積つもりかね」

平岡は一寸蹶踏ちよつとちうちよした。が、やがて、判然はつきり云ひ放はなつた。――

「新聞にゐるうちは、新聞で遣やる積つもりだ」

「大いに要領を得てゐる。僕だつて君の一生涯の事を聞いてゐるんぢやないから、返事はそれで沢山だ。然し新聞で君に面白い活動が出来るかね」

「出来できる積つもりだ」と平岡は簡明な挨拶をした。

話はなしは此所迄こゝ来ても、たゞ抽象的に進んだ丈であつた。代助は

言葉の上でこそ、要領を得たが、平岡の本体を見届ける事は些ちつと

も出来できなかつた。代助は何となく責任のある政府委員か弁護士

を相手にしてゐる様な気がした。代助は此時思ひ切つた政略的

な御世辞を云つた。それには軍神広瀬中佐の例が出て来た。広

瀬中佐は日露戦争のときに、閉塞隊に加はつて斃れたため、当時

の人ひとから偶像視アイドルされて、とう／＼軍神と迄崇められた。けれど

も、四五年後の今日こんにちに至つて見ると、もう軍神広瀬中佐の名を口くちにするものも殆んどなくなつて仕舞つた。英雄ヒーローの流行はやり廃すたりはこれ程急劇なものである。と云ふのは、多くの場合に於て、英雄ヒーローとは其時代に極めて大切な人ひとといふ事で、名前丈は偉えらさうだけれども、本来は甚だ實際的なものである。だから其大切な時機を通り越すと、世間は其資格を段々奪ひにかゝる。露西亞と戦争の最中こそ、閉塞隊は大事だらうが、平和こく克復あかつきの暁には、百の広瀬中佐も全くの凡人に過ぎない。世間は隣人りんじんに対して現金げんきんである如く、英雄ヒーローに対しても現金である。だから、斯かう云ふ偶像にも亦常に新陳代謝や生存競争が行はれてゐる。さう云ふ訳で、代助は英雄ヒーローなぞに担かつがれたい見は更さらにない。が、もし茲に野心があり覇氣のある快男子があるとするれば、一時的の劍けんの力よりも、永久的の筆の力で、英雄ヒーローになつた方が長持ながもちがする。

新聞は其方面の代表的事業である。

代助は此所迄述べて見たが、元來が御世辞の上に、云ふ事があまり書生らしいので、自分の内心には多少滑稽に取れる位、気が乗らなかつた。平岡は其返事に、

「いや難有う」と云つた丈であつた。別段腹を立てた様子も見えなかつたが、些とも感激してゐないのは、此返事でも明かであつた。

代助は少々平岡を低く見過ぎたのに恥ぢ入つた。実は此側から、彼の心を動かして、旨く油の乗つた所を、中途から転がして、元の家庭へ滑り込ませるのが、代助の計画であつた。代助は此迂遠で、又尤も困難の方法の出立点から、程遠からぬ所で、蹉跌して仕舞つた。

其夜代助は平岡と遂に愚図々々で分れた。会見の結果から云ふと、何の為に平岡を新聞社に訪ねたのだか、自分にも分らなかつた。平岡の方から見れば、猶更左様であつた。代助は必竟何しに新聞社迄出掛て来たのか、帰る迄ついに問ひ詰めずに済んで仕舞つた。

代助は翌日になつて独り書齋で、昨夕の有様を何遍となく頭の中で繰り返した。二時間も一所に話してゐるうちに、自分が平岡に対して、比較的眞面目であつたのは、三千代を弁護した時丈であつた。けれども其眞面目は、単に動機の眞面目で、口にした言葉は矢張好加減な出任せに過ぎなかつた。厳酷に云へば、嘘許と云つても可かつた。自分で眞面目だと信じてゐた動

機でさへ、必竟は自分の未来を救ふ手段である。平岡から見れば、固もとより真摯なものとは云へなかつた。まして、其他の談話に至ると、始めから、平岡を現在の立場から、自分の望む所へ落おとし込まうと、たくらんで掛かつた、打算ださん的のものであつた。従つて平岡を何どうする事も出来なかつた。

もし思ひ切つて、三千代を引合ひきあひに出だして、自分の考へ通りを、遠慮なく正面から述のべ立てたら、もつと強い事が云へた。もつと平岡を動揺ゆすぶる事が出来た。もつと彼の肺腑かたに入る事が出来た。に違ちがひない。其代り遣やり損そこなへば、三千代に迷惑がかゝつて来くる。平岡と喧嘩になる。かも知れない。

代助は知らずくの間あひだに、安全にして無能力な方針を取つて、平岡に接してゐた事を腑甲斐なく思つた。もし斯かう云ふ態度で平岡に当あたりながら、一方では、三千代の運命を、全然平岡に委ゆだ

ねて置けない程の不安があるならば、それは論理の許さぬ矛盾を、厚顔こうがんに犯してゐたと云はなければならぬ。

代助は昔むかしの人が、頭腦づのうの不明瞭な所から、実は利己本位の立場に居りながら、自らは固かたく人の為ためと信じて、泣ないたり、感じたり、激したり、して、其結果遂に相手を、自分の思ふ通りに動かし得たのを羨うらやましく思つた。自分の頭あたまが、その位のぼんやりさ加減であつたら、昨夕ゆふべの会談にも、もう少し感激して、都合のいゝ効果を収める事が出来たかも知れない。彼は人ひとから、ことに自分の父ちちから、熱誠の足りない男だと云はれてゐた。彼の解剖によると、事實は斯かうであつた。人間は熱誠を以て当あたつて然るべき程に、高尚な、真摯な、純粹な、動機や行為を常住に有するものではない。夫よりも、ずつと下等なものである。其下等な動機や行為を、熱誠に取り扱ふのは、無分別なる幼稚な

頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を銜つて、己れを高くする山師やましに過ぎない。だから彼の冷淡は、人間としての進歩とは云へまいが、よりよく人間を解剖した結果には外ほかならなかつた。彼は普通自分の動機や行為を、よく吟味して見て、其そのあまりに、狡黠ずるくつて、不真面目ふまじめで、大抵は虚偽きよぎを含んでゐるのを知つてゐるから、遂に熱誠な勢力を以てそれを遂行する気になれなかつたのである。と、彼は断然信じてゐた。

此所こゝで彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命ずる通り發展させるか、又は全然其反對に出て、何も知らぬ昔むかしに返るか。何方どつちかにしなければ生活の意義を失つたものと等ひとしいと考へた。其他のあらゆる中途半端ちゆうとはんぱの方法は、偽いつはりに始つて、偽いつはりに終るより外ほかに道はない。悉く社会的に安全であつて、悉く自己に対して無能無力である。と考へ

た。

彼は三千代と自分の關係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。——醜酔させる事の社会的危険を承知してゐた。天意には叶ふが、人の掟おきてに背く恋こひは、其恋こひの主ぬしの死によつて、始めて社会から認めみとられるのが常であつた。彼は万一の悲劇を二人ふたりの間に描えがいて、覚えおぼえず慄然とした。

彼は又反対に、三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に従ふ代りに、自己の意志に殉ひとする人にならなければ済すまなかつた。彼は其手段として、父ちちや嫂あによめから勧められてゐた結婚あつたに思ひ至つた。さうして、此結婚を肯うけがふ事が、凡ての關係を新あらたにするものと考へた。

それから

それから

自然の児にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷つた。彼は彼の主義として、弾力性のない硬張つた方針の下に、寒暑にさへすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。同時に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達して居る事を切に自覚した。

彼は結婚問題に就て、まあ能く考へて見ろと云はれて歸つた。ぎり、未だに、それを本気に考へる閑を作らなかつた。歸つた時、まあ今日も虎口を逃れて難有かつたと感謝した。ぎり、放り出して仕舞つた。父からはまだ何とも催促されないが、此二三日は又青山へ呼び出されさうな気がしてならなかつた。代助は固より呼び出される迄何も考へずにある氣であつた。呼び出されたら、父の顔色と相談の上、又何とか即席に返事を拵らえる

心組ぐみであつた。代助はあながち父ちちを馬鹿にする了見ではなかつた。あらゆる返事は、斯かう云ふ具合に、相手と自分を商量して、臨機に湧いて来るのが本當だと思つてゐた。

もし、三千代に対する自分の態度が、最後の一步前迄押し詰つめられた様な氣持もちがなかつたなら、代助は父ちちに対して無論さう云ふ所置を取つたらう。けれども、代助は今相手の顔色かほいろいかん如何に拘はらず、手に持つた賽さいを投げなければならなかつた。上になつた目が、平岡に都合わるが悪からうと、父ちちの氣に入らなからうと、賽なを投げる以上は、天の法則通りになるより外ほかに仕方しかたはなかつた。賽なを手に持つ以上は、又賽さいが投げられ可べく作つくられたる以上は、賽さいの目めを極きめるものは自分以外にあらう筈はなかつた。代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹はらのうちで定さだめた。父ちちも兄あにも嫂あによめも平岡も、決断の地平線上には出でて来こなかつた。

彼はたゞ彼の運命に対してのみ卑怯であつた。此四五日は掌てのひらに載せた賽さいを眺め暮らした。今日もまだ握にぎつてゐた。早く運命が戸外そとから来て、其手を軽く敲はたいて呉れれば好いと思つた。が、いつぼう一方では、まだ握にぎつてゐられると云ふ意識が大層嬉うれしかつた。門野は時々書齋へ来た。来る度たびに代助は洋卓デスクの前に凝じつとしてゐた。

「些ちつと散歩にでも御出おいでになつたら如何いかゞです。左様御勉強さやうぢや身体からだに悪いわるでせう」と云つた事が一二度あつた。成程顔色かほいろが好よくなかつた。夏向なつむぎになつたので、門野が湯ゆを毎日沸わかして呉れた。代助は風呂場に行くたびに、長い間鏡あひだかゞみを見た。髯ひげの濃こい男なので、少し延すこびると、自分には大層見苦しく見えた。触さわつて、ぎらくすると猶不愉快めしだつた。

飯めしは依然として、普通の如く食くつた。けれども運動の不足と、

睡眠の不規則と、それから、脳の屈托とで、排泄機能に変化を起した。然し代助はそれを何とも思はなかつた。生理状態は殆んど苦にする暇いとまのない位、一つ事をぐる／＼回まはつて考へた。それが習慣になると、終局なく、ぐる／＼回まはつてゐる方が、埒らっの外そとへ飛び出す努力よりも却つて楽になつた。

代助は最後に不決断の自己嫌悪けんおに陥つた。已を得ないから、三千代と自分の関係を発展させる手段として、佐川の縁談を断らうかと迄考へて、覚えす驚ろいた。然し三千代と自分の関係を絶つ手段として、結婚を許諾して見様かといふ気は、ぐる／＼回転してゐるうちに一度も出でて来こなかつた。

縁談を断ことわる方は単独にも何遍となく決定が出来た。たゞ断つた後あと、其反動として、自分をまともに三千代の上うへに浴あびせかけねば已やまぬ必然の勢力が来るに違ないと考へると、其所そこに至つて、

又恐ろしくなつた。

代助は父ちちからの催促を心待こころまちに待つてゐた。しかし父ちちからは何たよりの便たよりもなかつた。三千代にもう一遍逢はうかと思つた。けれども、それ程の勇氣も出でなかつた。

一番仕舞に、結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人ふたりの上うへに及ぼしきうもないと云ふ考が、段々代助の脳裏に勢力を得て來きた。既に平岡に嫁とついだ三千代に対して、こんな關係が起り得るならば、此上このうへ自分に既婚者の資格を与へたからと云つて、同様の關係が続つづかない訳には行かない。それを続つづかないと見るのはたゞ表向の沙汰で、心を束縛そくばくする事の出来できない形式は、いくら重かさねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。代助は縁談を断るより外に道みちはなくなつた。

十四の二

斯^かう決心した翌^{よくじつ}日、代助は久し振^ぶりに髪^{かみ}を刈^かつて髯^{ひげ}を剃^そつた。梅雨^{つゆ}に入^いつて二三日^{すさ}凄まじく降^ふつた揚句^{やうぐ}なので、地面^{ぢめん}にも、木の枝^{えだ}にも、埃^{ほこり}らしいものは悉^{ことごと}くしつとりと静^{しづ}まつてゐた。日^ひの色^{いろ}は以前^{いぜん}より薄^{うす}かつた。雲^{くも}の切れ間^まから、落ちて来^くる光線^{くわんせん}は、下界^{げかい}の湿^{しめ}り気^けのために、半ば反射^{はんぱはんしつ}力を失^うつた様に柔^ならかに見え^えた。代助^{たいてすけ}は床屋^{とこや}の鏡^{かがみ}で、わが姿^{すがた}を映^{うつ}しながら、例^{れい}の如^{ごと}くふつくらした頬^ほを撫^なで、今日^{けふ}から愈^い積極^{じききく}的生活^{けいふ}に入る^いるのだと思^{おも}つた。

青山^{あおやま}へ来^きて見^みると、玄関^{くわん}に車^{くるま}が二台^{ふただい}程^{ほど}あつた。供待^{ともまち}の車夫^{くるま}は蹴^け込^こみに倚^より掛^かつて眠^かつた儘^{まま}、代助^{たいてすけ}の通り過^かぎるの^のを知らなかつた。座敷^{ざしき}には梅子^{うめこ}が新聞^{しんぶん}を膝^{ひざ}の上^{うへ}へ乗^のせて、込^こみ入^いつた庭^{には}の緑^{みどり}

をぼんやり眺めてみた。是もぼかんと眠むさうであつた。代助はいきなり梅子の前へ坐つた。

「御父さんは居ますか」

「御父さんは居ますか」
嫂は返事をする前に、一応代助の様子を、試験官の眼で見た。

「代さん、少し瘠せた様ぢやありませんか」と云つた。代助は又頬を撫でて、

「そんな事も無いだらう」と打ち消した。

「だつて、色沢が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顔を覗き込んだ。

「庭の所為だ。青葉が映るんだ」と庭の植込の方を見たが、「だから貴方だつて、矢つ張り蒼いですよ」と続けた。

「私、此二三日具合が好くないんですもの」

「道理でぼかんとして居ると思つた。何うかしたんですか。風邪

ですか」

「何だか知らないけれど生欠許り出て」

なまあくびばか

梅子は斯う答へて、すぐ新聞を膝から卸すと、手を鳴らして、

ひざか おろ

小間使を呼んだ。代助は再び父の在、不在を確めた。梅子は其

たしか

問をもう忘れてゐた。聞いて見ると、玄関にあつた車は、父の

客の乗つて来たものであつた。代助は長く懸ゝらなければ、客

きやく

の帰る迄待たうと思つた。嫂は判然しないから、風呂場へ行つ

あによめ はつきり

て、水で顔を拭いて来ると云つて立つた。下女が好い香のする

にほひ

葛の粽を、深い皿に入れて持つて来た。代助は粽の尾をぶら下

げて、頻りに嗅いで見た。

梅子が涼しい眼付になつて風呂場から帰つた時、代助は粽の

一つを振子の様に振りながら、今度は、

「兄さんは何うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問

それから

に答へる義務がないかの如く、しばらく椽鼻ばなに立たつて、庭にはを眺ながめてゐたが、

「二三日あめの雨こけで、苔いろの色すつかりでが悉こと皆出た事」と平生こに似合ははぬ觀察ををして、故もとの席せきに返かへつた。さうして、

「兄にいさんが何どうしましたつて」と聞き直なほした。代助さきは先の質問をを繰り返した時あによめ、嫂あによめは尤も無頓着な調子で、

「何どうしましたつて、例の如くですわ」と答へた。

「相変らず、留守勝がちですか」

「え、え、朝あさも晩ばんも滅多うちに宅うちに居た事はありません」

「姉ねえさんは夫それで淋さむしくはないですか」

「今更改いまさらあらたまつて、そんな事ことを聞きいたつて仕方しかたがないぢやありませんか」

と梅子は笑ひ出だした。調戲からかふんだと思つたのか、あんまり小供染みてゐると思つたのか殆んど取り合ふ気色けしきはなかつ

た。代助も平生の自分を振り返つて見て、真面目に斯んな質問を掛けた今の自分を、寧ろ奇体に思つた。今日迄兄と嫂の關係を長い間目撃してゐながら、ついぞ其所には気が付かなかつた。嫂も亦代助の気が付く程物足りない素振は見せた事がなかつた。「世間の夫婦は夫で済んで行くものかな」と独言の様に云つたが、別に梅子の返事を予期する気もなかつたので、代助は向の顔も見ず、たゞ畳の上に置いてある新聞に眼を落した。すると梅子は忽ち、

「何ですつて」と切り込む様に云つた。代助の眼が、其調子に驚ろいて、ふと自分の方に視線を移した時、

「だから、貴方が奥さんを御貰ひなすつたら、始終宅に許ゐて、たと可愛がつて御上げなさいな」と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覚した。

それで成るべく不断ふだんの調子を出ださうと力つとめた。

十四の三

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、其謝絶に次ついで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注そくがれてゐた。従つて、いくら平生の自分に歸つて、梅子の相手になる積でも、梅子の予期してゐない、變つた音色ねいろが、時々會話なかの中に、思はず知らず出でて來きた。

「代さん、貴方あなた今日けふは何どうかしてゐるのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固もとより嫂あによめの言葉を側面そくめんへ摺ずらして受ける法をいくらでも心得てゐた。然るに、それを遣やるのが、輕薄の様で、又面倒な様で、今日けふは厭いやになつた。却かへつて真面目まじめに、何処どこが變へんか

教へて呉れと頼んだ。梅子は代助の問が馬鹿氣てゐるので妙な顔をした。が、代助が益頼むので、では云つて上げませうと前置をして、代助の何うかしてゐる例を挙げ出した。梅子は勿論わざと真面目を装つてゐるものと代助を解釈した。其中に、「だつて、兄さんが留守勝で、嘸御淋しいでせうなんて、あんまり思遣りが好過ぎる事を仰しやるからさ」と云ふ言葉があつた。代助は其所へ自分を挟んだ。

「いや、僕の知つた女に、左様云ふのが一人あつて、実は甚だ氣の毒だから、つい他の女の心持も聞いて見たくなつて、伺つたんで、決して冷かした積ぢやないんです」

「本当に？ 夫や一寸何てえ方なの」

「名前は云ひ悪いんです」

「ぢや、貴方が其旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛がる

やうにして御上あげになれば可いいのに」

代助は微笑した。

「姉ねえさんも、さう思ひますか」

「当り前ですわ」

「もし其夫おつとが僕の忠告を聞きかなかつたら、何どうします」

「そりや、何どうも仕様がないわ」

「放ほうつて置おくんですか」

「放ほうつて置おかなけりや、何どうなさるの」

「ぢや、其細君は夫おつとに對たいして細君の道まもを守る義務があるでせう

か

「大變理責りぜめなのね。夫そりや旦那の不親切どあひの度合よにも因よるでせう」

「もし、其細君に好すきな人があつたら何どうです」

「知らないわ。馬鹿らしい。好すきな人がある位なら、始めつか

それから
ら其方そつちへ行いつたら好いいぢやありませんか」

代助は黙だまつて考へた。しばらくしてから、姉ねえさんと云つた。

梅子は其深い調子に驚ろかされて、改あらためて代助の顔かほを見た。

代助は同じ調子で猶なほ云つた。

「僕ぼくは今度こんどの縁談えんだんを断ことわらうと思おもふ」

代助の巻烟草まきたばこを持もつた手が少すこし顫ふるへた。梅子は寧ろ表情うしなを失

つた顔付かほつきをして、謝絶せつたつの言葉を聞いた。代助は相手の様子ようすに頓

着ちかなく進行しんこうした。

「僕は今迄結婚問題けっこんもんだいに就あいて、貴方あなたに何返なんへんとなく迷惑めいわくを掛かけた上うへ

に、今度こんども亦心配おそして貫もらつてゐる。僕ぼくももう三十だから、貴方あなた

の云ふ通り、大抵たいていな所で、御勸め次第ごきんめしだいになつて好いいのですが、少

し考があるから、この縁談えんだんもまあ已やめにしたい希望きぼうです。御父おとう

さんにも、兄にいさんにも済すまないが、仕方しかたがない。何なにも当人あたひが気

に入らないと云ふ訳ではないが、断ことわるんです。此間御父おとうさんによく考へて見ると云はれて、大分考へて見たが、矢つ張り断ことわる方が好いい様だから断ことわります。実は今日けふは其用で御父おとうさんに逢あひに来きたんですが、今御客いまおきやくの様だから、序ついでと云つては失礼だが、あなた貴方にも御話おはなしをして置きます」

梅子は代助の様子が真面目なので、何時いつもの如く無駄口くちも入れずに聞いてゐたが、聞き終つた時、始めて自分の意見を述べた。それが極きわめて簡単かんたんな且つ極きわめて實際的な短かい句であつた。

「でも、御父おとうさんは屹度御困りですよ」

「御父おとうさんには僕が直ちかに話すから構ひません」

「でも、話はなしがもう此所迄進すすんでゐるんだから」

「話どこが何所迄進んでゐやうと、僕はまだ貰もらひますと云つた事はありません」

「けれども判然貫はつきりもらはないとも仰しやらなかつたでせう」

「それを今云いひに來きた所です」

代助と梅子は向むかひ合あつたなり、しばらく黙だまつた。

十四の四

代助の方では、もう云いふ可べき事ことを云いひ尽つくした様な気がした。少すくなくとも、是これより進すすんで、梅子に自分を説明しやうといふ考かんがは丸まるで無なかつた。梅子は語かたるべき事こと、聞きくべき事ことを沢山持たくさんもつてゐた。たゞ夫それが咄嗟とつさの間に、前まへの問答もんどうに繋つながり好よく、口くちへ出でて來こなかつたのである。

「貴方あなたの知しらない間に、縁談えんだんが何どれ程進すすんだのか、私わたしにも能よく分わからないけれど、誰だれにしたつて、貴方あなたが、さう的確きつぱりおことわ御断ごだんりなさ

それから

らうとは思ひ掛けないんですもの」と梅子は漸くにして云つた。
「何故です」と代助は冷かに落ち付いて聞いた。梅子は眉を動かした。

「何故ですつて聞いたつて、理窟ぢやありませんよ」

「理窟でなくつても構はないから話して下さい」

「貴方の様にさう何遍断つたつて、詰り同じ事ぢやありませんか」と梅子は説明した。けれども、其意味がすぐ代助の頭には響かなかつた。不可解の眼を挙げて梅子を見た。梅子は始めて自分の本意を布衍しに掛かつた。

「つまり、貴方だつて、何時か一度は、御奥さんを貰ふ積なんぞせう。厭だつて、仕方がないぢやありませんか。其様何時迄も

我儘を云つた日には、御父さんに済まない丈ですわ。だからね。何うせ誰を持つて行つても氣に入らない貴方なんだから、つま

それから

り誰だれを持もたしたつて同じおんなだらうつて云ふ訳わけなんです。貴方あなたには
何どんな人ひとを見みせても駄目だめなんですよ。世よの中なかに一人ひとりも氣きに入る
様なものは生きてやしませんよ。だから、奥おくさんと云ふものは、
始はじめから氣きに入いらないものと、諦あきらめられて貰もらふより外ほかに仕方しほうがな
いぢやありませんか。だから私達わたしが一番好いいと思おもふのを、黙だまつ
て貰もらへば、夫おとうで何所どこも彼所かしこも丸まるく治おさまつちまふから、——だか
ら、御父おとうさんが、殊ことによると、今度こんどは、貴方あなたに一いから十迄相談さうだん
して、何かなに為なさらないかも知しれませんが。御父おとうさんから見れば
夫それが当あたり前まへですもの。さうでも、為しなくつちや、生いきてる内うちに、
貴方あなたの奥おくさんの顔かほを見みる事は出来できないぢやありませんか」
代助たいてすけは落ち付おちつけいて嫂あによめの云いふ事を聴きいてゐた。梅子うめこの言葉ことばが切
れても、容易くちに口くちを動うごかさなかつた。若もし反駁はんぱくをする日には、
話はなしが段々だんだん込み入こみいる許ばかりで、此方こちらの思おもふ所ところは決きして、梅子うめこの耳みみへ通

それから

らないと考へた。けれども向ふの云ひ分を肯ふ気は丸でなかつた。實際問題として、双方が困る様になる許と信じたからである。それで、嫂に向つて、

「貴方の仰しやる所も、一理あるが、私にも私の考があるから、まあ打遣つて置いて下さい」と云つた。其調子には梅子の干渉を面倒がる気色が自然と見えた。すると梅子は黙つてゐなかつた。

「そりや代さんだつて、小供ぢやないから、一人前の考の御有な事は勿論ですわ。私なんぞの要らない差出口は御迷惑でせうから、もう何にも申しますまい。然し御父さんの身になつて御覧なさい。月々の生活費は貴方の要ると云ふ丈今でも出して入らつしやるんだから、つまり貴方は書生時代よりも余計御父さんの厄介になつてる訳でせう。さうして置いて、世話になる事

それから

は、元もとより世話になるが、年を取つて一人前いちにんまへになつたから、云ふ事は元もとの通りには聞きかれなかつて威張いつたつて通用きしないぢやありませんか」

梅子は少し激いしたと見えて猶も云ひ募もらうとしたのを、代助が遮さつた。

「だつて、女房にようばうを持もてば此上うへ猶御父とうさんの厄介やくかいに為ならなくつちや為ならないでせう」

「宜いいぢやありませんか、御父おとうさんが、其方そのほうが好いいと仰おほしやるんだから」

「ぢや、御父おとうさんは、いくら僕わがの氣に入いらない女房にようばうでも、是非持もたせる決心けつしんなんですな」

「だつて、貴方あなたに好すいたのがあればですけれども、そんなのは日本中探さがして歩あるいたつて無ないんぢやありませんか」

「何うして、夫が分ります」

梅子は張の強い眼を据ゑて、代助を見た。さうして、

「貴方は丸で代言人の様な事を仰しやるのね」と云つた。代助は蒼白くなつた額を嫂の傍へ寄せた。

「姉さん、私は好いた女があるんです」と低い声で云ひ切つた。

十四の五

代助は今迄冗談に斯んな事を梅子に向つて云つた事が能くあつた。梅子も始めはそれを本気に受けた。そつと手を廻して真相を探つて見た杯といふ滑稽もあつた。事実が分つて以後は、代助の所謂好いた女は、梅子に対して一向利目がなくなつた。代助がそれを云ひ出しても、丸で取り合はなかつた。でなければ

ば、茶化してゐた。代助の方でも夫で平氣であつた。然し此場合丈は彼かれに取つて、全く特別であつた。顔付かほつきと云ひ、眼付めつきと云ひ、声の低い底ひくそこに籠る力こもちからと云ひ、此所迄押し逼つて来た前後の關係と云ひ、凡ての点から云つて、梅子をはつと思はせない訳に行かなかつた。嫂あによめは此短みじかい句くを、閃ひらめく懐劍の如くに感じた。代助は帶おびの間あひだから時計を出して見た。父ちちの所へ来きてゐる客はなかく中々なか歸りさうにもなかつた。空そらは又曇くもつて来た。代助は一旦いちど引き上げて又改あらためて、父ちちと話はなしを付つけに出直でなほす方が便宜かんがだと考へた。

「僕は又来きます。出直でなほして来きて御父おとうさんに御目めに掛かる方が好いでせう」と立ちにかかつた。梅子は其間あひだに回復した。梅子は飽く迄人の世話を焼く実意のある丈に、物を途中で投なげる事の出来ない女であつた。抑おさえる様に代助を引き留とめて、女の名を聞

それから

いた。代助は固より答へなかつた。梅子は是非にと逼つた。代助は夫それでも応じなかつた。すると梅子は何故なぜ其女を貰もらはないのかと聞き出した。代助は単純に貰もらへないから、貰もらはないのだと答へた。梅子は仕舞に涙を流した。他のひと尽力を出し抜ぬいたと云つて恨んだ。何故なぜ始はじめから打ち明けて話さないかと云つて責めた。かと思ふと、気の毒だと云つて同情して呉れた。けれども代助は三千代に就ては、遂に何事も語かたらなかつた。梅子はどうく我がを折つた。代助の愈いよく帰ると云ふ間際まぎはになつて、「ぢや、貴方あなたから直ぢかに御父おとうさんに御話おはなしなさるんですね。それ迄わたくしは私は黙だまつてゐた方が好いいでせう」と聞いた。代助は黙だまつてゐて貰もらふ方が好いいか、話はなして貰もらふ方が好いいか、自分にも分わからなかつた。

「左様さうですね」と蹶ちうちよ躓ちよしたが、「どうせ、断ことわりに来くるんだから」

と云つて嫂の顔を見た。

「ぢや、若し話す方が都合が好きさうだつたら話しませう。もし又悪るい様だつたら、何にも云はずに置くから、貴方が始から御話なさい。夫が宜いでせう」と梅子は親切に云つて呉れた。

代助は、

「何分宜しく」と頼んで外へ出た。角へ来て、四谷から歩く積で、わざと、塩町行の電車に乗つた。練兵場の横を通るとき、重い雲が西で切れて、梅雨には珍らしい夕陽が、真赤になつて広い原一面を照らしてゐた。それが向を行く車の輪に中つて、輪が回る度に鋼鉄の如く光つた。車は遠い原の中に小さく見えた。原は車の小さく見える程、広がった。日は血の様に毒々しく照つた。代助は此光景を斜めに見ながら、風を切つて電車に持つて行かれた。重い頭の中がふらくした。終点迄来た時は、精

神が身体からだを冒おかしたのか、精神の方が身体からだに冒おかされたのか、厭いやな心持こころもちがして早く電車を降おりたかつた。代助は雨あめの用心よこしまに持もつたかうもりがさ蝙蝠傘かぶとを、杖つゑの如ごとく引き摺ずつて歩あるいた。

歩あるきながら、自分じぶんは今日けふ、自ら進みづかんで、自分の運命はんぶんの半分はんぶんを破壊はかいしたのも同じ事ことだと、心のうちこゝろのうちに嘯つゝやいだ。今迄いまは父ちちや嫂あによめを相手に、好このい加減かんかくな間隔かんかくを取とつて、柔ならかに自我じごを通とほして来きた。今度は愈い本性ほんせいを露あらはさなければ、それを通とほし切れなくなつた。同時に、此方面こゝに向むかつて、在来ざいらいの満足まんじつを求もとめ得とる希望きぼうは少すくなくなつた。けれども、まだ逆戻さかりをする余地あまはあつた。たゞ、夫それには又また父ちちを胡魔化こます必要ひつやうが出来でて来るに違ちがなかつた。代助は腹はらの中なかで今迄いまの我われを冷笑れいせうした。彼かれは何どうしても、今日けふの告白こくはくを以もつて、自己じこの運命はんぶんの半分はんぶんを破壊はかいしたものと認まめたかつた。さうして、それから受うける打撃うちげきの反動はんどうとして、思おもひ切きつて三千代さんぜんの上に、

掩おつ被かぶさる様に烈はたらしく働はたらき掛かけたかつた。

彼かれは此次このつぎ父ちちに逢あふときは、もう一いっ歩ぽも後あとへ引ひけない様に、自分おのれの方かたを拵こしらえて置おきたかつた。それで三さん千せん代だいと会あ見みする前に、又また父ちちから呼よび出でされる事ことを深こく恐おそれた。彼かれは今日け日ふ嫂あによめに、自分おのれの意思いしを父ちちに話はなす話はなさないの自由じゆうを与あたへたのを悔くいた。今夜こんやにも話はなされれば、明日あしたの朝あさ呼よばれるかも知しれない。すると今夜中こんやちゆうに三さん千せん代だいに逢あつて己おのれれを語かたつて置おく必要ひつやうが出来る。然しかし夜よだから都合ごうあつがよくないと思おもつた。

十四の六

それから
角つの上かみを下おりた時とき、日ひは暮くれ掛かかつた。士官し官学校がくの前まへを真ま直つに濠ほり端ばたへ出でて、一い二に三さん町ちゆう来くると砂さ土ど原はら町ちゆうへ曲まがるべき所ところを、代だい助すけはわ

ざと電車路みちに付ついて歩あるいた。彼は例れいの如ごとくに宅うちへ歸かえつて、一夜いちやを安閑やすかんと、書齋なかにの中で暮くらすに堪たえなかつたのである。濠ほりを隔へだて、高い土手まつの松まつが、眼めのつゞく限り黒くろく並ならんでゐる底そこの方かたを、電車でんしゃがしきりに通とほつた。代助たいてすけは軽かるい箱はこが、軌道レールの上うへを、苦くるもなく滑すべつて行いつては、又滑すべつて歸かへる迅速てきほな手際てぎはに、輕快くわいの感かんじを得えた。其代おなり自分みちと同じ路みちを容赦ゆるぎなく往來ゆきする外濠そとほりせん線くくるまの車くるまを、常つねよりは騒しやく々しく敷しく悪にくんだ。牛込見附みつけ迄き來きた時とき、遠とほくの小石川せいせきがわの森もりに数点ひかげの灯影みとを認みとめた。代助たいてすけは夕飯ゆふめしを食くふ考かんがもなく、三千代せんざいのゐる方角むかひへ向むいて歩あるいて行いつた。

約二十分やくにじゅうぶんの後のち、彼かれは安藤坂あがたざかを上あがつて、伝通院でんつういんの燒跡やけどの前まへへ出でた。大きな木きが、左右さゆうから被かぶさつてゐる間あひだを左ひだりりへ抜ぬけて、平岡ひらおかの家いへの傍そば迄く來きると、板塀いたべいから例れいの如ごとく灯ひが射さしてゐた。代助たいてすけは塀へいの本もとに身みを寄よせて、凝じつと様子ようすを窺うかがつた。しばらくは、何なにの

音もなく、家のうちは全く静であつた。代助は門を潜つて、格子の外から、頼むと声を掛けて見様かと思つた。すると、椽側に近く、びしやりと脛を叩く音がした。それから、人が立つて、奥へ這入つて行く気色であつた。やがて話声が聞えた。何の事か善く聴き取れなかつたが、声は慥に、平岡と三千代であつた。話声はしばらくで歇んで仕舞つた。すると又足音が椽側迄近づいて、どきりと尻を卸す音が手に取る様に聞えた。代助は夫なり堀の傍を退いた。さうして元来た道とは反対の方角に歩き出した。

しばらくは、何処を何う歩いてゐるか夢中であつた。其間代助の頭には今見た光景ばかりが煎り付く様に踊つてゐた。それが、少し衰へると、今度は自己の行為に対して、云ふべからざる汚辱の意味を感じた。彼は何の故に、斯ゝる下劣な真似をし

て、恰かも驚ろかされたかの如くに退却したのかを怪しんだ。彼はかれ暗いくら小路こみちに立つて、世界が今夜いまよるに支配しされつゝある事を私われかに喜よろこんだ。しかも五月雨さみだれの重い空氣くわいに鎖とぎされて、歩あるけば歩あるく程ちつそく、窒息しつそくする様な心持こころがした。神楽坂上かぐらざかうへへ出でた時、急に眼めがきら／＼した。身みを包つむ無数の人ひとと、無数の光ひかりが頭あたまを遠慮えんりょなく焼やいた。代助は逃にげる様に藁店わらだなを上あがつた。

家うちへ帰ると、門野かどのが例れいの如く漫然まんぜんたる顔をして、

「大分だいぶん遅おそうがしたな。御飯ごはんはもう御済おすみになりましたか」と聞きいた。

代助は飯めしが欲ほしくなかつたので、要いらない由よしを答こたへて、門野かどのを追おひ帰かへす様に、書齋しよさいから退しりぞけた。が、一三分いっぴんた立たない内に、又手を鳴ならして呼よび出だした。

「宅うちから使つかひは来きやしなかつたかね」

「いゝえ」

代助は、

「ぢや、宜よろしい」と云つた限ぎりであつた。門野かどのは物足りなさうに入口いりぐちに立つてゐたが、

「先生は、何なんですか、御宅おたくへ御出おいでになつたんぢや無なかつたんですか」

「何故なぜ」と代助は六づかしい顔をした。

「だつて、御出掛でかけになるとき、そんな御話おはなしでしたから」

代助は門野かどのを相手にするのが面倒めんどうになつた。

「宅うちへは行つたさ。——宅うちから使つかひが来こなければそれで、好いいぢやないか」

門野かどのは不得要領ふとくに、

「はあ左様さうですか」と云ひ放はなして出て行つた。代助は、父ちちがあ

らゆる世界に対してよりも、自分に対して、性急であるといふ事を知つてゐるので、ことによると、帰つた後あとから直使すぐつかひでも寄よこしはしまいかと恐れて聞きき糺たゞしたのであつた。門野が書生部屋へ引き取つたあとで、明日あしたは是非共三千代に逢はなければならぬと決心した。

其夜代助は寐ねながら、何どう云ふ手段で三千代に逢はうかと云ふ問題を考へた。手紙を車夫に持たせて宅うちへ呼びに遣やれば、来る事は来くるだらうが、既すでに今日けふ 嫂あによめとの会談が済んだ以上は、明日あしたにも、兄あにか嫂あによめの為ために、向ふから襲はれないとも限かぎらない。

又平岡のうちへ行つて逢ふ事は代助に取つて一種の苦痛があつた。代助は已を得ず、自分にも三千代にも関係のない所で逢ふより外ほかに道はないと思つた。

夜半から強く雨が降り出した。釣だつてある蚊帳かやが、却かへつて寒

く見える位な音がどうくくと家を包んだ。代助は其音の中に夜の明けるのを待った。

十四の七

雨は翌日迄晴れなかつた。代助は湿つぽい椽側に立つて、暗い空模様を眺めて、昨夕の計画を又変えた。彼は三千代を普通の待合杯へ呼んで、話をするのが不愉快であつた。已むなくんば、蒼い空の下と思つてゐたが、此天気では夫も覚束なかつた。と云つて、平岡の家へ出向く気は始めから無かつた。彼は何うしても、三千代を自分の宅へ連れて来るより外に道はないと極めた。門野が少し邪魔になるが、話のし具合では書生部屋に洩れない様にも出来ると思へた。

午少し前迄は、ぼんやり雨を眺めてゐた。午飯を済ますや否や、護謨の合羽を引き掛けて表へ出た。降る中を神楽坂下迄来て青山の宅へ電話を掛けた。明日此方から行く積であるからと、機先を制して置いた。電話口へは嫂が現れた。先達ての事は、まだ父に話さないでゐるから、もう一遍よく考へ直して御覧なさらぬかと云はれた。代助は感謝の辞と共に号鈴を鳴らして談話を切つた。次に平岡の新聞社の番号を呼んで、彼の出社の有無を確かめた。平岡は社に出てゐると云ふ返事を得た。代助は雨を衝いて又坂を上つた。花屋へ這入つて、大きな白百合の花を沢山買つて、夫を提げて、宅へ歸つた。花は濡れた儘、二つの花瓶に分けて挿した。まだ余つてゐるのを、此間の鉢に水を張つて置いて、莖を短かく切つて、はぼく／＼放り込んだ。それから、机に向つて、三千代へ手紙を書いた。文句は極めて短か

いものであつた。たゞ至急御目に掛つて、御話したい事があ
るから来て呉れろと云ふ丈であつた。

代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現れ
た。手紙を受取りながら、

「大変好い香ですな」と云つた。代助は、

「車を持つて行つて、乗せて来るんだよ」と念を押した。門野
は雨の中を乗りつけの帳場迄出て行つた。

代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩ふ強い香の中に、残
りなく自己を放擲した。彼は此嗅覚の刺激のうち、三千代の
過去を分明に認めた。其過去には離すべからざる、わが昔の影
が烟の如く這ひ纏はつてゐた。彼はしばらくして、

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。斯う云
ひ得た時、彼は年頃になく慰を総身に覺えた。何故もつと早

それから

く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

やがて、夢から覺めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して来た。彼の唇は色を失つた。彼は默然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れてゐる血潮が、ぶる／＼顫へる様に思はれた。彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩う迄嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。彼はやがて、腕を組んで、書齋と座敷

の間を往つたり来たりした。彼の胸は始終鼓動を感じてゐた。彼は時々椅子の角や、洋卓の前へ来て留まつた。それから又歩き出した。彼の心の動揺は、彼をして長く一所に留まる事を許さなかつた。同時に彼は何物をか考へる為めに、無暗な所に立ち留まらざるを得なかつた。

其内には時は段々移つた。代助は断えず置時計の針を見た。又覗く様に、軒から外の雨を見た。雨は依然として、空から真直に降つてゐた。空は前よりも稍暗くなつた。重なる雲が一つ所で渦を捲いて、次第に地面の上へ押し寄せるかと怪しまれた。其時雨に光る車を門から中へ引き込んだ。輪の音が、雨を圧して代助の耳に響いた時、彼は蒼白い頬に微笑を洩しながら、右の手を胸に当てた。

十四の八

三千代は玄関から、門野かどのに連れられて、廊下づた伝ひに這入つて来た。銘仙めいせんの紺緋こんがすりに、唐草からくさ模様の一重帯ひとえを締め、此前とは丸で違つた服装なりをしてゐるので、一目見ひとめた代助には、新あたらしい感かんじがした。色いろは不断の通り好よくなかつたが、座敷ざしきの入口いりぐちで、代助かほと顔あはを合あはせた時、眼めも眉まゆも口くちもびたりと活動うごを中止した様に固かたくなつた。敷居しきみに立たつてゐる間あひだは、足あしも動うごけなくなつたとしか受取うけとれなかつた。三千代は固もとより手紙てがみを見た時から、何事をか予期きして来た。其予期きのうちには恐れと、喜よろこびと、心配しんぱとがあつた。車くるまから降おりて、座敷へ案内あんいされる迄、三千代の顔かほは其予期きの色いろをもつて漲みなつてゐた。三千代の表情へうしやうはそこで、はたと留とまつた。代助かほの様子は三千代に夫丈しよつツクの打衝うちつを与へる程に強烈で

あつた。

代助は椅子の一つを指さした。三千代は命ぜられた通りに腰を掛けた。代助は其向に席を占めた。二人は始めて相對した。然し良少時は二人とも、口を開かなかつた。

「何か御用なの」と三千代は漸くにして問ふた。代助は、たゞ、「え」と云つた。二人は夫限で、又しばらく雨の音を聴いた。「何か急な御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「え」と云つた。双方共何時もの様に軽くは話し得なかつた。代助は酒の力を借りて、己れを語らなければならぬ様な自分を恥ぢた。彼は打ち明けるときは、必ず平生の自分でなければならぬもの兼ねて覚悟をして居た。けれども、改たまつて、三千代に對して見ると、始めて、一滴の酒精が恋しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例のキスキーを洋盃で傾け様かと思つ

たが、遂に其決心に堪えなかつた。彼は青天白日の下もとに、尋常の態度で、相手に公言し得る事でなければ自己の誠まことでないと信じたからである。酔よひと云ふ牆壁を築いて、其掩護に乗じて、自己を大胆にするのは、卑怯で、残酷で、相手に汚辱を与へる様な気がしてならなかつたからである。彼は社会の習慣に對しては、徳義的な態度を取る事が出来なくなつた、其代り三千代に對しては一点も不徳義な動機を蓄たくわへぬ積であつた。否、彼かれをしりんに卑吝ひりんに陥らしむる余地が丸でない程に、代助は三千代を愛した。けれども、彼は三千代から何の用かを聞かれた時に、すぐ己れを傾かたむける事が出来なかつた。二度聞きかれた時に猶躑躅した。三度目には、己やむを得ず、

「まあ、緩ゆつくり話はなしませう」と云つて、巻烟草まきたばこに火を点つけた。三千代の顔かほは返事を延のばされる度たびに悪わるくなつた。

雨は依然として、長く、密に、物に音を立て、降つた。二人は雨の為に、雨の持ち来す音の為に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立の儘、白百合の香の中に封じ込められた。

「先刻表へ出て、あの花を買つて来ました」と代助は自分の周囲を顧みた。三千代の眼は代助に随いて室の中を一回した。其後で三千代は鼻から強く息を吸ひ込んだ。

「兄さんと貴方と清水町にゐた時分の事を思ひ出さうと思つて、成るべく沢山買つて来ました」と代助が云つた。

「好い香です」と三千代は翻がへる様に綻びた大きな花瓣を眺めてゐたが、夫から眼を放して代助に移した時、ぼうと頬を薄赤くした。

「あの時分の事を考へると」と半分云つて已めた。

「覚えてゐますか」

「覚えてゐますわ」

「あなた貴方は派手な半襟を掛^かけて、銀杏返しに結つてゐましたね」

「だつて、東京へ来^{きた}立^ただつたんですもの。ぢき已^やめて仕舞つた

わ」

「このあひだ此間百合の花を持つて来^きて下^{くだ}さつた時も、銀杏返しぢやなか

つたですか」

「あら、気が付いて。あれは、あの時限^{ぎり}なのよ」

「あの時はあんな鬘^{たまぐ}に結^{ちよいとゆ}ひ度^{たく}なつたんですか」

「えゝ、気迷^{きまぐ}れに一寸^{ちよいとゆ}結^むつて見たかつたの」

「僕はあの鬘^{まげ}を見て、昔^{むかし}を思ひ出した」

「さう」と三千代は恥^はづかしさうに肯^{うけが}つた。

三千代が清水町にゐた頃、代助と心安^{くち}く口^{くち}を聞く様になつて

からの事だが、始めて国から出て来た当時の髪かみの風を代助から賞ほめられた事があつた。其時三千代は笑つてゐたが、それを聞いた後あとでも、決して銀杏返しには結はなかつた。二人ふたりは今も此事をよく記憶してゐた。けれども双方共口くちへ出だしては何も語らなかつた。

十四の九

三千代の兄あにと云ふのは寧むしろ豁達な気性で、懸隔かけへだてのない交際つきあひが振びから、友達ともだちには甚ひどく愛されてゐた。ことに代助は其親友であつた。此兄あには自分が豁達である丈に、妹の大人おとなしいのを可愛かあいがつてゐた。国から連れて来てき、一所うちに家を持つたのも、妹を教育しなればならないと云ふ義務の念からではなくて、全く妹の

未来に對する情合あひと、現在自分の傍そばに引き着つけて置きたい欲望とからであつた。彼かれは三千代を呼ぶ前、既に代助に向つて其旨を打ち明あけた事があつた。其時代助は普通の青年の様に、多大の好奇心を以て此計画を迎へた。

三千代が来きてから後、兄あにと代助とは益親したしくなつた。何方どつちが友情の歩を進めたかは、代助自身にも分わからなかつた。兄あにが死んだ後あとで、當時を振り返つて見る毎に、代助は此親密このの裡うちに一種の意味を認めない訳に行かなかつた。兄あには死ぬ時迄それを明言しなかつた。代助も敢て何事をも語らなかつた。斯かくして、相互おもの思おもはくは、相互の間の秘密として葬られて仕舞つた。兄あには在生中に此意味を私ひそかに三千代に洩もらした事があるかどうか、其所そこは代助も知らなかつた。代助はたゞ三千代の拳止動作と言語談話からある特別な感じを得た丈であつた。

代助は其頃から趣味の人として、三千代の兄あにに臨んでゐた。三千代の兄あには其方面に於て、普通以上の感受性を持つてゐなかつた。深い話はなしになると、正直に分わからないと自白して、余計な議論を避さけた。何処どこからか arbiter elegantiarum と云ふ字を見付みつ出して来て、それを代助の異名のように濫用したのは、其頃の事であつた。三千代は隣となりの部屋で黙だまつて兄あにと代助の話はなしを聞いてゐた。仕舞にはとうとう arbiter elegantiarum と云ふ字を覚おぼえた。ある時其意味を兄あにに尋ねて、驚ろかれた事があつた。

兄あには趣味に関する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。代助を待つて啓発されべき妹の頭脳に、接触の機会を出来る丈与へる様に力めた。代助も辞退はしなかつた。後あとから顧みると、自ら進みづかんで其任に當つたと思はれる痕迹もあつた。三千代は固よより喜よろこんで彼の指導かを受けました。三人は斯くして、巴ともえの

如くに回転しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴ともえの輪わは回めぐるに従つて次第せだいに狭せばまつて来きた。遂ついに三巴みつどもえがいつしよ一所いっしょに寄よつて、丸い円にならうとする少し前の所で、忽然其一つが欠かけたため、残る二つは平衡を失なつた。

代助と三千代は五年の昔むかしを心置なく語り始めた。語るに従つて、現在の自己が遠退いて、段々と当時の学生時代に返つて来きた。二人ふたりの距離は又元もとの様に近くなつた。

「あの時兄にいさんが亡なくならないで、未まだ達者でゐたら、今頃私いまごろわたくしは何どうしてゐるでせう」と三千代は、其時を恋こひしがる様に云つた。

「兄にいさんが達者でゐたら、別べつの人ひとになつて居ゐる訳ですか」

「別ひとな人ひとにはなりませんわ。貴方あなたは？」

「僕も同じ事です」

三千代は其時、少し窘める様な調子で、

「あら嘘」と云つた。代助は深い眼を三千代の上に据ゑて、

「僕は、あの時も今も、少しも違つてゐやしないのです」と答へた儘、猶しばらくは眼を相手から離さなかつた。三千代は忽ち視線を外らした。さうして、半ば独り言の様に、

「だつて、あの時から、もう違つてゐらしたんですもの」と云つた。

三千代の言葉は普通の談話としては余りに声が低過た。代助は消えて行く影を踏まへる如くに、すぐ其尾を捕えた。

「違やしません。貴方にはたゞ左様見える丈です。左様見えたつて仕方がないが、それは僻目だ」

代助の方は通例よりも熱心に判然した声で自己を弁護する如くに云つた。三千代の声は益低かつた。

「僻目でも何でも可くつてよ」

代助は黙つて三千代の様子を窺つた。三千代は始めから、眼を伏せてゐた。代助には其長い睫毛の顫へる様が能く見えた。

十四の十

「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。僕は夫丈の事を貴方に話したい為^{ため}にわざ／＼貴方^{あなた}を呼んだのです」

代助の言葉には、普通の愛人の用ひる様な甘い文彩^{あやふく}を含んでゐなかつた。彼の調子は其言葉と共に簡単で素朴であつた。寧ろ嚴肅の域に逼つてゐた。但、夫丈の事を語る為^{ため}に、急用として、わざ／＼三千代を呼んだ所が、玩具の詩歌に類してゐた。けれども、三千代は固より、斯う云ふ意味での俗を離れた急用を

それから

理解し得る女であつた。其上世間の小説に出て来る青春時代の修辭には、多くの興味を持つてゐなかつた。代助の言葉が、三千代の官能に華やかな何物をも与へなかつたのは、事實であつた。三千代がそれに渴いてゐなかつたのも事實であつた。代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。三千代は顫へる睫毛の間から、涙を頬の上に流した。

「僕はそれを貴方に承知して貰ひたいのです。承知して下さい」

三千代は猶泣いた。代助に返事をする所ではなかつた。袂から手帛を出して顔へ当てた。濃い眉の一部分と、額と生際丈が代助の眼に残つた。代助は椅子を三千代の方へ摺り寄せた。

「承知して下さい」と耳の傍で云つた。三千代は、まだ顔を蔽つてゐた。しやくり上げながら、

「余りだわ」と云ふ声が手帛の中で聞えた。それが代助の聴覚を

電流の如くに冒した。代助は自分の告白が遅過ぎたと云ふ事を切に自覚した。打ち明けるならば三千代が平岡へ嫁ぐ前に打ち明けないければならない筈であつた。彼は涙と涙の間をぼつくと綴る三千代の此一語を聞くに堪えなかつた。

「僕は三四年前に、貴方に左様打ち明けないければならなかつたのです」と云つて、無然として口を閉ぢた。三千代は急に手帛を顔から離した。瞼の赤くなつた眼を突然代助の上に睜つて、「打ち明けて下さらなくつても可いから、何故」と云ひ掛けて、一寸躊躇したが、思ひ切つて、「何故棄て、仕舞つたんです」と云ふや否や、又手帛を顔に当て、又泣いた。

「僕が悪い。堪忍して下さい」

代助は三千代の手頸を執つて、手帛を顔から離さうとした。三千代は逆はうともしなかつた。手帛は膝の上へ落ちた。三千

代は其膝ひざの上うへを見た儘まま、微かすかな声こゑで、

「残酷さくごだわ」と云つた。小さい口元くちもとの肉にくが顫ふるふ様に動いた。

「残酷と云はれても仕方がありません。其代り僕は夫丈それだけの罰ばつを
受うけてゐます」

三千代は不思議な眼めをして顔かほを上げたが、

「何どうして」と聞きいた。

「貴方あなたが結婚して三年以上になるが、僕はまだ独身どくしんでゐます」

「だつて、夫それは貴方あなたの御勝手ご勝手ぢやありませんか」

「勝手勝手ぢやありません。貫もらはうと思つても、貫もらへないのです。

それから以後、宅うちのものから何遍結婚を勧められたか分わかりませ

ん。けれども、みんな断つて仕舞ひました。今度こんども亦ひとりごと一人断り

ました。其結果僕と僕の父ちちとの間あひだが何うなるか分わかりませぬ。然

し何どうなつても構かまはない、断ことわるんです。貴方あなたが僕わたしに復讐ふくしゅうしてゐ

「あひだ、ことわ
る間は断らなければならぬです」

「復讐」と三千代は云つた。此二字を恐るゝものゝ如くに眼を
はたら
働かした。「わたし
あなた
貴方が御結婚なされば可いと思はないで暮らした事はありません
ん」と稍改たまつた物の言ひ振であつた。然し代助はそれに耳
を貸さなかつた。

「いや僕は貴方に何所迄も復讐して貰ひたいのです。それが本
望なのです。今日斯うやつて、貴方を呼んで、わざく、自分の
胸を打ち明けるのも、実は貴方から復讐されてゐる一部分とし
か思やしません。僕は是で社会的に罪を犯したも同じ事です。
然し僕はさう生れて来た人間なのだから、罪を犯す方が、僕に
は自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔する事が
出来れば、夫で沢山なんです。是程嬉しい事はないと思つてゐ

るんです」

十四の十一

三千代は涙なみだの中で始はじめて笑つた。けれども一言ひとことも口くちへは出ださなかつた。代助は猶己れを語ひまる隙を得た。――

「僕は今更こんな事を貴方あなたに云ふのは、残酷だと承知してゐます。それが貴方あなたに残酷に聞えれば聞える程僕は貴方あなたに対して成功したも同様になるんだから仕方がない。其上僕はこんな残酷な事を打ち明けなければ、もう生きてゐる事が出来なくなつた。つまり我儘わがまです。だから詫あやまるんです」

「残酷では御座いません。だから詫あやまるのはもう廃よして頂戴」
三千代の調子は、此時急に判然はつきりした。沈しづんではゐるだが、前に

比べると非常に落ち着いた。然ししばらくしてから、又

「たゞ、もう少し早く云つて下さると」と云ひ掛けて涙ぐんだ。

代助は其時斯う聞いた。――

「ぢや僕が生涯黙つてゐた方が、貴方には幸福だつたんですか」

「左様ぢやないのよ」と三千代は力を籠めて打ち消した。「私だ

つて、貴方が左様云つて下さらなければ、生きてゐられなくな

つたかも知れませんか」

今度は代助の方が微笑した。

「夫ぢや構はないでせう」

「構はないより難有いわ。たゞ――」

「たゞ平岡に済まないと云ふんでせう」

三千代は不安らしく首肯いた。代助は斯う聞いた。――

「三千代さん、正直に云つて御覧。貴方は平岡を愛してゐるん

ですか」

三千代は答へなかつた。見るうちに、顔の色が蒼くなつた。眼も口も固くなつた。凡てが苦痛の表情であつた。代助は又聞いた。

「では、平岡は貴方を愛してゐるんですか」

三千代は矢張り俯つ向いてゐた。代助は思ひ切つた判断を、自分の質問の上に与へやうとして、既に其言葉が口迄出掛つた時、三千代は不意に顔を上げた。其顔には今見た不安も苦痛も殆んど消えてゐた。涙さへ大抵は乾いた。頬の色は固より蒼かつたが、唇は確として、動く気色はなかつた。其間から、低く重い言葉が、繋がらない様に、一字づゝ出た。

「仕様がな。覚悟を極めませう」

代助は脊中から水を被つた様に顫へた。社会から逐ひ放たる

それから

べき二人の魂は、たゞ二人対ひ合つて、互を穴の明く程眺めて
ゐた。さうして、凡てに逆つて、互を一所に持ち来たした力を
互と怖れ戦いた。

しばらくすると、三千代は急に物に襲はれた様に、手を顔に
当てて泣き出した。代助は三千代の泣く様を見るに忍びなかつ
た。肱を突いて額を五指の裏に隠した。二人は此態度を崩さず
に、恋愛の彫刻の如く、凝としてゐた。

二人は斯う凝としてゐる中に、五十年を眼のあたりに縮めた
程の精神の緊張を感じた。さうして其緊張と共に、二人が相並
んで存在して居ると云ふ自覚を失はなかつた。彼等は愛の刑と
愛の賚とを同時に享けて、同時に双方を切実に味はつた。

しばらくして、三千代は手帛を取つて、涙を奇麗に拭いたが、
静かに、

「わたくし
私もう帰つてよ」と云つた。代助は、

「御帰りなさい」と答へた。

雨は小降こおりになつたが、代助は固より三千代を独り返す気はなかつた。わざと車くるまを雇はずに、自分で送つて出た。平岡の家迄つ附いて行く所を、江戸川の橋の上で別れた。代助は橋の上に立つて、三千代が横町を曲る迄見送つてゐた。夫それから緩ゆるくり歩を回めぐらしながら、腹はらの中で、

「万事終る」と宣告した。

雨は夕方歇やんで、夜に入つたら、雲がしきりに飛とんだ。其中うち洗つた様な月が出た。代助は光ひかりを浴あびる庭の濡葉ぬれはを長い間あひだ橡側うしから眺ながめてゐたが、仕舞に下駄したを穿はいて下へ降おりた。固より広い庭にでない上うへに立木たちぎの数が存外多あいので、代助の歩あるく積せきはたんと無なかつた。代助は其真中まんなかに立つて、大きな空そらを仰あいだ。やが

て、座敷から、昼間買った百合の花を取つて来て、自分の周囲に蒔き散らした。白い花瓣が点々として月の光に冴えた。あるものは、木下闇に仄めいた。代助は何をすることもなく其間に曲んでゐた。

寐る時になつて始めて座敷へ上がった。室の中は花の香がまだ全く抜けてゐなかつた。

十五の一

三千代に逢つて、云ふべき事を云つて仕舞つた代助は、逢はない前に比べると、余程心の平和に接近し易くなつた。然し是は彼の予期する通りに行つた迄で、別に意外の結果と云ふ程のものではなかつた。

会見の翌日彼は永らく手に持つてゐた賽を思ひ切つて投げた人の決心を以て起きた。彼は自分と三千代の運命に対して、昨日から一種の責任を帯びねば濟まぬ身になつたと自覺した。しかも夫は自ら進んで求めた責任に違ひなかつた。従つて、それを自分の脊に負ふて、苦しいとは思へなかつた。その重みに押されるがため、却つて自然と足が前に出る様な気がした。彼は自ら切り開いた此運命の断片を頭に乗せて、父と決戦すべき準備を整へた。父の後には兄がゐた、嫂がゐた。是等と戦つた後には平岡がゐた。是等を切り抜けても大きな社会があつた。個人の自由と情実を毫も斟酌して呉れない器械の様な社会があつた。代助には此社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした。

彼は自分で自分の勇氣と胆力に驚ろいた。彼は今日迄、熱烈

を厭ふ、危きに近寄り得ぬ、勝負事を好まぬ、用心深い、太平の好紳士と自分を見倣してゐた。徳義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども、臆病と云ふ自覚はどうしても彼の心から取り去る事が出来なかつた。

彼は通俗なある外国雑誌の購読者であつた。其中のある号で、マウンテン Mountain Accidents アクシデント と題する一篇に遭つて、かつて心を駭かした。夫には高山を攀ぢ上る冒険者の、怪我過が沢山に並べてあつた。登山の途中雪崩れに圧されて、行き方知れずになつたもの、骨が、四十年後に氷河の先へ引懸つて出た話や、四人の冒険者が懸崖の半腹にある、真直に立つた大きな平岩を越すとき、肩から肩の上へ猿の様に重なり合つて、最上の一人の手が岩の鼻へ掛かるや否や、岩が崩れて、腰の繩が切れて、上の三人が折り重なつて、真逆様に四番目の男の傍を遙かの下に落ちて行

つた話などが、幾何となく載せてあつた間に、鍊瓦の壁程急な山腹に、蝙蝠の様に吸ひ付いた人間を二三ヶ所点綴した挿画があつた。其時代助は其絶壁の横にある白い空間のあなたに、広い空や、遙かの谷を想像して、怖ろしさから来る眩暈を、頭の中に再現せずには居られなかつた。

代助は今道德界に於て、是等の登攀者と同一な地位に立つてゐると云ふ事を知つた。けれども自ら其場に臨んで見ると、怯む気は少しもなかつた。怯んで猶予する方が彼に取つては幾倍の苦痛であつた。

彼は一日も早く父に逢つて話をしたかつた。万一の差支を恐れて、三千代が来た翌日、又電話を掛けて都合を聞き合せた。父は留守だと云ふ返事を得た。次の日又問ひ合せたら、今度は差支があると云つて断られた。其次には此方から知らせる迄は

来るに及ばんといふ挨拶であつた。代助は命令通り控えてゐた。其間嫂あによめからも兄あにからも便たよりは一向なかつた。代助は始めは家うちのものが、自分に出来る丈長い、反省再考の時間を与へる為ための策略ではあるまいかと推察して、平氣に構へてゐた。三度の食事も旨うまく食つた。夜も比較よる的安らかな夢を見た。雨あめの晴間はれまには門野かどのを連れて散歩を一二度した。然し宅うちからは使つかひも手紙てがみも来なかつた。代助は絶壁ぜつべきの途中で休息する時間の長過ぎるのに安やすからずなつた。仕舞に思ひ切つて、自分の方から青山へ出掛でかけて行つた。兄あには例の如く留守であつた。嫂あによめは代助を見て氣の毒さうな顔をした。が、例の事件に就ては何にも語かたらなかつた。代助の来意を聞きいて、では私わたしが一寸奥ちよつとおくへ行いつて御父おとうさんの御都合うかひを伺つて来きませうと云つて立つた。梅子の態度は、父ちちの怒りから代助を庇かばう様にも見えた。又彼を疎外する様にも取とれた。代助は

両方の何れだらうかと煩わづらつて待つてゐた。待ちながらも、何どうせ覚悟の前だと何遍くちも口のうちで繰り返した。

奥から梅子が出て来る迄には、大分暇ひまが掛かつた。代助を見て、又氣の毒さうに、今日けふは御都合わるが悪いさうですよと云つた。代助は仕方なしに、何時いつ来たら宜よからうかと尋ねた。固れいより例れいの様な元氣はなく悄然とした問ひ振りであつた。梅子は代助の様子に同情の念を起した調子で、二三日中に屹度自分が責任を以て都合の好いい時日けふを知らせるから今日けふは帰れと云つた。代助が内玄関でを出る時、梅子はわざと送つて来て、

「今度こんだこそ能く考へて入らつしやいよ」と注意した。代助は返事もせずもんに門でを出た。

帰る途中とちゆうも不愉快で堪たまらなかつた。此間このあひだ三千代に逢あつて以後、味はう事を知つた心の平和を、父ちちや嫂あによめの態度で幾分か破壊されたと云ふ心持が路々みちちく募つた。自分は自分の思ふ通りを父ちちに告げつる、父ちちは父ちちの考へを遠慮なく自分に洩らす、それで衝突する、衝突の結果はどうあらうとも潔よく自分で受ける。是が代助の予期であつた。父ちちの仕打しうちは彼かれの予期以外に面白くないものであつた。其仕打しうちは父ちちの人格を反射する丈夫丈多く代助を不愉快にした。

代助は途みちすがら、何を苦なんで、父ちちとの会見を左迄に急いでもないのだから、便宜は寧ろ、是を待ち受ける父ちちの方にあるべき筈であつた。其父ちちがわざとらしく自分を避ける様にして、面会

それから

を延ばすならば、それは自己の問題を解決する時間が遅くなる
と云ふ不結果を生ずる外に何も起り様がない。代助は自分の未
来に関する主要な部分は、もう既に片付けて仕舞つた積でゐた。
彼は父から時日を指定して呼び出される迄は、宅の方の所置を
其儘にして放つて置く事に極めた。

彼は家に帰つた。父に対しては只薄暗い不愉快の影が頭に残
つてゐた。けれども此影は近き未来に於て必ず其暗さを増して
くるべき性質のものであつた。其他には眼前に運命の二つの潮
流を認めた。一つは三千代と自分が是から流れて行くべき方向
を示してゐた。一つは平岡と自分を是非共一所に捲き込むべき
凄じいものであつた。代助は此間三千代に逢つたなりで、片片
の方は捨てゝある。よし是から三千代の顔を見るにした所で、
——また長い間見ずにゐる気はなかつたが、——二人の向後取

るべき方針に就て云へば、当分は一步も現在状態より踏み出さず見は持たなかつた。此点に關して、代助は我ながら明瞭な計畫を拵こしらへてゐなかつた。平岡と自分とを運び去るべき将来に就ても、彼はたゞ何時いつ、何事なにごとにでも用意ありと云ふ丈であつた。無論彼は機きを見て、積極的に働らき掛ける心組はあつた。けれども具体的な案は一つも準備しなかつた。あらゆる場合に於て、彼の決して仕損しそんじまいと誓つたのは、凡てを平岡に打ち明けると云ふ事であつた。従つて平岡と自分とで構成すべき運命の流れは黒く恐ろしいものであつた。一つの心配は此恐ろしい暴風あらしの中なかから、如何にして三千代を救すくひ得べきかの問題であつた。

最後に彼の周囲を人間のあらん限りかぎ包つむ社会に對しては、彼は何の考も纏めなかつた。事実として、社会は制裁の権を有してゐた。けれども動機行為の権は全く自己の天分から湧いて出で

るより外に道はないと信じた。かれは此点に於て、社会と自分との間には全く交渉のないものと認めて進行する気であつた。

代助は彼のかれのちひ小さな世界の中心に立つて、彼のかれの世界を斯様に観て、一順其關係比例を頭あたまの中で調べた上、

「善よからう」と云つて、又家いへを出た。さうして一二丁ある歩いて、乗り付けの帳場迄来きて、奇麗はやで早はやさうな奴やつを掴んで飛び乗のつた。何処どこへ行く当あてもないのを好加減な町を名指なざして二時間程ぐるぐる乗まはり廻かへして歸かへつた。

翌日も書齋なかの中で前日同様、自分の世界の中心に立つて、左右前後を一応隈くまなく見渡あとした後、

「宜よろしい」と云つて外そとへ出て、用もない所を今度は足に任せてぶらあるぶら歩いて歸かへつた。

三日目にも同じ事を繰り返した。が、今度は表でへ出るや否や、

すぐ江戸川を渡つて、三千代の所へ来た。三千代は二人の間に
何事も起らなかつたかの様に、

「何故夫から入らつしやらなかつたの」と聞いた。代助は寧ろ
其落ち付き払つた態度に驚ろかされた。三千代はわざと平岡の
机の前に据ゑてあつた蒲団を代助の前へ押し遣つて、

「何でそんなに、そわ／＼して居らつしやるの」と無理に其上
に坐らした。

一時間ばかり話してゐるうちに、代助の頭は次第に穏やかに
なつた。車へ乗つて、当もなく乗り回すより、三十分でも好
から、早く此所へ遊びに来れば可かつたと思ひ出した。帰ると
き代助は、

「又来ます。大丈夫だから安心して入らつしやい」と三千代を
慰める様に云つた。三千代はたゞ微笑した丈であつた。

十五の三

其夕方ゆふがた始めて父ちちからの報知しらせに接した。其時代助は婆さんの給仕で飯めしを食くつてゐた。茶碗を膳うへの上へ置いて、門野かどのから手紙を受取うけとつて読よむと、明朝何時迄いに御出いでの事といふ文句があつた。代助は、

「御役所風だね」と云ひながら、わざと端書はがきを門野かどのに見せた。門野かどのは、

「青山あをやまの御宅おたくからですか」と叮嚀おもてに眺めてゐたが、別に云ふ事がないものだから、表おもてを引つ繰り返して、

「何どうも何なんですな。昔むかしの人は矢ひとつ張り手蹟てが好いい様ですな」と御世辞ごよみを置き去ざりにして出て行つた。婆さんは先刻さつきから曆こよみの話はなし

をしきりに為^してゐた。みづの、えだのかの、とだの、八朔だの友引^{ともびき}だの、爪^{つめ}を切る日^きだの普請^{しん}をする日^ひだのと頗^{うらや}る煩^{わづら}いものであつた。代助は固^うより上^はの空^{そら}で聞^きいてゐた。婆^ばさんは又^{また}門野^{かどの}の職^{しよく}の事^{こと}を頼^{たの}んだ。十五円でも宜^いいから何方^{どつか}へ出^だして遣^やつて呉^くれないかと云^いつた。代助は自分^{じぶん}ながら、何^どんな返^へ事^じをしたか分^{わか}らない位^{くらい}にも留^とめなかつた。たゞ心^{こころ}のうちでは、門野^{かどの}所^{ところ}か、この己^{おれ}が危^{あや}しい位^{くらい}だと思^{おも}つた。

食^{しよく}事^じを終^おるや否^{いな}や、本郷^{ほんきやう}から寺尾^{てらび}が来^きた。代助は門野^{かどの}の顔^{かほ}を見て暫^{しばらく}らく考^{かん}へてゐた。門野^{かどの}は無^む雑^{ざつ}作^{さく}に、
「断^{ことわ}りますか」と聞^きいた。代助は此^{こゝ}間^まから珍^{めづ}らしくある会^{くわい}を一^{いち}
二^に回^{かい}欠^け席^{せき}した。来^き客^{きやく}も逢^あはないで済^すむと思^{おも}ふ分^{ぶん}は両^{りやう}度^ど程^{てい}謝^{しゃ}絶^{ぜつ}し
た。

代助は思^{おも}ひ切^きつて寺尾^{てらび}に逢^あつた。寺尾^{てらび}は何^い時^{とき}もの様^{よう}に、血^{ちまなこ}眼^{がん}

になつて、何か探^{さが}してゐた。代助は其様子を見て、例の如く皮肉で持ち切る気にもなれなかつた。翻訳だらうが焼き直しだらうが、生きてゐるうちは何処^{どこ}迄も遣^やる覚悟だから、寺尾の方がまだ自分より社会の兇^じらしく見えた。自分がもし失脚して、彼と同様の地位に置かれたら、果して何^どの位の仕事に堪えるだらうと思ふと、代助は自分に対して氣の毒になつた。さうして、自分が遠^かからず、彼^{かれ}よりも甚^{ひど}く失脚するのは、殆んど未発の事實の如く確^{たしか}だと諦めてゐたから、彼は侮蔑の眼^めを以て寺尾を迎へる訳には行かなかつた。

寺尾は、此間の翻訳を漸くの事で月末迄に片付けたら、本屋の方で、都合が悪いから秋迄出版を見合せると云ひ出したので、すぐ労力を金^{かね}に換算する事が出来ずに、困つた結果遣^やつて來^きたのであつた。では書肆と契約なしに手を着^つけたのかと聞^きくと、

全く左様さうでもないらしい。と云つて、本屋の方が丸で約束を無視しした様にも云はない。要するに曖昧であつた。たゞ困つてゐる事丈は事実らしかつた。けれども斯かう云ふ手違てちがひに慣れ抜ぬいた寺尾は、別に徳義問題として誰にも不満を抱いだいてゐる様には見えなかつた。失敬だとか怪けしからんと云ふのは、たゞ口くちの先許さきばかりで、腹はらの中の屈托なかは、全然飯めしと肉にくに集注してゐるらしかつた。

代助は氣の毒になつて、当座の經濟に幾分の補助を与へた。寺尾は感謝の意を表して歸つた。歸る前に、実は本屋からも少しは前借はしたんだが、それは疾とくの昔むかしに使つかつて仕舞つたんだと自白した。寺尾の歸つたあとで、代助はあゝ云ふのも一種の人格だと思つた。たゞ斯かう楽らくに活計くわしてゐたつて決して為なれる訳のものぢやない。今の所謂文壇が、あゝ云ふ人格を必要と認めて、自然に産み出した程、今の文壇は悲しむべき状況もとの下もとに呻吟し

てゐるんではなからうかと考へて茫乎ぼんやりした。

代助は其晩そのばん自分の前途をひどく気に掛けた。もし父ちちから物質的に供給の道を鎖とじされた時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑うたぐつた。もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたなら、彼は当然餓死すべきである。もし筆を執とらなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。

彼は眼めを開あけて時々蚊帳とぎんかやの外そとに置おいてある洋燈ランプを眺めた。夜中よなかに燐寸マツチを擦すつて烟草たばこを吹ふかした。寐返ねりを何遍も打つた。固こより寐ね苦しい程暑い晩ではなかつた。雨が又ざあくと降ふつた。代助は此雨の音おとで寐付ねくかと思ふと、又雨の音おとで不意に眼めを覺さました。夜は半醒半睡のうちうちに明け離れた。

定刻ていこくになつて、代助は出掛でかけた。足駄穿あしだばきで雨傘あまがさを提さげて電車に乗のつたが、一方まじの窓まどが締め切きつてある上うへに、革紐かはひもにぶら下さがつてゐる人ひとが一杯ひとなので、しばらくすると胸むねがむかついて、頭あたまが重おもくなつた。睡眠不足すいみんぷそくが影響えいぎょうしたらしく思おもはれるので、手てを窮屈きうくつに伸のばして、自分の後丈うしろを開あけ放はなつた。雨は容赦ようじやなく襟えりから帽子ぼうしに吹ふき付つけた。二三にさん分ぶんの後隣のちとなりの人ひとの迷惑めいわくさうな顔かほに氣きが付ついて、又元もとの通りとおりに硝子窓がらすまどを上げあげた。硝子がらすの表側おもてがはには、弾はぢけた雨あめの珠たまが溜たまつて、往來わうらいが多少たうしやう歪ゆがんで見みえた。代助は首くびから上うへを扨ねぢ曲まげて眼めを外そと面に着つけながら、幾いくたびか自分の眼めを擦こすつた。然し何遍なんべん擦こつても、世界の恰好なぐめが少し變かつて來きたと云いふ自覚じかくが取とれなかつた。硝子がらすを通とほして斜なぐめに遠方とほを透すかして見るときは猶さう左様さやういふ感かんじがした。

弁慶橋べんけいばしで乗り換かえてからは、人もまばらに、雨も小降りこぶりになつた。頭あたまも楽らくに濡ぬれた世なの中なかを眺ながめる事が出来できた。けれども機嫌きげんの悪い父ちちの顔かほが、色々いろいろな表情へいしを以もつて彼の脳髓かを刺戟せきした。想像さうぞうの談話だんわさへ明あきかに耳みみに響ひびいた。

玄関げんかんを上あつて、奥おくへ通まる前まへに、例れいの如ごとく一応あによめめに逢あつた。嫂あによめは、

「鬱陶ふさふさしい御天氣ごてんきぢやありませんか」と愛想あいさうよく自分で茶ちやを汲きんで呉くれた。然しかし代助だいてすけは飲のむ氣きにもならなかつた。

「御父おとうさんが待つて御出おいででせうから、一寸ちよつとい行いつて話はなしをして来きませう」と立たち掛かけた。嫂あによめは不安あならしい顔かほをして、

「代なさん、成ならう事ことなら、年寄としよりに心配しんぱを掛かけない様ようになさいよ。御父おとうさんだつて、もう長ながい事ことはありませんから」と云いつた。代助だいてすけは梅子うめこの口くちから、こんな陰氣いんきな言葉ことばを聞きくのは始めてであつ

た。不意に穴倉へ落ちた様な心持がした。

父は烟草盆を前に控えて、俯向いてゐた。代助の足音を聞いても顔を上げなかつた。代助は父の前へ出て、叮嚀に御辞儀をした。定めて六づかしい眼付をされると思ひの外、父は存外穩かなもので、

「降るのに御苦労だつた」と労はつて呉れた。其時始めて気が付いて見ると、父の頬が何時の間にかぐつと瘡けてゐた。元來が肉の多い方だつたので、此変化が代助には余計目立つて見え

た。代助は覺えず、
「何うか為さいましたか」と聞いた。

父は親らしい色を一寸顔に動かした丈で、別に代助の心配を物にする様子もなかつたが、少時話してゐるうちに、

「己も大分年を取つてな」と云ひ出した。其調子が何時もの父

とは全く違つてゐたので、代助は最前嫂あによめの云つた事を愈重く見なければならなくなつた。

父は年としの所為せゐで健康の衰へたのを理由として、近々実業界を退く意志のある事を代助に洩もらした。けれども今は日露戦争後の商工業膨脹の反動を受けて、自分の経営にかゝる事業が不景気の極端に達してゐる最中さいちゆうだから、此難関を漕こぎ抜けた上うへでなくては、無責任の非難を免かれる事が出来ないのです、当分已を得ずに辛抱してゐるより外に仕方がないのだと云ふ事情を委しく話した。代助は父ちちの言葉を至極尤もだと思つた。

父は普通ちひの実業なるものゝ困難と危険と繁劇と、それ等から生ずる当事者の心こゝろの苦痛及び緊張の恐るべきを説いた。最後に地方の大地主ぢぬしの、一見地味ぢみであつて、其实自分等よりはずつと鞏固の基礎を有してゐる事を述べた。さうして、此比較を論拠

として、新たに今度の結婚を成立させやうと力めた。

「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大変な便利で、且つ此際甚だ必要ぢやないか」と云つた。代助は、父ちちとしては寧ろ露骨過ぎる此政略的結婚の申し出いでに対して、今更驚ろく程、始めから父ちちを買ひ被つてはゐなかつた。最後の会見に、父ちちが従来かめんの仮面を脱ぬいで掛かかつたのを、寧ろ快こころよく感じた。彼かれ自身じしんも、斯こんな意味の結婚を敢てし得る程度の人間にんげんだと自ら見積みづかてみた。

其その上父うへちちに対して何時いつにない同情があつた。其顔かほ、其声こゑ、其代助を動かさうとする努力、凡てに老後の憐れを認める事が出来た。代助はこれをも、父の策略とは受取り得なかつた。私わたしは何うでも宜よう御座いますから、貴方あなたの御都合の好いい様に御極きめなさいと云ひたかつた。

十五の五

けれども三千代と最後の会見くわいけんを遂とげた今更いまさら、父ちちの意いに叶かなふ様な当座の孝行は代助には出来かねた。彼は元來が何方どつちつ付かずの男であつた。誰だれの命令も文字通りに拝承した事のない代りには、誰だれの意見にも露むきに抵抗した試がなかつた。解釈のしやうでは、策士の態度とも取れ、優柔の生れ付つきとも思はれる遣口やりくちであつた。彼かれ自身さへ、此二つの非難いづの何れを聞きいた時に、左様さうかも知れないと、腹はらの中で首くびを振ひねらぬ訳わけには行いかなかつた。然し其原因の大部分は策略でもなく、優柔でもなく、寧ろ彼かれに融通の利きく両ふたつの眼めが付ついてゐて、双方を一時に見みる便宜を有してゐたからであつた。かれは此能力の為に、今日迄一凶もつに物ものに向つて突進する勇氣を挫くぢかれた。即かず離れず現状に立ち竦すくんでゐる事ことが屢しばしば

それから

あつた。此現状維持の外観が、思慮の欠乏から生ずるのでなく、却つて明白な判断に本いて起ると云ふ事實は、彼が犯すべからざる敢為の氣象を以て、彼の信ずる所を断行した時に、彼自身にも始めて解つたのである。三千代の場合、即ち其適例であつた。

彼は三千代の前に告白した己れを、父の前で白紙にしやうとは想ひ到らなかつた。同時に父に対しては、心から氣の毒であつた。平生の代助が此際に執るべき方針は云はずして明らかであつた。三千代との關係を撤回する不便なしに、父に満足を与へる為の結婚を承諾するに外ならなかつた。代助は斯くして双方を調和する事が出来た。何方付かずに真中へ立つて、煮え切らずに前進する事は容易であつた。けれども、今の彼は、不断の彼とは趣を異にしてゐた。再び半身を埒外に挺でて、余人と

握手するのは既に遅かつた。彼は三千代に対する自己の責任を夫程深く重いものと信じてゐた。彼の信念は半ば頭の判断から来た。半ば心の憧憬から来た。二つのものが大きな濤の如くに彼を支配した。彼は平生の自分から生れ変つた様に父の前に立つた。

彼は平生の代助の如く、成る可く口数を利かずに控えてゐた。父から見れば何時もの代助と異なる所はなかつた。代助の方では却つて父の変つてゐるのに驚ろいた。実は此間から幾度も会見を謝絶されたのも、自分が父の意志に背く恐があるから父の方でわざと、延ばしたものと推してゐた。今日逢つたら、定めて苦い顔をされる事と覚悟を極めてゐた。ことによれば、頭から叱り飛ばされるかも知れないと思つた。代助には寧ろ其方が都合が好かつた。三分の一は、父の暴怒に対する自己の反動を、

心理的に利用して、判然断らうと云ふ下心さへあつた。代助は父の様子、父の言葉遣、父の主意、凡てが予期に反して、自分の決心を鈍らせる傾向に出たのを心苦しく思つた。けれども彼は此心苦しさにさへ打ち勝つべき決心を蓄へた。

「貴方の仰しやる所は、一々御尤もだと思ひますが、私には結婚を承諾する程の勇氣がありませんから、断るより外に仕方がなからうと思ひます」ととう／＼云つて仕舞つた。其時父はたゞ代助の顔を見てゐた。良あつて、

「勇氣が要るのかい」と手に持つてゐた烟管を畳の上に放り出した。代助は膝頭を見詰めて黙つてゐた。

「当人が氣に入らないのかい」と父が又聞いた。代助は猶返事をしなかつた。彼は今迄父に対して己れの四半分も打ち明けてはゐなかつた。その御蔭で父と平和の關係を漸く持続して来た。

けれども三千代の事丈は始めから決して隠かくす気はなかつた。自分の頭あたまの上うへに当然落ちかゝるべき結果を、策で避さける卑怯が面白くなかつたからである。彼はたゞ自白の期に達してゐないと考へた。従つて三千代の名は丸で口くちへは出ださなかつた。父ちちは最後に、

「ぢや何なんでも御前おまへの勝手にするさ」と云つて苦にがい顔かほをした。

代助も不愉快であつた。然し仕方がないから、礼をして父ちちの前まへを退さがらうとした。ときに父ちちは呼よび留とめて、

「己おれの方でも、もう御前おまへの世話はせんから」と云つた。座敷へ歸つた時、梅子は待ち構へた様に、

「何どうなすつて」と聞いた。代助は答へ様もなかつた。

翌日眼が覚めても代助の耳の底には父の最後の言葉が鳴つてゐた。彼は前後の事情から、平生以上の重みを其内容に附着しなければならなかつた。少なくとも、自分丈では、父から受ける物質的の供給がもう絶えたものと覚悟する必要があつた。代助の尤も恐るゝ時期は近づいた。父の機嫌を取り戻すには、今度の結婚を断るにしても、あらゆる結婚に反対してはならなかつた。あらゆる結婚に反対しても、父を首肯させるに足る程の理由を、明白に述べなければならなかつた。代助に取つては二つのうち何れも不可能であつた。人生に対する自家の哲学の根本に触れる問題に就いて、父を欺くのは猶更不可能であつた。代助は昨日の会見を回顧して、凡てが進むべき方向に進んだとしか考へ得なかつた。けれども恐ろしかつた。自己が自己に自

然な因果を發展させながら、其因果の重みを脊中に負つて、高い絶壁の端迄押し出された様な心持であつた。

彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云ふ文字がある丈で、職業其物は体を具えて現はれて来なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業を想ひ浮べて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く丈で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出来なかつた。彼には世間が平たい複雑な色分の如くに見えた。さうして彼自身は何等の色を帯びてゐないとした考へられなかつた。

凡ての職業を見渡した後、彼の眼は漂泊者の上に来て、そこで留まつた。彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷ふ乞食の群の中に見出した。生活の墮落は精神の自由を殺す点に於て

彼の尤も苦痛とする所であつた。彼は自分の肉体に、あらゆる醜穢しうえを塗り付けた後あと、自分の心の状態が如何に落魄こころするだらうと考へて、ぞつと身振みぶるひをした。

此落魄のうちに、彼は三千代を引張り廻まはさなければならなかつた。三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至る迄彼女かのをんなに対して責任を負ふ積であつた。けれども相当の地位を有もつてゐる人の不実ふじつと、零落れいらくの極に達した人の親切とは、結果に於て大たいした差違はないと今更ながら思はれた。死ぬ迄三千代に対して責任を負ふと云ふのは、負おふ目的があるといふ迄で、負おつた事実には決してなれなかつた。代助は惘然もうぜんとして黒内障そこひに罹かつた人の如くに自失した。

彼かれは又三千代を訪たうねた。三千代は前日ぜんじつの如く静しづかに落おち着ついてゐた。微笑ほゝえみと光輝かゞやきとに満みちてゐた。春風はるかぜはゆたかに彼女かのをんなの眉まゆを

吹いた。代助は三千代が己おのれを挙げて自分に信頼してゐる事を知つた。其証拠を又眼まのあたりに見た時、彼は愛憐あいれんの情と気の毒の念に堪えなかつた。さうして自己を悪漢の如くに呵責かしゃくした。思ふ事は全く云ひそびれて仕舞つた。帰るとき、

「又都合して宅うちへ来きませんか」と云つた。三千代はえゝと首肯うなづいて微笑した。代助は身を切きられる程酷つらかつた。

代助は此間このあひだから三千代を訪問する毎ごとに、不愉快ながら平岡の居ゐない時を扱えらまなければならなかつた。始めはそれを左程にも思はなかつたが、近頃では不愉快と云ふよりも寧ろ、行き悪い度どが日毎に強くなつて来きた。其上留守そのうへの訪問が重かさなれば、下女に不審を起させる恐れがあつた。気の所為せゐか、茶を運はこぶ時にも、妙に疑ぐり深い眼付めつきをして、見られる様でならなかつた。然し三千代は全く知らぬ顔をしてゐた。少すくなくとも上部丈うはべは平気で

あつた。

平岡との關係に就ては、無論詳しく尋ねる機会もなかつた。
会たまに一言二言夫となく問を掛けて見ても、三千代は寧ろ応じな
かつた。たゞ代助の顔を見れば、見てゐる其間丈そのあひだの嬉しさに溺
れ尽すのが自然の傾向であるかの如くに思はれた。前後を取り
囲かこむ黒い雲が、今にも逼せまつて来はしまいかと云ふ心配は、陰で
はいざ知らず、代助の前まへには影さへ見せなかつた。三千代は元
来神経質の女であつた。昨今の態度は、何どうしても此女の手際
ではないと思ふと、三千代の周囲の事情が、まだ夫程險惡に近
づかない証拠になるよりも、自分の責任が一層重くなつたのだ
と解釈せざるを得なかつた。

「すこし又話したい事があるから来て下さい」と前よりは稍真
面目に云つて代助は三千代と別れた。

それから

中二日置いて三千代が来る迄、代助の頭は何等の新しい路を開拓し得なかつた。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で焼き付けられてゐた。それを押し退けると、物質的供給の杜絶がしきりに踊り狂つた。それが影を隠すと、三千代の未来が凄じく荒れた。彼の頭には不安の旋風が吹き込んだ。三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回転した。其結果として、彼の周囲が悉く回転しだした。彼は船に乗つた人と一般であつた。回転する頭と、回転する世界の中に、依然として落ち付いてゐた。

青山の宅からは何の消息もなかつた。代助は固よりそれを予期してゐなかつた。彼は力めて門野を相手にして他愛ない雑談

に耽ふけつた。門野は此暑あつさに自分の身体からだを持ち扱あつてゐる位、用のない男であつたから、頗る得意に代助の思ふ通り口くちを動うごかした。それでも話し草くたび臥たれると、

「先生、将棋は何どうです」杯はと持ち掛けた。夕方ゆふがたには庭にはに水を打うつた。二人共ふたり跣はだしになつて、手桶てづくもを一杯宛持づつて、無分別むぶんべつに其所等そこいらを濡ぬらして歩あるいた。門野かどのが隣となりの梧桐てつべんの天辺てんぺん迄水みづにして御目ごめにかけると云つて、手桶てづくもの底そこを振り上げる拍子あに、滑すべつて尻しり持もを突ついた。白粉草おしろいそうが垣根かきの傍そばで花はなを着きけた。手水鉢てすいひちの蔭かげに生はえた秋海棠あきあやめの葉はが著いちぢるしく大きくなつた。梅雨つゆは漸しく晴はれて、昼くもは雲みねの峰みねの世界せかいとなつた。強い日ひは大きな空そらを透すき通とほす程ほど焼やいて、空そら一杯いっぱいの熱あつたを地上ちじやうに射あり付ける天気あまとなつた。

代助だいてすけは夜よに入いつて頭あたまの上うへの星ほしばかり眺ながめてゐた。朝あさは書齋しよさいに這入はつた。二三日ふたつみは朝あさから蟬せみの聲こゑが聞きえる様ようになつた。風呂場ふろば

へ行つて、度々頭を冷した。すると門野がもう好い時分だと思つて、

「何うも非常な暑さですな」と云つて、這入つて来た。代助は斯う云ふ上の空の生活を二日程送つた。三日目の日盛に、彼は書齋の中から、ぎらくする空の色を見詰めて、上から吐き下す焔の息を嗅いだ時に、非常に恐ろしくなつた。それは彼の精神が此猛烈なる気候から永久の変化を受けつゝあると考へた為であつた。

三千代は此暑を冒して前日の約を履んだ。代助は女の声を聞き付けた時、自分で玄関迄飛び出した。三千代は傘をつぼめて、風呂敷包を抱へて、格子の外に立つてゐた。不断着の儘宅を出たと見えて、質素な白地の浴衣の袂から手帛を出し掛けた所であつた。代助は其姿を一目見た時、運命が三千代の未来を切り

抜ぬいて、意地悪く自分の眼の前に持つて来たき様に感じた。われ
知らず、笑ひながら、

「馳かけ落おちでもしさうな風ぢやありませんか」と云つた。三千代は
穏おだやかに、

「でも買物をした序でないかと上あがり悪いから」と真面目な答をし
て、代助のあと後につ跟着いて奥迄這入つて来た。代助はすぐ団扇を出だ
した。照り付けられた所せ為で三千代の頬ほが心持よく輝かがやいた。
何時いつもの疲つかれた色は何処どこにも見えなかつた。眼めの中なかにも若わかい沢
が宿やどつてゐた。代助は生々いきした此美しくしさに、自己の感覚を溺
らして、しばらくは何事も忘れて仕舞つた。が、やがて、此美
くしさを冥々うらの裡うちに打ち崩しつゝあるものは自分であると考へ
出だしたら悲かなしくなつた。彼は今日けふも此美うくしきの一部分を曇ら
す為ために三千代を呼んだに違ちがなかつた。

代助は幾度か己れを語る事を躊躇した。自分の前に、これ程幸福に見える若い女を、眉一筋にしろ心配の為に動かさせるのは、代助から云ふと非常な不徳義であつた。もし三千代に対する義務の心が、彼の胸のうちに鋭どく働らいてゐなかつたなら、彼は夫から以後の事情を打ち明ける事の代りに、先達ての告白を再び同じ室のうちに繰り返して、単純なる愛の快感の下に、一切を放擲して仕舞つたかも知れなかつた。

代助は漸くにして思ひ切つた。

「其後貴方と平岡との関係は別に変りはありませんか」

三千代は此問を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて、構はないわ」

「貴方は夫程僕を信用してゐるんですか」

「信用してゐなくつちや、斯うして居られないぢやありません

か」

代助は目映しさうに、熱い鏡の様な遠い空を眺めた。

十六の三

「僕には夫程信用される資格がなささうだ」と苦笑しながら答へたが、頭の中は焙炉の如く火照つてゐた。然し三千代は氣にも掛からなかつたと見えて、何故とも聞き返さなかつた。たゞ簡単に、

「まあ」とわざとらしく驚ろいて見せた。代助は真面目になつた。

「僕は白状するが、実を云ふと、平岡君より頼にならない男なんですよ。買ひ被つてゐられると困るから、みんな話して仕舞

それから

ふが」と前置まへおきをして、夫それから自分と父ちちとの今日迄それの關係を詳しく述べた上うへ、

「僕の身分みぶんは是から先何さきどうなるか分わからない。少すくなくとも当分は一人前ぢやない。半人前にもなれない。だから」と云いひ淀よどんだ。

「だから、何どうなさるんです」

「だから、僕の思ふ通り、貴方あなたに対して責任が尽せないだらうと心配してゐるんです」

「責任わかつて、何どんな責任なの。もつと判然はつきりおつ仰しやらなくつちや解わからないわ」

代助は平生から物質的状况に重きを置くの結果、たゞ貧苦が愛人の満足あたひに価あたいしないと云ふ事丈を知つてゐた。だから富とみが三千代に対する責任の一つと考へたのみで、夫それより外ほかに明らかな觀念は丸で持つてゐなかつた。

「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」

「そんなものは欲ほしくないわ」

「欲ほしくない」と云いつたつて、是非必要になるんです。是から先さき僕あなが貴方なたと何どんな新あたらしい関係に移うつて行くにしても、物質上の供給が半分は解決者ですよ」

「解決者でも何なんでも、今更いまさら左様そんな事を氣きにしたつて仕方がないわ」

「口くちではさうも云へるが、いざと云ふ場合になると困るのは眼めに見えてゐます」

三千代は少し色いろを變かへた。

「今いま貴方あなたの御父様おとうさまの御話おはなしを伺うかつて見ると、斯かうなるのは始めから解わかつてゐるぢやありませんか。貴方あなただつて、其位とな事は疾とうから氣きが付ついて入いつしやる筈はずだと思おもひますわ」

代助は返事が出来なかつた。頭あたまを抑えて、

「少し脳なみだが何どうかしてゐるんだ」と独り言ひとごとの様に云つた。三千代は少し涙なみだぐんだ。

「もし、夫それが氣になるなら、私わたくしの方は何どうでも宜よう御座ござんすから、御父様おとうさまと仲直りなかりをなすつて、今迄通り御交際つきあひになつたら好いいぢやありませんか」

代助は急に三千代の手頸てくびを握にぎつてそれを振ふる様に力を入れて云つた。――

「そんな事を為する氣きなら始めから心配をしやしない。たゞ氣の毒あなただから貴方あやまに詫あやまるんです」

「詫あやまるなんて」と三千代は声を顫ふるはしながら遮さへぎつた。「私わたくしがもとと源因さうで左様さうなつたのに、貴方あなたに詫あやまらしちや濟すまないぢやありませんか」

三千代は声を立て、泣いた。代助は慰撫める様に、

「ぢや我慢しますか」と聞いた。

「我慢はしません。当り前まへですもの」

「是さきから先さきまだ変化がありますよ」

「ある事は承知してゐます。何どんな変化があつたつて構やしません。私わたくしは此間このあひだから、——此間このあひだから私わたくしは、若もしもの事があれば、死ぬ積きで覚悟を極きめてゐるんですもの」

代助は慄然りつぜんとして戦おのいた。

「貴方あなたに是これから先さき何どうしたら好いいと云ふ希望はありますか」と聞いた。

「希望ななんか無ないわ。何なんでも貴方あなたの云ふ通りになるわ」

「漂泊はく——」

「漂泊いでも好いいわ。死ねと仰おつしやれば死ぬわ」

代助は又竦ぞつとした。

「此儘このままでは」

「此儘このままでも構はないわ」

「平岡君は全く気が付いてゐない様ですか」

「気が付いてゐるかも知れませんが。けれども私わたくしもう度胸を据ゑ

てゐるから大丈夫なのよ。だつて何時いつ殺ころされたつて好いいんです

もの」

「さう死ぬの殺されるのと安やすつぽく云ふものぢやない」

「だつて、放ほうつて置おいたつて、永ながく生きられる身体からだぢやないぢ

やありませんか」

代助は硬かたくなつて、竦すくむが如く三千代を見詰めた。三千代は

歇ヒステリ私テリ的里ほつきの発作おそに襲おそはれた様に思ひ切つて泣ないた。

それから

十六の四

ひとしきりた
一仕切経つと、発作は次第に収まつた。後は例の通り静かな、
しとやかな、奥行のある、美しくしい女になつた。眉のあたりが
殊に晴ぐしく見えた。其時代助は、
「僕が自分で平岡君に逢つて解決を付けても宜う御座んすか」と聞きいた。

「そんな事が出来て」と三千代は驚ろいた様であつた。代助は、
「出来る積つもりです」と確しつり答へた。

「ぢや、何どうでも」と三千代が云つた。

「さうしませう。二人が平岡君を欺あざむいて事をするのは可よくない様だ。無論事実を能く納得出来できる様に話はなす丈です。さうして、僕の悪わるい所はちやんと詫あやまる覚悟です。其結果は僕の思ふ様に

行かないかも知れない。けれども何う間違つたつて、そんな無暗な事は起らない様にする積です。斯う中途半端にしてゐては、御互も苦痛だし、平岡君に対しても悪い。たゞ僕が思ひ切つて左様すると、あなたが、嘸平岡君に面目なからうと思つてね。其所が御氣の毒なんだが、然し面目ないと云へば、僕だつて面目ないんだから。自分の所為に対しては、如何に面目なくつても、徳義上の責任を負ふのが当然だとすれば、外に何等の利益がないとしても、御互の間に有た事文は平岡君に話さなければならぬでせう。其上今の場合では是からの所置を付ける大事の自白なんだから、猶更必要になると思ひます」

「能く解りましたわ。何うせ間違へば死ぬ積なんですから」

「死ぬなんて。——よし死ぬにしたつて、是から先何の位間があるか——又そんな危険がある位なら、なんで平岡君に僕か

ら話すもんですか」

三千代は又泣き出した。

「ぢや能く詫ります」

代助は日の傾くのを待つて三千代を帰した。然し此前の時の様に送つては行かなかつた。一時間程書齋の中で蟬の声を聞いて暮した。三千代に逢つて自分の未来を打ち明けてから、気分が薩張りした。平岡へ手紙を書いて、会見の都合を聞き合せ様として、筆を持つて見たが、急に責任の重いのが苦になつて、拝啓以後を書き続ける勇氣が出なかつた。卒然、襦衣一枚になつて素足で庭へ飛び出した。三千代が帰る時は正体なく午睡をしてゐた門野が、

「まだ早いぢやありませんか。日が当つてゐますぜ」と云ひながら、坊主頭を両手で抑えて椽端にあらはれた。代助は返事も

せずに、庭の隅へ潜り込んで竹の落葉を前の方へ掃き出した。
門野も已を得ず着物を脱いで下りて来た。

狭い庭だけれども、土が乾いてゐるので、たつぷり濡らすには大分骨が折れた。代助は腕が痛いと言つて、好加減にして足を拭いて上つた。烟草を吹いて、椽側に休んでゐると、門野が其姿を見て、

「先生心臓の鼓動が少々狂やしませんか」と下から調戲つた。

晩には門野を連れて、神楽坂の縁日へ出掛けて、秋草を二鉢三鉢買つて来て、露の下りる軒の外へ並べて置いた。夜は深く空は高かつた。星の色は濃く繁く光つた。

代助は其晩わざと雨戸を引かずに寝た。無用心と云ふ恐れが彼の頭には全く無かつた。彼は洋燈を消して、蚊帳の中に独り寝転びながら、暗い所から暗い空を透かして見た。頭の中には昼

の事が鮮あざやかに輝かいた。もう二三日にちのうちには最後の解決でが出来きると思つて幾度たびか胸むねを躍おどらせた。が、そのうち大いなる空そらと、大いなる夢ゆめのうちに、吾知らず吸収あされた。

翌日あさの朝彼は思ひ切つて平岡へ手紙を出だした。たゞ、内々で少し話したい事があるが、君の都合を知らせて貰もらひたい。此方こつちは何時いつでも差支ない。と書いた丈だが、彼はわざとそれを封書にした。状袋のりの糊しを湿しめて、赤い切手をとんと張はつた時には、愈クライシスに証券つかひを与へた様な気がした。彼は門野かどのに云ひ付けて、此運命つかひの使つかひを郵便函ぽうこに投なげ込ました。手渡わたしにする時、少し手先ふるが顫ふるへたが、渡したあとでは却つて茫然として自失した。三年前三千代と平岡あひだの間に立たつて幹旋あつせんの労を取つた事を追想すると丸で夢の様であつた。

十六の五

翌日よくじつは平岡の返事を心待こころまちに待ち暮まらした。其明あくる日も当あてにし
て終日しゅうじつ宅うちにゐた。三日みっか四日よっかと経たつた。が、平岡ひらからは何たよりの便たよりも
なかつた。其中そのうち例月れいげつの通り、青山あをやまへ金かねを貰もらひに行くべき日ひが来き
た。代助の懐中くわいちゆうは甚てうすだ手薄てうすになつた。代助は此前ちひ父ちひに逢あつた時
以後、もう宅うちからは補助を受けられないものと覚悟を極きめてゐ
た。今更平気な顔かほをして、のそく出掛でかけて行く了見は丸まるでなか
つた。何なに二ヶ月ふたつきや三ヶ月さんつきは、書物か衣類いりを売うり払はつても何どうか
なると腹はらの中なかで高たかを括くくつて落おち付ついてゐた。事ことの落着次第おちつき緩ゆるく
り職業しごを探さがすと云ふ分別ぶんべつもあつた。彼かれは平生へいぜいから人ひとのよく口癖くちくせ
にする、人間は容易ことな事ことで餓死するものぢやない、何どうにかな
つて行くものだほんことわざと云ふ半諺はんげんの真理まことを、経験けんけんしない前まへから信しんじ出だ

した。

五いつか日あつさ目に暑おかを冒おかして、電車のへ乗のつて、平岡のの社で迄か出掛でけて行かつて見て、平岡は二三日わ出社わしないと云わふ事わが分わつた。代助は表へ出うて薄汚うない編み輯あ局の窓みを見あ上げながら、足あを運あぶ前にに、一応電話あで聞あき合あすべきき筈だつたと思つた。先達の手紙はは、果もして平岡の手に渡つたかどうか、夫それさへ疑うはしくなつた。代助はわざと新聞社宛でそれを出だしたからである。帰りに神田へ廻まつて、買ひつけの古本屋に、売ひたい不用の書物があるから、見みに來きてくれろと頼たんだ。

其ぼん晩みづは水みづを打うつ勇う気きも失うせて、ぼんやり、白あい網あ襦あ衣しを着きた門野の姿すがたを眺ながめてみた。

「先生け今日けは御疲おつかですか」と門野かが馬尻ばけつを鳴ならしながら云いつた。代助の胸ふは不安ふにあんに圧おされて、明あらかな返事でも出でなかつた。夕食ゆ食めし

それから

のとき、飯の味は殆んどなかつた。呑み込む様に咽喉を通して、箸を投げた。門野を呼んで、

「君、平岡の所へ行つてね、先達ての手紙は御覧になりましたか。御覧になつたら、御返事を願ひますつて、返事を聞いて来て呉れ玉へ」と頼んだ。猶要領を得ぬ恐がありさうなので、先達てこれくの手紙を新聞社の方へ出して置いたのだと云ふ事迄説明して聞かした。

門野を出した後で、代助は椽側に出て、椅子に腰を掛けた。門野の帰つた時は、洋燈を吹き消して、暗い中に凝としてみた。門野は暗がりです、

「行つて参りました」と挨拶をした。「平岡さんは御居ですした。手紙は御覧になつたさうです。明日の朝行くからといふ事です」

「左様かい、御苦勞さま」と代助は答へた。

「実はもつと早く出るんだつたが、うちに病人が出来たんで遅くなつたから、宜しく云つてくれると云はれました」

「病人？」と代助は思はず問ひ返した。門野は暗い中で、

「え、何でも奥さんが御悪い様です」と答へた。門野の着てゐる白地の浴衣丈がぼんやり代助の眼に入つた。夜の明りは二人の顔を照らすには余り不充分であつた。代助は掛けてゐる籐椅子の肱掛を両手で握つた。

「余程悪いのか」と強く聞いた。

「何うですか、能く分りませんが。何でもさう軽さうでもない様でした。然し平岡さんが明日御出になられる位なんだから、大した事ぢやないでせう」

代助は少し安心した。

「何だい。病気は」

「つい聞き落しましたかな」

二人の問答は夫で絶えた。門野は暗い廊下を引き返して、自

分の部屋へ這入つた。静かに聞いてみると、しばらくして、洋燈

の蓋をホヤに打つける音がした。門野は灯火を点けたと見えた。

代助は夜の中に猶凝としてゐた。凝としてゐながら、胸がわ

くくした。握つてゐる脇掛に、手から膏が出た。代助は又手

を鳴らして門野を呼び出した。門野のぼんやりした白地が又廊

下のはづれに現はれた。

「まだ暗闇ですな。洋燈を点けますか」と聞いた。代助は洋燈

を断つて、もう一度、三千代の病気を尋ねた。看護婦の有無や

ら、平岡の様子やら、新聞社を休んだのは、細君の病気の為だ

か、何うだか、と云ふ点に至る迄、考へられる丈問ひ尽した。け

れども門野の答は必竟前と同じ事を繰り返すのみであつた。でなければ、好加減な当^{あて}ずつぼうに過ぎなかつた。それでも、代助には一人^{ひとり}で黙つてゐるよりも堪^{こら}え易^{やす}かつた。

十六の六

寐^ねる前^{まへ}に門野^{かどの}が夜中投函から手紙を一本出^だして来^きた。代助は暗^{うら}い中^{ちゆう}でそれを受取^{うけと}つた儘^{べつ}、別^{べつ}に見様ともしなかつた。門野^{かどの}は、「御宅^{おたく}からの様です。灯火^{あかり}を持つて来^きませうか」と促^{うな}がす如くに注意した。

代助は始めて洋燈^{ランプ}を書齋に入れさして、其下^{そのした}で、状袋の封を切^きつた。手紙は梅子から自分に宛^あてた可なり長いものであつた。

「此間から奥さんの事で貴方も嘸御迷惑なすつたらう。此方でも御父様始め兄さんや、私は随分心配をしました。けれども其甲斐もなく先達て御出の時、とうく御父さんに断然御断りなすつた御様子、甚だ残念ながら、今では仕方がないと諦らめてゐます。けれども其節御父様は、もう御前の事は構はないから、其積でゐると御怒りなされた由、後で承りました。其後あなたが御出にならないのも、全く其為ぢやなからうかと思つてゐます。例月のものを上げる日には何うかとも思ひましたが、矢張り御出にならないので、心配してゐます。御父さんは打遣つて置けと仰います。兄さんは例の通り呑気で、困つたら其内来るだらう。其時親爺によく詫らせるが可い。もし来ない様だつたら、おれの方から行つてよく異見してやると云つてゐます。けれども、結婚の事は三人とももう断念してゐるんですから、其

それから

点では御迷惑になる様な事はありますまい。尤も御父さんは未だ怒つて御出の様子です。私の考では当分昔の通りになる事は、六づかしいと思ひます。それを考へると、貴方が入らつしやらない方が却つて貴方の為に宜いかも知れませんが、たゞ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、さう急に自分で御金を取る氣遣はなからうと思ふと、差し当り御困りになるのが眼の前に見える様で、御氣の毒で堪りません。で、私の取計で例月分を送つて上げるから、御受取の上は是で来月迄持ち応へて入らつしやい。其内には御父さんの御機嫌も直るでせう。又兄さんからも、さう云つて頂く積です。私も好い折があれば、御詫をして上げます。それ迄は今迄通り遠慮して入らつしやる方が宜う御座います。……」

まだ後が大分あつたが、女の事だから、大抵は重複に過ぎな

かつた。代助は中に這入つてゐた小切手を引き抜いて、手紙丈をもう一遍よく読み直した上、丁寧うへに元の如くに巻き収めて、無言の感謝を改めて嫂あによめに致した。梅子よりと書いた字は寧ろ拙であつた。手紙の体の言文一致なのは、かねて代助の勧めた通りを用ひたのであつた。

代助は洋燈ランプの前にある封筒を、猶つくづくと眺ながめた。古い寿命ふるじゆめいが又一ヶ月延のびた。晩おそかれ早かれ、自己を新たにする必要のある代助には、嫂あによめの志は難有いにもせよ、却つて毒になる許ばかりであつた。たゞ平岡と事を決する前は、麵パン麩めんの為ために働らく事を肯うけがはぬ心を持つてゐたから、嫂あによめの贈物おくりものが、此際このさい糧食としてことに彼には貴たつとかつた。

其晩も蚊帳へ這入る前にふつと、洋燈ランプを消けした。雨戸あまどは門野かどのが立たてに來きたから、故障も云はずに、其儘まにして置いた。硝子戸がらすど

だから、戸越しにも空は見えた。たゞ昨夕より暗かつた。曇つたのかと思つて、わぎく椽側迄出て、透かす様にして軒を仰ぐと、光るものが筋を引いて斜めに空を流れた。代助は又蚊帳を捲つて這入つた。寐付かれないので団扇をはたはた云はせた。家の事は左のみ気に掛からなかつた。職業もなるが儘になれど度胸を据ゑた。たゞ三千代の病氣と、其原因と其結果が、ひどく代助の頭を悩ました。それから平岡との会見の様子も、様々に想像して見た。それも一方ならず彼の脳髓を刺激した。平岡は明日の朝九時頃あんまり暑くならないうちに来るといふ伝言であつた。代助は固より、平岡に向つて何う切り出さう杯と形式的の文句を考へる男ではなかつた。話す事は始めから極つてゐて、話す順序は其時の模様次第だから、決して心配にはならなかつたが、たゞ成る可く穩かに自分の思ふ事が向ふに徹する

それから

様にしたかつた。それで過度の興奮を忌んで、一夜の安静を切に冀つた。成るべく熟睡じゆくすいしたいと心掛けて瞼まぶたを合せたが、生憎眼が冴えて昨夕ゆふべよりは却つて寐苦ねしかつた。其内夏うちの夜がぼうと白み渡わたつて来た。代助は堪たまりかねて跳ね起きた。跣足はだしで庭先へ飛び下りて冷たい露つゆを存分に踏んだ。夫から又椽側の籐椅子に倚つて、日の出でを待つてゐるうちに、うとくくした。

十六の七

かどの門野かどのが寐惚ねぼけ眼まなこを擦こすりながら、雨戸あまどを開あけに出でた時、代助ははつとして、此うたゝ仮睡ゝねから覚さめた。世界の半面はもう赤い日ひに洗あらはれてゐた。

「大變御早おんはやうがすな」と門野が驚おどろいて云つた。代助はすぐ風

呂場へ行つて水を浴びた。朝飯は食はずに只紅茶を一杯飲んだ。新聞を見たが、殆んど何が書いてあるか解らなかつた。読むに従つて、読んだ事が群がつて消えて行つた。たゞ時計の針ばかりが気になつた。平岡が来る迄にはまだ二時間あまりあつた。代助は其間を何うして暮らさうかと思つた。凝としてはゐられなかつた。けれども何をしても手に付かなかつた。責めて此二時間をぐつと寐込んで、眼を開けて見ると、自分の前に平岡が来てゐる様にしたかつた。

仕舞に何か用事を考へ出さうとした。不図机の上に乗せてあつた梅子の封筒が眼に付いた。代助は是だと思つて、強いて机の前に坐つて、嫂へ謝状を書いた。成るべく叮嚀に書く積であつたが、状袋へ入れて宛名迄認めて仕舞つて、時計を眺めると、たつた十五分程しか経つてゐなかつた。代助は席に着いた儘、

安からぬ眼を空に据ゑて、頭の中で何か捜す様に見えた。が、急に起つた。

「平岡が来たら、すぐ帰るからつて、少し待たして置いて呉れ」と門野に云ひ置いて表へ出た。強い日が正面から射竦める様な勢で、代助の顔を打つた。代助は歩きながら絶えず眼と眉を動かした。牛込見附を這入つて、飯田町を抜けて、九段坂下へ出て、昨日寄つた古本屋迄来て、

「昨日不要の本を取りに来て呉れと頼んで置いたが、少し都合があつて見合わせる事にしたから、其積で」と断つた。帰りには、暑さが余り酷かつたので、電車で飯田橋へ回つて、それから揚場を筋違に毘沙門前へ出た。

家の前には車が一台下りてゐた。玄関には靴が揃へてあつた。代助は門野の注意を待たないで、平岡の来てゐる事を悟つた。

汗あせを拭ふいて、着物きものを洗あらひ立ての浴衣ゆかたに改あらめて、座敷ざしきへ出でた。

「いや、御使おつかひで」と平岡ひらおかが云いつた。矢張り洋服やうふくを着きて、蒸むされる様に扇あふぎを使つかつた。

「何どうも暑あつい所ところを」と代助だいてすけも自おのづから表立おもてだつた言葉遣づかひをしなければならなかつた。

二人ふたりはしばらく時候ときの話はなしをした。代助だいてすけはすぐ三千代さんせんだいの様子ようすを聞いて見たみたかつた。然しかしそれが何どう云いふものか聞き悪にくかつた。其内そのうち通例つうれいの挨拶あいさつも済すんで仕舞しまつた。話はなしは呼び寄せた方かたから、切り出きりだすのが順当じゆんたうであつた。

「三千代さんせんだいさんは病氣びやうきだつてね」

「うん。夫それで社しやの方ほうも二三ふた日休やすませられた様なやうな訳わけで。つい君きみの所ところへ返事へんじを出すだすのも忘わすれて仕舞しまつた」

「そりや何どうでも構かまはないが。三千代さんせんだいさんはそれ程わろ悪わるいのかい」

平岡は断然たる答を一言葉でなし得なかつた。さう急に何うの斯うのといふ心配もない様だが、決して軽い方ではないといふ意味を手短かに述べた。

此前暑い盛りに、神楽坂へ買物に出た序に、代助の所へ寄つた明日の朝、三千代は平岡の社へ出掛ける世話をしてゐながら、突然夫の襟飾を持つた儘卒倒した。平岡も驚ろいて、自分の支度は其儘に三千代を介抱した。十分の後三千代はもう大丈夫だから社へ出て呉れと云ひ出した。口元には微笑の影さへ見えた。横にはなつてゐたが、心配する程の様子もないので、もし悪い様だつたら医者と呼ぶ様に、必要があつたら社へ電話を掛ける様に云ひ置いて平岡は出勤した。其晩は遅く帰つた。三千代は心持が悪いといつて先へ寐てゐた。何んな具合かと聞いても、判然した返事をしなかつた。翌日朝起きて見ると三千代の色沢

が非常に可よくなかつた。平岡は寧ろ驚ろいて医者を迎へた。医者
者は三千代の心臓を診察して眉をひそめた。卒倒は貧血ための為だ
と云つた。随分強い神経衰弱に罹かつてゐると注意した。平岡は
夫それから社を休やすんだ。本人は大丈夫だから出て呉くれろと頼む様に
云つたが、平岡は聞きかなかつた。看護をしてから二日目の晩ばんに、
三千代みちよが涙なみだを流して、是非詫あやまらなければならぬ事があるか
ら、代助の所へ行つて其訳を聞いて呉おつとれろと夫に告げた。平岡
は始めてそれを聞いた時には、本当にしなかつた。脳のうの加減かげんが
悪いわるのだらうと思つて、好よしくと気休きやすめを云つて慰めてゐた。
三日目みつかめにも同じ願が繰り返された。其時平岡は漸やく三千代の
言葉に一種の意味を認みとめた。すると夕方ゆふがたになつて、門野が代助
から出した手紙の返事を聞ききにわざ／＼小石川迄遣やつて來きた。

「君の用事と三千代の云ふ事と何か関係があるのかい」と平岡

は不思議さうに代助を見た。

十六の八

平岡の話は先刻さつきから深い感動を代助に与へてゐたが、突然此思はざる問とひに來た時とき、代助はぐつと詰つまつた。平岡の問は実に意表に、無邪氣に、代助の胸むねに應こたへた。彼かれは何時いつになく少し赤面せきめんして俯向うつむいた。然し再ふたゝび顔を上げた時は、平生の通り静かな悪わるびれない態度を回復してゐた。

「三千代さんの君きみに詫あやまる事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる關係があるだらう。或は同じ事おんなかも知れない。僕は何どうしても、それを君に話さなければならぬ。話す義務があると思ふから話はなすんだから、今日迄の友誼めんに免めんじて、快こころよく

僕に僕の義務を果さ^{はた}して呉れ給へ」

「何だい。改^{あら}たまつて」と平岡は始めて眉を正^{たゞ}した。

「いや前置をすると言訳らしくなつて不可^いないから、僕も成る可くなら卒直に云つて仕舞ひたいのだが、少し重大な事件だし、^{それ}夫に習慣に反した嫌^{きらひ}もあるので、若し途中で君に激されて仕舞ふと、甚だ困るから、是非仕舞迄君に聞^きいて貰ひたいと思つて」

「まあ何だい。其話^{はなし}と云ふのは」

好奇心と共に平岡の顔^{かほ}が益真面目^{まじめ}になつた。

「其代り、みんな話^{はなし}した後^{あと}で、僕は何^どんな事を君から云はれても、矢張り大人しく仕舞迄聞^きく積^ただ」

平岡は何にも云はなかつた。たゞ眼鏡^{めがね}の奥から大きな眼^めを代助^{うへ}の上に据^たゑた。外^{そと}はぎらくする日が照^てり付けて、椽側迄射返^{いかへ}したが、二人^{ふたり}は殆んど暑さを度外^{ぶがい}に置いた。

代助は一段声を潜めた。さうして、平岡夫婦が東京へ来てから以来、自分と三千代との関係が何んな変化を受けて、今日に至つたかを、詳しく語り出した。平岡は堅く唇を結んで代助の一語一句に耳を傾けた。代助は凡てを語るに約一時間余を費やした。其間に平岡から四遍程極めて単簡な質問を受けた。

「ざつと斯う云ふ経過だ」と説明の結末を付けた時、平岡はただ唸る様に深い溜息を以て代助に答へた。代助は非常に酷かつた。「君の立場から見れば、僕は君を裏切りした様に当る。怪しからん友達だと思ふだらう。左様思れても一言もない。濟まない事になつた」

「すると君は自分のした事を悪いと思つてるんだね」

「無論」

「悪いと思ひながら今日迄歩を進めて来たんだね」と平岡は重

ねて聞きいた。語気は前よりも稍切迫してゐた。

「左様さようだ。だから、此この事ことに對して、君の僕等に与へやうとする制裁は潔よく受ける覚悟だ。今のはたゞ事實を其儘に話した丈で、君の処分の材料にする考だ」

平岡は答へなかつた。しばらくしてから、代助の前へ顔を寄せて云つた。

「僕の毀損された名誉が、回復出来る様な手段が、世の中なかにあり得ると、君は思つてゐるのか」

今度は代助の方が答へなかつた。

「法律や社会の制裁は僕には何にもならない」と平岡は又云つた。

「すると君は当事者とうじしや丈のうちで、名誉を回復する手段があるかと聞くんだね」

「左様さ」

「三千代さんの心機を一転して、君を元よりも倍以上に愛させる様に、其上僕を蛇蝎の様に悪ませさへすれば幾分か償にはなる」

「夫が君の手際で出来るかい」

「出来ない」と代助は云ひ切つた。

「すると君は悪いと思つた事を今日迄発展さして置いて、猶其悪いと思ふ方針によつて、極端押して行かうとするのぢやないか」

「矛盾かも知れない。然し夫は世間の掟と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がつた夫婦関係とが一致しなかつたと云ふ矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫まる。然し僕の行為其物に対しては矛

盾も何も犯してゐない積だ」

十六の九

「ぢや」と平岡は稍声を高めた。「ぢや、僕等二人は世間の掟に叶ふ様な夫婦関係は結べないと云ふ意見だね」

代助は同情のある気の毒さうな眼をして平岡を見た。平岡の険しい眉が少し解けた。

「平岡君。世間から云へば、これは男子の面目に關はる大事件だ。だから君が自己の権利を維持する為に、——故意に維持しやうと思はないでも、暗に其心が働らいて、自然と激して来るのは已を得ないが、——けれども、こんな関係の起らない学校時代の君になつて、もう一遍僕の云ふ事をよく聞いて呉れない

か」

平岡は何とも云はなかつた。代助も一寸控ひかえてゐた。烟草を
一吹ひとふき吹いた後あとで、思ひ切つた。

「君は三千代さんを愛してゐなかつた」と静しづかに云つた。

「そりや」

「そりや余計な事だけれども、僕は云はなければならぬ。今
度の事件に就て凡ての解決者はそれだらうと思ふ」

「君には責任がないのか」

「僕は三千代さんを愛してゐる」

「他の妻さいを愛する権利が君にあるか」

「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件ぢ
やない人間だから、心迄こころ所有する事は誰にも出来ない。本人以
外にどんなものが出て来きたつて、愛情の増減や方向を命令する

それから

訳には行かない。夫の権利は其所迄は届きやしない。だから細君の愛を他へ移さない様にするのが、却つて夫の義務だらう」

「よし僕が君の期待する通り三千代を愛してゐなかつた事が事実としても」と平岡は強いて己を抑える様に云つた。拳を握つてゐた。代助は相手の言葉の尽きるのを待つた。

「君は三年前の事を覚えてゐるだらう」と平岡は又句を更へた。

「三年前は君が三千代さんと結婚した時だ」

「さうだ。其時の記憶が君の頭の中に残つてゐるか」

代助の頭は急に三年前に飛び返つた。当時の記憶が、闇を回る松明の如く輝いた。

「三千代を僕に周旋しやうと云ひ出したものは君だ」

「貰いたいと云ふ意志を僕に打ち明けたものは君だ」

「それは僕だつて忘れやしない。今に至る迄君の厚意を感謝し

てゐる」

平岡は斯う云つて、しばらく冥想してゐた。

「二人ふたりで、夜上野よるうへのを抜けて谷中やなかへ下りる時だつた。雨上りあめあがで谷中やなかの下したは道みちが悪わるかつた。博物館の前から話はなしつゞけて、あの橋はしの所迄き来た時、君は僕の為ために泣いて呉れた」

代助は黙然としてゐた。

「僕は其時程朋友を難有うれいと思つた事はない。嬉うれしくつて其晩は少しも寐ねられなかつた。月のある晩ばんだつたので、月の消える迄起きてゐた」

「僕もあの時は愉快だつた」と代助が夢の様に云つた。それを平岡は打ち切る勢いきほひで遮さへぎつた。――

「君は何だつて、あの時僕の為ために泣いて呉れたのだ。なんだつて、僕の為ために三千代を周旋ちかしやうと盟ちかつたのだ。今日こんにちの様な事

を引き起す位なら、何故あの時、ふんと云つたなり放つて置いて呉れなかつたのだ。僕は君からは程深刻な復讐を取られる程、君に向つて悪い事をした覚がないぢやないか」

平岡は声を顫はした。代助の蒼い額に汗の珠が溜つた。さうして訴たへる如くに云つた。

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」

平岡は茫然として、代助の苦痛の色を眺めた。

「其時の僕は、今の僕でなかつた。君から話を聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、君の望みを叶へるのが、友達の本分だと思つた。それが悪かつた。今位頭が熟してゐれば、まだ考へ様があつたのだが、惜しい事に若かつたものだから、余りに自然を軽蔑し過ぎた。僕はあの時の事を思つては、非常な後悔の念に襲はれてゐる。自分の為ばかりぢやない。實際君の為に後悔

してゐる。僕が君に対して真に済まないと思ふのは、今度の事件より寧ろあの時僕がなまじいに遣り遂げた義侠心だ。君、どうぞ勘弁して呉れ。僕は此通り自然に復讐を取られて、君の前に手を突いて詫まつてゐる」

代助は涙を膝の上に零した。平岡の眼鏡が曇つた。

十六の十

「どうも運命だから仕方がない」

平岡は呻吟く様な声を出した。二人は漸く顔を見合せた。

「善後策に就て君の考があるなら聞かう」

「僕は君の前に詫まつてゐる人間だ。此方から先へそんな事を云ひ出す権利はない。君の考から聞くのが順だ」と代助が云つ

た。

「僕には何にもない」と平岡は頭を抑えてゐた。

「では云ふ。三千代さんを呉れないか」と思ひ切つた調子に出た。

平岡は頭から手を離して、肱を棒の様に洋卓の上に倒した。

同時に、

「うん遣らう」と云つた。さうして代助が返事をし得ないうちに、又繰り返した。

「遣る。遣るが、今は遣れない。僕は君の推察通り夫程三千代を愛して居なかつたかも知れない。けれども悪んぢやゐなかつた。三千代は今病氣だ。しかも余り軽い方ぢやない。寐てゐる病人を君に遣るのは厭だ。病氣が癒る迄君に遣れないとすれば、夫迄は僕が夫だから、夫として看護する責任がある」

「僕は君に詫つた。三千代さんも君に詫まつてゐる。君から云へば二人とも、不埒な奴には相違ないが、——幾何詫まつても勘弁出来んかも知れないが、——何しろ病氣をして寐てゐるんだから」

「夫は分つてゐる。本人の病氣に付け込んで僕が意趣晴らしに、虐待でもすると思つてゐるんだらうが、僕だつて、まさか」

代助は平岡の言を信じた。さうして腹の中で平岡に感謝した。平岡は次に斯う云つた。

「僕は今日の事がある以上は、世間的の夫の立場からして、もう君と交際する訳には行かない。今日限り絶交するから左様思つて呉れ玉へ」

「仕方がない」と代助は首を垂れた。

「三千代の病氣は今云ふ通り軽い方ぢやない。此先何んな変化

がないとも限かぎらない。君も心配だらう。然し絶交した以上は已やむを得ない。僕の在不在かに係かはらず、宅うちへ出入ではいりする事丈は遠慮して貰もらひたい」

「承知した」と代助はよろめく様に云つた。其頬ほは益蒼あをかつた。平岡は立ち上あがつた。

「君、もう五分許ばかりすは坐つて呉くれ」と代助が頼たのんだ。平岡は席つに着いた儘無言つであつた。

「三千代さんの病気は、急に危き険けんな虞おそれでもありさうなのかい」
「さあ」

「夫それ丈教へて呉れないか」

「まあ、さう心配しないでも可いいだらう」

平岡は暗くらい調子で、地ぢに息いきを吐はく様に答へた。代助は堪たえられない思がした。

「若しだね。若し万一の事がありさうだつたら、其前にたつた一遍丈で可いから、逢はして呉れないか。外には決して何も頼まない。たゞ夫丈だ。夫丈を何うか承知して呉れ玉へ」

平岡は口を結んだなり、容易に返事をしなかつた。代助は苦痛の遣り所がなくて、両手の掌を、垢の縋れる程揉んだ。

「夫はまあ其時の場合にしやう」と平岡が重さうに答へた。

「ぢや、時々病人の様子を聞きに遣つても可いかね」

「夫は困るよ。君と僕とは何にも関係がないんだから。僕は是から先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だと思つてゐるんだから」

代助は電流に感じた如く椅子の上で飛び上がった。

「あつ。解つた。三千代さんの死骸丈を僕に見せる積なんだ。それは苛い。それは残酷だ」

代助は洋卓の縁を回つて、平岡に近づいた。右の手で平岡の脊広の肩を抑えて、前後に揺りながら、

「苛い、苛い」と云つた。

平岡は代助の眼のうちに狂へる恐ろしい光を見出した。肩を揺られながら、立ち上がった。

「左んな事があるものか」と云つて代助の手を抑えた。二人は魔に憑かれた様な顔をして互を見た。

「落ち付かなくつちや不可ない」と平岡が云つた。

「落ち付いてゐる」と代助が答へた。けれども其言葉は喘ぐ息の間を苦しさうに洩れて出た。

暫らくして発作の反動が来た。代助は己れを支ふる力を用ひ尽した人の様に、又椅子に腰を卸した。さうして両手で顔を抑えた。

十七の一

代助は夜の十時過すぎになつて、こつそり家いえを出でた。

「今いまから何方どちらへ」と驚ろいた門野かどのに、

「何一寸なにちよつと」と曖昧な答をして、寺町てらまちの通り迄来た。暑い時分の

事なので、町まちはまだ宵よひの口くちであつた。浴衣ゆかたを着きた人が幾人とな

く代助の前後ぜんごを通つた。代助には夫それが唯動たゞうごくものとしか見えな

かつた。左右さゆうの店みせは悉く明あかるかつた。代助は眩まぼしさうに、電気

燈すくの少ない横町まがへ曲つた。江戸川の縁ふちへ出た時、暗くらい風が微かすか

に吹ふいた。黒くろい桜さくらの葉が少し動うごいた。橋はしの上うへに立つて、欄干らんかんか

ら下したを見下おろしてゐたものが二人あつた。金剛寺坂ざかでは誰にも逢

はなかつた。岩崎家の高い石垣が左右から細い坂道さかみちを塞ふさいでゐ

た。

平岡の住んでゐる町は、猶静かであつた。大抵な家は灯影を洩らさなかつた。向ふから来た一台の空車の輪の音が胸を躍らす様に響いた。代助は平岡の家の塀際迄来て留つた。身を寄せ中を窺ふと、中は暗かつた。立て切つた門の上に、軒燈が空しく標札を照らしてゐた。軒燈の硝子に守宮の影が斜めに映つた。

代助は今朝も此所へ来た。午からも町内を彷徨いた。下女が買物にでも出る所を捕まへて、三千代の容体を聞かうと思つた。然し下女は遂に出て来なかつた。平岡の影も見えなかつた。塀の傍に寄つて耳を澄まして、夫らしい人声は聞えなかつた。医者突き留めて、詳しい様子を探らうと思つたが、医者らしい車は平岡の門前には留らなかつた。そのうち、強い日に射付

けられた頭あたまが、海うみの様に動き始めた。立ち留どまつてみると、倒れさうになつた。歩き出あると、大地あつちが大きな波紋なみぎらを描えがいた。代助は苦しさを忍しのんで這はふ様に家うちへ歸かへつた。夕食ゆふめしも食くはずに倒れたなり動うごかずにゐた。其時そのとき恐おそるべき日は漸おく落ちて、夜よが次第だいいに星ほしの色いろを濃こくした。代助は暗くらさと涼すずしさのうちに始めて蘇よみがへ生なつた。さうして頭あたまを露つゆに打うたせながら、又三千代さんせんのゐる所迄や遣やつて来たのである。

代助は三千代の門前かどまへを二三度行いつたり来きたりした。軒燈のりの下したへ来くるたびに立ち留どまつて、耳みみを澄すました。五分乃至十分は凝じつとしてゐた。しかし家うちの中なかの様子は丸まるで分わからなかつた。凡たゞてが寂しんとしてゐた。

代助が軒燈のりの下したへ来きて立ち留とまるたびに、守宮やもりが軒燈のりの硝子がらすにびたりと身体からだを貼はり付けてゐた。黒い影かげは斜はすに映うつつた儘い何時いつ

でも動うごかなかつた。

代助は守宮やもりに気が付く毎ごとに厭いやな心持がした。其動うごかない姿が妙かに氣に掛かつた。彼の精神は鋭どきの余りから來くる迷信に陥おつた。三千代は危険だと想像した。三千代は今苦しみつゝあると想像した。三千代は今死につゝあると想像した。三千代は死ぬ前に、もう一遍自分に逢あひたがつて、死に切れずに息いきを偷ぬすんで生きてゐると想像した。代助は拳こぶしを固めて、割れる程平岡の門かどを敲たたかずにはゐられなくなつた。忽ち自分は平岡のものに指ゆびさへ触れる権利がない人間だと云ふ事に氣が付いた。代助は恐おそろしさの余り馳かけ出だした。静かな小路こうぢの中うちに、自分の足音あしおと丈だけがひび高く響ひびいた。代助は馳かけながら猶恐おそろしくなつた。足あしを緩ゆるめた時は、非常に呼息いきが苦くるしくなつた。

道端みちばたに石段いしだんがあつた。代助は半なかば夢中そこで其所そこへ腰を掛けたな

り、額ひたひを手で抑おさえて、固かたくなつた。しばらくして、閉ふさいだ眼めを開あけて見ると、大きな黒い門もんがあつた。門の上うへから太い松が生垣そとの外そと迄枝を張つてゐた。代助は寺てらの這入り口くちに休んでゐた。彼は立たち上あがつた。惘然もうぜんとして又ある歩き出した。少し来きて、再び平岡の小路へ這入つた。夢の様に軒燈の前たちどまで立留つた。守宮やもりはまだ一つ所に映うつつてゐた。代助は深い溜息ためいきを洩もらして遂に小石川を南側みなみがはへ降おりた。

其晩は火の様に、熱くて赤い旋風つむじの中に、頭あたまが永久に回転した。代助は死力を尽して、旋風つむじの中なかから逃のがれ出で様やうと争つた。けれども彼の頭あたまは毫も彼の命令に応じなかつた。木の葉の如く、遲疑ちぎする様子もなく、くるり／＼と焰ほのほの風かぜに卷まかれて行つた。

翌日は又燬け付く様に日が高く出た。外は猛烈な光で一面にいらくし始めた。代助は我慢して八時過に漸く起きた。起きるや否や眼がぐらついた。平生の如く水を浴びて、書齋へ這入つて凝と竦んだ。

所へ門野が来て、御客さまですと知らせたなり、入口に立つて、驚ろいた様に代助を見た。代助は返事をするのも退儀であつた。客は誰だと聞き返しもせず、手で支へた儘の顔を、半分ばかり門野の方へ向き易へた。其時客の足音が椽側にして、案内も待たずに兄の誠吾が這入つて来た。

「やあ、此方へ」と席を勧めたのが代助にはやうやうであつた。誠吾は席に着くや否や、扇子を出して、上布の襟を開く様に、風を送つた。此暑さに脂肪が焼けて苦しいと見えて、荒い息遣を

した。

「暑いな」と云つた。

「御宅おたくでも別に御変りもありませんか」と代助は、左も疲つかれ果はてた人の如ひとくに尋たづねた。

二人は少時ふたり例しげろくの通りせけんぼなしの世間話をした。代助の調子態度は固より尋常ではなかつた。けれども兄あには決して何どうしたとも聞きかなかつた。話の切れ目めへ来きた時、

「今日は実じつは」と云ひながら、懐ふところへ手を入れて、一通の手紙を取り出した。

「実じつは御前まへに少し聞ききたい事があつて来きたんだがね」と封筒の裏うらを代助の方へ向けて、

「此男を知つてるかい」と聞いた。其所そこには平岡の宿所姓名が自筆で書いてあつた。

それから

「知つてます」と代助は殆んど器械的に答へた。

「元、御前おまへの同級生だつて云ふが、本当か」

「さうです」

「此男の細君も知つてるのかい」

「知つてゐます」

兄あには又扇を取り上げて、二三度ぱちくくと鳴らした。それから、少し前へ乗り出す様に、声を一段落おとした。

「此男の細君と、御前おまへが何か関係があるのかい」

代助は始めから万事を隠す気はなかつた。けれども斯う単簡に聞かれたときに、何うして此複雑な経過いちげんを、一言で答へ得る

だらうと思ふと、返事は容易に口へは出でなかつた。兄あには封筒のなか中から、手紙を取り出だした。それを四五寸ばかり捲まき返かへして、

「実じつは平岡と云ふ人が、斯かう云ふ手紙を御父おとうさんの所へ宛あてて寄よ

こしたんだがね。——読んで見るか」と云つて、代助に渡した。代助は黙つて手紙を受取つて、読み始めた。兄は凝と代助の額の所を見詰めてゐた。

手紙は細かい字で書いてあつた。一行二行と読むうちに、読み終つた分が、代助の手先から長く垂れた。それが二尺余になつても、まだ尽きる気色はなかつた。代助の眼はちらちらした。頭が鉄の様に重かつた。代助は強いても仕舞迄読み通さなければならぬと考へた。総身が名状しがたい圧迫を受けて、腋の下から汗が流れた。漸く結末へ来た時は、手に持つた手紙を巻き納める勇氣もなかつた。手紙は広げられた儘洋卓の上に横はつた。

「其所に書いてある事は本当なのかい」と兄が低い声で聞いた。代助はたゞ、

「本当です」と答へた。兄は打衝を受けた人の様に一寸扇の音を留めた。しばらくは二人とも口を聞き得なかつた。良あつて兄が、

「まあ、何う云ふ了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ」と呆れた調子で云つた。代助は依然として、口を開かなかつた。

「何んな女だつて、貰はうと思へば、いくらでも貰へるぢやないか」と兄がまた云つた。代助はそれでも猶黙つてゐた。三度目に兄が斯う云つた。――

「御前だつて満更道楽をした事のない人間でもあるまい。こんな不始末を仕出かす位なら、今迄折角金を使つた甲斐がないぢやないか」

代助は今更兄に向つて、自分の立場を説明する勇氣もなかつた。彼はついで此間迄全く兄と同意見であつたのである。

十七の三

「姉ねえさんは泣ないてゐるぜ」と兄あにが云つた。

「さうですか」と代助は夢の様に答へた。

「御父おとうさんは怒おこつてゐる」

代助は答をしなかつた。たゞ遠い所を見る眼めをして、兄あにを眺めてゐた。

「御前おまへは平生から能よく分わからない男だつた。夫でも、いつか分わかる時

機くが来くるだらうと思つて今日迄交際つきあつてゐた。然し今度こんだと云ふ

今度こんだは、全くく分わからない人間だと、おれも諦あきらめて仕舞つた。世

の中に分わからない人間にんげん程危険なものはない。何を為するんだか、何

を考へてゐるんだか安心が出来ない。御前おまへは夫それが自分の勝手だ

から可よからうが、御父おとうさんやおれの、社会上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名誉と云ふ觀念は有もつてゐるだらう」

兄あにの言葉は、代助の耳みみを掠かすめて外そとへ零こぼれた。彼はたゞ全身に苦痛を感じた。けれども兄あにの前に良心の鞭撻を蒙る程動揺してはゐなかつた。凡てを都合よく弁解して、世間的の兄あにから、今更同情を得やうと云ふ芝居気は固より起らなかつた。彼は彼かれの頭あたまの中に、彼自身に正当な道を歩あゆんだといふ自信があつた。彼は夫で満足であつた。その満足を理解して呉れるものは三千代丈であつた。三千代以外には、父ちちも兄あにも社会も人間も悉く敵てきであつた。彼等は赫々たる炎火の裡うちに、二人を包つんで焼やき殺ころさうとしてゐる。代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此焰ほのほの風に早く己れを焼やき尽つくすのを、此上うへもない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭あたまを支へて石の様に動かなかつた。

「代助」と兄あにが呼んだ。「今日けふはおれは御父おとうさんの使つかひに來たのだ。御前このあひだは此間うちから家へ寄り付つかない様になつてゐる。平生へいぜいなら御父おとうさんが呼び付けて聞き糺たゞす所だけでも、今日けふは顔かほを見るのが厭いやだから、此方こつちから行つて実否たしかを確めて來いと云ふ訳で來たのだ。それで——もし本人に弁解があるなら弁解を聞きくし。又弁解も何もない、平岡の云ふ所が一々根拠のある事實なら、——御父おとうさんは斯かう云はれるのだ。——もう生涯代助には逢あはない。何処どこへ行つて、何をしやうと当人とうじんの勝手だ。其代り、以来子としても取り扱あはない。又親おやとも思つて呉くれるな。——尤もなの事だ。そこで今御前いまおまへの話はなしを聞いて見ると、平岡の手紙には嘘うそは一つも書いてないんだから仕方がない。其上御前は、此事に就て後悔もしなければ、謝罪せざいもしない様に見受けられる。それぢや、おれだつて、歸つて御父おとうさんに取り成し様がない。御父おとう

さんから云はれた通りを其儘御前に伝へて帰る丈の事だ。好いか。御父さんの云はれる事は分つたか」

「よく分りました」と代助は簡明に答へた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな声を出した。代助は俯向いた儘顔を上げなかつた。

「愚図だ」と兄が又云つた。「不断は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざと云ふ場合には、丸で唾の様に黙つてゐる。さうして、陰で親の名誉に關はる様な悪戯をしてゐる。今日迄何の為に教育を受けたのだ」

兄は洋卓の上の手紙を取つて自分で巻き始めた。静かな部屋の中に、半切の音がかさく鳴つた。兄はそれを元の如くに封筒に納めて懐中した。

「ぢや帰るよ」と今度は普通の調子で云つた。代助は叮嚀に挨

撈をした。兄は、

「おれも、もう逢はんから」と云ひ捨てて玄関に出た。

兄の去つた後、代助はしばらくして元の儘じつと動かずにゐた。門野が茶器を取り片付けに来た時、急に立ち上がつて、

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」と云ふや否や、烏打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はぢりぢりと焦る心持がした。

「焦るく」と歩きながら口の内で云つた。

飯田橋へ来て電車に乗つた。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「あゝ動く。世の中が動く」と傍の人に聞える様に云つた。彼

頭のあたまは電車の速力を以て回転し出した。回転するに従つて火の様に焙つて来た。是で半日乗り続けたら焼き尽す事が出来るだらうと思つた。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くるくくと回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、又代助の頭に飛び込んで、くるくくと渦を捲いた。四つ角に、大きい真赤な風船玉を売つてるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風船玉は追懸て来て、代助の頭に飛び付いた。小包郵便を載せた赤い車がはつと電車と摺れ違ふとき、又代助の頭の中に吸ひ込まれた。烟草屋の暖簾が赤かつた。売出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと続いた。仕舞には世の中が真赤になつた。さうして、代助の頭

を中心としてくるりくと焰ほのほの息いきを吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した。

後註

- 一 「痲痺」は底本では「痲痺」

それから

底本：「漱石全集 第六巻」岩波書店
1994（平成6）年5月9日発行

底本の親本：漱石の自筆原稿

※ルビは、漱石の原稿にあったルビのみ付け、岩波編集部が付けたルビは省きました。

※ルビ、文字遣い、語句の混在は底本の通りとしました。

入力：Godot、野口英司、oto

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年4月16日作成

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。